

# 京都府遺跡調査概報

## 第 14 冊

1. 千代川遺跡第 6・7 次
2. 千代川遺跡第 8 次
3. 上中遺跡第 2 次
4. 篠窯跡群昭和59年度発掘調査概要
  - (1) 西長尾 A 地区作業場跡
  - (2) 芦原 3 号窯
  - (3) 芦原地区試掘
  - (4) 黒岩 C 地区作業場跡
  - (5) 前山地区田畑試掘
  - (6) 掛ヶ谷・黒岩地区田畑試掘
  - (7) 掛ヶ谷植林地試掘
  - (8) 黒岩地区田畑試掘

1985

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

## 序

昭和56年4月に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足し、間もなく4年が過ぎようとしています。その設立の目的は、京都府内の埋蔵文化の調査、保存、活用及び研究を行い、その保護を図るとともに、先人の遺した文化財を大切にすることの普及育成に努め、地域の文化の発展に寄与することにあります。

当調査研究センターの直面する事業は、京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり、昭和59年度は39件の調査を実施しました。これらの発掘調査は、いずれも道路建設、学校建設、宅地造成などの開発事業に伴う事前調査であり、調査によって発見された遺跡の多くは、調査終了後破壊され、消滅する運命にあります。しかし、発掘調査したすべての遺跡が開発事業により消滅してはいけません。一つでも多くの遺跡がその重要性を理解され、現状のまま保存されることが望ましいのは言うまでもありません。

この「京都府遺跡調査概報」は、遺跡の重要性を理解していただくために、また、たとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し、その活用を図るために刊行するものです。昭和59年度は、第13冊、第14冊、第15冊、第16冊の4冊にまとめることにしましたが、この第14冊には篠塚跡群ほか3件を収録しました。これらの調査結果を速報として掲載した「京都府埋蔵文化財情報」とあわせて御活用いただければ幸甚であります。

この報告書をまとめるまでの現地調査では、開発事業関係者はもちろんのこと京都府教育委員会、各市町村教育委員会をはじめ関係機関の御協力を受け、さらに、炎暑の下、極寒の中で熱心に作業に従事していただいた多くの方がたがあります。この報告書を刊行するにあたって、これら多くの関係者に厚く御礼を申し上げます。

昭和60年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福山敏男

## 凡 例

1. 本冊に収めた概要は、

1. 千代川遺跡第6・7次    2. 千代川遺跡第8次    3. 上中遺跡第2次  
4. 篠窯跡群

2. 各遺跡の所在地，調査期間，経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調査期間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1. 千代川遺跡6・7次	亀岡市千代川町拜田ほか	昭58. 9. 19 昭59. 7. 5	京都府土木建築部	水谷 寿克 引原 茂治 田代 弘 森下 衛
2. 千代川遺跡第8次	亀岡市大井町小金岐	昭59. 7. 26 昭59. 8. 30	京都府教育委員会	村尾 政人
3. 上中遺跡第2次	京北町大字赤谷	昭59. 8. 1 昭59. 10. 11	京都府教育委員会	長谷川 達 増田 孝彦
4. 篠 窯 跡 群			建設省近畿地方建設局	水谷 克寿 岡崎 研一 竹井 治雄 石井 清司
(1) 西長尾A地区作業場跡	亀岡市篠町篠西長尾	昭59. 5. 17 昭59. 9. 7		
(2) 芦原3号窯	亀岡市篠町篠芦原	昭59. 11. 5 昭60. 1. 19		
(3) 芦原地区試掘	亀岡市篠町篠芦原	昭59. 9. 17 昭59. 10. 27		
(4) 黒岩C地区作業場跡	亀岡市篠町篠黒岩	昭59. 9. 3 昭59. 10. 30		
(5) 前山地区田畑試掘	亀岡市篠町森前山	昭59. 12. 21 昭60. 2. 27		
(6) 掛ヶ谷・黒岩地区田畑試掘	亀岡市篠掛ヶ谷・黒岩	昭60. 1. 24 昭60. 2. 14		
(7) 掛ヶ谷植林地試掘	亀岡市篠町篠掛ヶ谷	昭59. 7. 27 昭59. 8. 30		
(8) 黒岩地区田畑試掘調査	亀岡市篠町黒岩	昭60. 2. 15 昭60. 3. 28		

3. 本冊の編集には，調査課企画資料担当が当たった。

## 目 次

1. 千代川遺跡第6・7次発掘調査概要	1
2. 千代川遺跡第8次発掘調査概要	63
3. 上中遺跡第2次発掘調査概要	69
4. 篠窯跡群昭和59年度発掘調査概要	77
(1) 西長尾A地区作業場跡発掘調査	79
(2) 芦原3号窯発掘調査	97
(3) 芦原地区試掘調査	104
(4) 黒岩C地区作業場跡発掘調査	106
(5) 前山地区田畑試掘調査	109
(6) 掛ヶ谷・黒岩地区田畑試掘調査	111
(7) 掛ヶ谷地区植林地試掘調査	117
(8) 黒岩地区田畑試掘調査	118

## 挿図・付表目次

### 1. 千代川遺跡6・7次

第 1 図	周辺遺跡分布図	3
第 2 図	千代川遺跡詳細図	5
付表 1	千代川遺跡調査一覧表	5
第 3 図	土層断面図	7
第 4 図	トレンチ配置図	8
第 5 図	主要遺構配置図	9
第 6 図	No.9トレンチ平面図	12
第 7 図	No.13トレンチ平面図	13
第 8 図	No.5トレンチ・方形周溝墓 1 平面図	15
第 9 図	No.7トレンチ・方形周溝墓 2 平面図	16
第 10 図	No.16トレンチ平面図	18
第 11 図	No.2トレンチ掘立柱建物跡平面図	18
第 12 図	築地状遺構平面図	19
第 13 図	No.4トレンチ東半部平面図	19
第 14 図	No.6トレンチ平面図	20
第 15 図	SD06出土遺物実測図(1)	24
第 16 図	SD06出土遺物実測図(2)	25
第 17 図	SD06出土遺物実測図(3)	26
第 18 図	SD06出土遺物実測図(4)	27
第 19 図	SD06出土遺物実測図(5)	28
第 20 図	SD06出土遺物実測図(6)	29
第 21 図	SD06出土遺物実測図(7)	30
第 22 図	SD06出土遺物実測図(8)	31
第 23 図	方形周溝墓 1 出土遺物実測図(1)	32
第 24 図	方形周溝墓 1 出土遺物実測図(2)	33
第 25 図	方形周溝墓 2 出土遺物実測図(1)	34
第 26 図	方形周溝墓 2 出土遺物実測図(2)	35
第 27 図	方形周溝墓 2 出土遺物実測図(3)	36

第 28 図	方形周溝墓 2 出土遺物実測図(4).....	37
第 29 図	SD41出土遺物実測図 .....	38
第 30 図	石器実測図(1).....	41
第 31 図	石器実測図(2).....	43
付表 2	石器法量表.....	44
第 32 図	No.2・3トレンチ出土遺物実測図 .....	45
第 33 図	No.2・3トレンチ出土遺物実測図 .....	47
第 34 図	No.6トレンチ(SD25, 26)出土遺物実測図 .....	49
第 35 図	出土瓦実測図(1).....	51
第 36 図	出土瓦実測図(2).....	53
第 37 図	出土瓦実測図(3).....	54
第 38 図	舟状木製品実測図.....	55
付表 3	古瓦計測表.....	56
付表 4	木製品一覧表.....	56
付表 5	弥生土器出土数一覧表.....	60

## 2. 千代川遺跡第 8 次

第 39 図	千代川遺跡と周辺の遺跡.....	64
第 40 図	遺構実測図.....	66

## 3. 上中遺跡

第 41 図	調査地位置図.....	69
第 42 図	調査対象地.....	70
第 43 図	調査地平面図.....	71
第 44 図	トレンチ南壁西端土層断面図.....	71
第 45 図	遺物散布調査図.....	72
第 46 図	出土遺物実測図(1).....	74
第 47 図	出土遺物実測図(2).....	74

## 4. 篠窯跡群

第 48 図	調査地位置図.....	78
第 49 図	西長尾 A 地区作業場跡調査地位置図.....	79
第 50 図	西長尾 A 地区調査地地形図.....	80

第 51 図	遺構配置図	82
第 52 図	検出遺構(Ⅰ期)	83
第 53 図	検出遺構(Ⅱ期)	84
第 54 図	SK02実測図	85
第 55 図	SK04土器出土状況	86
第 56 図	第 1 トレンチ断面図	87
第 57 図	出土遺物実測図(1)	88
第 58 図	出土遺物実測図(2)	89
第 59 図	出土遺物実測図(3)	90
第 60 図	出土遺物実測図(4)	92
第 61 図	出土遺物実測図(5)	93
第 62 図	出土遺物実測図(6)	94
付表 6	器種・形態別個体数一覧表	96
第 63 図	芦原 3 号窯地形図	97
第 64 図	芦原 3 号窯実測図	98
第 65 図	芦原 3 号窯・1 号窯灰原遺構配置図	99
第 66 図	出土遺物実測図(1)	101
第 67 図	出土遺物実測図(2)	102
第 68 図	芦原地区試掘調査地地形図	105
第 69 図	黒岩地区作業場跡調査地地形図	107
第 70 図	前山地区調査地地形図	110
第 71 図	掛ヶ谷・黒岩地区調査地地形図	112
第 72 図	SD01断面図(C トレンチ)	113
第 73 図	SD02断面図(K トレンチ)	114
第 74 図	SD01・SD02出土遺物実測図	115
第 75 図	掛ヶ谷地区調査地地形図	118
第 76 図	黒岩地区調査地地形図	119
第 77 図	出土遺物実測図	120

## 図 版 目 次

### 千代川遺跡第6次・7次

- 図版第1 (1)調査地遠景(西から) (2)第6次調査地調査前全景(西から)
- 図版第2 (1)第6次調査地全景(西から) (2)No.4トレンチ築地状遺構(南から)
- 図版第3 (1)No.4トレンチ東半部(東から) (2)No.2トレンチ掘立柱建物跡(西から)
- 図版第4 (1)No.7トレンチ全景(西から) (2)No.5トレンチ全景(西から)
- 図版第5 (1)No.13トレンチ全景(西から) (2)No.9トレンチ全景(西から)
- 図版第6 (1)第7次調査地全景(西から) (2)No.16トレンチ遺構検出状況(西から)
- 図版第7 No.5トレンチ出土遺物
- 図版第8 No.7トレンチ出土遺物(1)
- 図版第9 No.7トレンチ出土遺物(2)
- 図版第10 No.9トレンチ出土遺物(1)
- 図版第11 (1)No.9トレンチ出土遺物(2) (2)No.9トレンチ出土遺物(3)
- 図版第12 (1)No.9トレンチ出土遺物(4) (2)出土遺物(石器)
- 図版第13 出土遺物(須恵器)
- 図版第14 出土遺物(瓦)
- 図版第15 出土遺物(木製品)

### 千代川遺跡第8次

- 図版第16 (1)調査地遠景(南西から) (2)調査地全景(南から)
- 図版第17 (1)調査地全景(北から) (2)南北方向溝(南から)
- 図版第18 (1)溝内遺物出土状況(北から) (2)出土遺物

### 上中遺跡第2次

- 図版第19 (1)調査前全景(南西から) (2)トレンチ全景(南西から)
- 図版第20 (1)トレンチ南壁西南端土層断面(北西から) (2)調査地全景(北東から)

### 篠窯跡群

- 図版第21 (1)西長尾A地区作業場跡調査地遠景(東から)  
(2)西長尾C地区作業場跡遠景(南西から)
- 図版第22 (1)西長尾A地区作業場跡(調査前)



- (2)西長尾A地区作業場跡(調査後)
- 図版第23 (1)調査地北側ピット群・SB01・SA02・SA03(西から)  
(2)調査地北側ピット群・SB02・SA04(東から)
- 図版第24 (1)調査地南側ピット群・SA01(西から)  
(2)調査地南側ピット群・SA01(南から)
- 図版第25 (1)SD01・SD02・SX01(西から) (2)SD01・SD02・SX01(南から)
- 図版第26 (1)SD03(南から) (2)SD04・SD05(北から)
- 図版第27 (1)SK01(北から) (2)SK02(西から)
- 図版第28 (1)SK03(北から) (2)SK04(北から)
- 図版第29 (1)SK04(北から) (2)SK04(西から)
- 図版第30 (1)ピット内遺物出土状態 (2)ピット内遺物出土状態
- 図版第31 (1)ピット内根石検出状況 (2)第1トレンチ(南から)
- 図版第32 西長尾A地区作業場跡出土遺物(1)
- 図版第33 西長尾A地区作業場跡出土遺物(2)
- 図版第34 西長尾A地区作業場跡出土遺物(3)
- 図版第35 (1)芦原3号窯調査前全景(東から)  
(2)1号窯・1号窯灰原・3号窯検出状況(東から)
- 図版第36 (1)3号窯・SD01・1号灰原完掘状況(東から)  
(2)芦原3号窯・SD01(東から)
- 図版第37 (1)1号窯灰原断面(北から) (2)SD01遺物出土状況(東から)
- 図版第38 芦原窯跡出土遺物(1)
- 図版第39 芦原窯跡出土遺物(2)
- 図版第40 (1)芦原地区調査前風景(北から) (2)芦原地区完掘状況(東から)
- 図版第41 (1)前山地区調査地西側全景(西から)  
(2)前山地区調査地東側全景(北西から)
- 図版第42 (1)掛ヶ谷・黒岩地区調査地全景(東から)  
(2)掛ヶ谷・黒岩地区調査地近景(南から)
- 図版第43 (1)SD01(北から) (2)SD02(北から)
- 図版第44 (1)掛ヶ谷地区調査地全景(東から) (2)掘削状況(東南から)
- 図版第45 (1)黒岩地区調査地全景(東から) (2)掘削状況(東から)
- 図版第46 (1)石組遺構(南から) (2)J区自然木出土状況

# 1. 千代川遺跡第6・7次発掘調査概要

## 1. はじめに

亀岡市内では、国道9号バイパスの建設計画が昭和49年度から開始され、亀岡市南方の丘陵部から西方の行者山裾を縦断する路線が決定される一方、近年の宅地開発や学舎の増改築が著しくなった。またこれらの建設に先立つ事前の発掘調査においては、弥生時代の集落跡から中世の山城まで多大な成果を得ている。特に行者山裾に点在する大井町太田遺跡・北金岐遺跡では弥生時代の環濠集落等を検出し、さらに千代川町内においても5次にわたる調査が行われ、弥生時代から鎌倉時代に至る遺物や遺構を検出し、広範囲かつ長期的な複合遺跡であることが判明している。

さて、千代川遺跡は亀岡市を貫流する大堰川の西岸、行者山の北東麓に形成された扇状地上にあたり、推定丹波国府跡<sup>(注1)</sup>や奈良時代の寺院跡と伝えられる桑寺廃寺の存在も想定される場所である。またその北西から南西にかけての丘陵においては、拝田古墳群・北ノ庄古墳群・小金岐古墳群などの6世紀から7世紀にかけての古墳群が形成されている。

今回の発掘調査は、国道9号バイパスに関連して府道(北ノ庄・千代川停車場線)の拡幅工事が進められることとなり、上記の千代川遺跡・推定丹波国府跡・桑寺廃寺の一面を横断することから、事前に発掘調査を行う必要が生じたものである。

昭和58年4月に京都府土木建築部道路建設課から遺跡調査の依頼をうけ、再三にわたる協議を行ったうえ、昭和58・59年の2か年にわたって調査を実施することとなった。昭和58年8月4日付けで文化庁長官あて埋蔵文化財発掘調査届出書を提出し、同年9月19日より調査を開始した。調査の結果、幅約2～3mの細長い調査地にもかかわらず、後述する住居跡・方形周溝墓・水田など多大な成果を得て昭和59年7月5日にすべての現地作業を終了した。

発掘調査にあたっては、調査課主任調査員水谷寿克、同調査員森下 衛・引原茂治が担当して行ったが、多くの方々から専門的指導、助言を賜った<sup>(注2)</sup>。また現地調査においては森下調査員が中心となり作業の進行をはかったが、調査補助員として京都学園大学などの有志学生諸氏、整理員として亀岡市内の方がた、作業員として千代川町の方がたの協力をいただいた<sup>(注3)</sup>。

なお、本概要報告の執筆にあたっては、「はじめに」を水谷寿克、「出土遺物」のうち奈良・平安時代の項を引原茂治、石器の項を調査員田代 弘が行い、他を森下 衛が行った。

## 2. 位置と環境

亀岡盆地は、京都府のほぼ中央部に標高400～900mの山々によって形成される丹波高原の南端に開けた断層盆地である。丹波高原に源を発した大堰川は、盆地を東西に2分するように南流した後、山城盆地を経て淀川と合流し大阪湾へ注ぐ。

当地方は、古代山陰道東端の国である丹波国に属し、老ノ坂峠を介して山城国と接しており、常に畿内からの出入口として口丹波地方と呼ばれるに至った。そのため丹波国の中でも交通の要衝、文化の中心地としての位置を占め、国府・国分二寺のおかれた地でもある。

さて今回の調査地は、亀岡盆地の北西、行者山(標高431m)の北東麓に形成された扇状地上に位置している。当扇状地上は西から東へゆるやかに下る地形を呈しているが、東西約1.2km、南北約1.5kmにわたる広大な台地状をなし、その縁辺部には1～1.5mの段差がみられる。そして、この台地状部のほぼ全域には弥生時代から中世にわたる遺物の散布が認められ、集落跡さらには丹波国府跡・桑寺廃寺の存在も推定されており、広大かつ長期的な複合遺跡である千代川遺跡と呼ばれている。

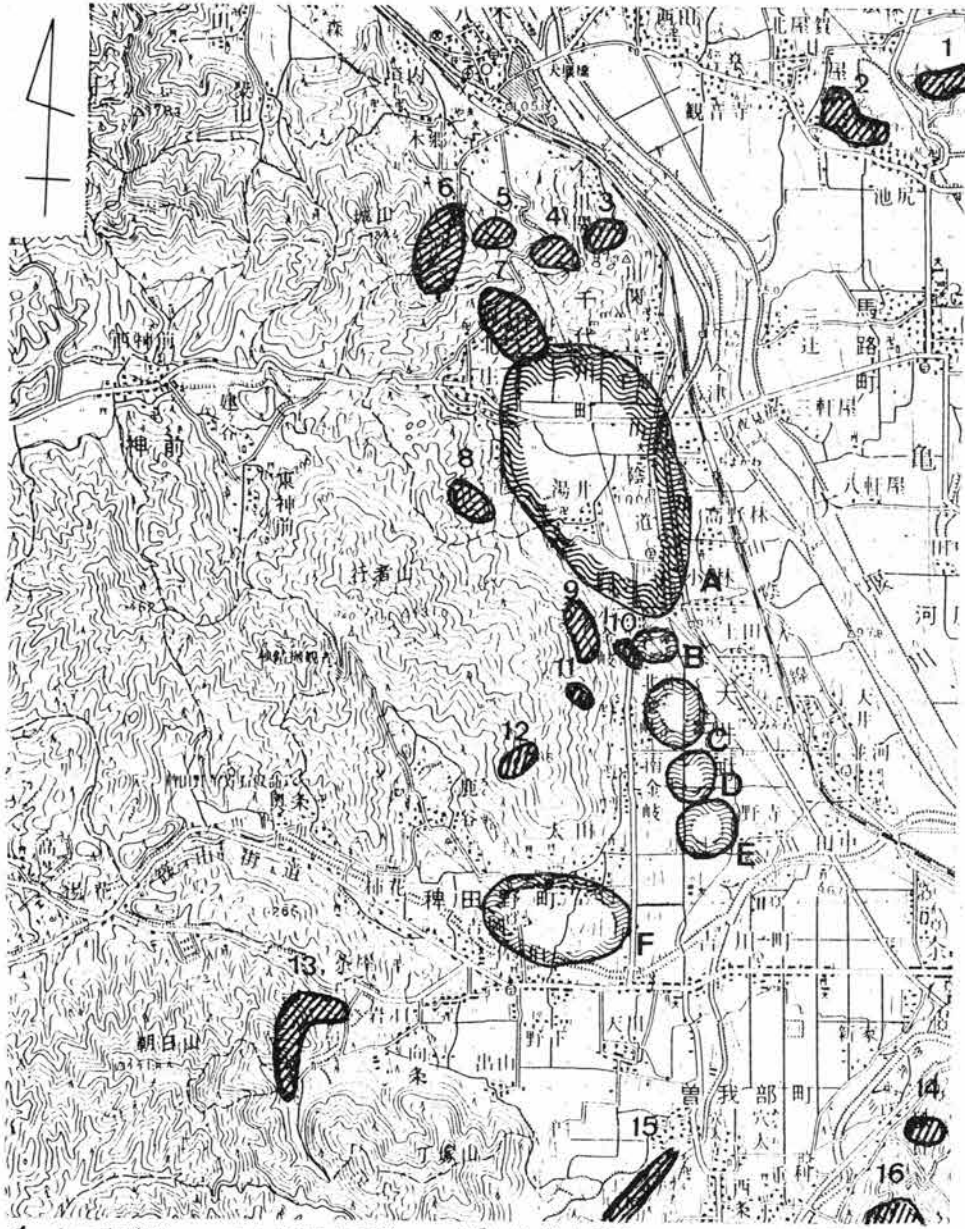
盆地全域をみると、その地形的特色から大きく4地域に分けることができる。それは、大堰川東岸の馬路町から河原林町・千歳町にわたる広大な平地部、西岸の篠町一帯の平地部、余部町から曾我部町そして吉川町を含む平地部、さらに行者山山麓一帯の千代川町から大井町・稗田野町一帯の平地部の4地域である。

これらは大小の差こそあれ、それぞれ各時代の遺跡が分布しており、特色を有した変遷をうかがうことができる。中でも、調査地の位置する行者山山麓一帯は、近年の国道9号バイパス建設などに伴って諸々の遺跡の状況が明らかとなってきた。以下、それらを概観する。

現在までに確認されているもので最も古いものは、縄文時代後期と考えられるもので、丘陵部に分布する小金岐古墳群や拜田古墳群の調査で墳丘盛土内などから土器片や石器片が出土している。<sup>(注4)</sup> また晩期と考えられる土器片も千代川遺跡・<sup>(注5)</sup>太田遺跡・<sup>(注6)</sup>北金岐遺跡<sup>(注7)</sup>などで出土しているが、いずれも少量でありまとまったものではない。

しかし弥生時代に至ると、前期末から中期初頭の太田遺跡、中期の方形周溝墓や後期の溝が検出された南金岐遺跡、<sup>(注8)</sup>後期から古墳時代初頭の北金岐遺跡、<sup>(注9)</sup>後期の馬場ヶ崎遺跡、今回の調査地を含め中期から後期にわたる千代川遺跡などがみられ、盆地全域をみても後期以後、大堰川兩岸の段丘上や微高地上に遺跡が散在するようになる。

古墳時代の集落跡の発見例は少ないが、<sup>(注10)</sup>千代川遺跡や北金岐遺跡で住居跡が検出されているのをはじめ、多くの場合、弥生時代の集落跡が確認されたところの近辺から遺物が出土しており、弥生時代とほぼ似かよったところに営まれていたと考えられる。また古墳から見る



- |          |            |           |          |
|----------|------------|-----------|----------|
| 1 小口古墳群  | 7 拝田古墳群    | 13 佐伯古墳群  | A 千代川遺跡  |
| 2 池尻古墳群  | 8 北ノ庄古墳群   | 14 風ノ口古墳群 | B 馬場ヶ崎遺跡 |
| 3 上川関古墳群 | 9 小金岐古墳群   | 15 穴太古墳群  | C 北金岐遺跡  |
| 4 大法寺古墳群 | 10 馬場ヶ崎古墳群 | 16 龍ヶ尾古墳群 | D 南金岐遺跡  |
| 5 内山古墳群  | 11 北金岐古墳群  |           | E 太田遺跡   |
| 6 小谷古墳群  | 12 鹿谷古墳群   |           | F 鹿谷遺跡   |

第1図 周辺遺跡分布図

と、亀岡盆地では、古墳時代中期に千歳車塚古墳(全長約80mの前方後円墳)を中心に小地域毎に方墳が築かれる(2基が並び築かれる場合が多い)のを特色とし、当地域でも大井町馬場ヶ崎1・2号墳ではやはり方墳2基が近接して存在する。しかし、それ以外に中期の墳墓群についてはあまり明確にされていない<sup>(注11)</sup>。ただ盆地内をみると、馬路町池尻古墳群や曾我部町穴太古墳群などに代表されるような低丘陵の稜線上に営まれた中期の古墳群があり、今後当地域内でもこのような古墳群が発見される可能性がある<sup>(注12)</sup>。

これに対し、後期に至ると盆地全域の丘陵部に横穴式石室を内部主体とする古墳が数多く築かれ、古墳群を形成する。当地域も例外ではなく、行者山から拜田丘陵にかけ後期の群集墳がみられ、鹿谷古墳群・北金岐古墳群・小金岐古墳群・北ノ庄古墳群・拜田古墳群などがある。中でもこの地域には特異な石室が多く、前方後円墳の内部主体として石棚を設けた石室を有す拜田16号墳をはじめ、石棚を有すもの(小金岐76・77号墳・鹿谷古墳)<sup>(注13)</sup>、棺障状遺構を有すもの(拜田9号墳・小金岐1号墳)<sup>(注14)</sup>がある。

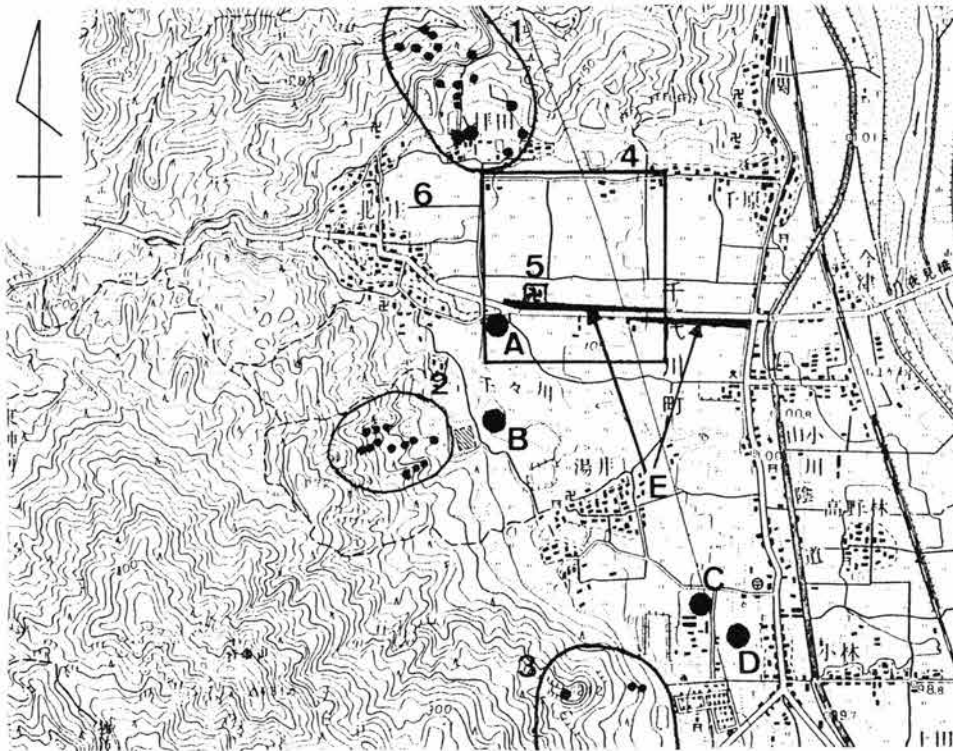
歴史時代の遺跡として、今回の対象地である丹波国府推定地、桑寺廃寺があるのをはじめ、千代川遺跡や北金岐遺跡で奈良・平安時代の遺構・遺物が出土している<sup>(注15)</sup>。また、鎌倉時代を中心とする中世の遺構・遺物も近年の調査で比較的多く出土している。

国府推定地については諸説があるものの<sup>(注16)</sup>、現段階では一か所に確定しうる明確な資料は無い。ただ、当地に残る条里制地割、そこから復元しうる方六町の国府城、地名(字名)などの考証等から、木下良氏らが示されるように、奈良時代に千代川町に所在した国府が平安時代以降に八木町屋賀に移転したとする説が最も有力視されている。また寺院跡についてみると、盆地内に千歳町三日市廃寺・国分寺・国分尼寺、篠町観音芝廃寺、曾我部町与野廃寺、千代川町桑寺廃寺などがある。これらは、先に盆地内を4分したその各地域毎にある。このことは、それぞれの創建の背景を考える上で大きな示唆をあたえてくれるものと思う。

### 3. 千代川遺跡について

先述のように、調査地の立地する扇状地は、南北約1.5km、東西約1.2kmという広大な台地状を呈している。そしてそこからは、弥生時代から鎌倉時代にわたる遺物が採取され、実際、近年の数次の発掘調査や分布調査でも、諸々の遺構・遺物の発見が報告されている。

それらをまとめると付表1のようになる。これらを見ると、千代川遺跡の縁辺部の調査が多いが、その中央部でも遺物の散布がみられ、時代毎に場所を変えながら扇状地全域に遺跡が広がっているものと考えられる。



- |          |           |
|----------|-----------|
| 1 拝田古墳群  | 4 丹波国府推定地 |
| 2 北ノ庄古墳群 | 5 桑寺廃寺    |
| 3 小金岐古墳群 | 6 千代川遺跡   |

第2図 千代川遺跡詳細図

付表1 千代川遺跡調査一覧表

	分布調査 国道9号バイパス関係	当扇状地上のほぼ全域に遺物の散布が認められた。中でも、北半部の国府推定域・行者山東麓の舌状台地上に集中していた。
A	第1次調査地(昭和55年度)国道9号バイパス関係	国府推定域西南隅付近の調査だったが、千々川の氾濫のため奈良・平安時代の遺物は出土したものの遺構は検出できず。
B	第2次・第5次調査地(昭和56年度・58年度)国道9号バイパス関係	行者山東麓の舌状台地上に位置し、弥生時代～古墳時代の住居跡5基、奈良・平安時代の掘立柱建物跡6棟などが検出された。出土遺物中に墨書土器・灰釉陶器・緑釉陶器などがあった。
C	第4次調査地(昭和58年度)丹波養護学校関係	奈良時代の掘立柱建物跡1棟、奈良時代・中世の素掘り溝多数検出。
D	第3次調査地(昭和57・58年度)日吉ダム移住地関係	古墳時代前期の竪穴式住居跡2基、同時期の大溝を検出した。大溝埋土中から弥生時代中期・奈良時代の遺物も出土している。
E	第6次・7次調査地(昭和58・59年度)府道関係	今回の調査地

(表中のアルファベットは第2図と一致する)

#### 4. 調査経過

今回の調査は、その性格上、道路に沿って幅3m内外のトレンチを入れるという限られた範囲で行ったものである。そのため検出した遺構の全容(規模や性格等)は、不明な部分が多かった。しかしその反面、対象地が扇状地上を東西に縦断するように走っているため、千代川遺跡(特に国府推定域)の一面における遺構の埋没状況や、その東西方向への広がり等を確認する上で、非常に重要な意味を有していたと言えるだろう。

なお調査は、天候及び道路工事の都合上、昭和58年9月19日～昭和59年1月20日、昭和59年2月6日～昭和59年3月13日(千代川遺跡第6次調査)と、昭和59年6月1日～7月5日(千代川遺跡第7次調査)に分けて行った。

##### (1) 千代川遺跡第6次調査(昭和58年度の調査)

現地調査は2,500m<sup>2</sup>を対象として、まず9月19日より地区割を設定することから始めた。調査地が、東西に細長く伸びているためこれを線としてとらえ、道路上に設けた中軸ラインをもとに60m毎に大地区(A～O)、そしてその中を6m毎に10小地区(a～j)に分けた(第4図)<sup>(注18)</sup>。またこれに併行して調査地内に7か所の試掘トレンチを入れ、遺構の有無・土層の確認を行った。

その結果、各トレンチで田畑を作る際に盛土や削平がくり返し行われており、土層は一様ではなかった。しかし基本的には、耕作土・床土の下に暗灰色砂質土、黒灰色砂質土、黒灰色土、黄灰色砂質土もしくは粘土の順にみられた。そして耕作土、暗灰色砂質土、黒灰色砂質土中には、弥生時代から近世に至る遺物が細片となり含まれていた。また黒灰色土中には、層位的に分けることはできなかったものの弥生時代から平安時代にわたる遺物が含まれており、遺構はその下の黄灰色砂質土もしくは粘土上面で検出した。

黒灰色土中に含まれる遺物をみると、調査地ほぼ全域で奈良時代から平安時代にわたるものが出土しているが、それらは特に西半部に集中している。また弥生土器は、調査地東半部に集中してみられた。検出遺構もこれに対応し、西半部に奈良時代から平安時代を中心とするもの、そして東半部に弥生時代を中心とするものがみられた。

以上の成果をもとに、10月19日原因者である京都府道路建設課、亀岡土木事務所と協議を行った後、同20日から各トレンチを拡張するとともに、新たに8か所のトレンチを設け掘削を行った(No.1～15トレンチ)。

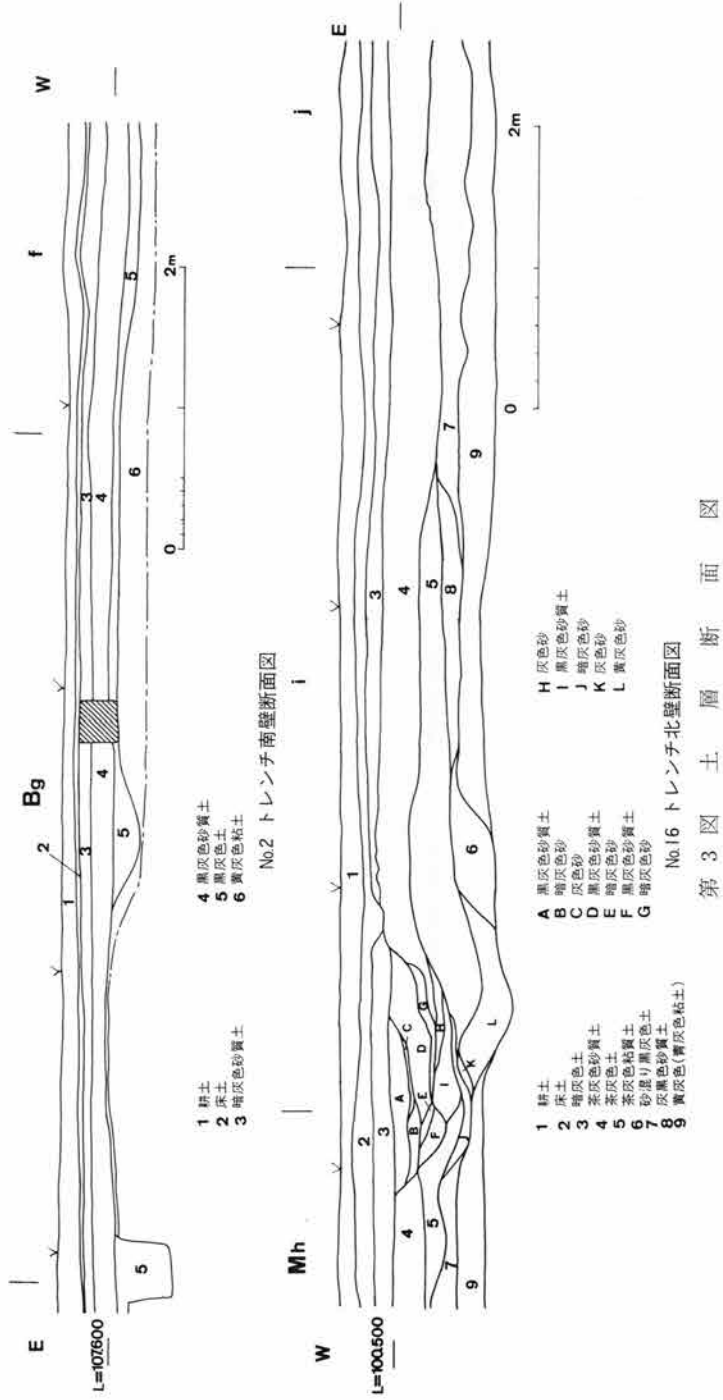
調査は主に、No.5～No.9トレンチから進めた。この部分は、試掘トレンチの成果から、弥生時代中期の遺構・遺物の出土が予想されたところである。精査の結果、やはりその時期の遺構群を検出した。No.5・No.7トレンチから方形周溝墓を、No.9トレンチからは竪穴

式住居跡・掘立柱倉庫跡・溝など、さらにNo.6トレンチからは旧河道と考えられる大溝を検出した。

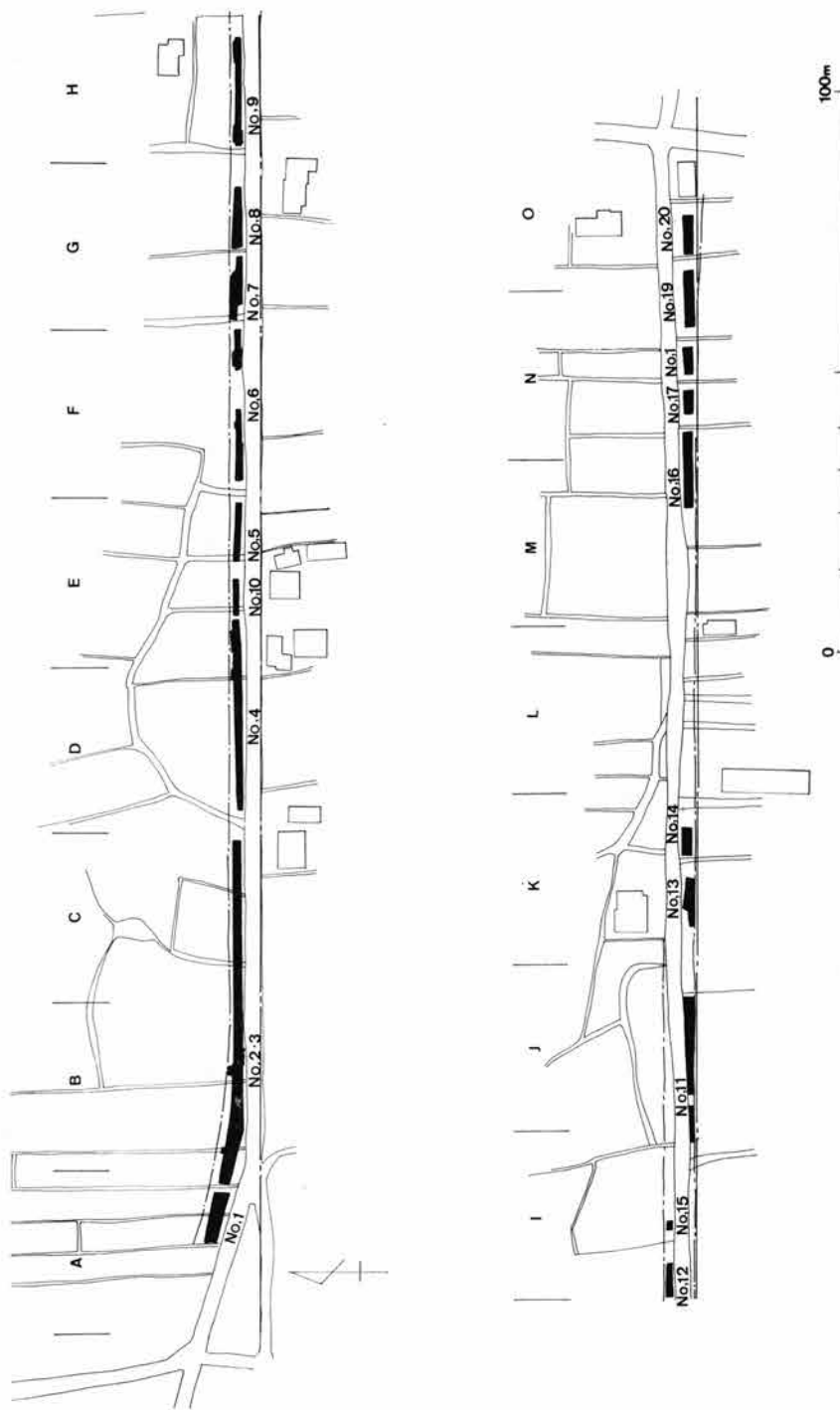
続いて、No.1~No.4, No.10トレンチの調査に移った。<sup>(注19)</sup>この部分は桑寺廃寺の推定地にあたり、試掘トレンチの成果からも奈良・平安時代にわたる古瓦や須恵器・土師器が出土し、その時代の遺構の存在が予想されたところである。

精査の結果、やはり桑寺廃寺に関連すると考えられる諸々の遺構（築地状遺構・掘立柱建物跡・溝など）を検出した。

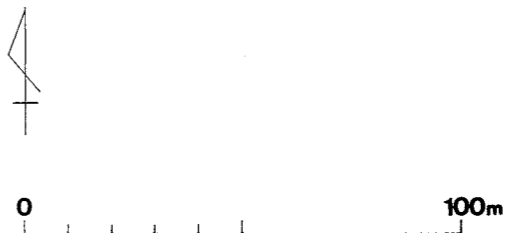
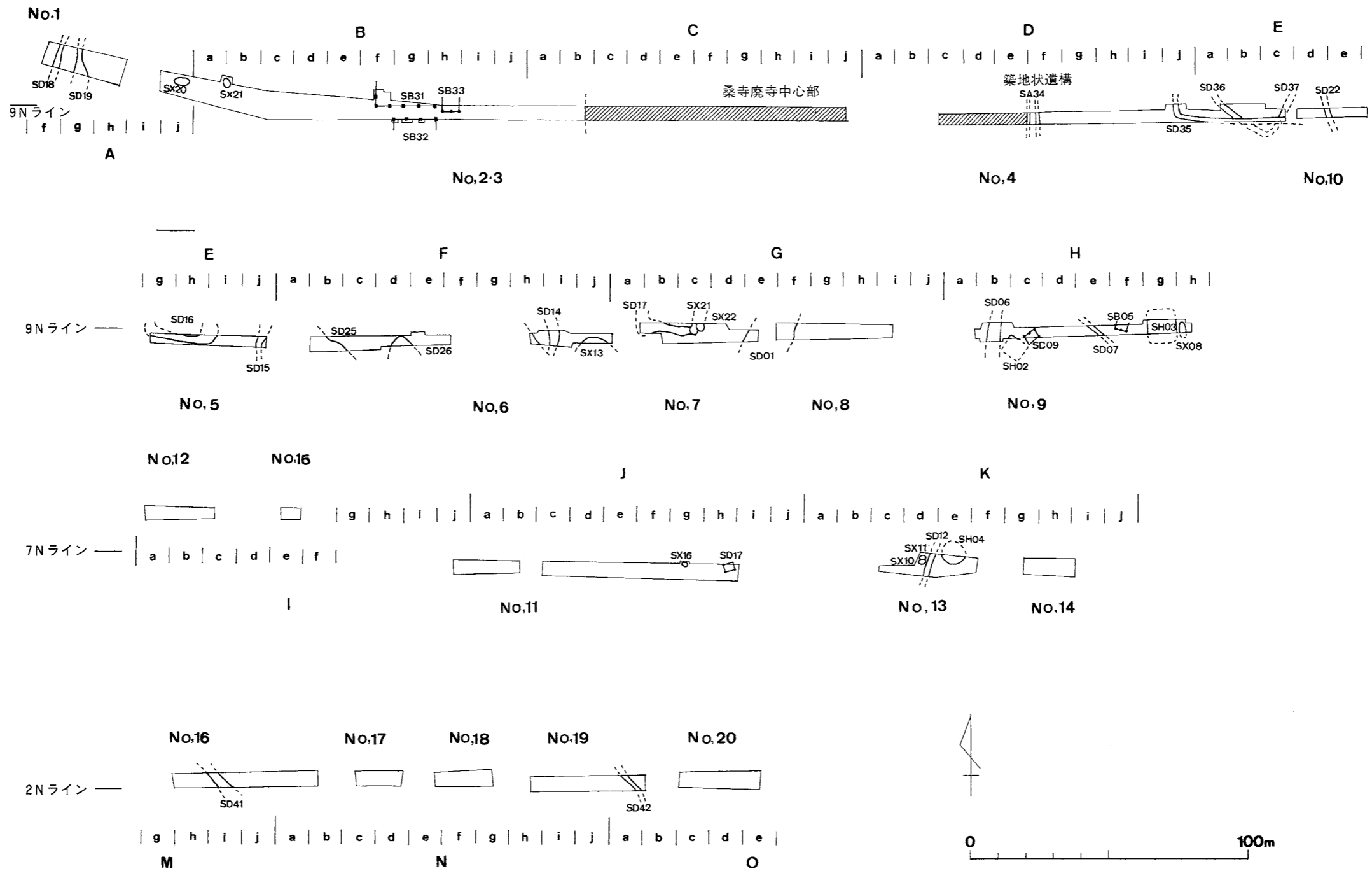
工事の都合等で、一旦この時点で諸々の記録を作成し、昭和59年1月20日に現地調査を終了した。そして約半月後の2月6日から改めてNo.11~No.15トレンチの調査に着手した。







第4図 トレンチ配置図



第5図 主要遺構配置図

ここは、先に弥生時代中期の遺構群を検出した No. 5～No. 9トレンチの東側に続く部分であり、それらの遺構群に関連する遺構の検出が予想されたところである。

後世の削平が著しく遺構の遺存状況は悪かったものの、No. 12トレンチが当台地状地形の先端部にあたる事が判明し、その先端近くのNo. 11・12トレンチで弥生時代中期の竪穴式住居跡・掘立柱倉庫跡・土壇・溝などを検出した。そしてこれらの諸記録を作成し、昭和59年3月13日に現地調査を終了した。

## (2) 千代川遺跡第7次調査(昭和59年度の調査)

昭和59年度調査地は、台地状をなす前年度調査地からは一段下がる、その縁辺部にあたる。調査は、昭和59年6月1日から前年度の調査結果をもとに、調査地内に5か所のトレンチを入れ掘削を開始した。ところが前年度と立地が変化したためか、土層はまったく異なり、現在の耕作土・床土の下に暗灰色土、茶灰色砂質土、茶灰色土、黒灰色粘土、黄灰色粘土がみられた。遺物は、耕作土中に数点の須恵器が細片となって含まれていた他には、茶灰色土中に弥生土器片が少量包含されているにすぎなかった。そこで、茶灰色土上面までを重機によって掘削し、以下を人力により掘り下げた。

その結果、黒灰色粘土上面(地表下約1m)で、弥生時代の溝2条や足跡を検出した。このことから、黒灰色粘土上面が当時の水田面ではないかと考えられたため、精査をくり返し行ったところ、平面的にはそれらを証明するような遺構(畦畔など)は検出しえなかった。しかし、各トレンチ断面において、畦畔と考えられる高まりを数か所確認し、当地に水田跡(出土遺物から弥生時代中期と考えられる)が広がっていることを確信した。そこでこれらの諸記録を作成した後、昭和59年7月5日に現地調査を終了した。

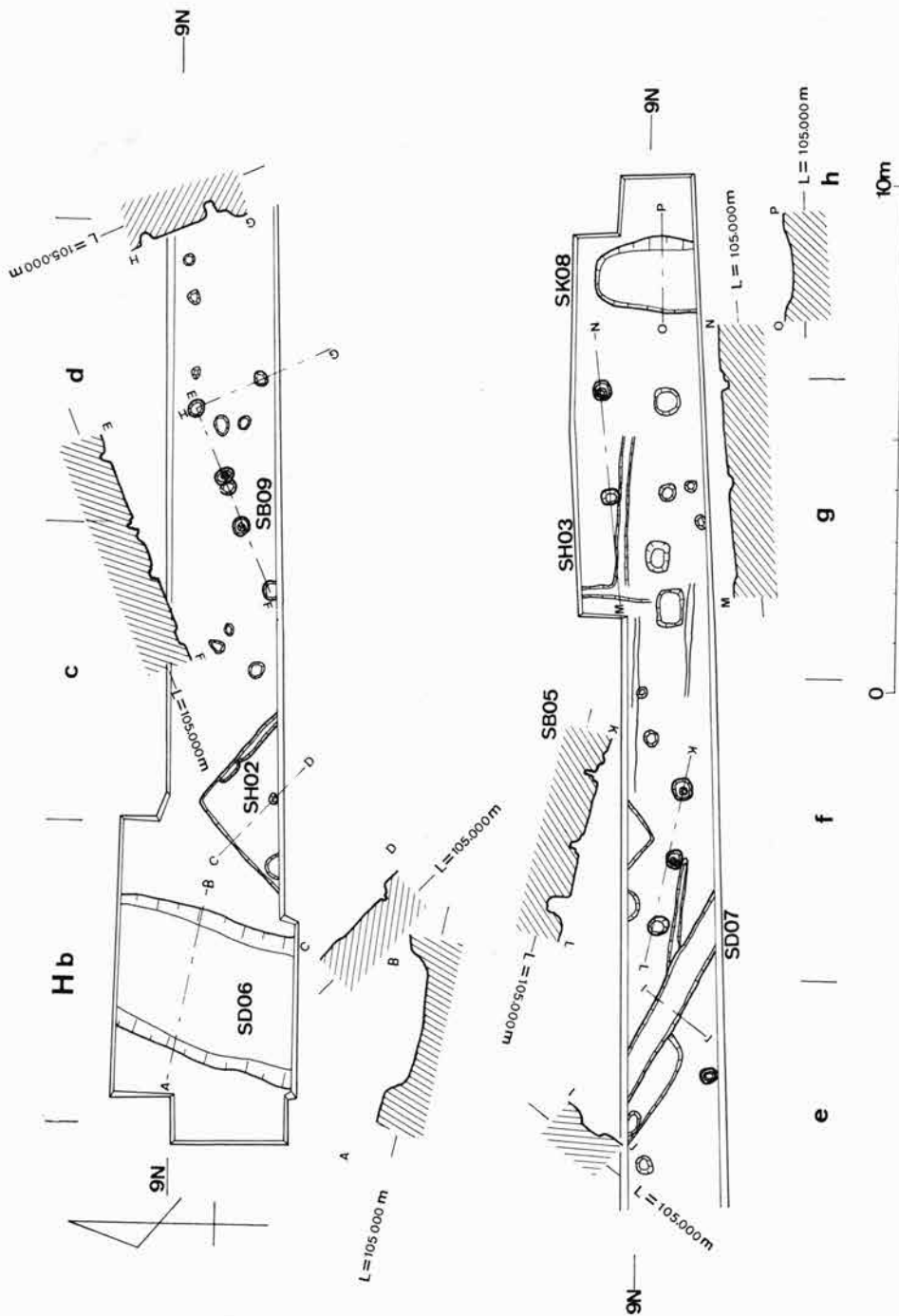
## 5. 主な検出遺構

今回の調査で検出した遺構は、弥生時代を中心とするものと、奈良時代から平安時代を中心とするものの大まかに2時期に分けることができる。しかし、先に述べたように限られた範囲の調査のため、各遺構は一部分の検出にとどまり、全体の規模や形態について明らかにできたものはなかった。以下、その主なものについて簡単に述べる。

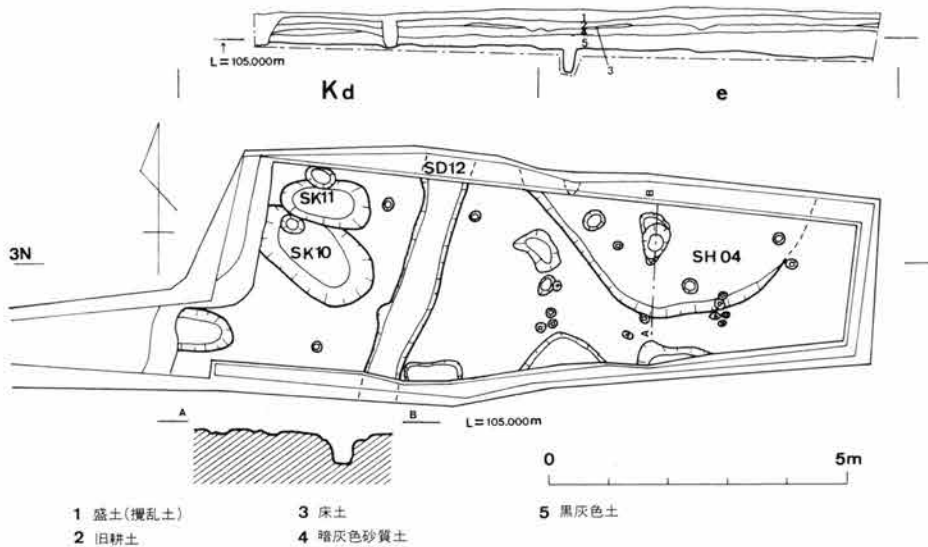
### (1) 弥生時代

弥生時代の遺構は、昭和58年度調査地東半部及び昭和59年度調査地にその広がりがみられた。そして、台地状をなす地形の先端部付近及びその縁辺部にわたり立地している。

遺構としては、方形周溝墓などの埋葬施設、竪穴式住居跡や掘立柱建物跡といった集落跡、水田跡とそれに伴う水路跡や足跡という3種類の遺構群を西から東へ連なった状態で検出し



第6図 No.9 トレンチ平面図



第7図 No.13 トレンチ平面図

た。

#### ①集落跡

集落跡に関する遺構としては、竪穴式住居跡・掘立柱倉庫跡・ピット群・溝などがある。これらは、台地状地形の先端付近に位置し、東西約200mという広大な範囲から検出した。しかし、いずれも遺存状態は悪く、かなりの削平をうけており、現水田の耕作土を除去するとすぐ遺構面となる部分が大半であった。

竪穴式住居跡1(第6図SH02) 方形の平面形を有す住居跡の北側コーナー付近を検出したものであり、全体の規模はわからない。遺存状態も悪く、検出面から3~4cm程遺存しているにすぎない。また床面からはピット1か所、北東壁に沿って幅約10cm、深さ約5cmの壁溝を検出したのみで、埋土内や床面から遺物の出土はなかった。

竪穴式住居跡2(第6図SH03) この住居跡は、支柱穴と考えられる4か所のピットを検出し、その周辺に部分的に約2~3cmの段差を検出したため竪穴式住居跡と考えたもので、削平が著しく、規模等はまったく不明である。ピット内から弥生時代中期と考えられる土器の細片が数点出土している。

竪穴式住居跡3(第7図SH04) この住居跡もかなりの削平をうけており、かろうじてその一部分を検出したものである。検出面から約3cm程遺存しているにすぎず、平面形も円形に近いものようであるが詳細は不明である。床面からは支柱穴と考えられるピットを2か所検出した。またそのピット内から弥生時代中期と考えられる土器の細片が数点出土している。

溝1(第6図SD06) 周囲の遺構の遺存状況からみて40~50cmは削平されていると考えられるが、現存の幅約3m・深さ約30cmを測る。集落の西端を区切るように南北方向に走ると考えられるものである。埋土は、底部付近に約2~3cmの厚さで砂層の堆積がみられるものの、それより上には黒灰色土のみが堆積している。常に流れを有していたものではなく、集落の環濠的なものとして人工的に掘削されたものである可能性が高い。なお、埋土内からは多量の弥生時代中期の土器片が出土している。

溝2(第6図SD07) SD06同様、かなりの削平をうけているようだが、幅約50cm・深さ約20cmを測る。溝内埋土は黒灰色土の単一層で、遺物の出土はみられなかった。位置からみて集落に伴う排水路的なものと考えられる。

溝3(第7図SD12) SH04の西側で検出した。SH04同様かなりの削平をうけているようだが、幅約60cm・深さ約5cmを測る。溝内埋土は黒灰色土の単一層で、弥生時代中期の土器片が少量出土している。位置からみて、SD07と同様集落に伴う排水路的なものと考えられる。

掘立柱建物跡1(第6図SB09) 東西方向2間(3.9m)、南北方向1間(1.8m)以上の規模を有するもので、調査地外へ続いているため全体の規模は不明だが、倉庫跡と考えている。

掘立柱建物跡2(第6図SB05) 東西方向に2間分の柱穴を確認したものである。北へ延びるものと考えられ、建物跡1と同じ倉庫跡と考えている。

土坑1(第6図SK08) これも上面はかなりの削平をうけているが、長径2m以上・短径1.4mの不整楕円を呈し、深さ約8cmを測る。埋土は黒灰色土の単一層で、弥生時代中期の土器細片が少量出土している。

土坑2(第7図SK10) 長径約2.2m・短径約1.2m・深さ約20cmを測る楕円形を呈するものである。埋土は黒灰色土の単一層であるが、弥生時代中期の土器片がまとまって出土している。

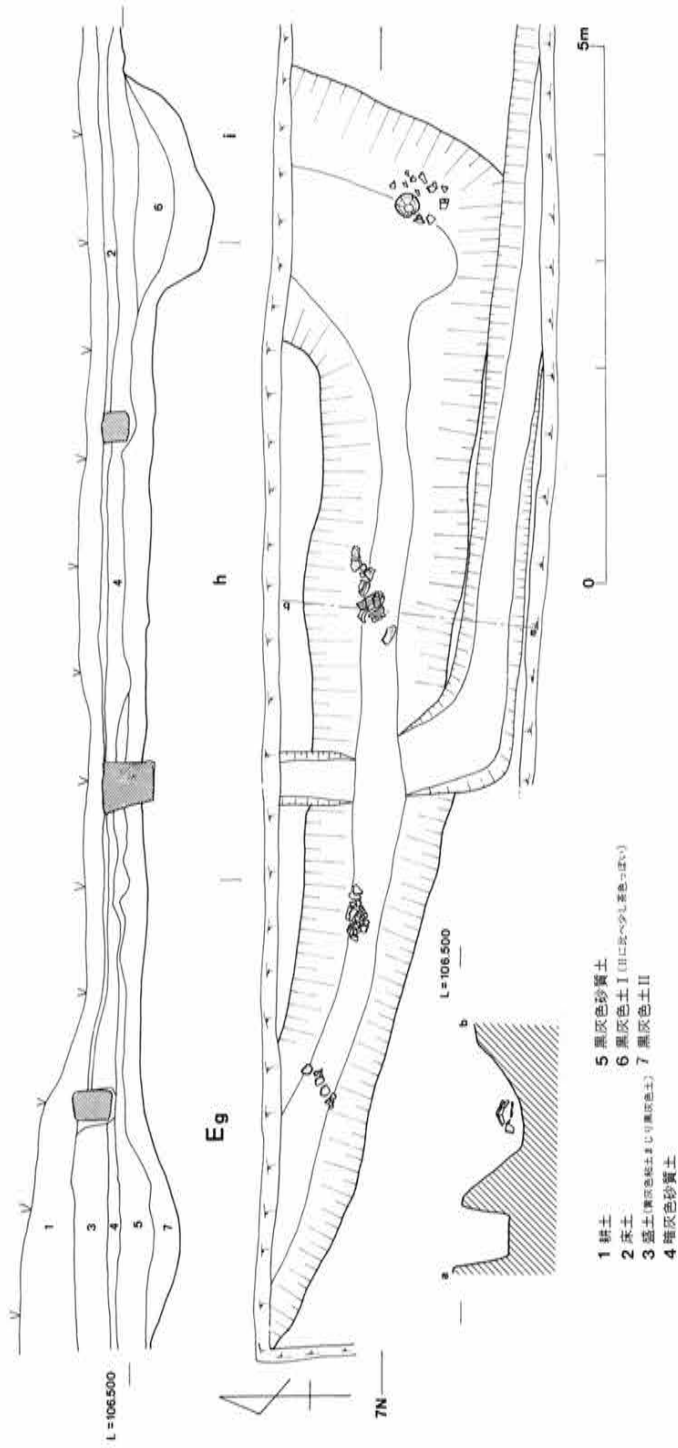
土坑3(第7図SK11) 長径約1.5m・短径約0.8m・深さ約17cmを測り、不整楕円を呈するものである。埋土は黒灰色土の単一層であるが、土坑2を切り込んでつくられている。出土遺物は、弥生土器の細片が数点出土している。

その他にも多くの柱穴状のピットや土坑等を検出しているが、時期の不明なものも多い。

## ②方形周溝墓

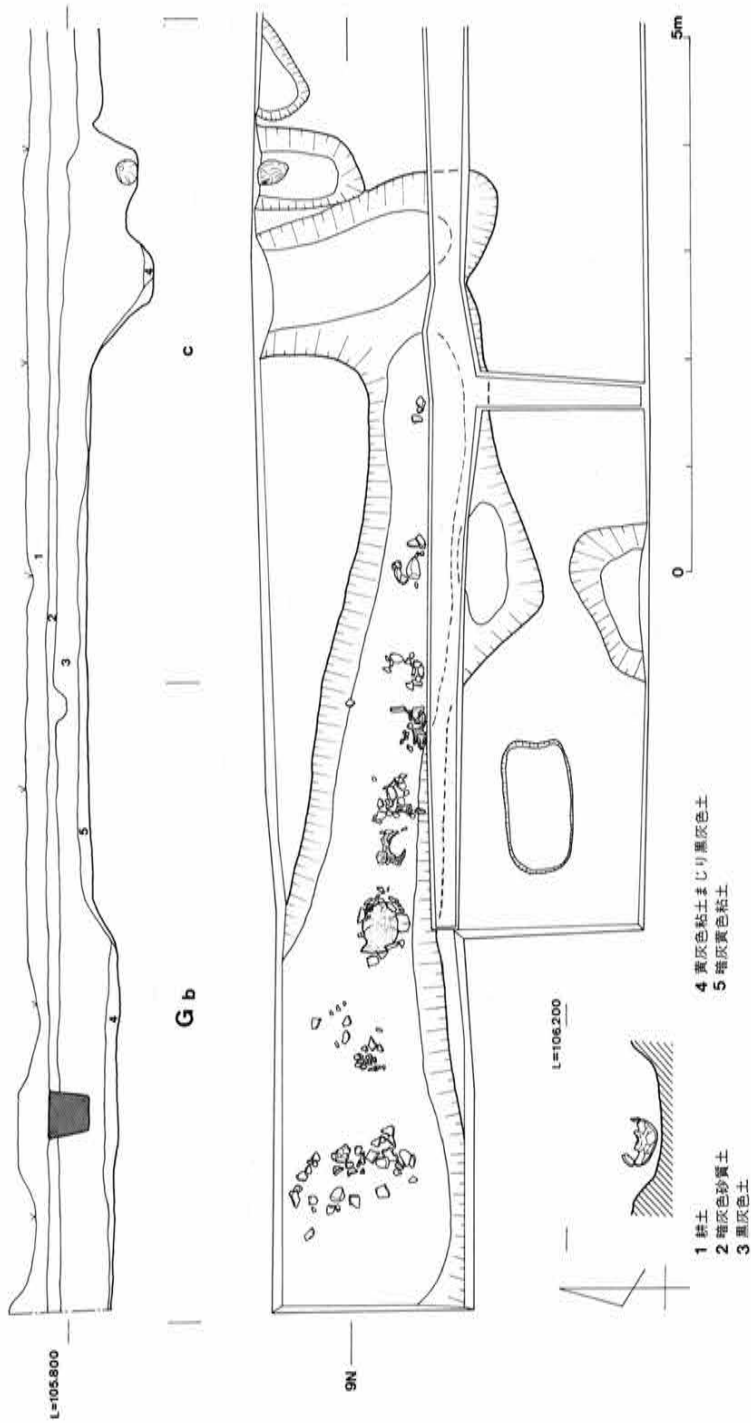
方形周溝墓は、No.4・No.5・No.7トレンチからそれぞれ検出した。いずれも弥生時代中期の土器が出土している。

方形周溝墓1(第8図) 幅約1.3m・深さ約50cmの溝を、L字状に検出したものである。



第8図 No.5 トレンチ・方形周溝墓1 平面図

- 1 耕土
- 2 赤土
- 3 澄土 (黒灰色粘土より黒灰色土)
- 4 暗灰色砂質土
- 5 黒灰色砂質土
- 6 黒灰色土 I (田に於て少し茶色っぽい)
- 7 黒灰色土 II





大部分は調査地外にあたり全体の構造等は不明であるが、検出状態から検出部西端で北へ屈曲するようで、一辺約10m前後の規模を有すと考えられる。溝内埋土は黒灰色土の単一層で、弥生時代中期の土器が出土している。また東端コーナー部は、幅がやや広がり深さも深くなっており、形状は明確にできなかったが、溝内土塚の可能性はある。

方形周溝墓2(第9図) 方形周溝墓1と同様、幅約1.4m・深さ30cmの溝をL字状に検出したものであり、大部分は調査地外へのびる。規模も一辺約10m前後になると考えられる。溝内埋土は黒灰色土の単一層で、弥生時代中期の土器が6群に分かれ出土している。また東端コーナー部付近には、溝内土塚と考えられる土塚を2基確認した。

方形周溝墓3(第13図SD36・37) 幅約1m・深さ約30cmの溝で、トレンチ内を北西から南東方向に横切り、さらにそれとはほぼ直行するように、再び南から北へ横切る状態で検出したものである。すでに、奈良時代以降の諸々の遺構によって削平されており、遺存状態は非常に悪く主体部等は確認できなかった。溝内埋土は他と同様、黒灰色土単一層で、弥生時代中期の土器が1点出土している。

### ③水田跡

水田跡については、先に述べたように、平面的にはそれを明確に示す畦畔等の遺構を検出することはできなかった。ただ、トレンチ断面において畦畔と考えられる高まりを数か所確認したことにより、その存在を確信するに至ったものである。またこれに伴って、水路と考えられる溝や足跡も確認した。

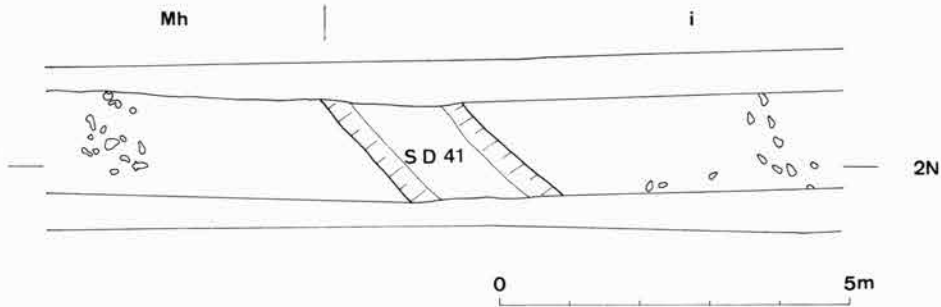
そしてこれらは、集落の立地する台地状地形部から約1~1.5mの段差をもって下がったその縁辺部に位置している。

水田跡 水田跡は、地山土と考えている青灰色粘土上にみられる黒灰色の有機層をベースにしている。ただ、断面観察で確認した畦畔が数か所にとどまり、トレンチの幅も限られていたため、水田一枚の大きさを知ることはできなかった。この面で検出した溝(SD41)の出土遺物から、この水田跡は弥生時代中期のものと推測された。

足跡(第10図) 水田跡と考えられた黒灰色有機層(粘土)上面で、砂が入り込んだ状態で検出した。ただ、湧水のため良好に検出できたのは、No.16トレンチのみである。

足跡は、水路と考えられる溝(SD41)の両岸で2群に分かれ計26個を検出した。特に東側のものは、北から南へ水路に沿って3人が歩いたものであろうと推測できるものであった。

溝4(第10図SD41) 南東方向から北西方向に流れていたと考えられるもので、幅約1m・深さ約30cmを測り断面はU字形をなす。断面観察によると、同一地点に少なくとも4度の掘削が行われており、厚く砂層が堆積していることから常にゆるやかな流れのあったことがう



第10図 No. 16 トレンチ平面図

かがわれる。しかし、最下層のものが弥生時代中期と考えられる他は、出土遺物がなく不明である。

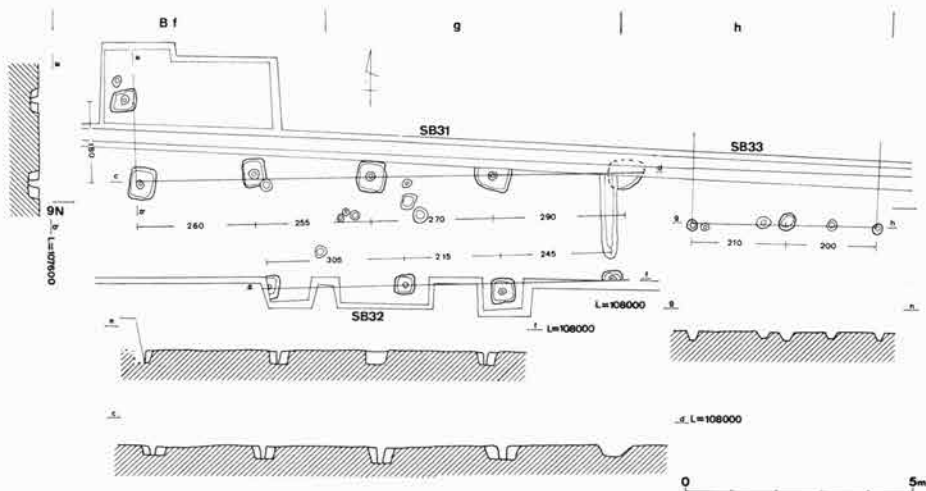
溝5(第5図SD42) 溝4とはほぼ平行に走るもので、約50m離れた所に位置する。

(2) 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は、第6次調査地西半部にその広がりが見られた。そして台地状地形の中央部に立地しており、桑寺廃寺の存在が想定されていたところでもある。そのため、これらの遺構は桑寺廃寺に関連するものが大半と考えられた。

① 桑寺廃寺関連遺構

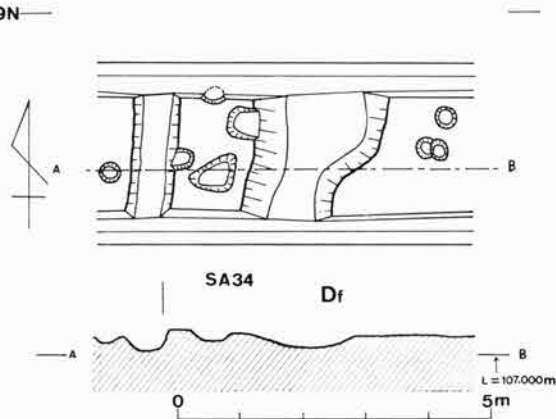
桑寺廃寺の名残りといわれていた土壇付近に、約80mにわたって地山土の高まりが確認できた。そして、その西端では約30cmの段差を、東端では築地状遺構を検出した。この部分は、おそらく寺院の中心部を示していたものと考えられるが、その上面はすでに削平されたようで何ら遺構を検出することはできなかった。またこの高まりの西側にも、約70mにわたる平



第11図 No. 2 トレンチ掘立柱建物跡平面図

坦面があり、そこから掘立柱建物跡3棟を検出した。このことから桑寺庵寺の寺域は、この平坦面を含め東西約150mに及ぶことが推測された。

築地状遺構(第12図) 寺院中心部と考えられる地山土の高まりの東端で検出した。西側に幅約0.8m深さ約40cm、また東側に、若干攪乱をうけているが幅約1.5m、深さ約20cmの溝が設けられ、その間に幅約1.3mの平坦面がみられるものである。

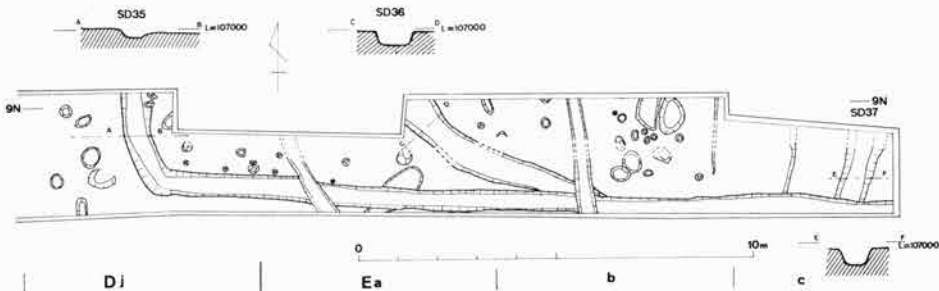


第12図 築地状遺構平面図

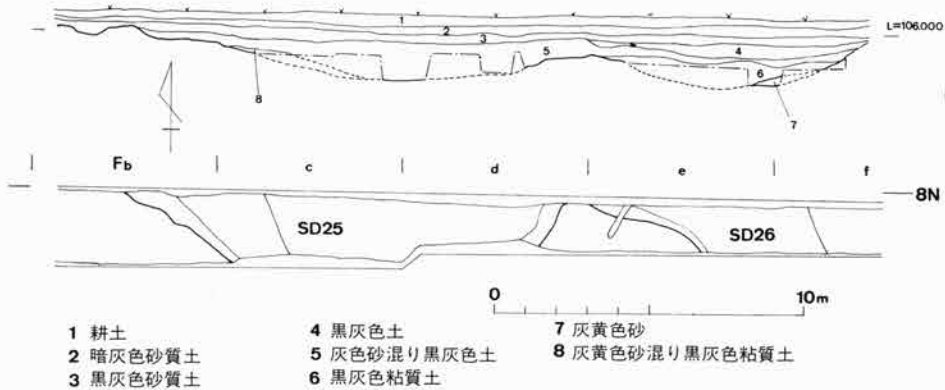
検出した幅も約3mと狭く上方もすでに削平されており、築地とするには確証を欠く。ただ、この平坦面上で柱穴状のピットを確認していることから、築地とするより柵列とする方が良いかもしれない。<sup>(註20)</sup>

掘立柱建物跡3(第11図SB31) 一辺約0.5mの方形の掘形を有し、径約15cm程度の柱痕を残す柱穴を6か所確認したものである。東西4間以上、南北2間以上の建物跡だが、その大半は北側の調査地外にのびているため全体の規模は不明である。

掘立柱建物跡4(第11図SB32) SB31の南側に接して検出したもので、同一建物の続きか、もしくは底部分にあたるのかも知れないが、柱穴の大きさや柱間が若干ずれることからここでは別の建物跡として報告する。一辺約0.3~0.4mの方形の掘形を有し径約10cmの柱痕を残す柱穴を4か所確認したものである。しかしその大半が調査地外にのびているため、全体の構造等は不明である。



第13図 No.4トレンチ東半部平面図



第14図 No.6 トレンチ平面図

②その他

桑寺廃寺関係外と考えられる主な遺構として、トレンチ内でL字状に屈曲する溝(SD35)がある。これは幅約0.8cm、深さ約30cmを測るもので、何らかの区画を示すものと思われる。しかしその区画内については、調査地外にあたるため不明である。(第13図)

さらに、上記の建物跡以外にも多数柱穴状のピットを検出したが、調査範囲が限られていることなどから、まとまりを把握することができないものが大半であった。

また調査地東半部にもどるが、No.6トレンチで検出した旧河道がある(第14図SD25・26)。検出状況からは、幅約10~15m・深さ約2.5mの大溝を2条検出したこととなる。しかし断面観察及び出土遺物からみると、弥生時代から古墳時代までは2条に分かれていたものが、奈良・平安時代には水位がかなり上昇し、水の流れもなく沼状となったと考えられた。おそらく奈良時代頃には、この下流に堰状の施設が構築されたものと思われる。またこれを示すかのように土器類に混ざり、杭状木製品や舟状木製品も出土している。

6. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は整理箱約120箱に及んだ。うち弥生土器が約50箱を占めその他に須恵器・土師器・瓦類・石器・木製品等がある。ここでは整理作業の都合上、調査地西半部では包含層中から出土した奈良・平安時代の遺物を、また東半部では遺構に伴って出土したSD06、No.5・No.7トレンチの方形周溝墓出土土器を中心に報告する。

(1) 弥生時代

調査地東半部を中心に検出した遺構に伴って出土した多数の土器のうち、ここではSD06及びNo.5・No.7トレンチの方形周溝墓から出土した土器を中心に報告し、その後補足的に第

7次調査のSD41出土土器についてふれる。また土器以外の遺物については、石器について述べる。

なお記述に際して、整理作業・紙面等の都合上、個々の土器について詳細に述べることができず、任意に分類設定した器種毎にまとめて行い、観察表は割愛した。

#### ①SD06出土遺物(第15図～第22図)

SD06はNo.9トレンチで検出し、幅約3m・深さ約30cmを測る。土器は、溝内埋土の黒灰色土中から出土した。器種として、壺・甕・鉢・高杯・甕蓋がある。そして各々口縁部の形態等から分類し、壺を広口壺A～E・細頸壺A・B・直口壺・無頸壺に、鉢をA～Dに、甕をA～Gに、高杯をA～Cに分けた。

広口壺A(2～5) 体部から大きくなだらかに開く口縁部をもつもの。口頸部の破片が多いが、(3・4)をみると、口縁端部は上下に少し拡張され端面に凹線文1条・刻み目を配すもの(3)、端面に3条の凹線文・内面に櫛描き波状文を配すもの(4)など加飾されたものが多い。(5)は頸部から体部上半の破片で、その境に断面三角形突帯を、体部上半に櫛描き直線文・波状文を配す。(3～5)とも刷毛目の後なでが施されるが、(3・5)はなでが粗く刷毛目が明瞭に残る。

広口壺B(1・2・7) 体部から頸部が上外方へのび、短く外反する口縁部をもつ。口縁端部は上下に拡張し面をもつ。体部上半まで残す(1)をみると、口縁端面に櫛描き波状文を配し、体部と頸部の境から体部上半へかけ凹線文・櫛原体による列点文を配す。

広口壺C(10・11・14) 丈高の体部から短く直立気味に頸部がのび、さらに短く外反する口縁部をもつ。口縁部は上下にわずかに拡張し面をもつ。大半のものが文様をもたないが、端面の強いなでにより凹線文もしくは凹線文状の凹みを入れるものや、体部外面に刷毛原体による列点文を配すもの(14)がある。頸部に刷毛目の後なで、体部外面上半に叩きの後刷毛目、下半に篋削りを、内面に刷毛目の後なでを施す。(14)はやや形態が異なる。

広口壺D(15～17) 外反する頸部から屈曲し、上方に立つ口縁部をもつもの。頸部に刷毛原体による圧痕文突帯を配すものが多いが、指頭圧痕文突帯をもつもの(17)も1点あった。口縁部外面に凹線文を配すもの(15)、鋸歯文を配すもの(16)、口縁端部を内側に肥厚させるもの(16・17)がある。また図示していないが、口縁端部に凹線文を配すものもある。(17)をみると、口縁部内外面に刷毛目の後なでを、頸部外面に縦方向の刷毛目、内面に横方向の刷毛目を、体部外面上半に叩きの後刷毛目、下半に篋削りを、内面に刷毛目の後なでを施す。

広口壺E(8) 内傾気味にのびる頸部から外反する口縁部をもつもの。口縁部は拡張しない。口縁部になで、頸部内外面とも刷毛目を施す。

その他の広口壺(6・9・12) いずれも広口壺の体部である。広口壺の分類においては、口縁部の形態を主に基準としているため、明確に分類できない。ただ、(6)は広口壺B、(9)は広口壺A、(12)はAもしくはDの体部と考えられる。(6)は、体部上半に櫛描き波状文・直線文を交互に入れる。体部外面上半に刷毛目の後などで、下半に篋削り、内面に刷毛目の後などを施す。(9・12)は、体部と頸部の境に断面三角形突帯を配す。(12)は、丈高の体部から直立してのびる頸部をもつ。頸部外面に刷毛目、体部外面上半に叩きを施す。

直口壺A(18~20・24・25) 直線的に上方へやや外傾気味にのびる口頸部をもつ。大型品(18)や、小型品(20)がある。口縁付近で少し内傾するもの(25)がある。口縁付近に凹線文が配されるものが多い(18・24・25)。直口壺は全体に広口壺Dと区分が不明瞭なものが多い。

直口壺B(31) 胴長の体部から頸部が内傾気味にのび、ゆるやかに外反する口縁をもつ。頸部と体部の境に、刷毛原体による圧痕文突帯を配す。口縁部付近などで、頸部に刷毛目、体部外面上半に格子叩きの後刷毛目、下半に篋削り、内面に刷毛目を施す。

無頸壺(21) 胴の張った体部に段状口縁(断面三角形に近い)をもつ。口縁部直下に紐穴を2口穿つ。体部上半外面に刷毛目、内面になでを施す。

細頸壺(13) 内傾しのびる頸部からやや外反する口縁部を有す。頸部に櫛描き波状文、口縁部に凹線文を配す。頸部外面に刷毛目、他はなでを施す。

短頸壺(26) 短く直立する頸部から外反する口縁部の破片である。ここでは、当該器種を短頸壺と呼び分類する。

鉢A(23) 椀形を呈すもの。口縁部外面に櫛描き波状文、凹線文を配す。

鉢B(29・30) 口縁部が直立ないし、内傾するもの。口縁部に2口の紐穴を穿ち、外面に数条の凹線文を配す。29は体部外面に篋磨き、内面に刷毛目を施す。

鉢C(22・28) 体部中位に稜をもち屈曲して上方へ立ち上がるもの。(22)は、短く外反する口縁をもつ。(28)は、(22)と同様短く外反するか、もしくは段状口縁を有すと考えられ、体部上半に櫛状工具による列点文・凹線文を配す。

鉢D(32) 底部から口縁部へ内湾気味にのび、段状口縁を有す大型の鉢。口縁に一か所片口部が認められる。内外面とも篋磨きが施され、内面には朱の痕跡がみられる。

甕A(33~46, 50, 53) 口縁部を若干つまみ上げたいわゆる「はね上げ口縁」をもつもの。口縁部の形態から、さらにI~IVに分けた。

A I(33~39) 口縁端部を上方へつまみ上げたもの。大きくつまみ上げるもの(30~34)、小さくつまみ上げるもの(35・36)がある。口縁端部に刻み目を配すもの(36)、端部に刻み目を、体部に刷毛原体による列点文を配すもの(33・34)もみられる。口縁部内外面ともなでを、

体部上半外面に叩きの後刷毛目、内面に刷毛目の後なでを施すものが多い。体部下半については、外面に篋削り、内面に刷毛目を施すものが多いようである。

AⅡ(40・41・45・50・53) 口縁部がななめ上方へのび、口縁に強くなでを施すため端部が上下に拡張され凹線文状となるもの。体部外面上半に叩きの後刷毛目、内面に刷毛目もしくはその後なでを施す。(50)・(53)は大型品で口径約30cm前後のものである。

AⅢ(42~44) 端部の形状はAⅡと同じだが、口縁部が水平近く屈曲するもの。体部上半外面に叩きもしくはその後刷毛目を、内面に刷毛目を施す。(39)は、体部中位に刷毛原体による列点文を配す。

AⅣ(46・54) 口縁が短く屈曲するもの。端部には縦方向に刷毛目が施され、一見文様状に見える。体部上半外面に刷毛目、内面に刷毛目の後なでを施す。54は、体部中位に刷毛原体による列点文を配す。完形品がなく、鉢とすべきかもしれない。

甕B(49・55・56) く字状に外反する口縁部を有す。端部には刻み目を配す。体部から口縁部まで外面に叩きが施され、その後口縁部はなでを、体部外面上半は刷毛目を、下半は篋削りを施す。口縁部内面に横方向の刷毛目を、体部内面に刷毛目を施す。(49)は、大型品で口径約27cmを測る。この甕はいわゆる「大和型」と称されるものの系統に入るものと考えられる。

甕C(57) 短く外反する口縁部をもつ。端部は面をなすが「はね上げ口縁」状をなさない。体部内外面ともに刷毛目を施す。

甕D(51・58・59) 体部からゆるやかに屈曲して口縁部がのびる。口縁端部に刻み目を配すもの(51・59)もある。(51)は大型品で口径約30cmを測る。体部外面に刷毛目を施す。

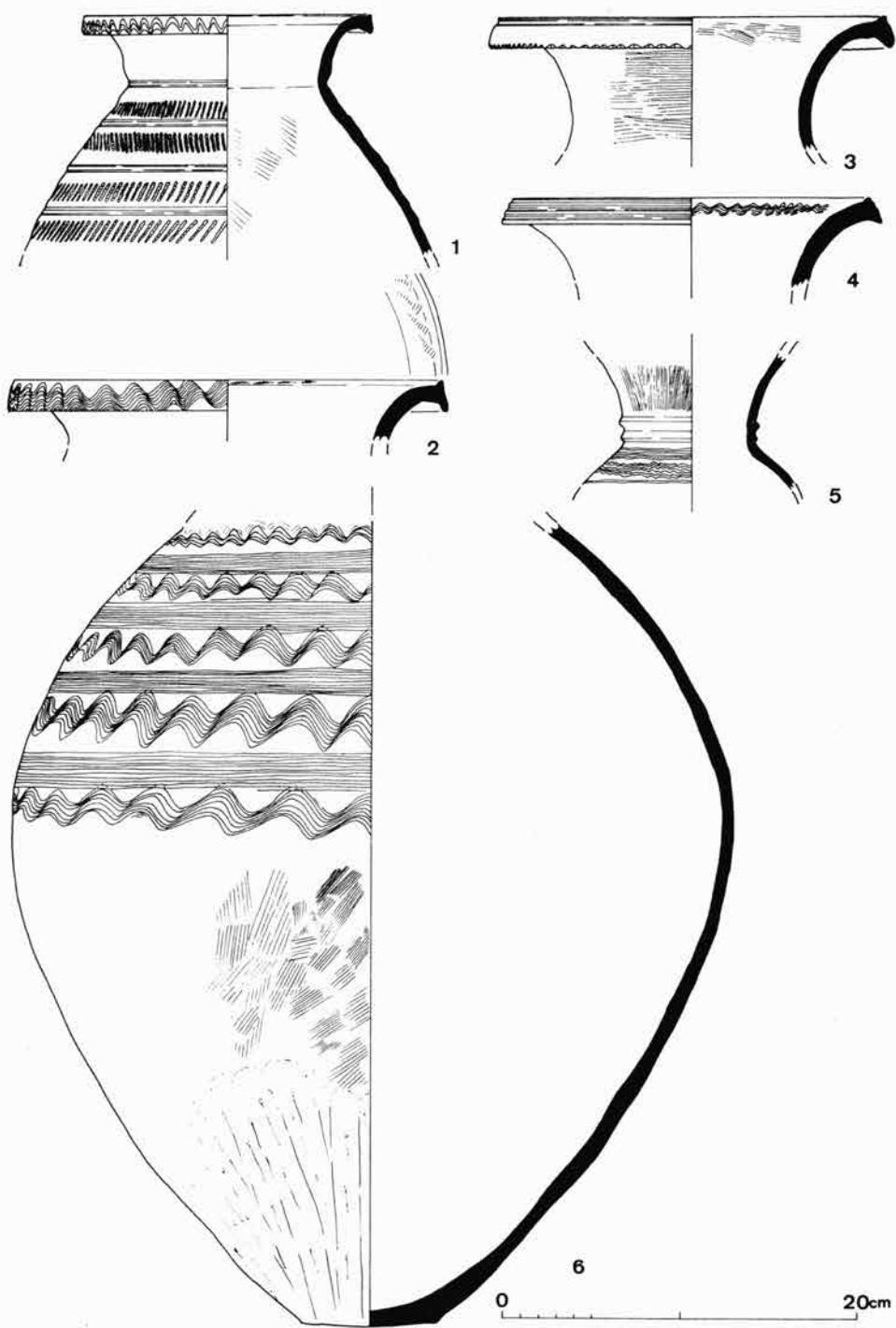
甕E(47) 口径が20cm前後のもので、体部からゆるやかに屈曲する口縁をもつ。端部は上下に少し拡張する。口縁端部に刻み目を配し、外面に縦方向・内面に横方向の刷毛目を施す。

甕F(48) 口径23cmを測るもので、受口状をなす「近江的」な口縁形態をもつ。口縁部に刻み目及び1条の凹線文を配し、外面に縦方向、内面に横方向の刷毛目を施す。

甕G(52) 口縁部が短く水平近く屈曲し、端部を上下に拡張する。端面には2条の凹線文、楕描き波状文を配し、口縁部内面にも楕描き波状文を配す。体部外面上端に2条の凹線文を配し、内面には刷毛目を施す。

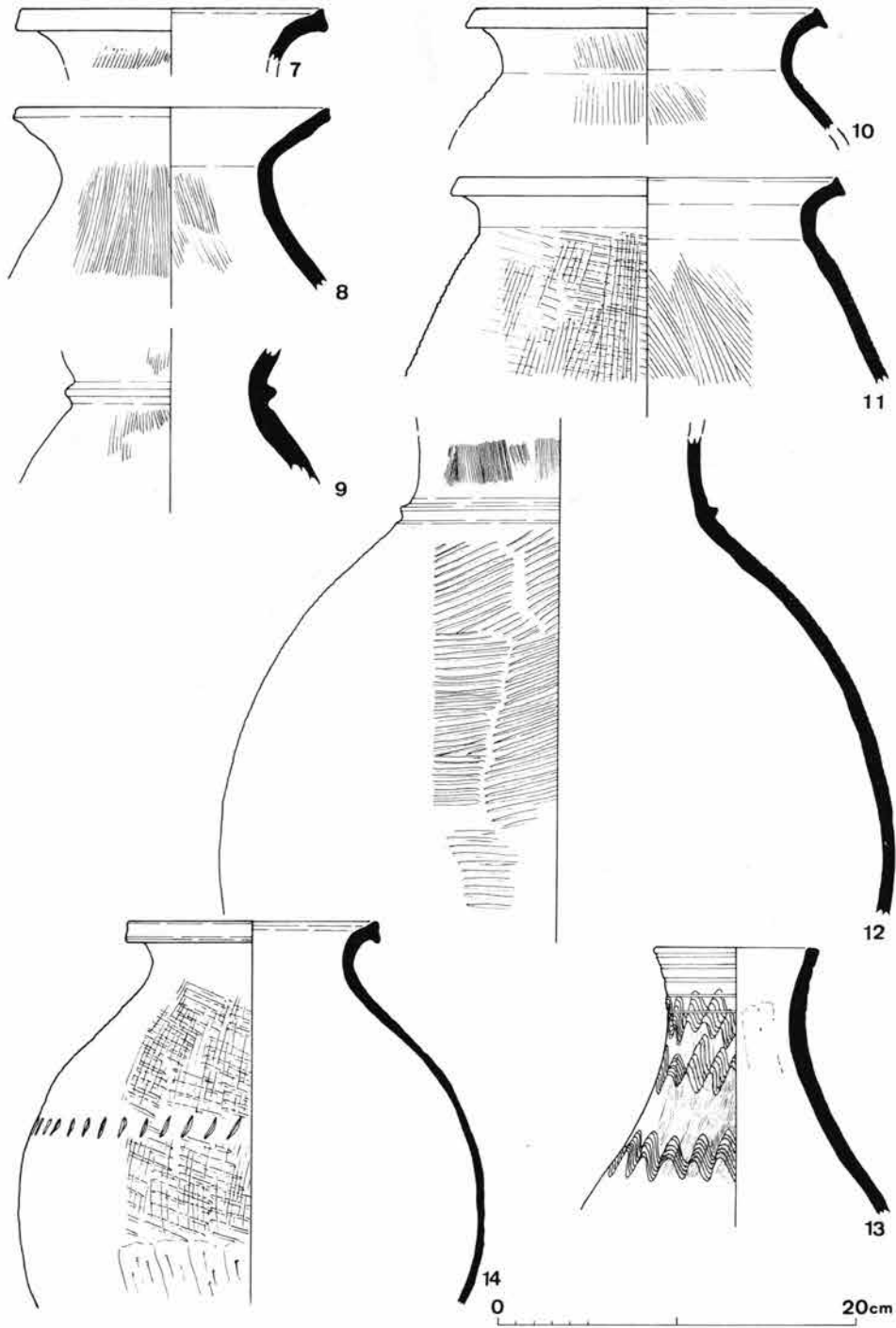
高杯A(27) 椀形の杯部をもつ。脚部が出土しておらず鉢かもしれない。杯部外面上半に刷毛目、下半に篋磨きを施す。

高杯B(60) 上外方へ直線的にのびる体部から、直立する口縁部をもつ。その屈曲部及び口縁部付近に凹線文を配す。杯部から脚部外面に篋磨きを、杯部内面に刷毛目、脚部内面に篋削りを施す。

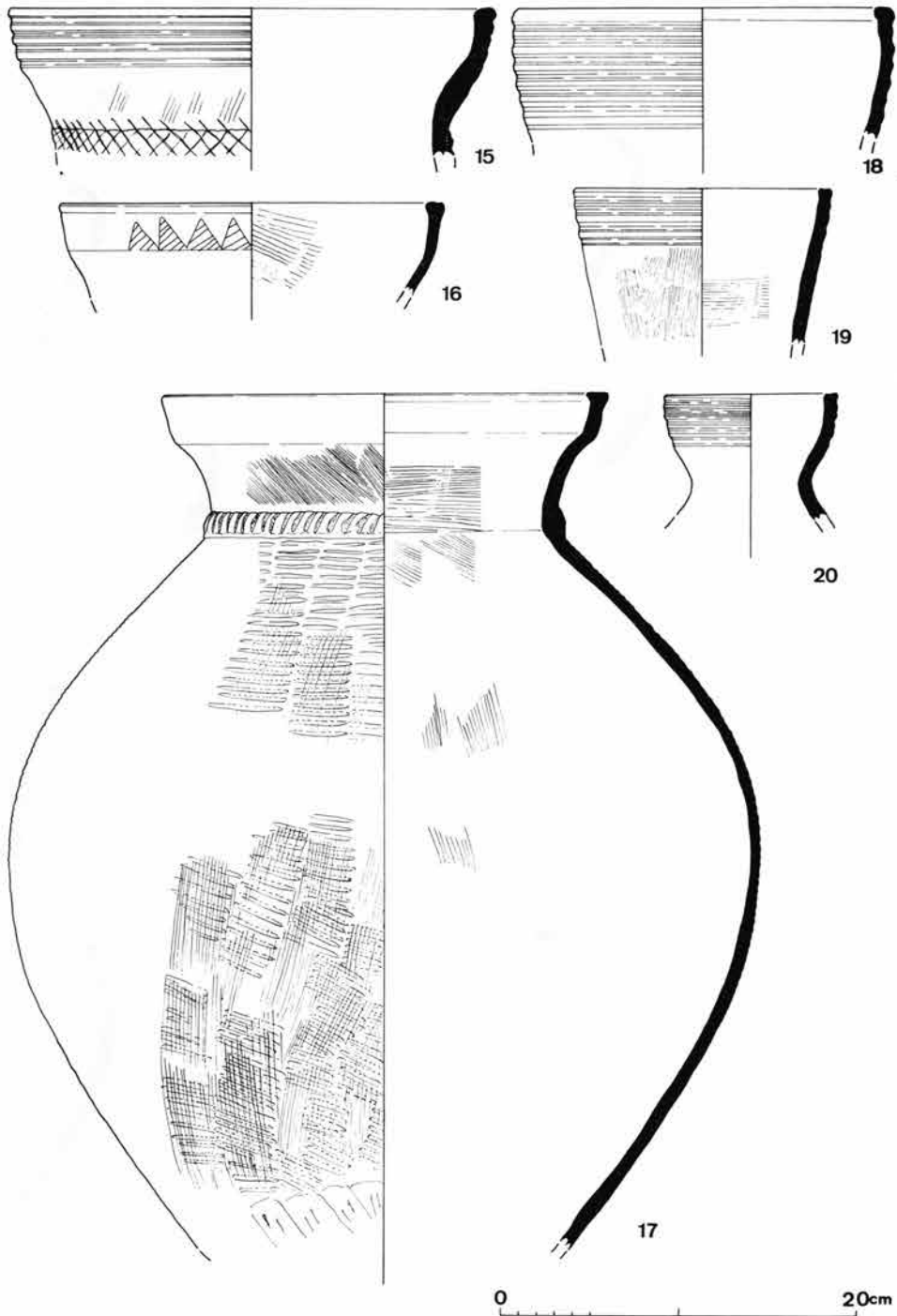


第15図 SD06 出土遺物実測図(1)

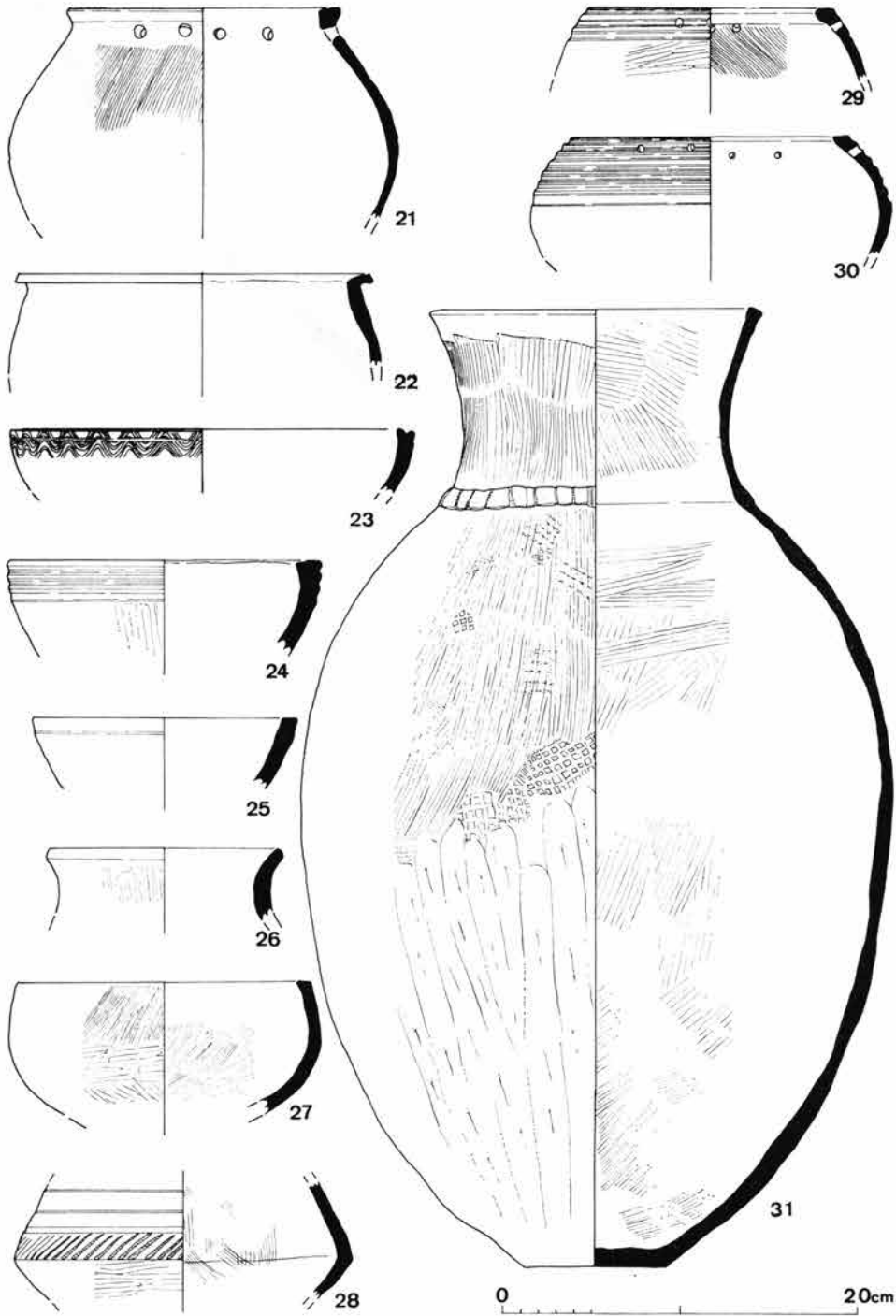




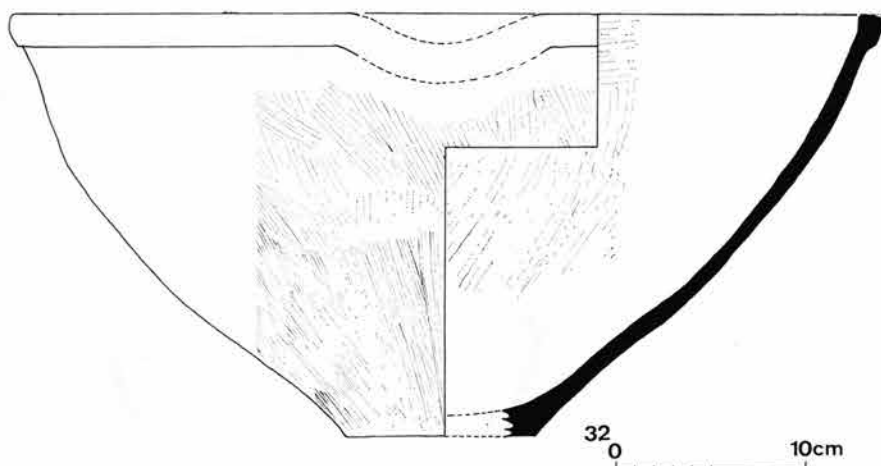
第16図 SD06 出土遺物実測図(2)



第17図 SD06 出土遺物実測図(3)



第18图 SD06 出土遺物実測图(4)



第19図 SD06 出土遺物実測図(5)

高杯C(61・62) 内湾気味にのびる体部から水平に屈曲し垂下する口縁部をもつ。口縁内に1条の突帯がめぐる。垂下が大きくなされるもの(61)や小さいもの(62)がある。またその外面に凹線文を配すものもある(62)。杯部の外面に篋削りの後篋磨きを、内面に篋磨きを施す。口縁部付近篋磨きを施すものが多いが、なでで仕上げるものもある。

脚台(63~69) 高杯のものと考えられるもの(63・65~68)や、台付壺のものと考えられるもの(64・69)がある。外面に篋磨きもしくは刷毛目、内面に篋削りを施すものが多い。端部に強く横なでを施し、凹線文状とするもの(64)や、篋状工具により直線文・斜格子文を配すもの(68)もある。

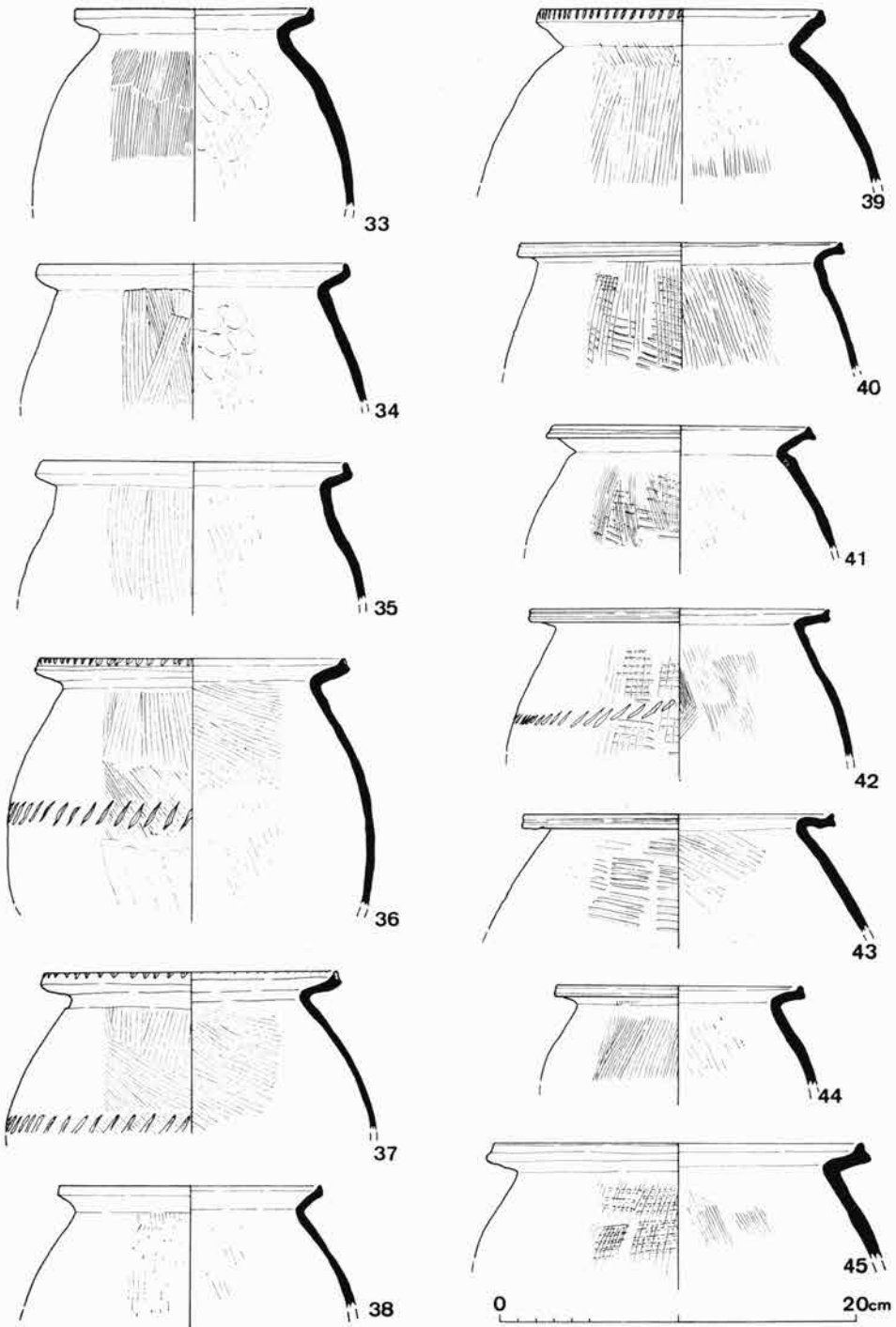
底部(71~81) 壺・甕の区別が難しく、ここではまとめて述べる。そのため調整方法と器形との対応関係を明確にしえなかった。内外面の調整方法をもとに7種類に分けた。外面刷毛目、内面なで(71・73・74)、内外面刷毛目(72・75)、外面刷毛目、内面篋削り(76)、外面篋磨き、内面篋削り(77)、外面篋削り・内面刷毛目(78~80)、内外面篋削り(81)である。

甕蓋(70) 蓋と考えられるものが1点のみあった。天井部はなでによりつまみ上げられ、下方へ刷毛目が施される。

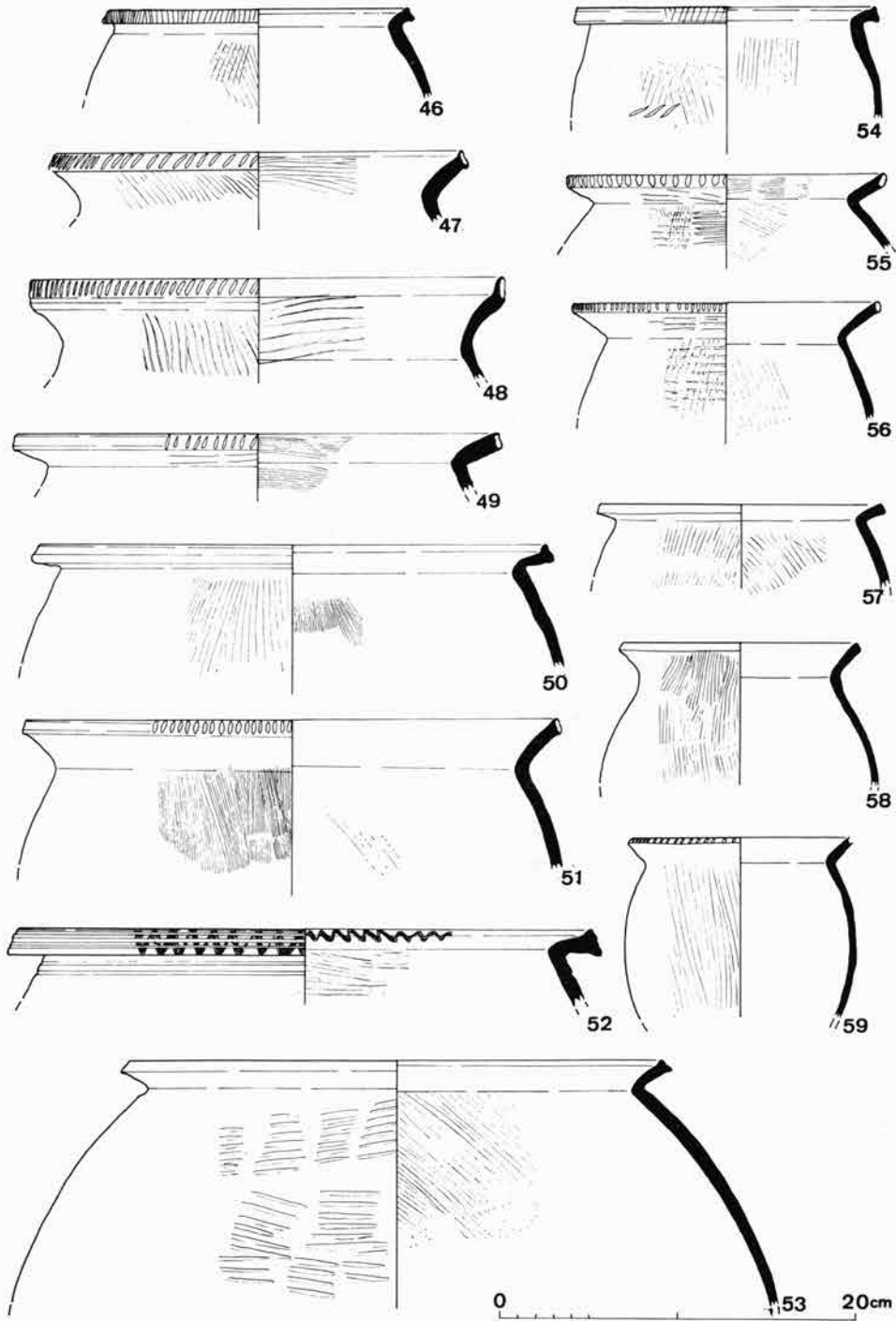
全体に完形品が少ないため各器種毎の区分基準は不明瞭な点が多い。特に広口壺Dと直口壺、甕AN・Cと鉢Cなど不適當な区分があるかもしれない。

#### ②方形周溝墓1出土土器(第23図・第24図)

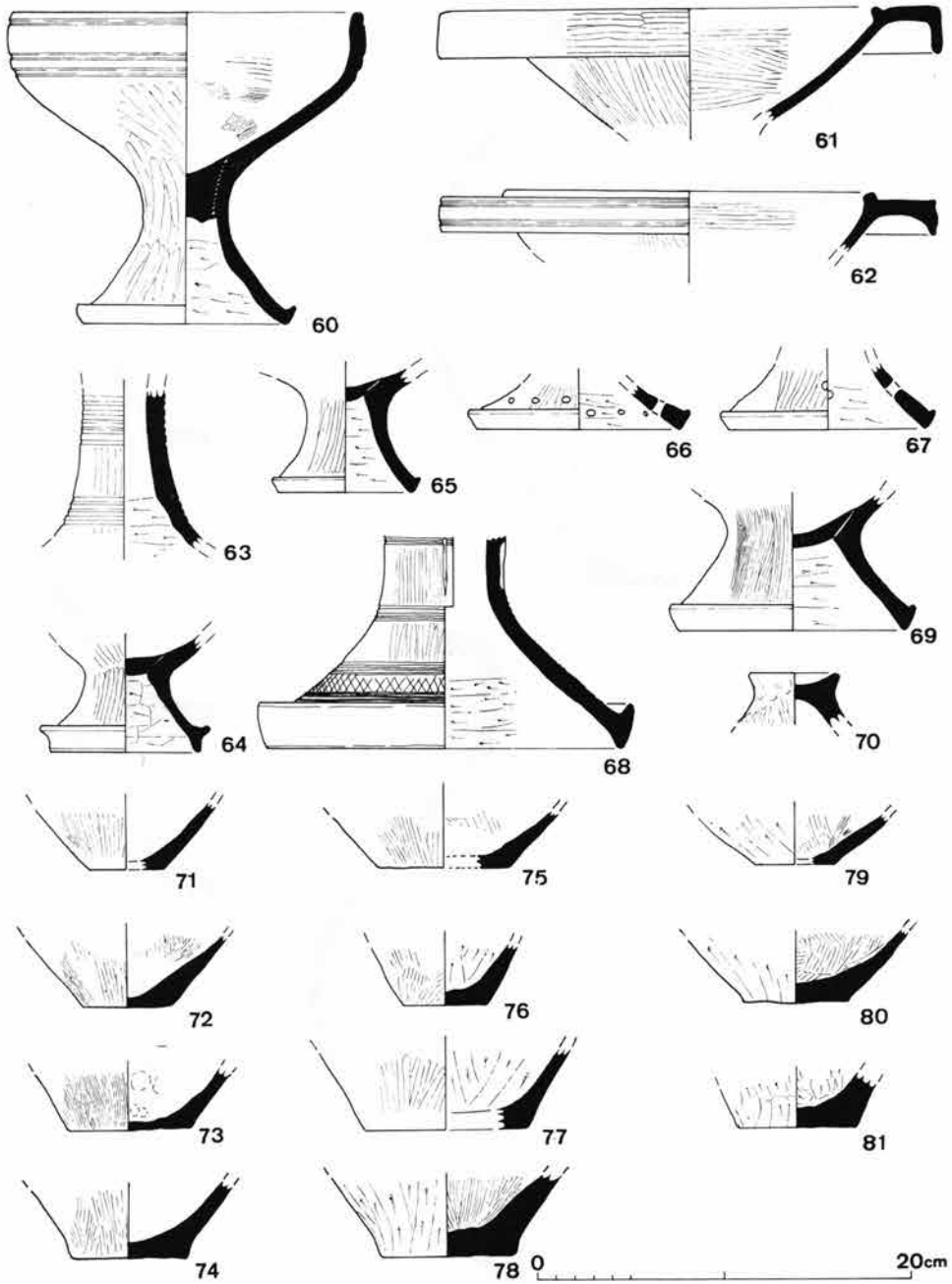
周溝の底から出土したものである。出土状況は第8図に示したが、(第24図7)のみは溝内土壇かと考えられる部分から出土しており、これが他の遺構と切り合った部分とすると、これのみ若干時期が異なる可能性もある。



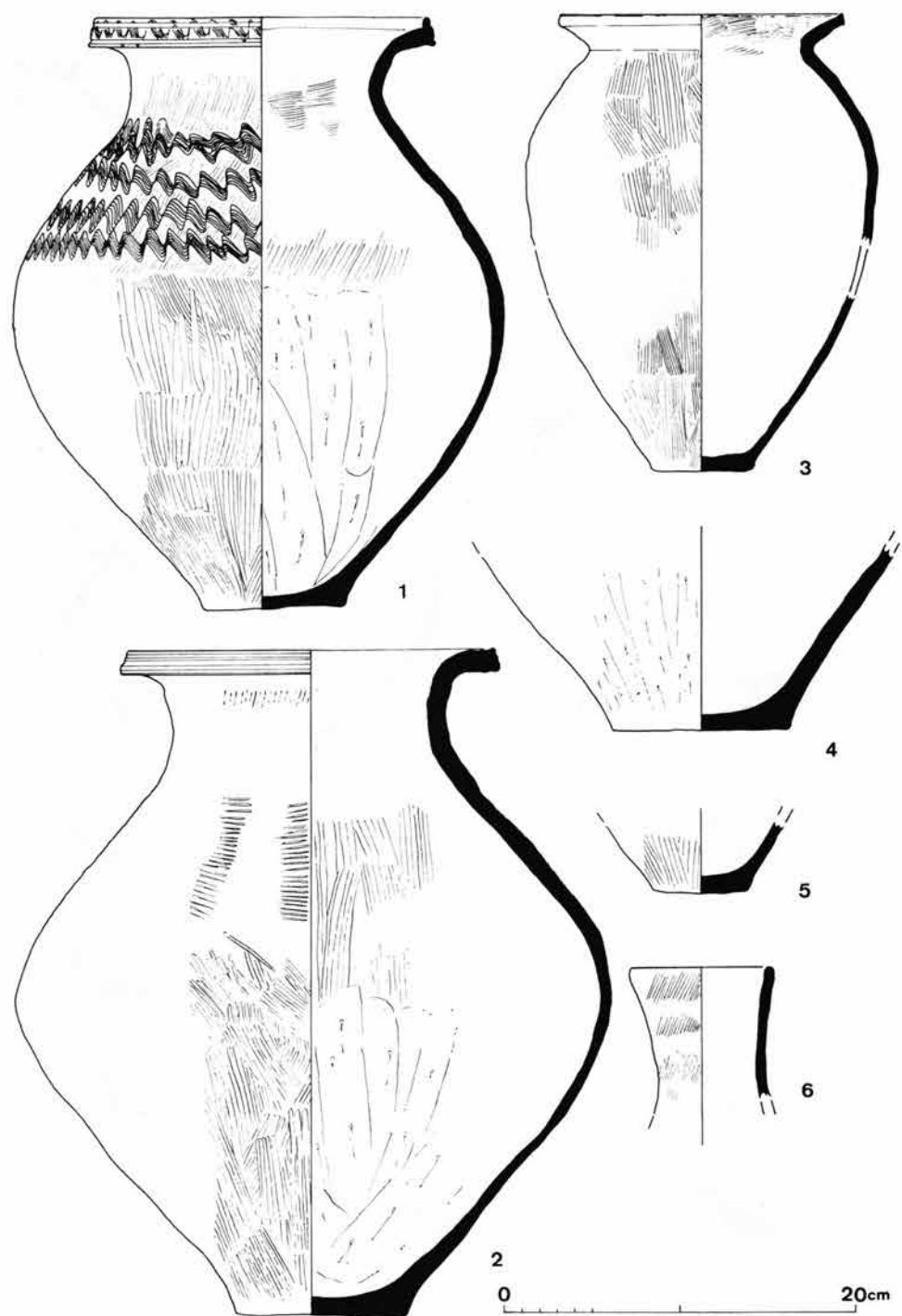
第20図 SD06 出土遺物実測図(6)



第 21 図 SD06 出土 遺物 実測 図 (7)



第22図 SD06 出土遺物実測図(8)



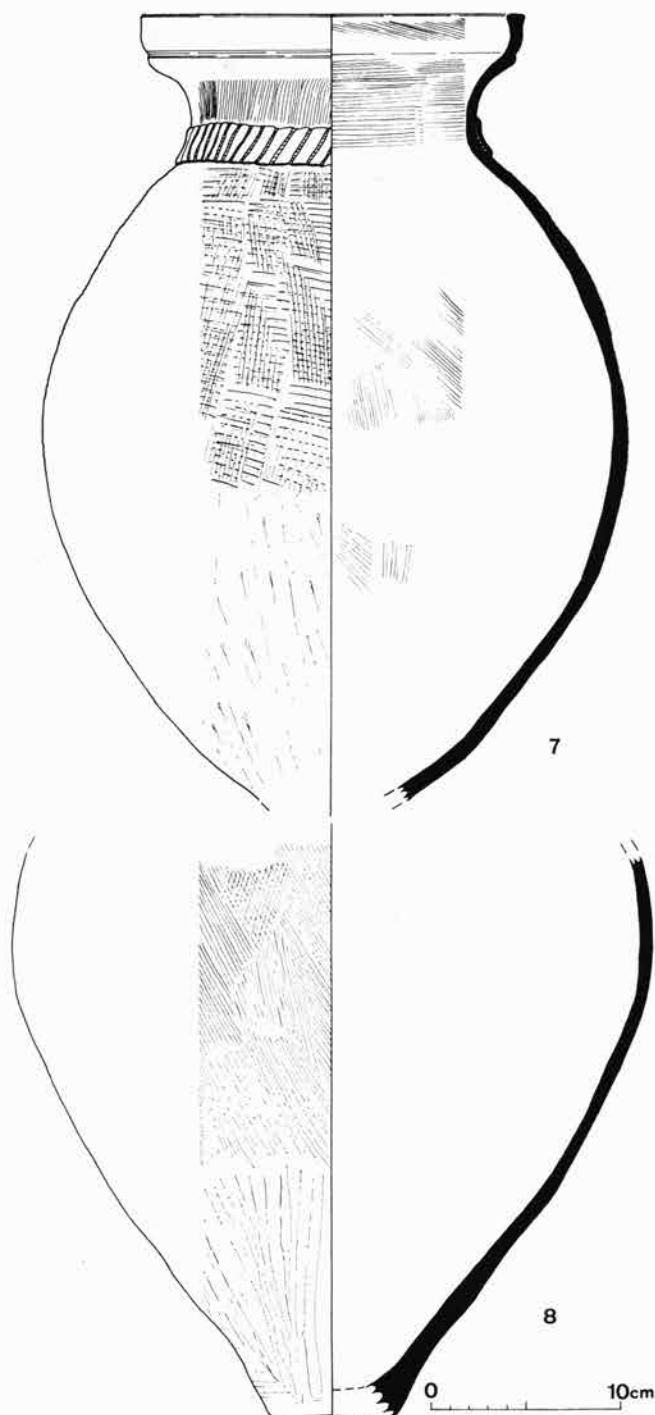
第23図 方形周溝墓1出土遺物実測図(1)



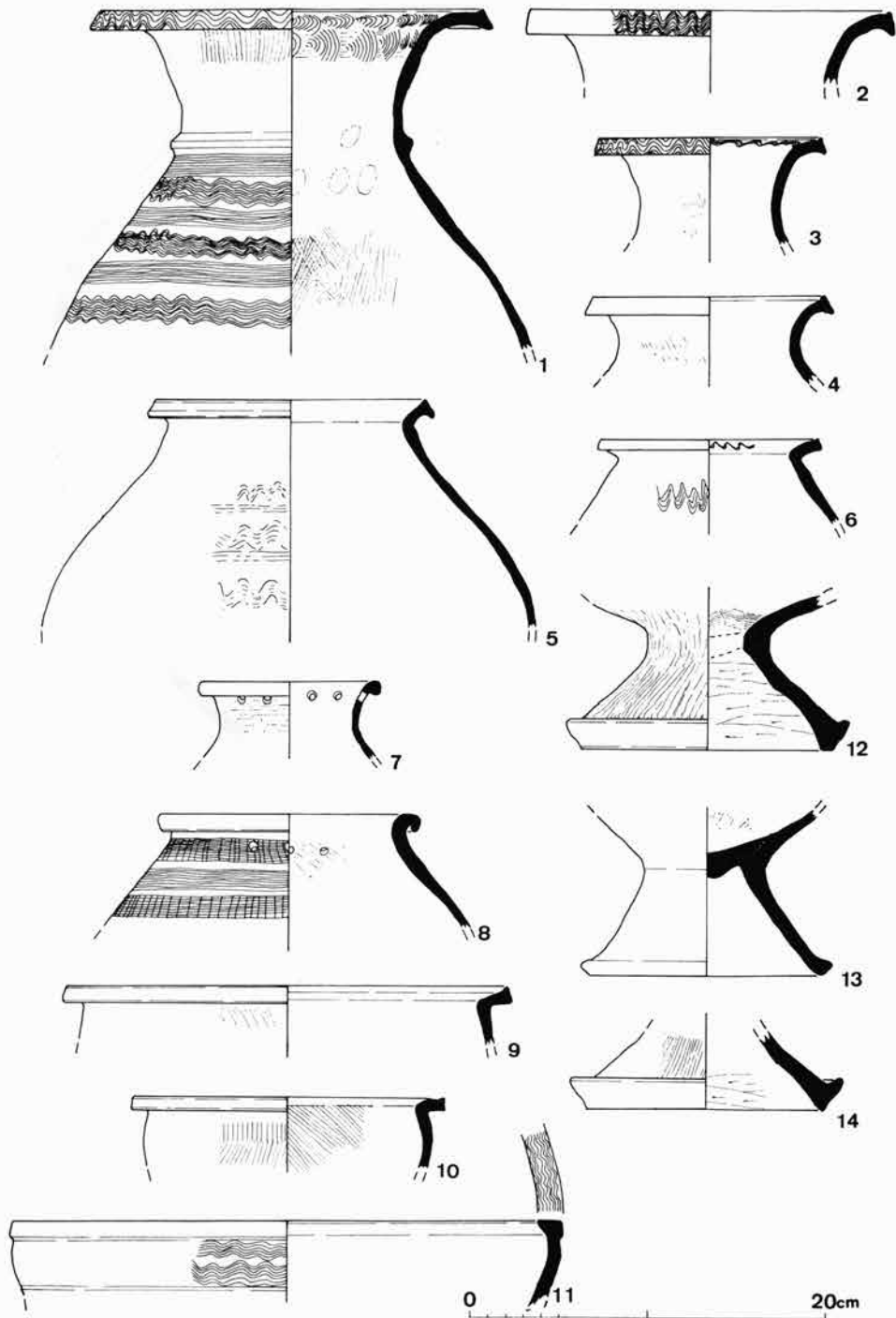
広口壺B・D，細頸壺，甕A I などがある。

広口壺B(1・2) 体部から上方に頸部がのび，さらに外反する口縁をもつ。(1)をみると端部は上下，特に上方に拡張し，端部には2条の凹線文・櫛描き波状文を配す。また体部上半にも櫛描き波状文を配す。頸部から体部上半内外面ともに，刷毛目の後なでが施され，下半外面に刷毛目の後篋磨きを，内面には篋削りが施される。(2)は，口縁端部を拡張しないが，端部に2条の凹線文を配す。頸部外面に刷毛目の後なでを，体部外面上半に叩きの後なで，下半に刷毛目の後篋磨きを，体部内面下半に篋削りを施す。

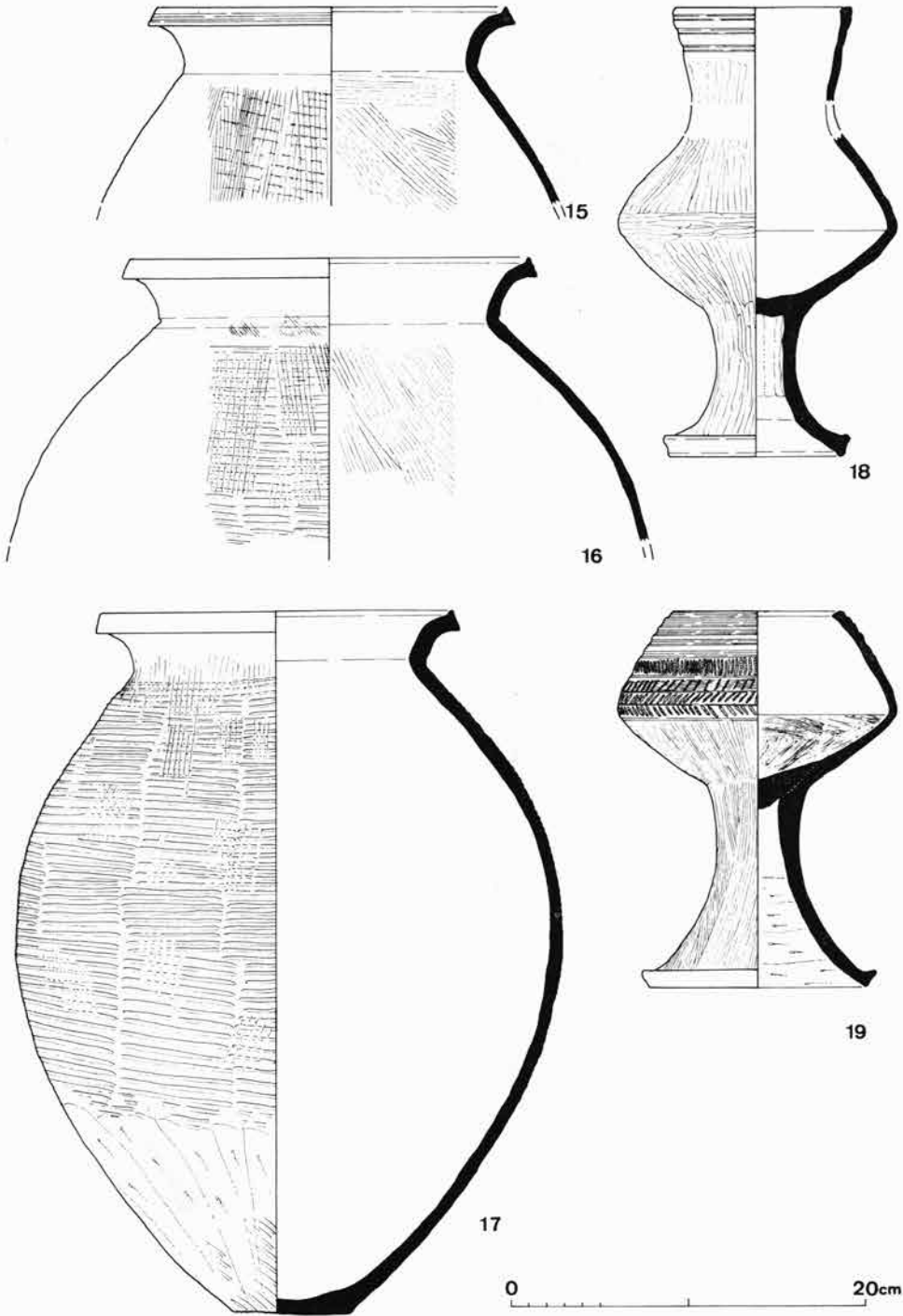
広口壺D(7) 口縁部下端に凹線文，体部と頸部の境に刷毛原体による庄痕文突帯を配す。口縁部内外面刷毛目の後なで，頸部外面に縦方向，内面に横方向の刷毛目を施す。体部外面上半に叩きの後刷毛目，下半に篋削りを，体部内面に刷



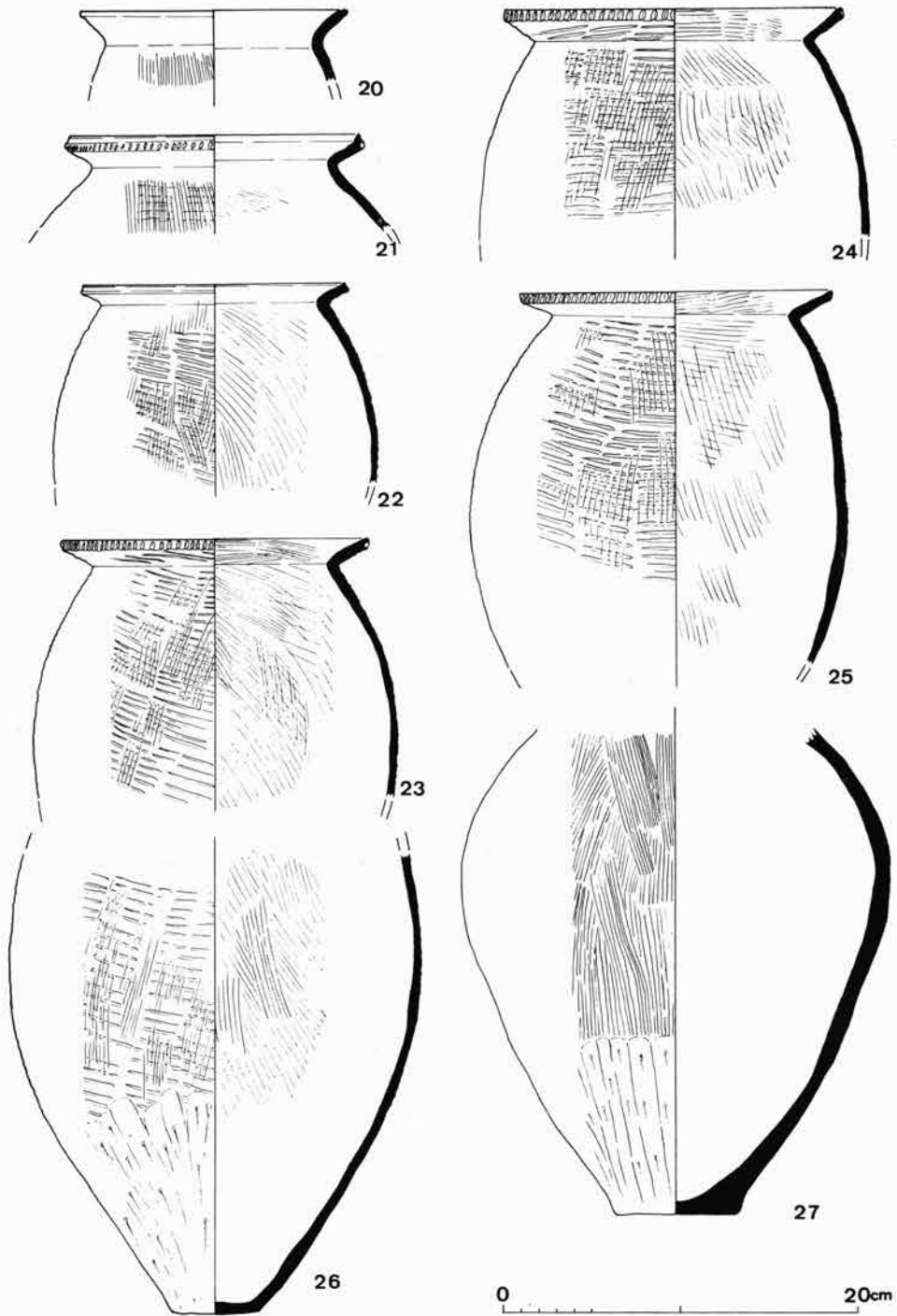
第24図 方形周溝墓1出土遺物実測図(2)



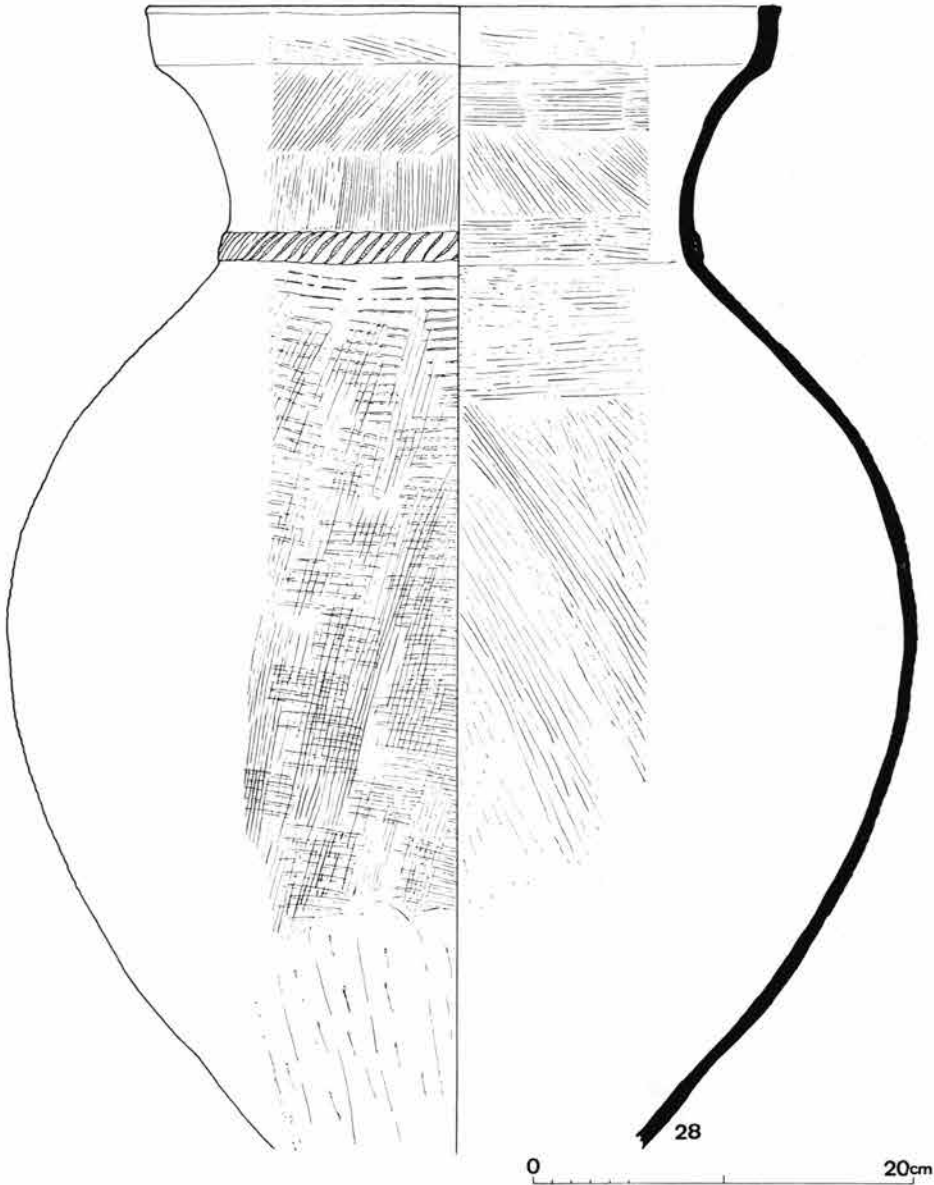
第25図 方形周溝墓2出土遺物実測図(1)



第26図 方形周溝墓2出土遺物実測図(2)



第27図 方形周溝墓2出土遺物実測図(3)



第28図 方形周溝墓2出土遺物実測図(4)

毛目の後なでを施す。

細頸壺(6) 外反気味に上方へのびる口縁部をもつ。外面に刷毛目の後なでを施す。

甕A1(3) 口縁端部を若干つまみ上げ、「はね上げ口縁」状となる。口縁部内面に横方向の刷毛目、体部外面に縦方向の刷毛目、内面に刷毛目の後なでを施す。

その他(4・5・8) (4)は壺の底部と考えられ外面に篋削りを、内面になでを施す。(5)

は甕の底部と考えられ、外面に刷毛目、内面になでを施す。(8)は壺の体部と考えら、外面上半に刷毛目、下半に篋磨きを、内面になでを施す。

③方形周溝墓2出土土器(第25図～第28図)

周溝底部から、数グループに分かれて出土した。ここでは、各グループ毎の細かな検討をせず一括して述べる。器種としては、広口壺A～Dのほか新たにF、台付直口壺、無頸壺、鉢C・E、高杯A、甕A・B・Dがある。

広口壺A(1～3) 体部から大きく外反する口頸部をもつ。(1)をみると、口縁部外面に櫛描き波状文・内面に扇形文を配す。また頸部と体部の境に断面三角形突帯を、そして体部上半に櫛描き直線文と波状文を交互に配す。頸部から体部にかけ内外面とも刷毛目の後なでを施す。(2・3)は口縁部外面に櫛描き波状文を配す。

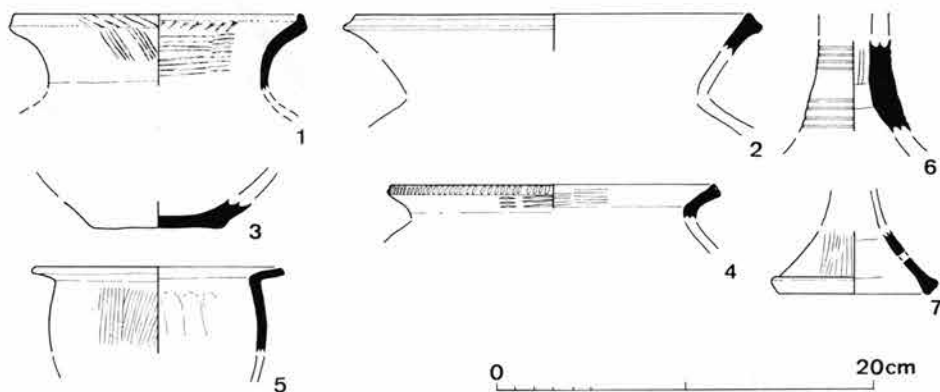
広口壺B(4) ゆるやかに外反する頸部から短く屈曲する口縁部をもつ。頸部内外面とも刷毛目の後なでを施す。

広口壺C(15～17) 丈高の体部から太く短い頸部がのび、さらに短く屈曲する口縁をもつ。体部外面上半に叩きの後刷毛目、下半に叩きの後篋削りを、内面に刷毛目の後なでを施す。

広口壺D(28) 口径約34cmを測る大型品。口縁部に横方向の刷毛目の後なで、頸部外面に縦方向、内面に横方向の刷毛目を施す。また体部外面上半に叩きの後刷毛目、下半に篋削りの後部分的に刷毛目を、内面に刷毛目を施す。底部を欠損する。

広口壺F(7) 口径約10cmを測る小型品で、体部から外反してのびる頸部に屈曲し玉縁状となった口縁部をもつ。口縁直下に紐穴を2口穿つ。口頸部内外面とも篋磨きを施す。

台付直口壺(18) 胴の張った体部から若干ひらき気味に頸部がのびる。口縁付近に3条の凹線文を配す。脚台部は円柱状にのびた後、ハの字状にひらき、端部は上下に若干拡張する。



第29図 SD41 出土遺物実測図

頸部から脚部にかけて外面に篋磨きを、脚部内面になでを施す。

無頸壺(5・6・8) (5・6)は、いずれも台付無頸壺と思われる。胴の張った体部から短く外反する口縁部をもつ。(5)は、口縁端部付近に強く横方向のなでが行われ、上下に拡張し凹線文状をなす。摩滅が著しいが、体部に櫛描き直線文と波状文を交互に配す。(6)は、口縁端部が若干はね上げ状を呈すが拡張はみられず、口縁内面・体部に櫛描き波状文を配す。(8)は、外反した口縁がさらに折り曲げられるもの。口縁直下に2口の紐穴を穿つ。体部上半に櫛描き廉状文と直線文を交互に配す。

壺体部(27) 体部外面上半に刷毛目、下半に篋削りを施す。

鉢C(9・10) 内湾、もしくは内傾気味に上方向にのびる体部から短く水平近く外反する口縁をもつもの。端部は「はね上げ口縁」状となり上方に拡張される。また端面は凹線文状となる。口縁付近になで、体部内外面に刷毛目の後なでを施す。

鉢E(11) 直立する口縁に段状口縁をもつもの。直立部に櫛描き波状文を配す。

高杯A(19) 碗形の杯部をもつ。口縁部付近に5条の凹線文、体部外面に櫛描き列点文・廉状文を配す。体部上半内外面、及び脚台部外面に刷毛目、脚台部内面に篋削りを施す。

甕A(21) 「はね上げ口縁」を施す。端部付近に刻み目を入れる。体部外面上半に叩きの後刷毛目、内面に刷毛目の後なでを呈す。

甕B(22~26) 口縁部がくの字状に外反する。口縁端部に刻み目を施すものが多いが、ないものもある(22)。口縁部内面に横方向の刷毛目を施す。体部外面上半に叩きの後刷毛目、下半篋削り、内面に刷毛目を施す。

甕D(20) 体部からゆるやかに屈曲する口縁部をもつ。体部外面に刷毛目を施す。

#### ④溝41出土遺物(第29図)

水田跡と考えられるNo.16トレンチ黒灰色粘土上面で検出した、溝41出土遺物について簡単に記す。器種は、広口壺Cのほか新たにG、甕Bのほか新たにI、高杯脚台がある。

広口壺C(2) 口縁端部の破片である。

広口壺G(1) 口頸部の破片であるが、端部が上方に大きく拡張され受口状をなし「近江的」な形態をもつ。口縁部内面に退化した櫛描き扇形文を配す。口頸部内外面ともに横方向の粗い刷毛目が施される。

甕B(4) 口縁部の小片である。端部に刻み目を施す。

甕I(5) 口縁部が水平方向に屈曲し、口径が体部最大径を上回るもの。体部外面に刷毛目、内面になでを施す。

高杯脚台(6・7) (6)は8条の凹線文を配す。いずれも外面に篋磨き、内面に篋削りを

施す。

その他(3) 壺底部と考えられるが、摩滅のため調整不明。

⑤石器(第30図・第31図)

本遺跡より出土した石器類には打製石器として石鏃、磨製石器として石鏃・石剣・石庖丁・石斧が認められた。その他未製品として鉄剣形磨製石剣と、大型蛤刃石斧がある。剥片生産過程で生ずる剥片は1点検出したのみで、石器製作過程で生ずる石核、碎片等は見られなかった。剥片を含め今回の調査で回収することのできた石器は、図示した16点である。他に自然円礫を用いた敲石状の石器が1点あったが、今回その報告は省略した。以下個々の石器について略述するが、便宜的に、図示した左側をA面、右側をB面と呼ぶことにする。法量は、図示した状態において縦(長さ)・横(幅)を、直交する方向で最大値を求めた。厚さは最大値である。ただ石庖丁については機能面を重視し、長さを刃縁に平行する最大幅、幅を刃縁に直交するラインに求めた。なお、法量は別表に掲げる。

打製石鏃(1) 凹基無茎式。周辺より丁寧な調整が為され、B面中央にわずかに主要剥離面が観察されるのみである。逆刺が大きく湾曲し、長幅比がほぼ1:1となる。石材は赤褐色を呈するチャートである。当地域では弥生時代の石鏃には、搬入石材であるサヌカイトを用いることが多い。縄文時代のものか。

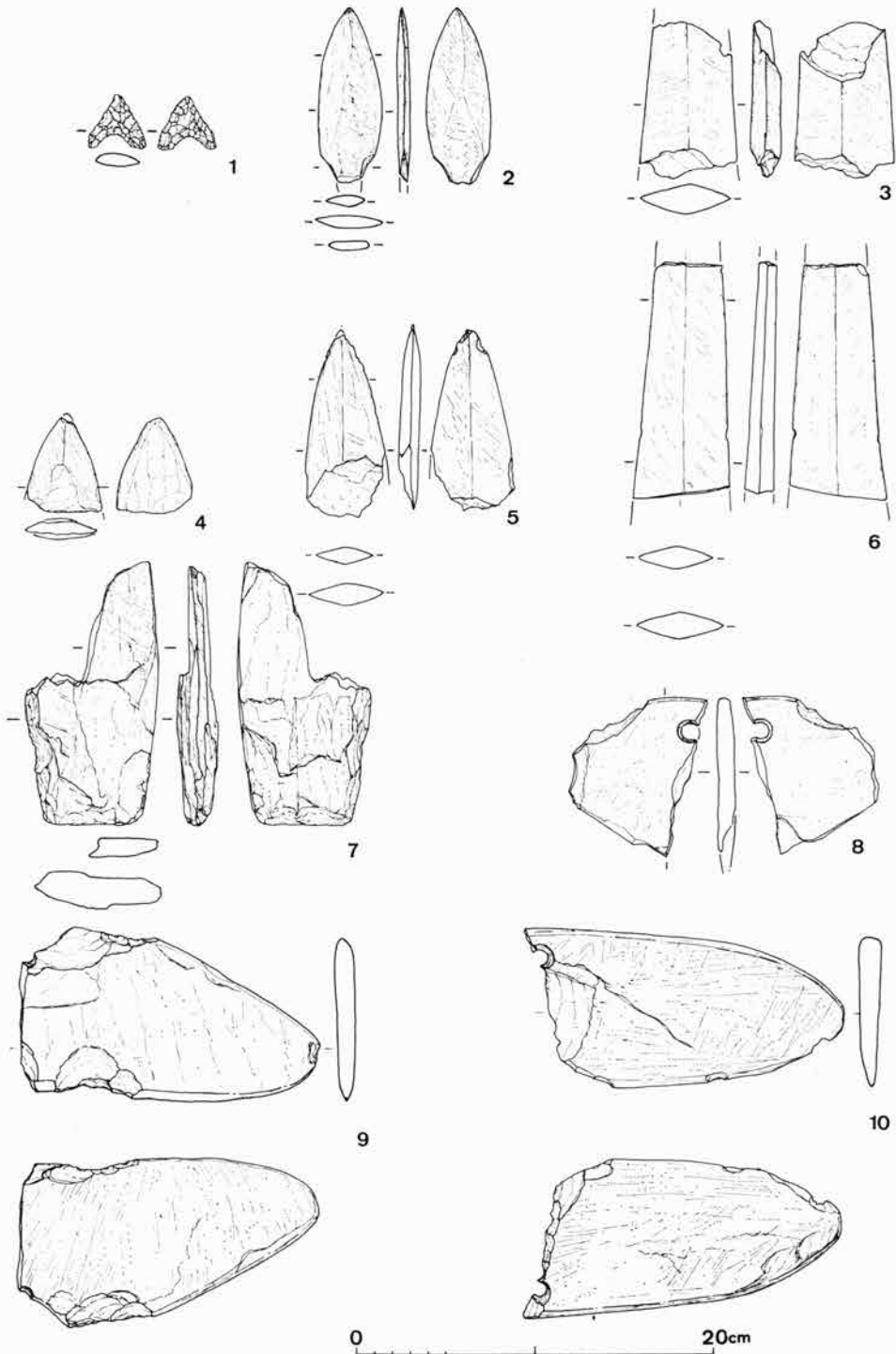
磨製石鏃(2) 有茎である。基部を若干欠損するがほぼ完存する。鏃身は柳葉形をなす。基部は葉理に直交する研磨によって作り出す。器表全面を斜行する研磨によって最終調整を施すが、体部中央に鏃身に直交する第一次粗研磨痕をとどめる。やや風化の進行した頁岩、ないし粘板岩を素材とする。

磨製石剣(3~6) (3)・(6)は剣身。先端部を欠損している。いずれも峰はややあまい。丁寧な研磨によって鋭い刃縁を形成する。縁部は直線的で剣身のしまった形状を呈する。最終調整はきわめて丁寧に行われる。断面は菱形である。石材は新鮮な頁岩ないし粘板岩を用いている。黒色を呈し硬質である。(4)・(5)は、先端部のみ残存。やや風化の進行した頁岩ないし粘板岩を素材として用いたため、(3)・(6)のような強靱さに欠ける。断面菱形。最終調整があまく、前者に比してやや粗製である。

未製品(7) 基部のみ残存。葉理に沿って目的とする剥片を剥取し、周縁部を交互に階段状剥離を施す。A面ならびに右側縁の一部について丁寧な研磨によって調整を行うのみで、全体に成形段階での剥離面に覆われる。比較的新鮮な頁岩ないし粘板岩を素材とする。磨製石剣の未製品と考えられる。

石庖丁(8・9・10) いずれも欠損しており旧状をとどめない。形態は三者とも背部が湾





第30图 石器实测图 (1)

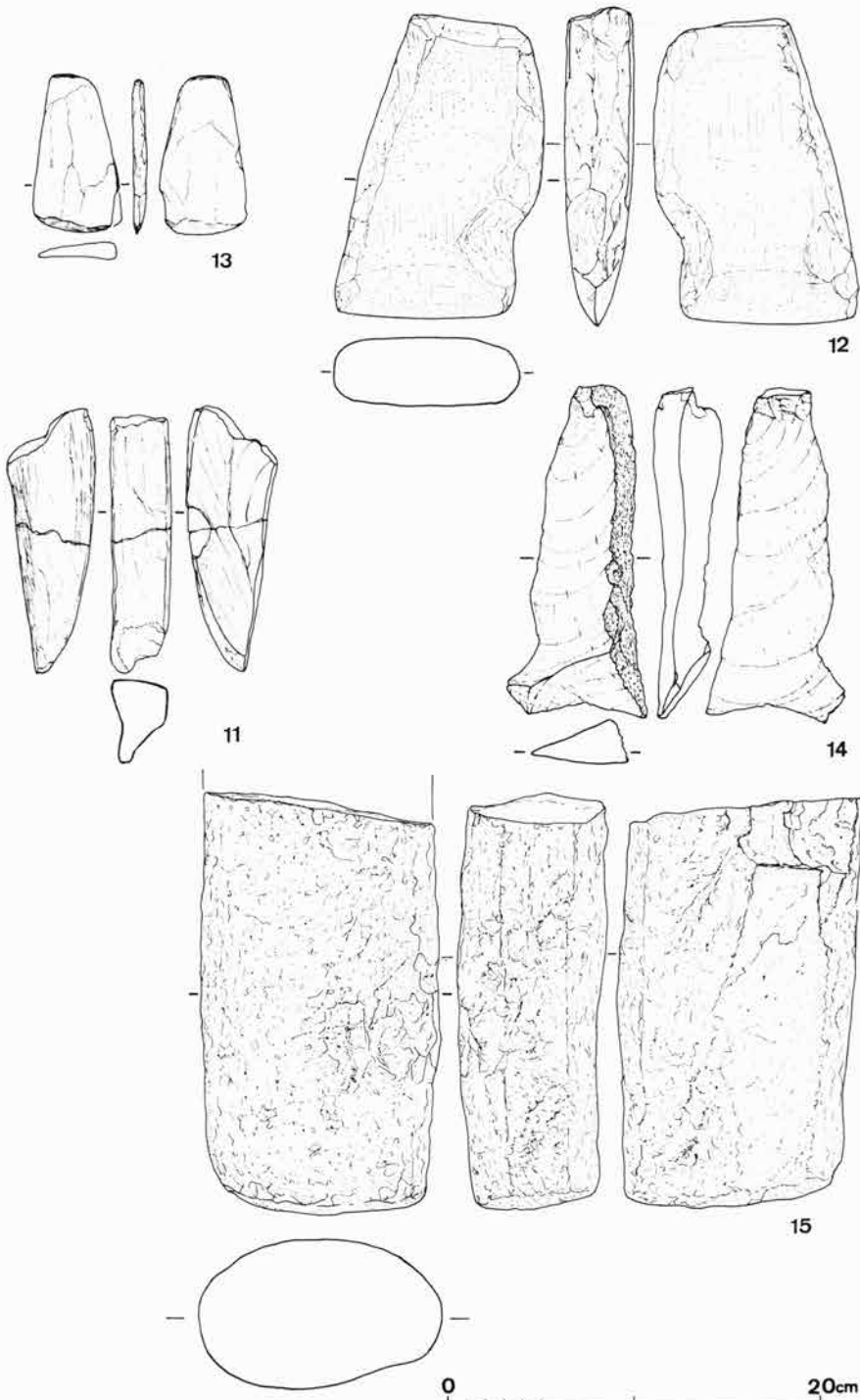
曲し刃部が直線をなす、いわゆる半月形直線刃形態をなすものと思われる。(8)は、A面側に剥片剥離段階のものとみられる剥離面をわずかに残す。器表は丁寧な調整を施す。刃部は欠損しており旧状を復し得ないが、A面側に残る横方向のわずかな研磨痕から、片刃であろうと考えている。やや風化の進行した頁岩ないし粘板岩を素材とする。(9)は、A面側が主要剥離面。調整あまく剥離痕をよくとどめる。全体に調整あまく粗製である。刃部は主にA面側から作り出す。背縁、刃部には折損後施したとみられる階段状剥離が部分的ながらみられ、再次的利用を企図したもののようである。硬質であるがやや風化の進んだ頁岩ないし粘板岩を素材とする。(10)は、(9)と同様体部中央で欠損。器面にはわずかに整形時の剥離痕をとどめるが、全体に丁寧に仕上げている。ただ最終調整は粗い横方向の研磨によっており、平滑に仕上げるに至っていない。主にA面側から研き出し刃部形成。黒色を呈する頁岩ないし粘板岩製、新鮮な石材を用い硬質である。

磨製石斧類(11・12) (11)は、柱状片刃石斧。使用による欠損品を、粗研磨によって整形し、小形方柱状片刃石斧として転用したもののようである。器表は欠損面を除くと、丁寧な研磨によって平滑に調整がなされる。刃部末端には転用によって生じた使用痕がみられる。石材は暗灰色を呈する風化の進行した頁岩ないし粘板岩を用いる。(12)は、扁平両刃石斧状の形状を有する石斧である。刃部がやや湾曲し中軸がややB面側に傾斜する点に特徴が求められる。器面は精緻な研磨によって平滑に調整されているが、頸部の一部と両側縁には研磨後のものとみられるあばた状の敲打痕が著しく認められる。これは、最終調整後に整形を目的とする敲打が行われたことを示すものであり、敲打→整形→調整という石器製作プロセスからは矛盾するものである。従って当該石斧も更に大形で横長の磨製石斧状石器の転用品として確認すべきものであろう。石材は不明。

小形扁平片刃石斧様の磨製石器(13) 上端ならび側縁を葉理に直交する粗研磨で調整し、下端を斜行して研磨を施し刃部を作り出す。周縁に整形剥離等の痕跡を欠く点、器表両面が凹状に剥離している点から、石庖丁等の磨製石器の破損品を転用している可能性がある。やや灰色がかった粘板岩を素材とする。

縦長剥片(14) プラットホームは平坦面をなす。B面が主要剥離面。A面には礫面をとどめる。礫面には小規模な虫喰い状の凹凸がみられるが、生成時の新鮮さはない。二次的な移動ないし再堆積した転礫状の原礫を搬入し、石核として用いたものであろう。断口は漆黒色を呈し緻密である。二上山麓遺跡、ないしその周辺地域からの搬入品とみられる。

大型蛤形石斧の未製品(15) 先端部欠損、器表全面にあばた状の敲打痕をのこす。大型品である。



第31図 石器実測図(2)

付表2 石器法量表

図番	出土地区	出土層位	最大長 (現存) cm	最大幅 (現存) cm	最大厚 (現存) cm	重量 g	石 材	備 考
1	No. 1 トレンチ	暗灰色土	1.5	1.6	0.4	0.6	チャート	
2	No. 9 トレンチ	溝6埋土	(4.9)	1.8	0.4	4.2	頁岩ないし粘板岩	
3	No. 7 トレンチ	黒灰色土	(3.5)	2.7	0.9	10.5	頁岩ないし粘板岩	
4	No. 9 トレンチ	溝6埋土	(2.6)	2.1	0.4	2.1	頁岩ないし粘板岩	
5	No. 9 トレンチ	溝6埋土	(5.1)	2.2	(0.7)	6.6	頁岩ないし粘板岩	
6	No. 8 トレンチ	黒灰色土	(6.6)	2.7	0.9	16.7	頁岩ないし粘板岩	
7	No. 9 トレンチ	溝6埋土	(7.4)	3.7	1.0	27.8	頁岩ないし粘板岩	未製品(折損)
8	No. 9 トレンチ	溝6埋土	(3.4)	(4.5)	0.5	10	頁岩ないし粘板岩	
9	No. 9 トレンチ	溝6埋土	(8.5)	4.9	0.6	33.6	頁岩ないし粘板岩	
10	No. 9 トレンチ	溝6埋土	(9.0)	4.3	0.5	30.5	頁岩ないし粘板岩	
11	No. 5 トレンチ	黒灰色土	(7.0)	(1.3)	(2.2)	33.1	頁岩ないし粘板岩	
12	No. 5 トレンチ	黒灰色土	8.4	(4.3)	1.8	14.3	不明	
13	No. 9 トレンチ	溝6埋土	9.0	3.0	1.2	37.2	サヌカイト	断面黒色
14	No. 8 トレンチ	黒灰色土	4.2	2.3	0.5	5.2	頁岩ないし粘板岩	
15	No. 8 トレンチ	黒灰色土	11.2	6.3	4.0	51.7	不明	未製品

## (2) 奈良・平安時代

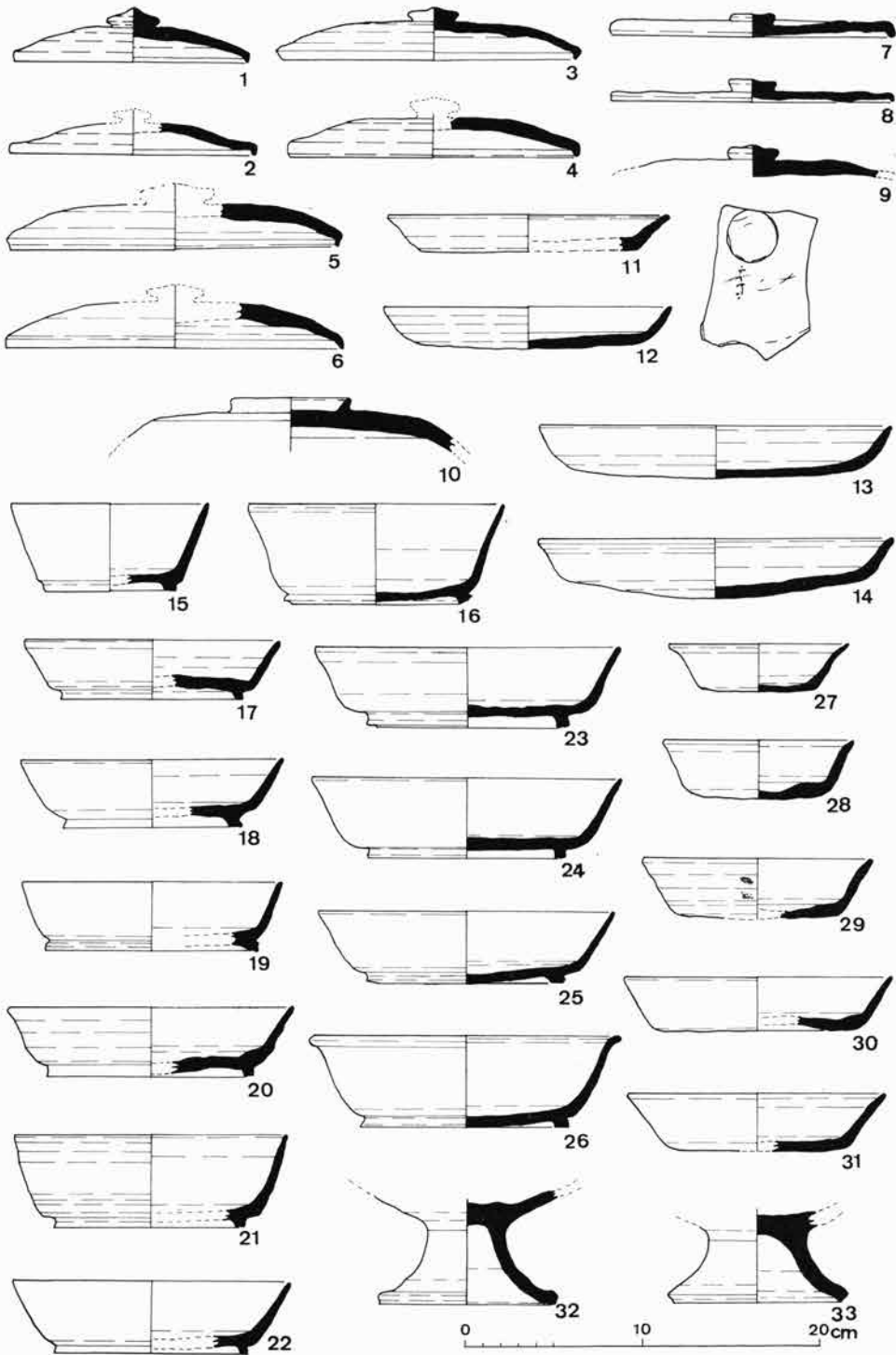
奈良・平安時代の遺物は、第6次調査地のほぼ全域から出土した。しかし遺構に伴うものも少なく、細片化しているものが多いため、それらが特に集中していたNo.2・3トレンチ・No.4トレンチ包含層出土遺物、旧河道と考えられるNo.6トレンチのSD25・26から出土した遺物の中から主なものを取り上げ述べる。またSD25・26出土遺物の中には、弥生時代・古墳時代の遺物も含まれており、それらについても少しふれる。

なお、古瓦類・木製品については後でまとめて述べる。

## No.2・3トレンチ出土遺物(第32図・第33図34~38)

桑寺廃寺の中心部に広がる黒灰色土中から、奈良・平安時代の須恵器・土師器・緑釉陶器などが出土した。

須恵器杯蓋(1~10) 器形から笠形をなすもの(1~6・9)、扁平なもの(7・8)、環状のつまみを有すもの(10)の3種に分かれる。(1~6)はやや平坦な天井部からなだらかに降る器形をもち、扁平気味の宝珠つまみを貼りつける。(9)は端部を欠くが、(1~6)とほぼ同一の器形をもつと考えられ、天井部外面に「寺」の墨書がある。口径から13cm前後の小型



第32図 No.2・3トレンチ出土遺物実測図

品(1・2)、17cm前後の中型品(3・4)、20cm前後の大型品(5・6)がある。(10)は外反気味に立ち上る環状のつまみを貼り付けるもの。厚手で大型品である。

須恵器杯身(15~31) 高台のないもの(28~31)と、あるもの(15~27)がある。(28~31)は平坦な底部から外反気味に口縁部がのびるもので、口径14~15cmのものが多いが、11cm前後の小型品(28)もある。(29)の口縁部外面に「 $\dot{\text{ニ}}$ 」の記号のような墨書がある。高台のあるもの(15~27)は、底部から直線的に口縁部がのびるものであるが、端部が外反するもの(26)や口径に比して器高の高いもの(15・16)がある。また底部と口縁部の境よりやや中央寄りに外に張る高台を貼りつけるもの(23~25)の他は、その境かやや内側に、外に張るか断面台形に近い高台を貼りつけるものが多い。口径15~17cmのものが多い。

須恵器皿(11~14) 口径約16cmを測り、平坦な底部から外反気味にのびる口縁部を有し端部を内側に肥厚させるもの(11)、口径16.4cmを測り、ややふくらみ気味の底部から内湾気味に立ち上る口縁部をもつもの(12)、口縁20cm前後で、ややふくらみ気味の底部から内湾気味に立ち上がる口縁部をもつもの(13・14)などがある。

須恵器高杯(32・33) 「ハ」の字状にひらく脚部のみ遺存。全体の形態は不明。

須恵器円面硯(34) 杯を逆転したような形態をもつ。口径約20cmを測る大型品であるが、脚部に透しもなく簡素なものである。

土師器杯身(35・37) 35は口径19.4cmを測り、直線的にのびる口縁部に、内側に折り返し肥厚させる口縁端部をなす。内面に二段の放射状の暗文を施す。また(37)は底部の破片で、内面見込みに螺旋状の暗文を施す。外面には意味不明の墨書がある。

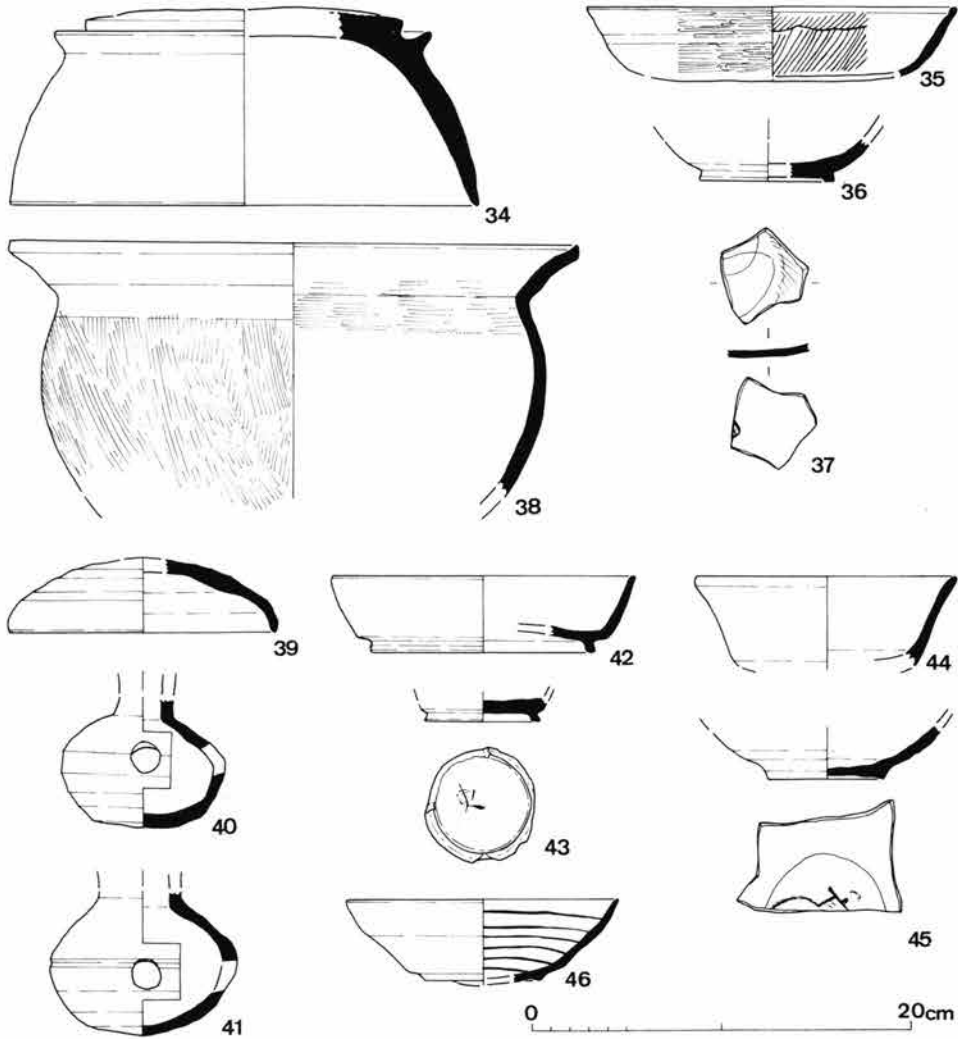
土師器甕(38) 丸い体部から強く外反する口縁部をもつもの。端部を若干上方へつまみ上げる。体部外面に刷毛目、内面はなでが施されるが、口縁から体部への屈曲部内面に刷毛目がみられる。

緑釉陶器椀(36) 削り出し高台をもつ。高台部以外を施釉するが、高台内に緑釉が刷毛で荒く塗られている。この手法は、亀岡市篠窯跡群黒岩1号窯に類例がある特異なもので、この緑釉陶器椀も篠窯跡群の製品である可能性が高い。

これら出土土器は、須恵器杯身(23~25)や土師器杯身(35)など若干古いもの、また緑釉陶器など時期の下るものを含むが、その他はおおむね8世紀後半から末葉におさまるものと考えられる。

#### ②No.4トレンチ出土土器(第33図39~46)

No.2・3トレンチと同様、黒灰色土中から奈良・平安時代の遺物が出土した。ただ桑寺廃寺の東限と考えている築地状遺構を境として、その東側からは弥生土器・古墳時代の須恵器



第33図 No.2・3トレンチ出土遺物実測図  
(34~38 No.2・3トレンチ, 39~46 No.4トレンチ)

・瓦器などが出土している。

古墳時代須恵器(39~41) (39)は口径14cmを測り、丸味をもつ天井部からゆるやかに降る器形をなす杯蓋である。(40・41)は甕で、口頸部を欠くが細くしまった頸部から大きくひろく口縁部をもつものと考えられる。やや胴の張った体部の下半に回転篋削りが施される。(39)をみると陶邑編年のⅡ形式4段階頃に併行するものと考えられ6世紀後半のものと思われる。(40・41)もほぼこれと同時期と考えられる。

須恵器杯身(42・44) いずれも高台を有すと考えられる。(42)は底部から上外方へ直線的

に立ち上る口縁部をもつもので、口縁部と底部の境よりやや内側に断面台形に近い高台を貼りつける。(44)はゆるやかに外反してのびる口縁部の破片である。

須恵器壺(43) 小型の壺もしくは杯の底部片と考えられるもので、外側に張る高台を貼りつけている。底部外面に「吏」と墨書されている。

須恵器椀(45) 体部に水挽き痕を残し、糸切り底をもつもの。底部外面に意味不明の墨書がみられる。

瓦器椀(46) 断面三角形をなすがかなり扁平となった高台を貼りつけるもので、内湾気味に上外方へのびる体部をもつ。内面には粗い横方向の暗文が施される。

形態からみて(42~44)は8世紀後半頃のものと考えられる。また(45)は、篠窯跡群西長尾5・6号窯出土品中に類似例があり11世紀代のものと考えられる。(46)は口縁部の形状等に明確な特徴は見られないが、一応丹波産とされているものと考えられ13世紀代のものとみられる。

### ③No.6トレンチ出土土器(第34図)

SD25・26の埋土内から出土した土器類である。最下層の砂層から弥生土器、その上の砂混り黒灰色土層から古式土師器、黒灰色土から古墳時代後期と奈良・平安時代の土器が出土した。

弥生土器(1・2) (1)は壺体部と考えられ、外面に楕描き直線文・波状文が配される。(2)は高杯脚台部と考えられ、外面に刷毛目が施される。弥生時代中期のものと考えられる。

古式土師器(3) 小型丸底壺である。口縁部から体部の外面に刷毛目の後篋磨きが施され、内面に篋削りが施される。

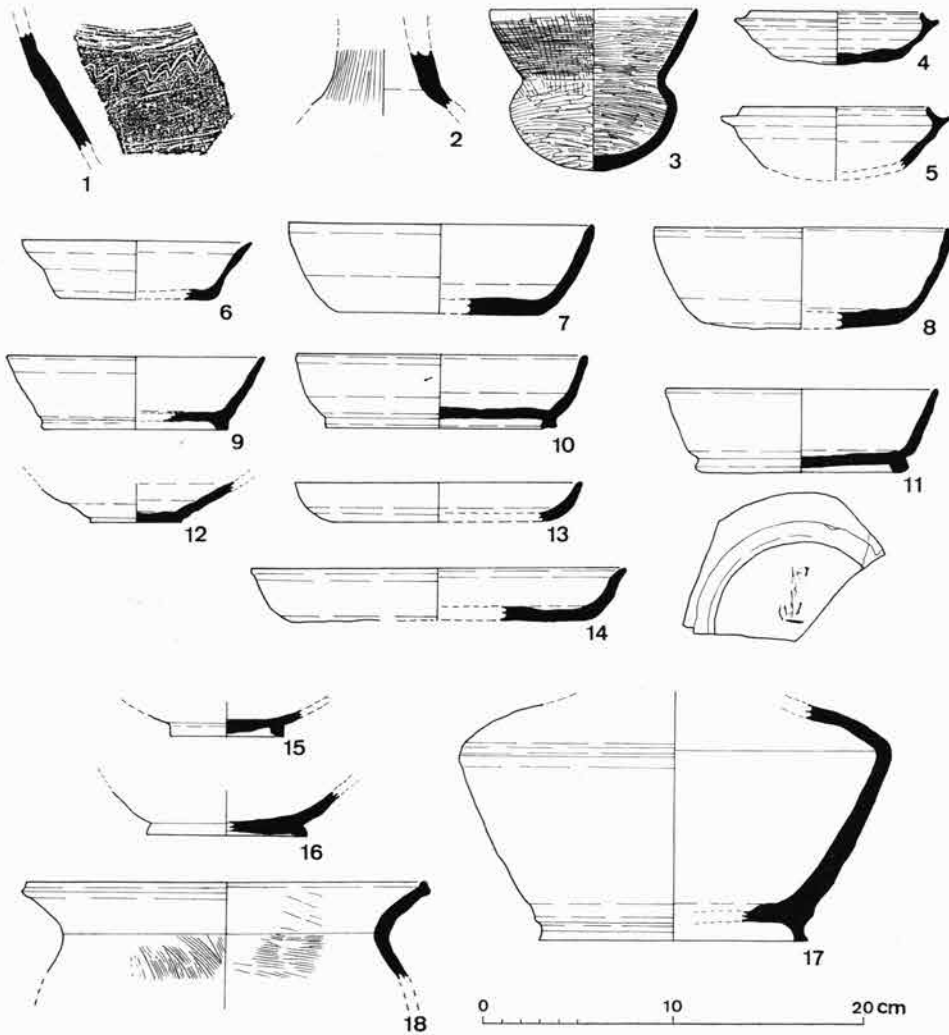
古墳時代須恵器(4・5) 口径9cm前後を測る小型のもの。平坦に近い底部から内湾気味に体部がのび、受け部から短く立ち上がる口縁部をもつ。陶邑編年のⅡ形式6段階頃に併行すると考えられ、7世紀初め頃のものと思われる。

須恵器杯身(6~11) 高台をもたないもの(6~8)ともつもの(9~11)がある。(6)は平坦な底部から外反して立ち上がる口縁部を有し、(7~8)は内湾気味に立ち上がる口縁部をもつ。また(9)は、底部と口縁部の境に断面台形の高台を貼りつけ直線的に上外方へのびる口縁部をもち、(10)は、底部と口縁部の境に断面逆台形に近い高台を貼り内湾気味にのびる口縁をもつものである。(11)は、底部と口縁部の境のやや内側に外に張る高台を貼り直線的に上外方へ口縁部がのびるもので、底部外面に「田邊」と墨書されている。

須恵器椀(12) 体部に水挽き痕を残し、糸切り底をもつもの。

須恵器皿(13・14) (13)は、平坦な底部からゆるやかに屈曲し、短く立ち上る口縁部をも





第34図 No.6 トレンチ (SD25,26) 出土遺物実測図

つもの。また14は平坦な底部から内湾気味に立ち上がった後外反して終る口縁部をもつものである。

須恵器壺(17) 頸部以上を欠くため全形を知り得ないが、肩の張る体部から長い頸がのび、外反して終る器形をもつものと考えられる。やや外に張る高台を貼る。

緑釉陶器碗(15・16) いずれも削り出しの高台部を残すもの。(15)は、高台部の両側を大きく削ることにより、しっかりとした輪高台を成形する。(16)は、内側をあまり削らず、平高台の周囲を一段高くしただけの形状をなす。(15)は高台部を施釉せず、(16)は高台置付き部以外全面に施釉する。

土師器甕(18) 球形に近い体部から、大きく外反する口縁部をもつと考えられる。端部を若干つまみ上げる。

(6～18)についてみると、形態から(12)を除きおおよそ8世紀後半から9世紀前半におさまるものと考えられる。(12)は、11世紀代のものと考えられる。

#### ④古瓦類(第35図～第37図)

古瓦類は、桑寺廃寺の存在が想定されていた No. 2～4トレンチから、集中して出土した。しかし、いずれも包含層から細片となって出土したものであり、各々の全形を復元しようものもなく、当時の使用状況を示す出土状態のものもなかった。ただここでは、これらが桑寺廃寺使用瓦の様相を大まかに示しているものと考え、簡単にその内容についてふれる。

軒瓦については、その瓦当文様などをもとに軒丸瓦3種、軒平瓦2種に分けた。また丸瓦・平瓦については、主に凸面に残る成形、調整痕をもとに丸瓦4種、平瓦4種に分けた。

以下、個々について記す。

軒丸瓦Ⅰ(1・2) 花卉端が軽く反転する素弁八葉を主文とする。突出した、やや小ぶりの中房には1+4+8の蓮子配置をする。花卉は、中央に若干稜を有し、中房付近では互いに接しているが先端近くでは個々独立する。各花卉間には、大きい目のくさび形をなした弁間文が配される。周縁は高く幅広である。瓦当面を残すものが2点出土しているが、範傷等の確認によって同範であることが判明している。

軒丸瓦Ⅱ(3・4) 先端の反転を表現した切り込みを有す素弁八葉を、主文とする。大ぶりの中房に1+8+8+8と密な蓮子配置をみる。花卉は幅広で平たい。花卉間には、大きくくさび形の弁間文を配す。全体を残す資料がなく全体の形状は不明であるが、Ⅰと同様に高く幅広の周縁を有すと考えられる。

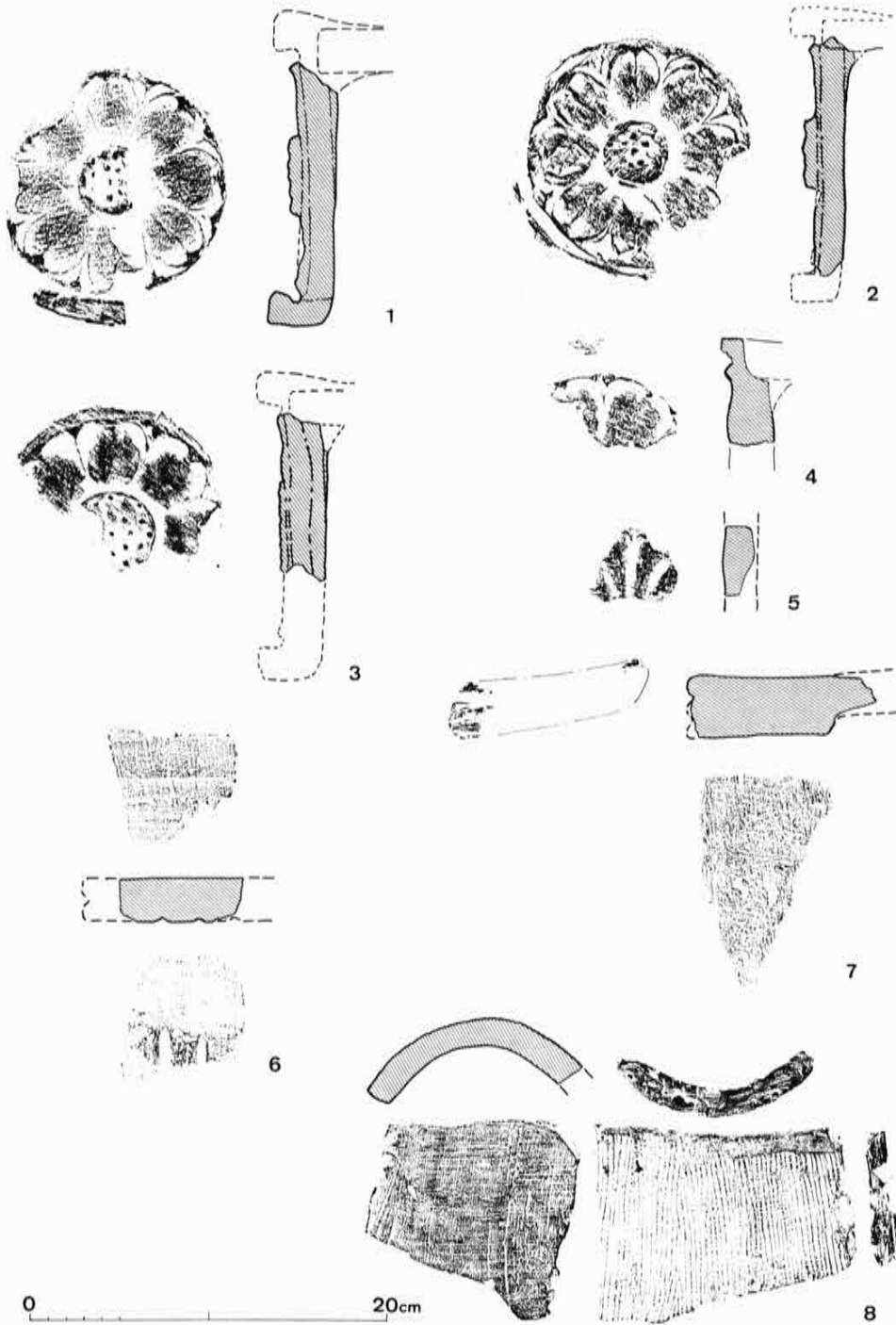
軒丸瓦Ⅲ(5) 瓦当面の一部を残す細片が1点出土したのみで、全体の形状はわからない。ただ遺存するものからみると、細弁状の文様を有していたらうと考えられる。

軒丸瓦Ⅰ・Ⅱをみると、その断面の観察から丸瓦との接合はいわゆる「印籠付け」と言われているものである。

軒平瓦Ⅰ(6) 通常の平瓦の凸面をなでにより平坦にし、そこに篋によって重弧文を配したものの。瓦当面を欠くが、2条の弧線をみることができる。凹面側には細かな布目及び枳板の痕跡を観察することができる。

軒平瓦Ⅱ(7) 三重弧文軒平瓦の一部を残すもの。遺存部がごくわずかなため細かな点は不明。頸部に縄叩き痕がみられ、凹面にはやや粗い布目が観察できる。

軒平瓦Ⅰは、後述の平瓦のいずれの叩きが施されたか確認はできていない。また軒平瓦Ⅱ



第35圖 出土瓦実測圖(1)

の頸部にみる縄叩きや凹面に板痕がないことから、これに接合される平瓦は後述する平瓦Ⅳと考えられ、一枚造りによっていると思われる。

丸瓦Ⅰ(8) 凸面に縦方向の刷毛状工具による調整痕をのこすもの。凹面に細かな布目がみられる他、凸面成形時の叩き痕を残すものはない。

丸瓦Ⅱ(9) 丸瓦Ⅰと同じく、凸面に縦方向の刷毛状工具による調整痕がみられるもの。ただ、凸面の器壁に残る痕跡から類似した工具ではあるが、明らかに異なったものが使用されている。一部に格子叩きの痕跡を残すものがあり、後述する平瓦Ⅱと同種のものである。

丸瓦Ⅲ(10) 凸面にやはり縦方向に刷毛状工具による調整を行った後、横方向に同様の工具によって調整を行い、さらにその上をなで調整をするもの。薄手で小型品である。

丸瓦Ⅳ 凸面になで調整を行うもの。凹面の布目は他の三者に比してやや粗い。

丸瓦は、Ⅰ～Ⅲにみられるように刷毛状工具の多用を特徴とする。中でも、Ⅲはくり返し刷毛状工具による調整を行い、しかも小型品であることから、使用された建物・部位が限られていた可能性が高い。Ⅰ～Ⅲは行基式、Ⅳは玉縁式であることを確認している。

平瓦Ⅰ(11) 凸面に一辺約1cm前後の正格子叩きを施すもの。図示したものは広端部側角を若干削り取っており、凹面側を幅約6cm横方向になで調整する。

平瓦Ⅱ(12) 凸面に一辺約0.7～0.8cm前後の正格子叩きを施すもの。

平瓦Ⅲ(13) 凸面に一辺約0.5cm前後の正格子叩きを施すもの。

平瓦Ⅳ(14) 凸面に縄目叩きを施すもの。

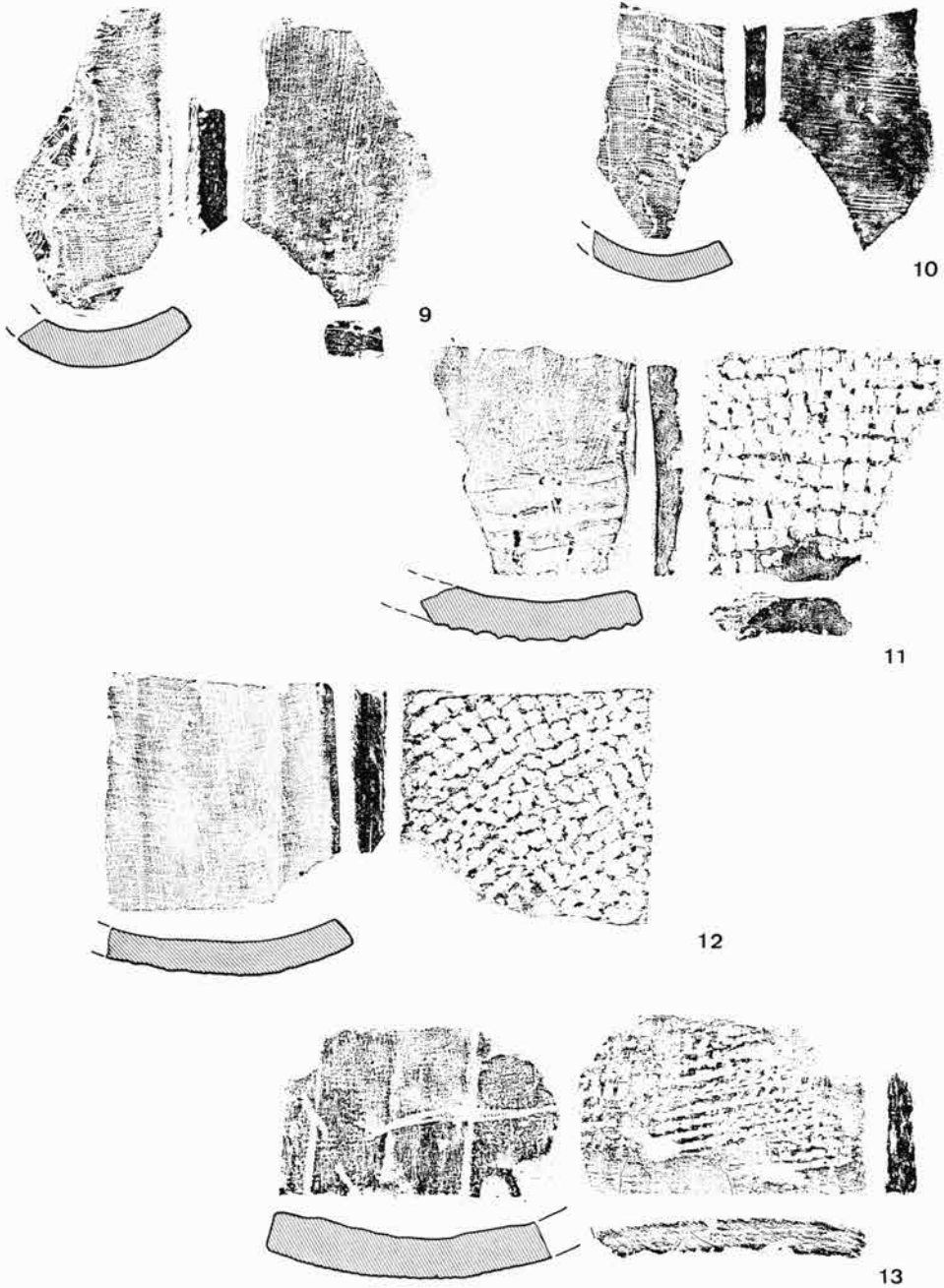
平瓦Ⅰ～Ⅲは、いずれも凹面側に枳板の痕跡を残し、断面に接合痕を確認していることから、粘土板桶巻き造りによるものと考えられる。またⅣは、側面に布目の及ぶものがあり、一枚造りによると考えられる。

鷗尾片(15) 上記の古瓦類以外に、鷗尾片がある。連珠文からなる縦帯の一部を残す断片のため、全形を推察することは難しい。ただ、連珠文による縦帯をもつ鷗尾は、白鳳時代末から奈良時代にかけて多い様式(注21)のようである。

それでは、これら古瓦類のセット関係とその年代について考えてみる。

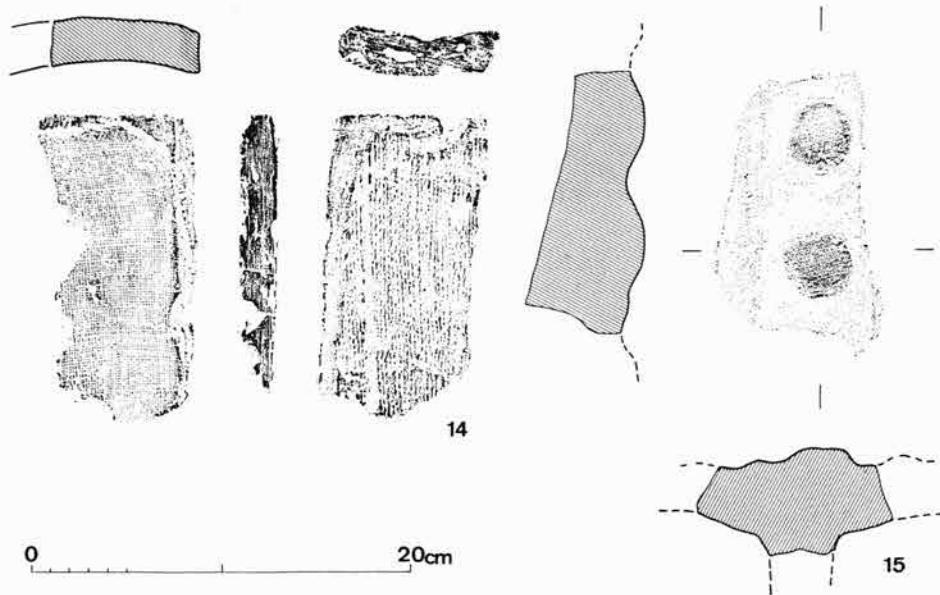
まず軒丸瓦をみると、Ⅰ・Ⅱは素弁八葉を内区主文とする点は飛鳥末様式を踏襲するが、中房部に蓮子が密に配される点など白鳳時代に多い要素がみられる。そのため、おおよそ7世紀後半のものと考えられ、その中でも古い段階のものとするのが妥当なようである。またⅢの細弁状のものは、弁の表現方法が簡素で、白鳳時代でも後半、つまり7世紀末から8世紀初頭のものと考えられる。

軒平瓦でも、無段顎で頸部に重弧文を配すⅠに対して、三重弧文軒平瓦であるが有段顎で



0 20cm

第36図 出土瓦実測図(2)



第37図 出土瓦実測図(3)

頸部に縄叩きが施され、平瓦部が一枚造りによる点など新しい要素をもつⅡのように、古・新の2つの様相をみる。

この軒瓦にみる古・新の様相は、丸瓦・平瓦にも対応できる。丸瓦では刷毛状工具を多用するⅠ～Ⅲと凸面になでを施すⅣであり、平瓦では桶巻き造りで正格子叩きを施すⅠ～Ⅲと一枚造りで縄叩きを施すⅣである。

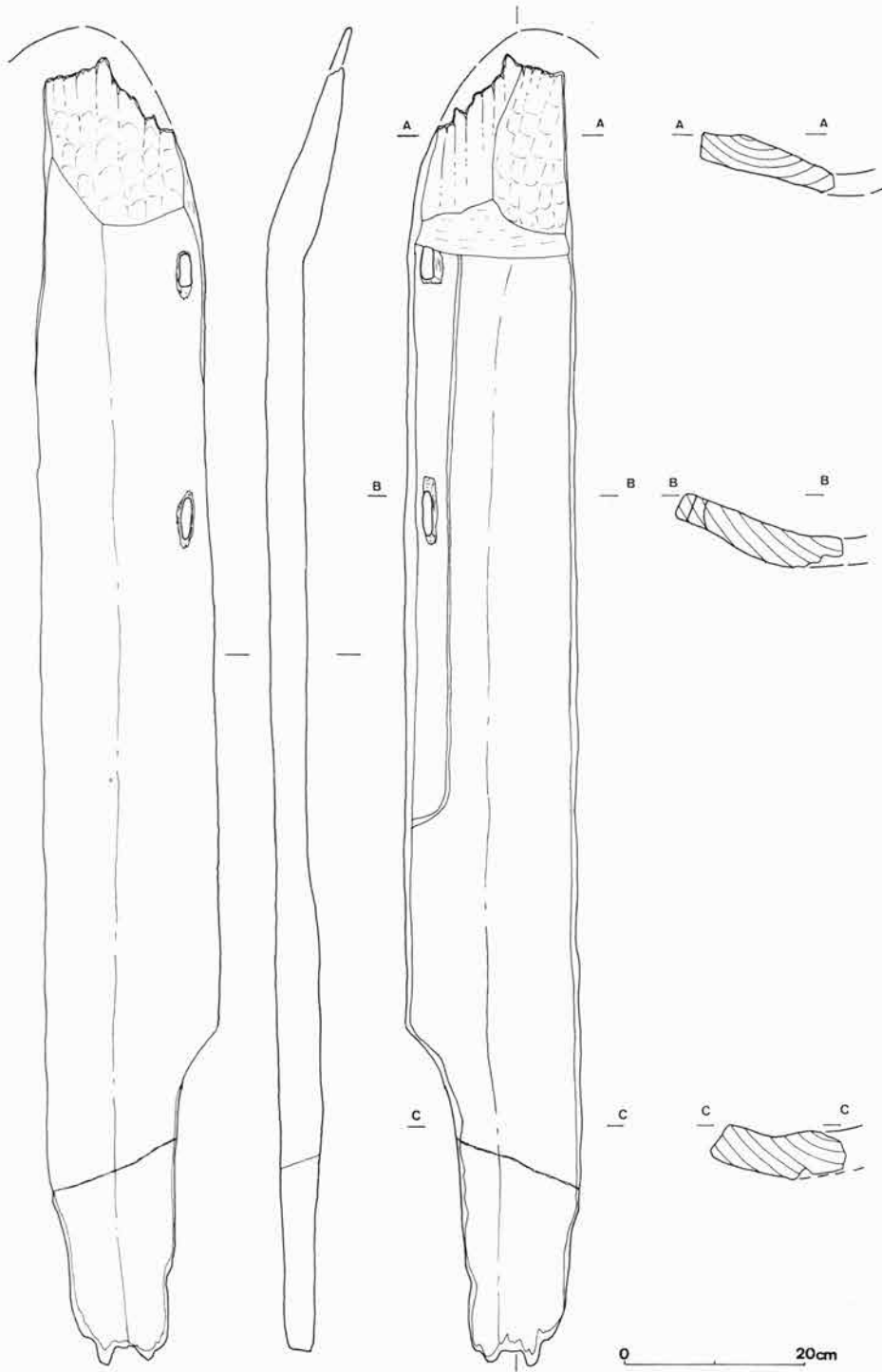
一応、今回出土した古瓦類を整理した結果、以上のように古・新の2群の古瓦に分類でき、この各群がセット関係をなす可能性が高いと考えられた。また古い群は量的にも、種類のにも豊富であることから創建時に使用されたものと考えられ、その年代は7世紀後半でも古い段階と推測される。さらに新しい群のものは、その後の規模拡大か修復瓦として、8世紀初頭頃に使用されたと考えられる。また鴟尾片はこの新しい群に属す可能性が高い。

⑤木製品(第38図・図版第15)

No.6トレンチSD25・26から数点の木製品が出土した。

舟状木製品(第38図)

ほぼその中央部で割れており、先端部及び後部を欠く。現存長143cm・幅約20cm・厚さ3～3.5cmを測り、舟としては小型品のようなものである。全体に流線形をなし、先端部は上方へ向って屈曲し、幅・厚みを減じていく。後部も遺存部では、側方から削り取って幅を減じている。断面形は浅く湾曲しているが、舟としては浅いようである。側辺に沿って2か所の穴が



第38図 舟状木製品実測図

付表3 古瓦計測表

(単位はcm)

軒丸瓦	中房径	弁区径	全径	文 様	出土数
I	4.3	12.4	—	素弁八葉蓮華文	3点
II	5.2	(12.4)	—	素弁八葉蓮華文	4点
III	—	—	—	細弁蓮華文	1点
					8点
軒平瓦	厚  さ		文  様		出土数
I	遺存部最大厚 2.5		不明(顎部に重弧文)		1点
II	瓦当部厚 3.6		三重弧文		1点
					2点
丸 瓦	厚  さ		特  徴		出土数
I	1.4~1.6		凸面刷毛調整		30%
II	1.6~2.0		凸面刷毛調整		19.3%
III	1.2~1.4		凸面刷毛調整		34.4%
IV	1.6~2.1		凸面なで調整		16.3%
					100%
平 瓦	厚  さ		特  徴		出土数
I	1.9~2.2		凸面正格子叩き(大)		21.6%
II	1.6~1.8		凸面正格子叩き(中)		33.6%
III	1.9~2.3		凸面正格子叩き(小)		21.6%
IV	2.1~2.5		凸面縄叩き		21.6%
					98.4% その他 (1.6%)

付表4 木製品一覧表

(単位はcm)

名 称	長さ	幅	厚さ	材質	時 代
1 舟状木製品	148	20	3	未鑑定	奈良時代
2 板 材 片	44.5	4.5	0.8	〃	奈良時代
3 棒状木製品	23	径 2.5	—	〃	奈良時代
4 杭状木製品	32	2.5	2.5	〃	奈良時代

(表番号は図版第15の番号に一致)

あることを考え合わせると、側板を組み合わせていた可能性が高い。そして、その側板の幅・範囲を考えると、穴の周囲に浅い溝が走っておりこれがその範囲を示すと思われる。この幅は、後部で減ず船の幅と一致している。これらの構造上の特徴をみてみると、舟状とは言うものの、田舟のような小型のものであった可能性が高い。

この他に、穴を3口穿った板材の一部と考えられるもの(図版第15, 2), 把手状をなす棒状木製品(同, 3), 杭状木製品(同, 4)などがある。

## 7. ま と め

ここまで今回の調査成果の概略を記したが、先にも述べたように限られた調査範囲ではあったものの、当初の予想以上の成果を納めることができた。

①まったく予想していなかった弥生時代中期の遺構・遺物が出土した。調査地が東西に長い事が幸いし、台地状部の中央から先端にかけ墳墓・集落・水田という遺構群を連なった状態で検出した。

②丹波国府推定地や桑寺廃寺については、この地に存在することが推定されていたものの考古学的な発掘資料は皆無に等しい状況であった。しかし、今回出土した遺構・遺物から桑



寺廃寺の存在がほぼ確実となったばかりではなく、その規模や創建年代を考える上で重要な資料を得た。また推定国府跡に直接関連づけて考えられる遺構は検出できなかったものの、墨書土器などの出土遺物からみて、その存在がより可能性の高いものとなったと考えている。

調査成果をまとめると以上ようになる。以下ここでは、各項目ごとにもう少し気付いた点を述べまとめとしたい。

#### (1) 弥生時代

近年亀岡盆地でも、国道9号線バイパス関係の調査で、弥生時代前期から中期初頭の太田遺跡、後期の北金岐遺跡などの大規模な集落跡の存在が明らかとされた。当遺跡は、時期的にはその間を埋める中期のものであり、遺構の広がりからもかなり大規模なものと考えられた。

次に各遺構毎に出土土器の特徴をみる。

##### SD06

①広口壺の文様は、第15図(5・6)のように櫛描き文・突帯文で飾られたものがあるが、第15図(1・4)のように凹線文を用いるものもある。また口縁部を下方へ大きく拡張するもの、口縁付近を大きく反転し口縁内に突帯を有すものがない。

②他の壺をみると体部片に廉状文を配すものや、第16図(13)や第17図(15・18~20)のように口縁付近に凹線文を配すものがある。

③甕をみると、甕Aとした「はね上げ口縁」をもつもの(A I~A IV)が最も多い。その他では甕Bとしたものが少量ではあるがまとまってある。

④甕Bは、その形態から第Ⅱ様式からある大和型の甕の系譜をひくものと考えられている。近年、その大和型甕が中期後半までその形態の特徴を残し継続して使用されると提唱されているが、これもその影響のもと成立した器種であろう。なお類例は、山城・湖西にもみられ、口丹波地方でも出土例がある。<sup>(註22)</sup>  
<sup>(註23)</sup>

⑤甕はほかに、第21図(48)のように「近江的」なもの、第20図(36・37・42)のように体部中位に刷毛原体による列点文を配すもの(壺Cにも1点ある)などがある。

⑥直口壺とした第18図(31)は、形態的には広口壺Dとの中間的なもので、体部に格子叩きを施す。

⑦底部片をみると、内面篋削り、内外面篋削りするものが含まれるが、外面篋削り、内面刷毛目もしくはその後なでを施すものが主流を占める。

⑧壺・甕とも体部外面に叩きを施すものは、その後刷毛目を施すものが多い。しかし、その刷毛目は粗く叩きを明瞭に残すものが多くみられる。



## (2) 桑寺廃寺

当廃寺跡については、周辺から古瓦が採取されることから比較的古くよりその存在が推測されていた。従来、資料的には古瓦以外にないため、これが寺院に伴うものか、当地に推定される国府に伴うものかという判断も難しい状況であった。また当廃寺跡について述べたものも少なく、丹波国府について述べた木下 良氏が国府に附属する寺院として性格づけされたにすぎない。<sup>(注25)</sup>

今回の調査の結果、古瓦をみるとその創建は7世紀後半と考えられ、国府に伴う施設としては古すぎるといえる点、「寺」と墨書された須恵器が出土した点などからやはり寺院跡である事は確実視できると考えられる。ただその性格づけとして、やはり国府に附属する寺院としての意味づけだけでは少し疑問が残る。そこで以下、当廃寺跡の性格についてふれてみる。

当廃寺跡の創建が7世紀後半頃と考えられる点については先に述べた。亀岡盆地全域をみると、7世紀後半から8世紀初頭にかけて創建されたと考えられる寺院跡が、当廃寺跡を含め3か寺(観音芝廃寺・与野廃寺・桑寺廃寺)、8世紀後半に創建されたと考えられる寺院が3か寺(国分寺・国分尼寺・三日月廃寺)ある。これら寺院の分布をみると、その特徴として2つの事が上げられる。まず、古い時期の3か寺はいずれも大堰川西岸にあり、新しい時期のものは、東岸にある点。そして、西岸にある3か寺は先に盆地内を4分割した小地域毎にあり、しかもそれぞれが交通の要所に位置していることである。7世紀から8世紀にかけて、東岸に対して西岸の優位性、先進性を示す背景としてやはり交通路というものがある。古代山陰道がどのルートを通っていたか、いまだ明確ではない。しかし、山城盆地から老ノ坂峠を経て篠山盆地方面へ向うとすれば、当然大堰川の西岸を北上し、現在の本梅町付近を経、篠山方面へと向っていたと推測できる。観音芝廃寺は老ノ坂峠を越えたすぐの篠町にある。また与野廃寺はそこからさらに北上しやや西へ行ったところにあり、現在の池田街道(摂丹街道とも言われ、摂津方面へぬけるルートである)と山陰道の分岐点を意識していると考えられる。そしてさらに北上し、いずれかで西に折れ、本梅方面へ向かわねばならないが、これが桑寺廃寺の存在する千代川町北ノ庄あたりであった可能性が高い。という具合に寺院の分布を古代の山陰道に結びつけてみると、その位置づけが可能となるのではないかと考えられるのである。そして8世紀後半に至り、東岸に国分寺・国分尼寺・三日月廃寺が造営される。このことは、国府が屋賀に移ったと推測される時期と考え合わせ充分検討せねばならないが、交通路の変化・政治体制の変化などがあったのかもしれない。

ここにみる桑寺廃寺と山陰道のかかわり合いは、当廃寺出土の丸瓦Ⅰ～Ⅲにみる刷毛状工具を多用する手法が、兵庫県加古川流域に比較的多くみられ、山陰道で結ばれた篠山盆地を

介して、これら加古川流域の諸寺院跡との結びつきが考えられることから推察できる。今後資料増加を待って検討を行いたい。

以上のように、当寺の創建の背景として、まず山陰道との関連を述べた。しかし単にそれのみではなく、当地には後期の前方後円墳である拜田16号墳が代表する後期古墳群が示すようにある程度勢力をもった氏族がおり、その氏寺として建立されたことは充分考えられる。ただその場合、木下氏が述べるように、国府設置以後当廃寺がそれに附属する寺院となったならば、当然「私寺」から「官寺もしくは準官寺」的な寺院として性格に変化があった事が推測される。しかし、これを考古学的資料のみで考えていくのは難しく、今後に残された課題の一つだろう。

(3) 国府跡

国府跡について、それを実証しうるもの(条坊等の遺構)を何ら検出することはできなかった。ただ今回の調査は線的なものであり、十分に把握しえなかったものの、今後面的に調査を行うことができれば、それらを把握できるかもしれない。特に出土した墨書土器や緑釉陶器は、単に桑寺廃寺との関連だけでは把握できない面があり、今回の調査成果を見る限り、

付表 5 弥生土器出土数一覧表

	壺											鉢						
	広口壺						直口壺		無頸壺	細口壺	短頸壺	計	A	B	C	D	E	計
	A	B	C	D	E	F	A	B										
方形周溝墓 1		2		1			1			1		5						0
// 2	3	2	7	1		1			3			17			2		1	3
溝 6	2	7	4	13	1		9	1	2	1	1	41	1	6	1	1		9
	甕											高杯				甕蓋		
	A				B	C	D	E	F	G	計	A	B	C	計			
	I	II	III	IV														
方形周溝墓 1	1										1							
// 2	1				5		1				7	1			1			
溝 6	36	13	10	4	7	1	7	1	1	1	81	1	1	5	7		1	
	底部								片									
	外面刷毛 内面なで		外面刷毛 内面刷毛		外面刷毛 内面篋削		外面篋削 内面篋削		外面篋削 内面刷毛		外面篋磨 内面なで		外面篋磨 内面篋削					
方形周溝墓 1	2				1				2				1					
// 2	2								6		2							
溝 6	14		4		6		2		18		2							

当地が国府跡である可能性が高くなったと考えてもよいものと思っている。

しかし近年、各地で国府域における発掘調査が行われているが、明確に条坊等が確認できた例は少なく、確認しえたとしても時期的に少し下ったもの(10世紀以降のもの)が多いようである。<sup>(注26)</sup>当遺跡の場合も、単に地名をもとに方六町という国府域が設定されてはいるが、考古学的、地理学的考証など加味し、国府の構造について再吟味する必要性が生じるかも知れない。いずれにしろ今後の調査研究に期する他はない。

注1 木下 良「丹波国府址」(『古代文化』16-2)1966

注2 木下 良・足利健亮・高橋誠一・和田 萃・上原真人・五十川伸矢・深沢芳樹・岡本一士・立花 聡・井藤暁子・森岡秀人・岡田見治・菱田哲郎らの方々から専門的指導・助言を賜った。

注3 調査補助員 山口文吾・斉藤雅彦・富田 宏・小林 正・宮本純二・中村正明・加藤隆也・広瀬なぎさ・柱 芳弘・中西 巧・松井正明・萩生田憲昭・田中暢一・宇野 稔・菅原淳之・中西秀行・村田杉雄・片山統夫・西垣真史・青木恒文・河原昭夫・中沢 勝・美馬幸大・川勝修・西村健二

調査整理員 中西 宏・加藤百合子・吉岡みよ子・高田幸子・小林慶美・谷利里美・高屋みしま・小林道子・箕輪有紀・塩見淑子・吉田裕子

調査作業員 八木初次・八木感一・真継幸男・松本 終・並河義次・渡辺春三・俣野ふじを・俣野利江・山内きくの・八木まさ子・八木美重子・八木よし子・山内タカ子・原田敦子・野々村美さを・野々村礼子・野々村由利子・松山晃子・八木淑子・松本はつゑ・松本菊栄・柿田喜代子・山本美代子

注4 安藤信策「国道9号バイパス関係遺跡昭和53年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』京都府教育委員会)1979

堤圭三郎ほか「国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1977)』京都府教育委員会)1977

注5 村尾政人ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和56年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第1冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1982

注6 村尾政人ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和57年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第7冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1983

注7 「北金岐遺跡」(京埋セ現地説明会資料No. 83-05)1983.12.18

注8 注5と同じ

注9 吉水真彦『馬場ヶ崎遺跡発掘調査報告』亀岡市教育委員会 1978

注10 注5・注7による

注11 中期の古墳として他に、丸塚古墳・丸塚西古墳などがある。

注12 拜田古墳群のように、古墳群の中に中期・後期の古墳を含むものもある。

注13 いままで鹿谷古墳と報告されていた、鹿谷古墳群中の1つである。

注14 現在、当調査研空センターが国道9号線バイパス関係遺跡として調査中である。

注15 当調査研空センターが千代川町丹波養護学校増築に伴って行った千代川遺跡第7次調査や注4の北金岐遺跡の調査で検出している。

注16 丹波国府推定地として、屋賀説・篠説・案察使説・保津説・宇津根説・三宅説・曾我部説・国分説・千歳説などがある。

注17 注1と同じ

- 注18 南北方向は、中軸ラインから北をN、南をSで表わし、離れた距離を数字で表現した。(例えば北へ5mのラインはN5と表わす)
- 注19 No.2とNo.3トレンチは最終的につなげたため、以下No.2・3トレンチとして表記する。
- 注20 類似した遺構として福知山市和久寺廃寺の築地跡などがある。
- 注21 大脇 潔「日本古代の鴟尾」(『日本古代の鴟尾』図録第7冊 飛鳥資料館) 1980
- 注22 大和地方には祖型とする大和甕が分布し、山城では今里遺跡・神足遺跡・上久世遺跡などに、近江では湖西の引川遺跡などにもみられ、今後この時期の資料が増加すれば、さらに詳しく分布範囲をまとめることができるだろう。
- 注23 当地方では、丹波町美月遺跡や千代川遺跡第3次調査などでも出土している。
- 注24 このような面で当調査研究センター第26回研修会の田代弘調査員の発表や、太田遺跡の前期から中期初頭の土器様相からみる摂津方面とのつながり(芦屋市教育委員会森岡秀人氏等の指摘)は、当遺跡出土土器の位置づけを行う上で非常に重要な示唆をあたえている。今後、西摂地方・北摂地方・兵庫丹波地方の土器様相をふまえて充分検討したい。
- 注25 注1や、木下 良「国府と国府寺」『古代学叢論』1984がある。
- 注26 山中敏史「国府と条里制地割」(『条里制の諸問題』Ⅲ 奈良国立文化財研究所) 1984

## 2. 千代川遺跡第8次発掘調査概要

### 1. はじめに

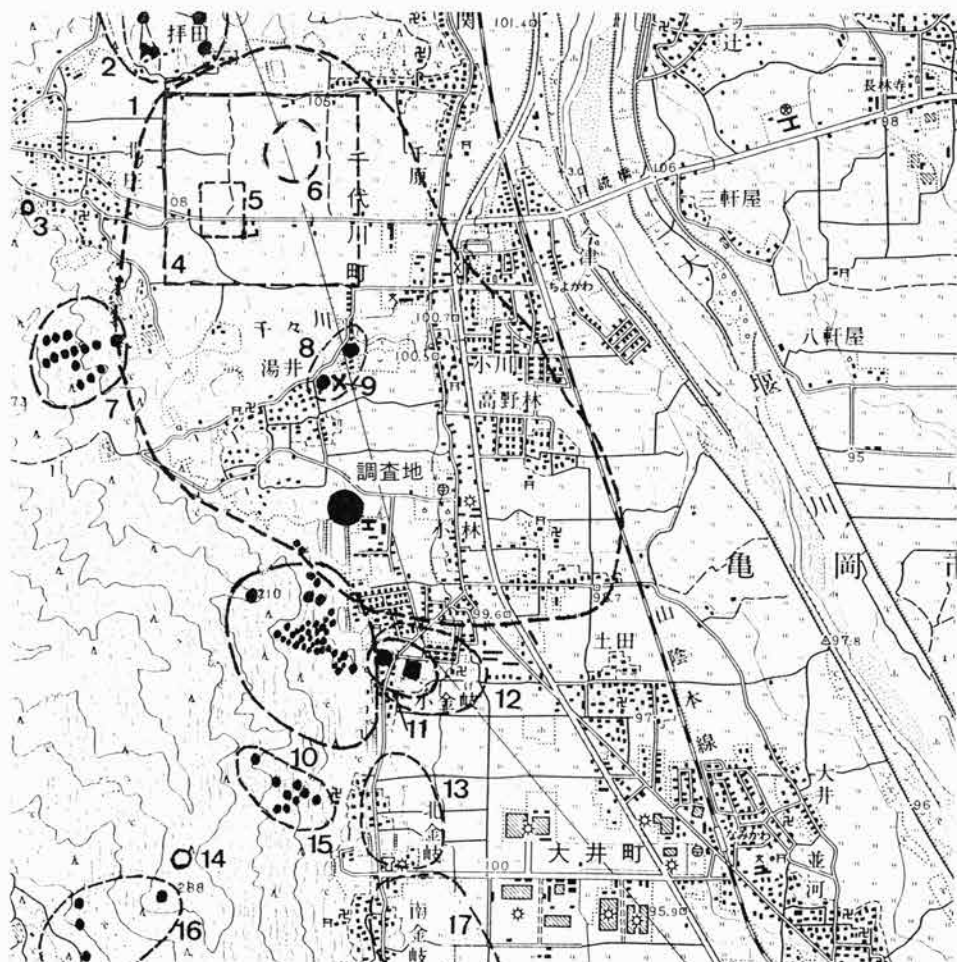
京都府教育委員会は、昭和58・59年度に京都府立丹波養護学校亀岡分校の校舎新築を計画し、昨年度と本年度の2回、校舎新築に伴う発掘調査を当調査研究センターに依頼した。今年度は、昭和59年7月26日から同年8月30日まで現地調査を実施した。

千代川遺跡は、今までに計7回の発掘調査と遺跡分布調査を実施してきた結果、弥生時代から鎌倉時代に至る各時代の遺構・遺物が確認され、千代川町一帯に広がる広範囲な遺跡であることが判明した。また、当地が、縄文時代から奈良時代に至る多数の遺物が出土した大溝や、古墳時代前期の竪穴式住居跡等が確認された千代川遺跡第3次調査地<sup>(注2)</sup>に隣接している事などから、それらに関連する遺構・遺物の検出を予想した。しかし、今回の調査では、昨年度調査を実施した千代川遺跡第4次調査<sup>(注3)</sup>と同様の中世素掘溝を主体とする遺構を検出したが、当初予想された遺構・遺物は検出できなかった。調査地は、昨年度調査を行った地点のすぐ北西にあたる亀岡市大井町小金岐北浦である。調査面積は、新築校舎予定地の約400m<sup>2</sup>である。調査は当調査研究センター主任調査員水谷寿克・調査員村尾政人が担当し、調査にあたっては、京都府立丹波養護学校分校、京都府教育庁指導部文化財保護課、京都南丹教育局、亀岡市教育委員会、亀岡市青少年センター、調査補助員<sup>(注4)</sup>、調査作業員の方々の協力をえた。

### 2. 調査経過

昨年度の調査である千代川遺跡第4次の発掘調査は、京都府立丹波養護学校亀岡分校の昭和58年度校舎建設予定地約3,500m<sup>2</sup>を対象として、昭和58年6月20日から同年9月30日まで実施した。当遺跡の第1・2次調査<sup>(注5)</sup>は、国道9号バイパスに伴う発掘調査であった。第3次調査は、日吉ダム建設による移転住宅地に伴うものであった。当調査は、26,000m<sup>2</sup>の調査対象地に4m方眼の割付を行い、一辺4mグリッドによる試掘調査を実施した。その結果、自然流路と考えられる大溝(幅約10m)と古墳時代前期の住居跡2基が確認された。大溝は、行者山の扇状地から発するものであろう。それに区画されたと考えられる住居跡は、扇状地の南側丘陵に一群をなしていたものと考えられる。

第4次調査<sup>(注6)</sup>では、今回と同じく京都府立丹波養護学校亀岡分校建設に伴うものであった。当調査は、第3次調査地に近接していることから、これらの大溝・住居跡等が当初予想され



第39図 千代川遺跡と周辺の遺跡

- 1. 千代川遺跡 2. 拝田古墳群 3. 矢尾谷遺跡 4. 丹波国府跡推定地 5. 桑寺廃寺
- 6. 大將軍遺跡 7. 北ノ庄古墳群 8. 丸塚古墳群 9. 湯井遺跡 10. 小金岐古墳群
- 11. 馬ヶ崎古墳群 12. 馬ヶ崎遺跡 13. 北金岐遺跡 14. 東谷遺跡 15. 北金岐古墳群
- 16. 鹿谷古墳群 17. 南金岐遺跡

だが、奈良時代の掘立柱建物1棟と奈良～江戸時代にかけての多数の素掘溝を検出したにとどまった。

今回の第8次調査は、昨年度の第4次調査の3m方眼地区割付を利用した。調査は、調査対象地を重機により土層確認しながら面的に掘削することから開始した。その結果、昨年度の調査と同様の黒色土層を表土から約50cm下位で確認したので、その面で精査し、遺構を検出した。本調査では、奈良時代から平安時代の素掘溝を確認することはできなかったが、鎌倉時代から近世にかけての東西方向に走る素掘溝を多数検出した。



### 3. 検出遺構と出土遺物

検出した遺構は、黄褐色粘土層及び黄褐色・青灰色の砂質土(地山)に切り込まれている素掘溝及びピット等である。調査地の北西一部のB15・16～E15・16地区は近世の素掘溝SD01～06が南北方向に走っている。この溝以外の地区には、東西方向に走る幅約20cm、深さ12cmを測る中世素掘溝が多数走っている。

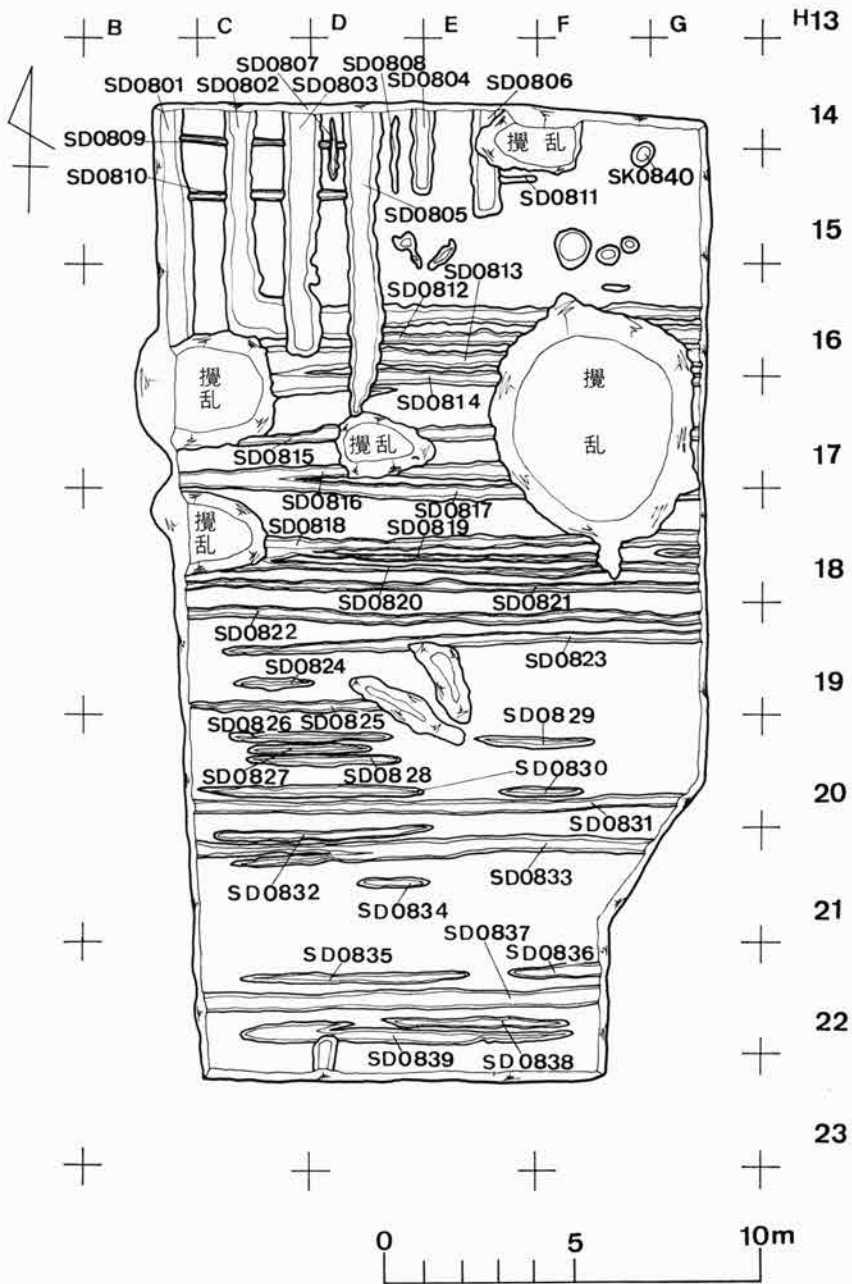
以下、各遺構に関して記述する。

**溝0801～0806** B14・15・16・17～E14・15・16・17地区で検出。南北方向に走る溝である。溝はやや幅広く約70cm、深さ約10cmを測る。これらの溝は、近世のもので、計6本あり、溝の間隔が約1mある。溝内の埋土は暗灰色土層の単一層である。出土遺物は近世の染付陶器碗がSD0802より出土している。溝0802がC16地区で南北方向から東へ直角に折れ曲がっている事や、溝0801・03・04がD17地区より南へ延びない点から16ラインから北側に近世における畑地の区画があったと予想できる。

**溝0809～0811** B11～E11地区で検出。東西方向に走る溝である。溝幅約17cm、深さ5cmを測る。黄褐色粘土(地山)を切り込んでいる。溝の埋土は黒褐色土層である。溝内からは瓦器片・土師器片が出土した。この地区では、この溝に同様のものは少なく、削平された可能性が強い。いずれにしても今回の調査地域には、中世(平安時代末以降)の素掘溝が東西方向に施行されていたことが判明した。

**溝0812～0839** B・C・D・E・F・G16～B・C・D・E・F・G22地区で検出。東西方向に走る溝群である。黄褐色粘土(地山)を切り込んでいる。溝の埋土は、黒褐色土層である。溝内からは、瓦器片、土師器片が出土した。溝は、幅約20cm、深さ約12cmを測る。溝の間隔は約120cm単位で南北方向に施行されているのが溝の間隔の狭い所や切り合いが平安末期から近世に至る段階の、溝の作り替えにより発生している。15・16地区では、近世溝を施行される時に一度削平を行っているので、中世素掘溝の残りは悪い。しかし、南側では東西方向の溝が比較的によく残っている。この原因については、近世の素掘溝を検出していないことから近世に削平による畑地の継続がなく、盛土による水田化があったためである。

今回の調査で出土した遺物には、須恵器片、土師器片、瓦器片、陶磁器片等がある。この中でもっとも多く出土しているものは、瓦器碗片、土師皿片である。出土状況はほとんどのものが遺構直上の遺物包含層及び、中世素掘溝である。遺物はすべて小片のため図画作業は不可能であった。



第40図 遺構実測図

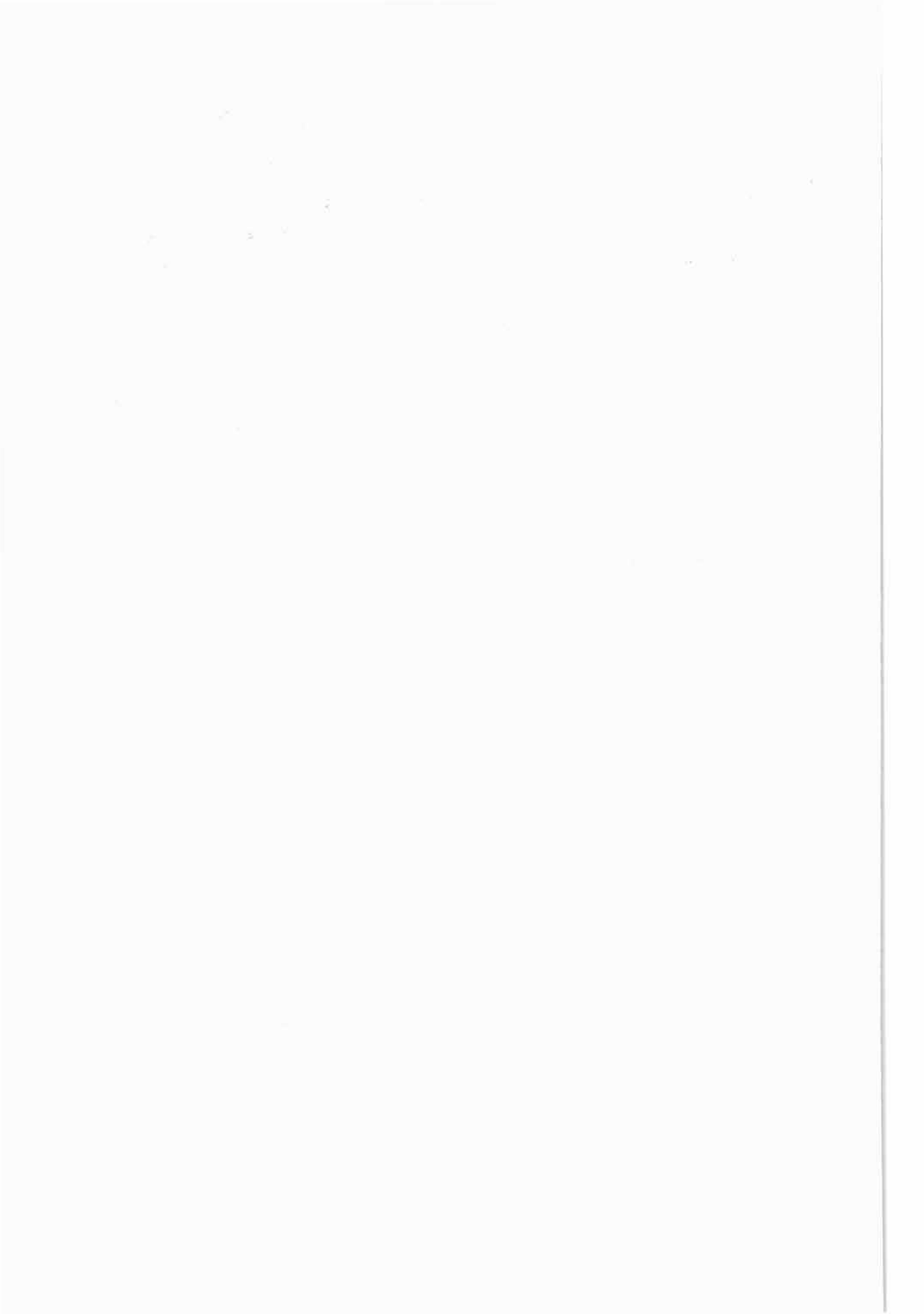
## 4. ま と め

今回の調査では目的とした千代川遺跡第3次調査に関連する遺構・遺物等のいずれも検出することはできなかった。今回検出した遺構は、昨年度調査を行った同地の千代川遺跡第4次調査と同様の中世素掘溝が今回は主体を占めるのと、それに続く近世の素掘溝であった。前回の調査では、奈良時代の掘立柱建物跡(2間×2間総柱倉庫)とそれに伴う素掘溝を検出し、今回よりも古い時期からの素掘溝の変遷を追う事ができたが、今回の調査地では奈良時代の遺構面は削平されているため残っていなかった。特に、今回の調査地であるC~G14C~G15地区は、残りが非常に悪く近世の素掘溝を施工する前に削平が行われたためと考えられるので残りが非常に悪かった。本来は、前回の調査結果から今回の調査地全面にも奈良・平安時代の南北方向に走る素掘溝が予想され、鎌倉時代になると、東西方向の横長に走る溝へと変化した畑地があったと考えられる。また、近世の溝は、前回でも一部を確認しており、小地域に小分割された南北の区画が一町間に配置されていたと予想される。現在は南北方向に長い水田として利用されていた所なので、近代に畑地が同区画のまま水田化したものである。

これらの古代から近世に至るまでの素掘溝の変化は耕作地の小区画を知るだけでなく、大きく亀岡盆地に整然と施行されている条里制を知る上でもかかせない重要な資料である。

(村尾政人)

- 注1 安藤信策「国道9号バイパス関係遺跡昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980)』京都府教育委員会)1980
- 注2 岡崎研一「千代川遺跡第3次」(『京都府埋蔵文化財情報』第10号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1984
- 注3 村尾政人「千代川遺跡第4次」(『京都府遺跡調査概報』第10冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1983
- 注4 昭和59年度調査参加者氏名(五十音順)  
調査補助員 伊豆田晃正・伊藤裕康・井上和也・久保雅彦・豊岡卓之・中川和弘・野々村寿良・細川康晴・村山一弥  
整理員 田中智子・並河智実
- 注5 安藤信策・村尾政人「国道9号バイパス関係遺跡昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981)』京都府教育委員会)1981  
村尾政人「国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第1冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1982
- 注6 注3と同じ



### 3. 上中遺跡第2次発掘調査概要

#### 1. はじめに

京都府は、北桑田郡京北町大字赤石小字鳥谷小迫口16・17番地の府立北桑田高等学校内に林業科実習棟新築を計画したが、この地は、上中遺跡として弥生時代～鎌倉時代にかけての石器・土器類の出土が知られている周知の遺跡にあたる。そのため工事に先だち、遺構の有無を確認し、記録保存をはかるとともに、重要な遺構を検出した場合、保存のための資料を作成することを主な目的として、京都府教育委員会から調査の依頼を受け実施したものである。

京北町は、京都府の中央部に位置し、標高1,000m未満の深い山々によって周りを囲まれ、町内を貫流する大堰川(桂川)と、周山で合流するその支流である弓削川によって形成された山間の盆地から成っている。小盆地は、大堰川上流の山国地区、弓削川中流の弓削地区にもっともよく発達している。

上中遺跡は、この弓削川により形成された小盆地のやや上流域に位置し、弓削川右岸に張り出した丘陵裾の北桑田高等学校校舎の建つ低い台地を中心として広がりをもっている。高等学校周辺では、弥生時代前期及び後期の土器片や半磨製石槍などの出土が知られている。また、ここより弓削川をやや下った左岸の丘陵地からは、1861(文久元)年、下弓削出土と伝える<sup>(注1)</sup>銅鐸(扁平鈕式袈裟濶文銅鐸—弥生時代中期)もあり、銅鐸祭祀を行っていた有力な農業共同体が存在していたことがうかがわれる。

古墳時代になると、調査地北西の丘陵上にも鳥谷(6基)・ふくがなる(2基)の古墳群が存在する。町内では前期古墳は未確認であるが、後期古墳を中心に中期古墳を含む総数120基にも及ぶ古墳が確認されている。その数は、



第41図 調査地位置図(1/50,000)

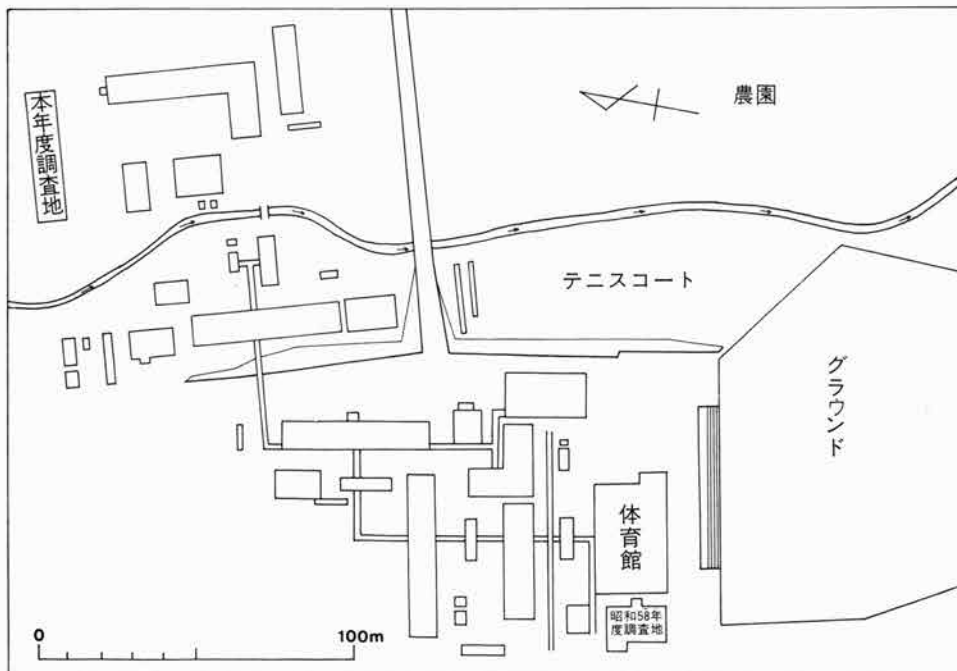
大堰川水系では亀岡市に次いで多く、園部・八木町をもしのぐ数を誇っている。その他、町内には、山間の可耕地面積の少ない小盆地を中心に多くの遺跡の分布が認められる。

上中遺跡は、昭和58年度に実施した格技場新築工事に伴う第1次調査<sup>(注3)</sup>では、古墳時代前期の川跡・土坂・柱穴状掘り込み2か所を確認した。出土した遺物も、古墳時代前期～鎌倉時代にわたるもので、調査地の立地する台地は長期にわたり利用されていたことがうかがわれる。

本年度は、第2次調査にあたるわけで、調査地は、第1次調査地より北方へ約200mの台地下の谷川沿いの平地にあたる。南東側約120mの学校進入路付近に遺物が多量に散布していることから遺構の存在が期待された。

調査は、昭和59年8月1日～10月11日まで行い、当調査研究センター主任調査員長谷川達・調査員増田孝彦が担当した。その間、調査補助員・整理員として有志学生の協力を受けた。調査にあたっては、京北町教育委員会・府立北桑田高等学校・地元各地区をはじめ多くの方<sup>(注5)</sup>々の協力を得た。

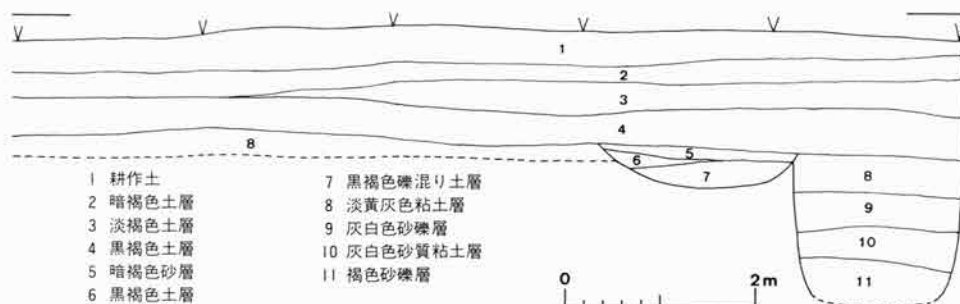
また、発掘調査と併行して上中遺跡の範囲、性格等を把握するため学校周辺の遺物散布調査も実施した。



第42図 調査対象地



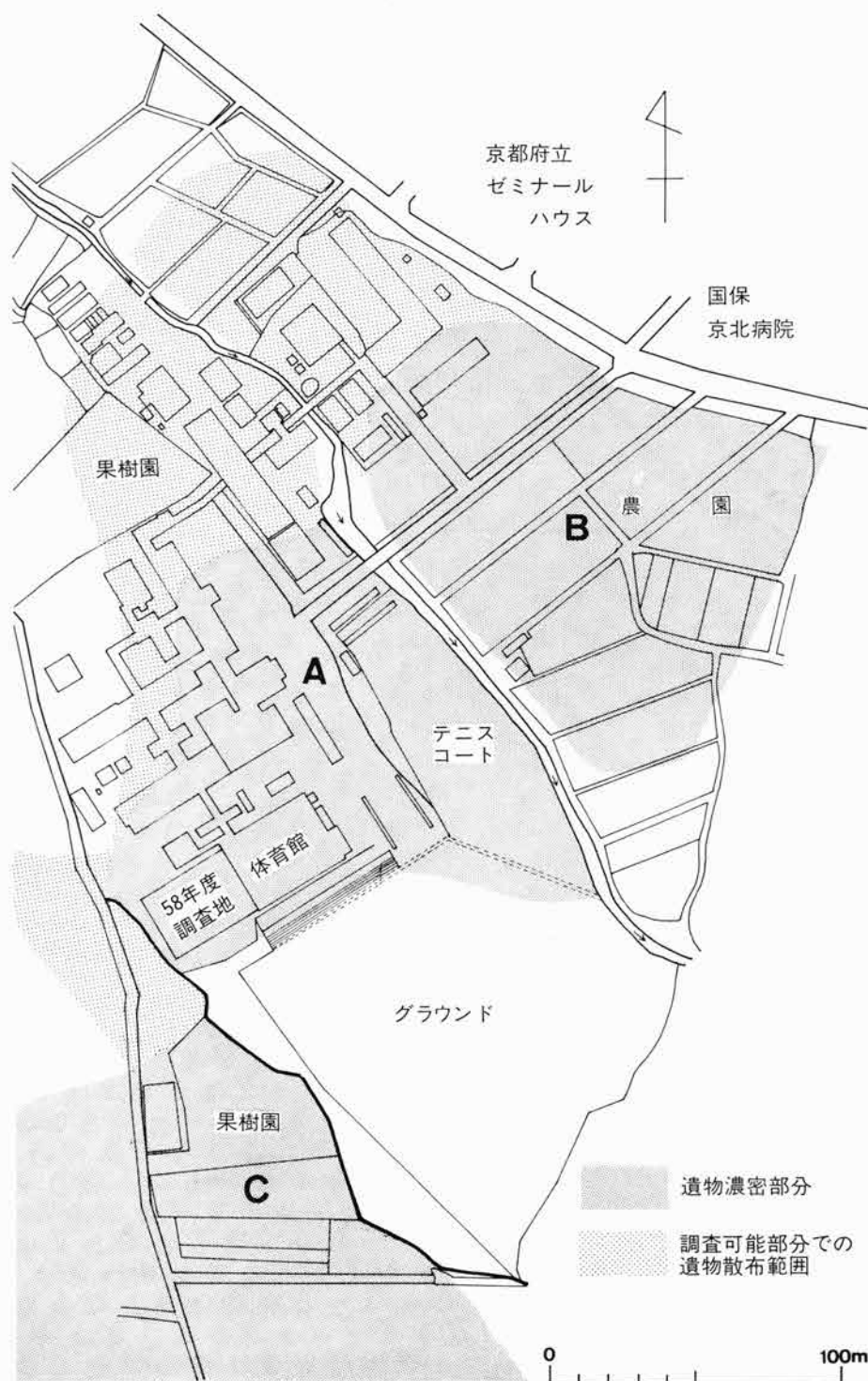
第43図 調査地平面図



第44図 トレンチ南壁西端土層断面図

## 2. 調査概要

調査は、林業科実習棟建設予定地に約46m×12mのトレンチを設定し(第43図)、重機により表土除去を行い、表土下40cmからは人力により掘り下げを行った。その結果、地山面まで精査を実施したが、顕著な遺構は検出されなかった。トレンチ中央より東側では、表土下に暗褐色土層が続き、その下が灰白色粘土層(地山面)となっていた。地山面上に遺物包含層である黒褐色土層の堆積が認められず、地山面自体も平坦化していた。この地山面において、樹枝状に延びる自然流路を検出したが、内部からは遺物は検出されなかった。灰白色粘土層は、トレンチ中央付近で急に下降するため、代って遺物包含層である黒褐色土の堆積が東側地山面検出面と同じレベルで西側に認められた。この黒褐色土は、全面に認められたのではなく、部分的なもので、淡褐色粘土・淡黄褐色粘土と混在していた。さらに、この西側部分を掘り下げると、黒褐色土は部分的に上下2層にわたる堆積が見られ、その下層は、砂礫層・粘質土・粘土層が交互に堆積していた(第44図)。これは、トレンチ西側が谷川のため、そ



第45図 遺物散布調査図



の氾濫源・湿地となっていたようである。この部分は、現在の谷川よりも北東側へ約50m張り出している。

このようなことから、トレンチ西側は、東側より土砂を削り埋め立てたものと考えられ、それに伴い東側地山面は平坦化し、西側は遺物包含層である黒褐色土が部分的に上下2層にわたって堆積したものといえる。また、この埋め立ては、水田・畑地利用に伴い行われたようで、水路か暗渠排水と思われる溝を東・西で各1条ずつ検出したが、いずれも現在の水路・畦区画とは方向が異なり、北側の谷筋に直交する区画を呈していた。この溝の時期については、内部より遺物が出土していないため不明である。

出土した遺物は、西側の黒褐色土中より、土師器細片・須恵器片・剥片・瓦器片・磁器片と極少量である。

### 3. 北桑田高等学校周辺の遺物散布調査(第45図)

上中遺跡の範囲及び性格を把握するため、学校周辺の遺物散布調査を発掘調査と並行して行った。

昨年度調査を実施した格技場を含む現在校舎の建つ台地部分は、西側背後の山を削り出し、東側に盛土が施されているため、ほとんど自然地形の露出している部分がなかった。また、この台地を挟んで東西に谷川が流れており、西側の墓地・果樹園、東側の国保京北病院側にも小台地が存在する。この3か所の台地は、その一部に校舎が建っていたり、水田・果樹園・山林となっていたり調査不可能な部分もあった。グラウンド周辺は、水稻栽培が行われており、調査期間内に散布調査を行うことができなかった部分もある。

調査の結果、上中遺跡は大きく分けて3か所の遺物散布濃密部分が認められた。すなわち、(A)現在校舎の建つ台地を中心とし、テニスコート・グラウンドを含む東側を流れる谷川までの部分、(B)校門から農園を中心に、国保京北病院の建つ小台地を含む西側の谷川付近までの部分、(C)昨年度調査地西側の谷川を越えた南側の墓地、果樹園を中心とする台地部分である。

(A)は、校舎・盛土の関係上、部分的な散布調査しか行うことができなかったが、テニスコート設置のため台地部分を削り取った斜面より多くの遺物を採集した。グラウンド部分については、削平・盛土が施されているためその範囲は明確でない。

(B)は、校門付近、農園内において各所に排水のための溝が掘られているため、その内より多量の遺物の出土が認められた。溝断面より観察すれば、校門より延びる学校進入路より南では、西側の谷川氾濫源は、東へ5~10m近く広がっているようである。また、遺物散布範

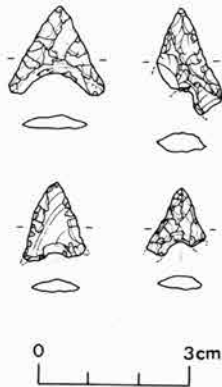
囲はさらに南・南東へと広がると思われるが、水稻栽培が行われているためその範囲を確認することはできなかった。

(C)は、さらに南東に広がりをもっており、台地が徐々に傾斜し、水田面になる所まで、遺物の散布が認められるが、水田部分については、その範囲を確認できなかった。

以上、(A)・(B)・(C)は、2本の谷川を挟んで3か所に分かれているわけであるが、3か所とも採集できた遺物は、古墳時代前期～鎌倉時代に比定される土器類であり、一部弥生式土器と考えられるものも極少量あるが、細片のため断定はできない。石器類では、磨製石器片や剥片も採集できた。また、昨年度調査と同様縄文時代に比定される打製石鏃4点も採集したが、縄文式土器の出土が見られないため可能性のみ指摘したい。

#### 4. 出土遺物

発掘調査で出土した遺物は極少量で、ほとんど細片である。また、散布調査では、打製石鏃4点を含むかなりの剥片・土器片が採集できたが、ほとんどが小片であり図化できたものは少ない。



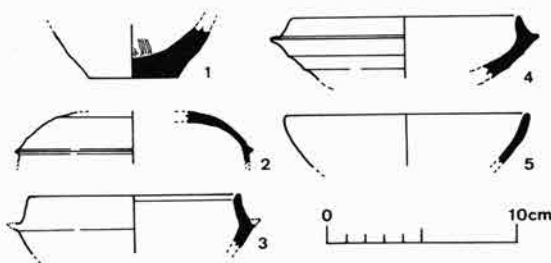
第 46 図  
出土遺物実測図(1)

##### 石器(第46図)

すべて凹基無茎式の打製石鏃で、全体に細かいいねいな剥離が施されている。(1)は、暗赤褐色のチャートで長さ1.6cm、(2)は、濃青色のチャートで長さ2.1cmを測る。(3・4)は、ともにサヌカイトで(3)が長さ1.7cm、(4)が長さ1.4cmを測る。縄文時代に比定されるものであるが、土器等の出土が見られないため指摘のみにとどめたい。

##### 土器類(第47図)

図化できたものは5点だけであるが、磨滅が著しく細部の調整等不明な点が多い。



第 47 図 出土遺物実測図(2)

(1)は、底部のみの破片であり、内面に刷毛目を施す。外面は磨滅が著しく調整等不明である。

(2～4)は、古墳時代後期の須恵器である。(2)は天井部・口縁端部を欠く杯蓋で、天井部と口縁部の間に張り出した稜線を持つ。天井部に

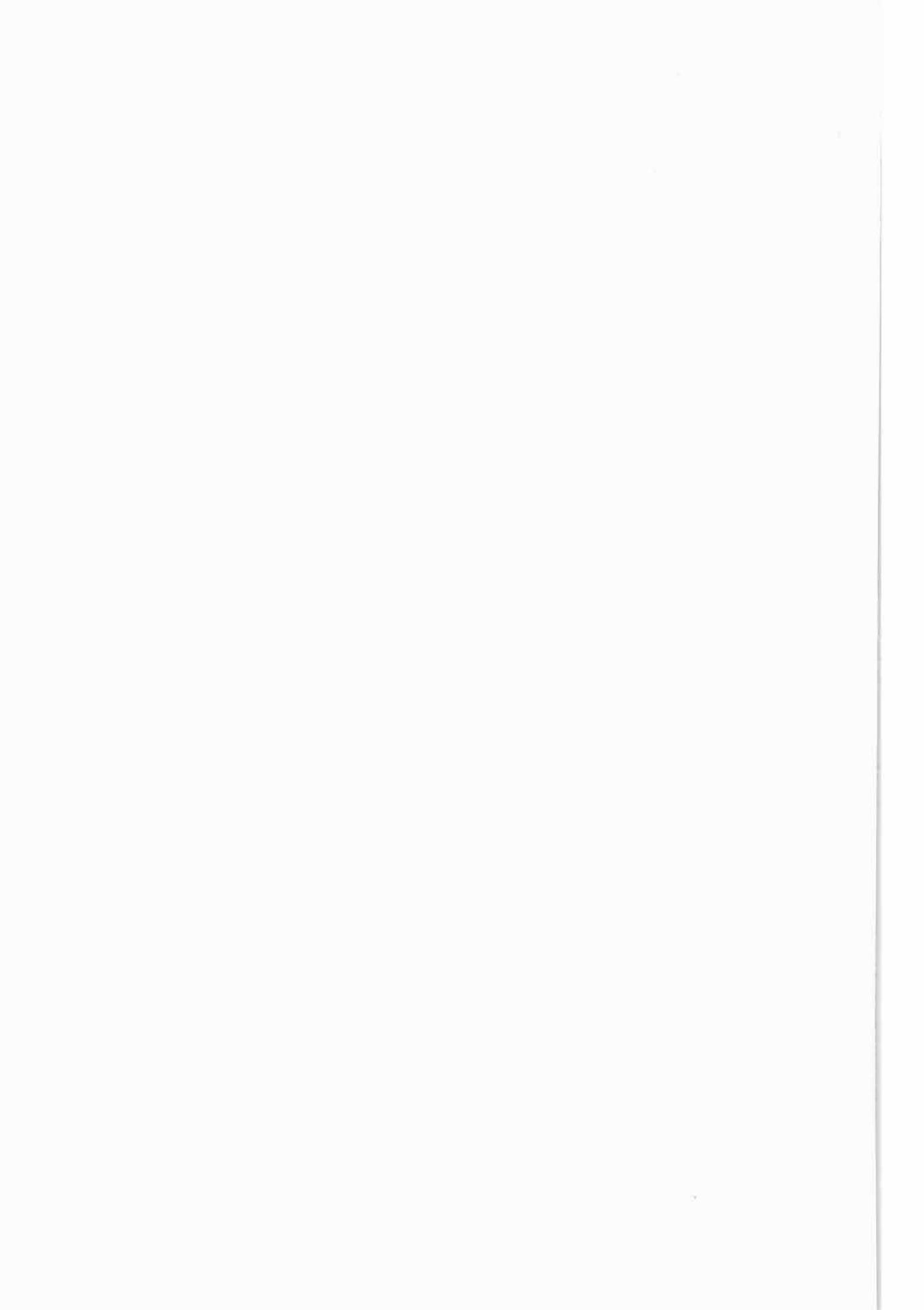
篋削りを施している。(3)は、やや内傾して高く立ち上がる口縁部をもち口縁端部に内傾面を有する杯身で口径11.2cmを測る。(4)は、立ち上がりが短く、やや内傾する杯身で口径12.1cmを測る。

(5)は、瓦器椀であるが磨滅が著しく調整等は不明である。口径13cmを測る。

## 5. おわりに

今回の調査では、遺構・遺物ともほとんど検出されなかったが、発掘調査と並行して行った周辺の遺物散布調査により、北桑田高校敷地内はすべて遺物が散布する広範囲にわたる遺跡であることも確認できた。未調査部分も入れれば、さらに東・南方へ広がるとも考えられる。採集した遺物も、縄文時代に比定されるものから、すでに確認されている弥生時代の土器も含め、鎌倉時代に至るまで長期間にわたって利用された地であることも明らかとなった。京北町の古代の様相を知る上で、上中遺跡は研究資料及び指針となる貴重な遺跡である。今後、調査を行う際は複合遺跡として慎重に調査を行う必要がある。分布調査、発掘調査の成果から今回の調査地付近が、上中遺跡の北端であろうと考えられる。(増田孝彦)

- 注1 平良泰久ほか「周山瓦窯跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1974)』京都府教育委員会) 1979
- 注2 辰馬考古資料館蔵、梅原末治「下弓削発見の銅鐸」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第7冊 京都府) 1926
- 注3 増田孝彦「上中遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第13号 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984
- 注4 補助員 小川健太郎・小川雄二・梅本秀利・山下京介、整理員 雲出美智子・藤野綾子・米田フキ子
- 注5 作業員 津原 勇・竹内外夫・西三次郎・四辻重勝・谷口岩吉・梅谷廣三・草木九郎・牧ヒサエ・草木小松・矢谷都之子・草木恵美子・鶴子三差子・海老瀬ふみ子・矢谷由紀子・井本廣子・和田ふみ枝



## 4. 篠窯跡群昭和59年度発掘調査概要

### はじめに

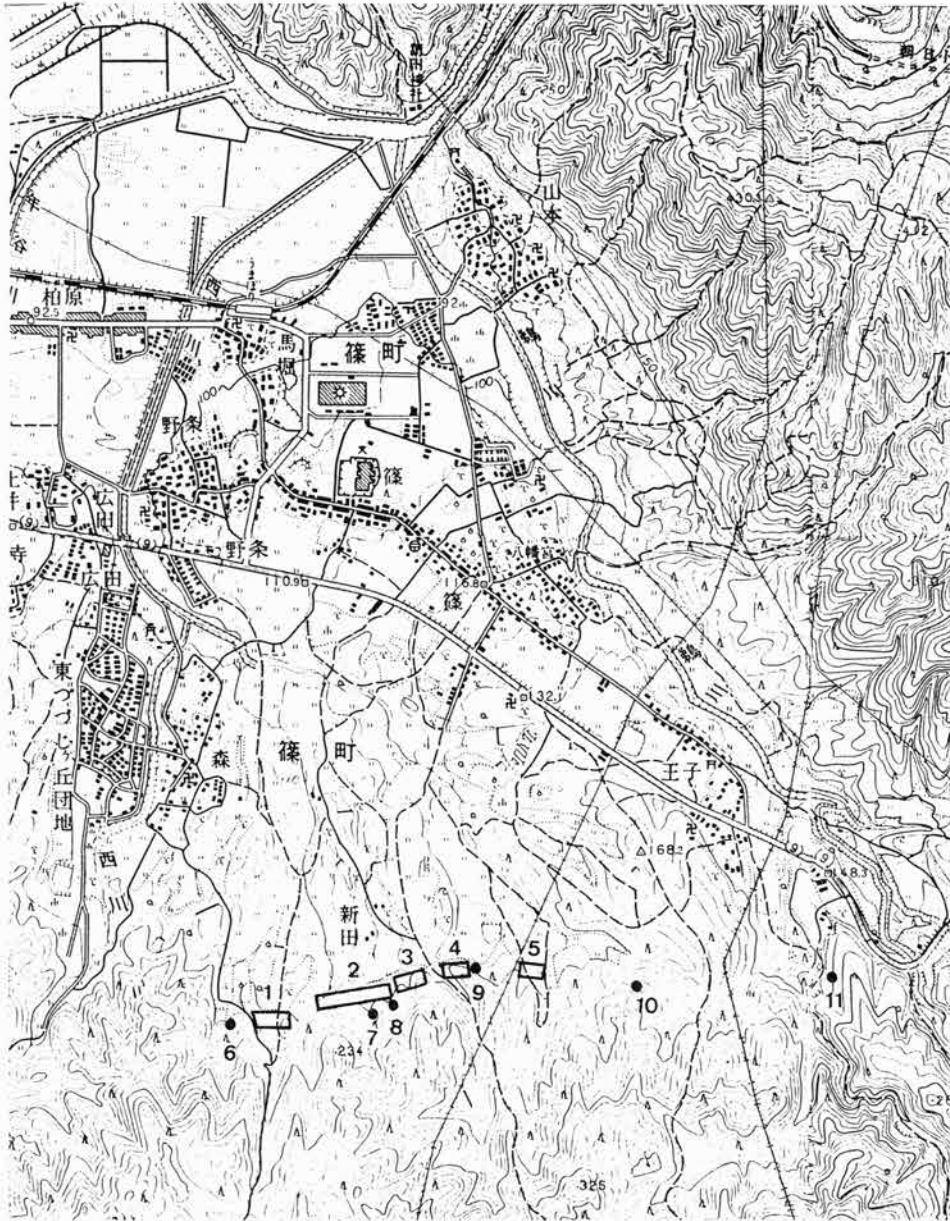
京都市右京区大枝沓掛町から船井郡丹波町須知に至るまで延長 32km にわたる国道 9 号バイパスの建設が計画されたのは、昭和49年 2 月のことであった。

京都府教育委員会は、近畿地方建設局京都国道工事事務所と協議を行い、予定路線に含まれる 8 遺跡（善願寺遺跡・瓜生野古墳群・小谷古墳群・拝田古墳群・小金岐古墳群・条里制跡・千代川遺跡・篠窯跡群）の試掘調査・発掘調査を、昭和50年度から継続的に実施することになった。昭和54年度からは、老ノ坂峠から亀岡市曾我部町風ノ口に至る延長約 10km の区間を日本道路公団が工事を施工することとなり、この区域内に存在する篠窯跡群の調査については日本道路公団との協議によって進められることになった。また昭和56年度からは、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが、上記遺跡の調査を引き継いで実施している。

亀岡市の東南部丘陵に広がる篠窯跡群の調査は昭和51年度から継続的に実施されており、予定路線内の調査は約 7 割近くまで終了した。その結果、窯跡20基・窯状遺構 4 基等を検出し、中でもロストル式楕円窯や緑釉焼成窯と考えられる小形三角窯を検出した。全国的にも類例のない貴重な窯跡であることから、その保存について京都府教育委員会と日本道路公団の間で協議が行われている。

さて、本年度発掘調査・試掘調査を実施した箇所は以下のとおりである。西長尾 A 地区作業場跡・黒岩地区作業場跡・芦原 3 号窯跡・同 4 号窯跡・前山地区田畑試掘調査・掛ヶ谷黒岩地区田畑試掘調査・掛ヶ谷地区植林地試掘調査。現地調査にあたっては、当調査研究センター調査課主任調査員水谷寿克・同調査員石井清司・竹井治雄・岡崎研一が中心となり作業の進行をはかったが、調査補助員・整理員として京都学園大学・京都産業大学・近畿大学をはじめとする有志学生諸氏、作業員として地元篠町の方がたや宮前町東本梅の方がたにも参加していただいた。<sup>(注1)</sup>

なお、本書の執筆にあたっては、上記調査員が分担してこれにあたった。文末にて名記し、その文責を明らかにした。(水谷寿克)



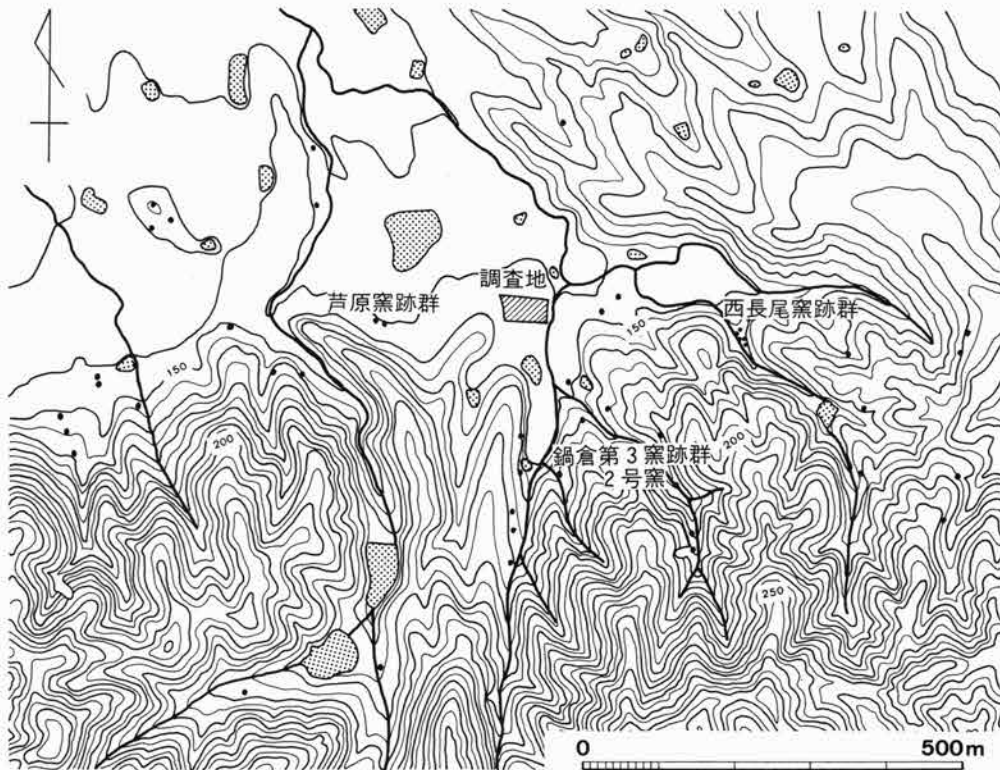
第48図 調査地位置図 (1/25,000)

1. 前山(森地区)田畑試掘
2. 黒岩地区田畑試掘・黒岩C地区作業場跡
3. 掛ヶ谷・黒岩地区田畑試掘・掛ヶ谷地区植林地試掘
4. 芦原3・4号窯発掘調査地
5. 西長尾A地区作業場跡
6. 前山窯跡群
7. 黒岩1号窯
8. 小柳窯跡群
9. 芦原窯跡群
10. 西長尾窯跡群
11. 石原畑窯跡群

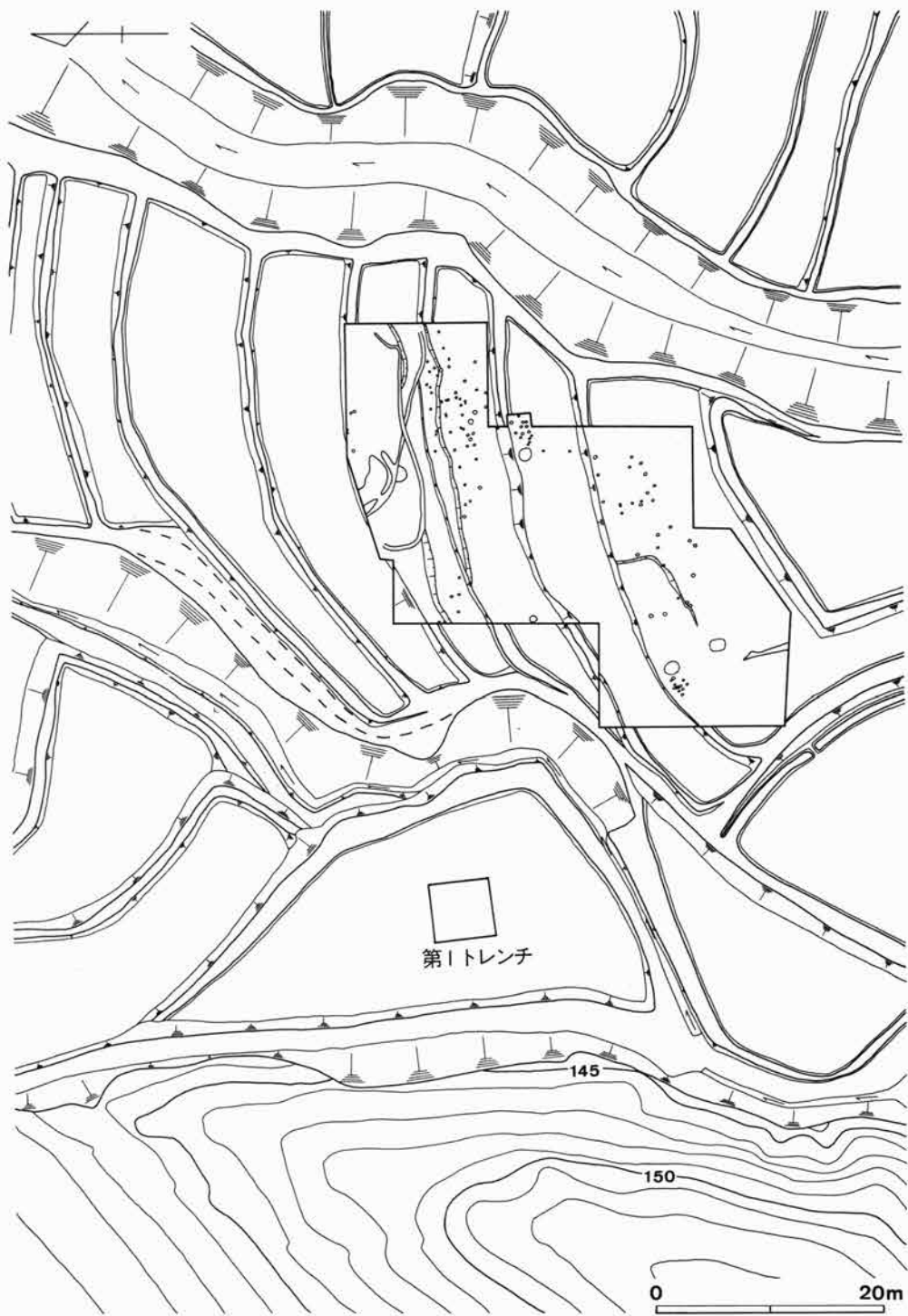
## (1) 西長尾A地区作業場跡発掘調査

## 1. 位 置

篠窯跡群は、鞍部山や小塩保・明神ヶ嶽から派生する丘陵部に位置する。この丘陵斜面には奈良時代から平安時代にかけての窯跡が存在する。その数は100基以上を数え、長岡京や平安京と密接な関係のある一大窯跡群として重要視されている。今回調査を行った西長尾A地区は、京都府亀岡市篠町大字篠小字鍋倉に位置し、谷地形の最も奥まった所にあたる。この付近からは、西長尾窯跡群に続く谷筋と調査地から南方にのびる二筋の谷筋から約20基を数える窯跡が確認されている。<sup>(注2)</sup> また西方へ丘陵沿いに行くと芦原1・3号窯がある。調査地の東北東約50mには、灰原のみ残存していた鍋倉第4窯跡群1号窯があり、<sup>(注3)</sup> 谷を狭んだ北側の平坦地には西長尾C地区作業場跡が存在する。この作業場跡からカマド状遺構やピット群が検出されているが、建物跡や柵列の規模解明には至っていない。<sup>(注4)</sup> 調査地周辺の地形は、東側に谷川が流れている。北側は3m程の後世の削平を受け、<sup>(注5)</sup> ここから灰原のみ検出している。西側は、試掘調査を行うことによって3m程の流土の堆積を確認し、もとは北方にのびる舌状



第 49 図 西長尾A地区作業場跡調査地位置図



第50図 西長尾A地区調査地地形図



の台地があり、東側と西側を谷川が流れていたものと思われる。

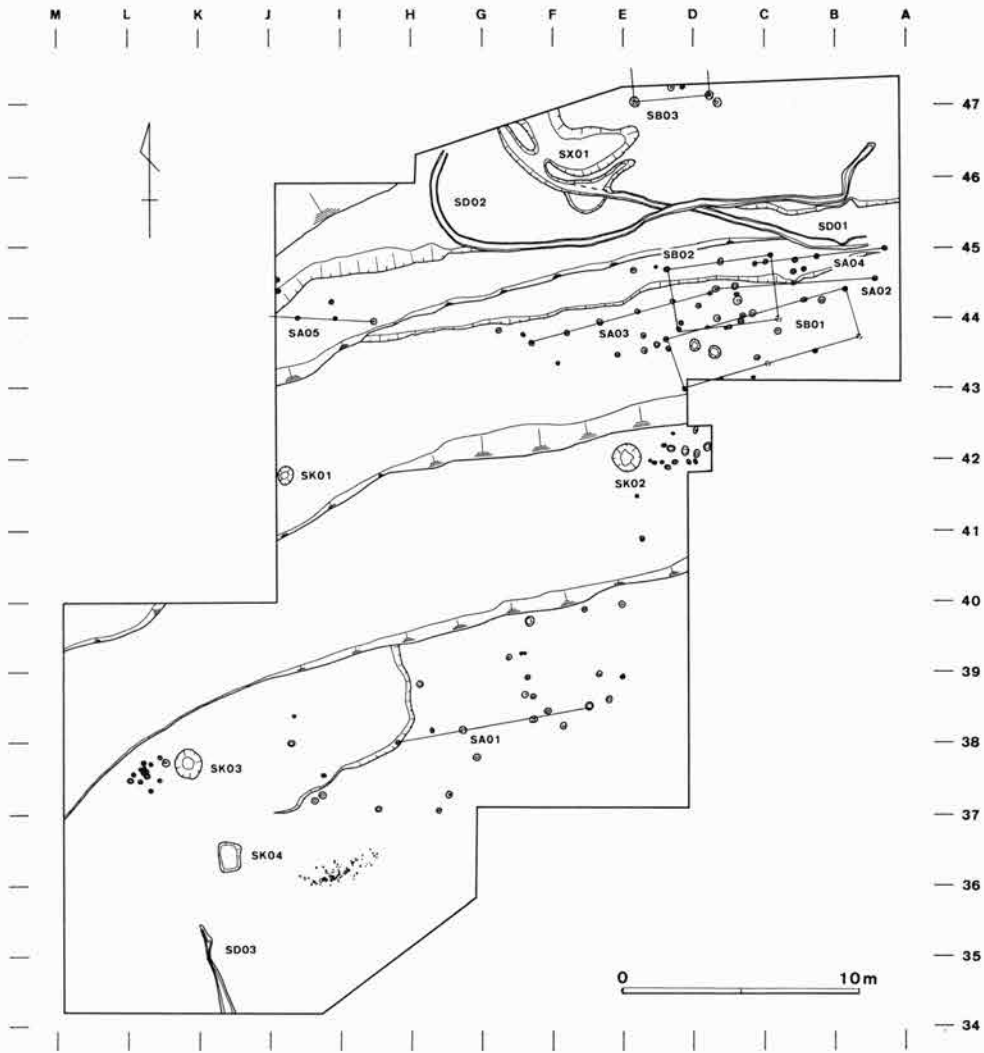
## 2. 調査概要

今回の調査は、その近辺に西長尾C地区作業場跡が存在すること、地形が西長尾C地区とよく似ていること、さらに昭和58年度の試掘調査によって柱穴や須恵器片を多量に含む土坑状遺構を発見したことから、この台地には窯業に関連する遺構があるものと思われ、約900m<sup>2</sup>を対象として昭和59年5月17日から9月7日まで実施した。

地区割り及び地区名は、従来から行われてきたものを使用した。層位は、調査地南側が後世の削平を受けており、耕土下すぐに礫混り黄褐色粘質土(地山)となり、40ラインから44ライン付近までは、耕土・黄灰色粘質土・黄褐色砂質土・淡黄褐色粘質土・礫混り黄褐色粘質土(地山)となる。44ライン以北の調査地北側ピット群付近では、耕土・黄褐色砂質土・淡茶褐色粘質土・黄褐色粘質土・礫混り黄褐色粘質土(地山)である。耕土層から遺構面までは多量の遺物を包含しており、8世紀末葉から11世紀前半までの須恵器片が出土した。中でも8世紀末葉から9世紀初頭の須恵器片が大半を占めた。

調査の結果、遺構面は、調査前の段々状の地形とは異なり比較的緩傾斜の地形であることを確認した。調査地北側ピット群付近では、出土遺物の時期差は見られないものの層位から二時期に細分でき、時期毎に地形が少し異なっていた。SB02が存在した頃(I期)は、SB02中央部付近からゆるやかな傾斜をなし、SB01が存在した頃(II期)には、SB02付近に黄褐色粘質土がうすく堆積し、SD02に沿ってわずかな段差があった。SD01・02が46ラインから北側にのびていることから、47ライン付近までトレンチを拡張した。またAE42地区の遺構面直上から石鏃が出土し、この付近の堆積状態が他の所と異なっていると思われたため、AD42地区付近を拡張し様子を見ることにした。掘削したところ、石鏃に伴う遺構は検出できず、柱穴の検出にとどまった。

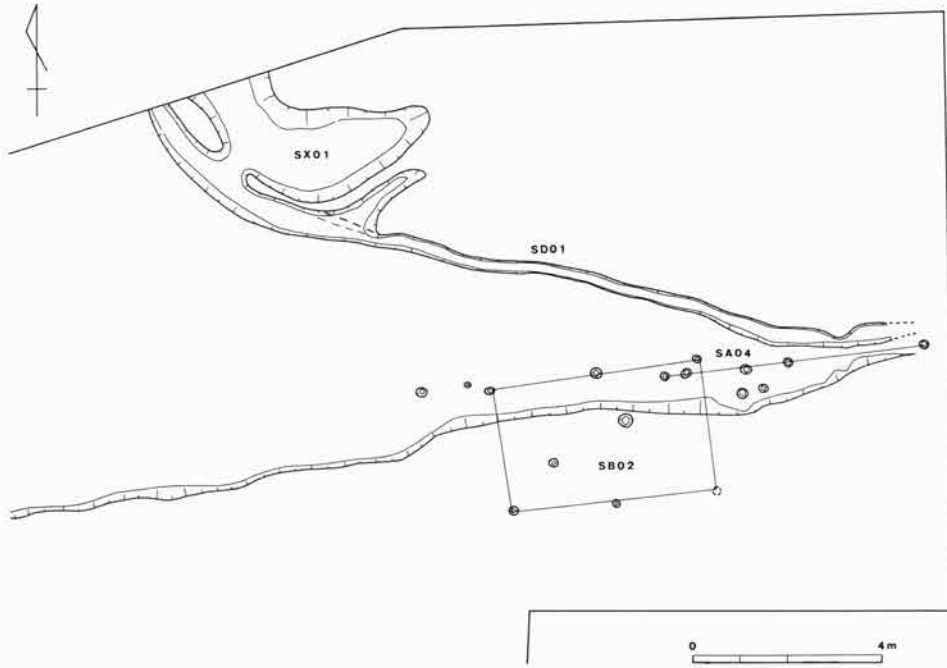
また、調査地西側の谷状に落ち込んだ田畑に5m四方のトレンチ(第1トレンチ・図版第31)を設定し、堆積状態及び旧地形の観察を行った。現地表より約3m掘削を行ったところ谷川に見られる拳大の摩滅した石が見つかり、以前は調査地東側と同じ谷地形であったことを確認した。第1トレンチでの層位は、耕土・黄褐色砂質土・灰白色砂質土と赤褐色砂質土の互層・青灰色砂質土・礫混り黒色砂土である。ここから出土した須恵器片(第62図)のすべては、最下層の礫混り黒色砂土からのものである。これは昭和26年におきた山津波によって現地表面まで埋ったものと考えられ、出土した須恵器片は、作業場跡からの流入によるものか、あるいは第1トレンチ南側の窯跡から流出したのものと思われる。また耕土層から有舌尖頭器(注6)と考えられる石器も出土している。



第 51 図 遺 構 配 置 図

### 3. 検 出 遺 構

今回の調査によって検出した遺構は、建物跡(SB01・SB02・SB03)、柵列(SA01・SA02・SA03・SA04・SA05)、溝(SD01・SD02・SD03・SD04・SD05)、土壇(SK01・SK02・SK03・SK04)、水を溜めていたと思われる土壇状遺構(SX01)である。建物跡や柵列に関しては、出土遺物に時期差がなく、柱列も不揃いであるため、柱穴の切り込む層位やその深さ、また周囲の地形を考え復元した。その結果大きく3時期に分かれ、古い順にⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期とした。Ⅰ・Ⅱ期は9世紀前期頃で、Ⅲ期は10世紀後期頃である。以下、各時期ごとに遺構の概要を記すことにする。



第 52 図 検 出 遺 構 (I 期)

〔I 期〕

SB02 2間(4.42m)×1間(2.61m)の掘立柱建物である。棟方位は、N-80°-Eである。柱の掘方は円形で直径20cm前後を測る(図版第23)。

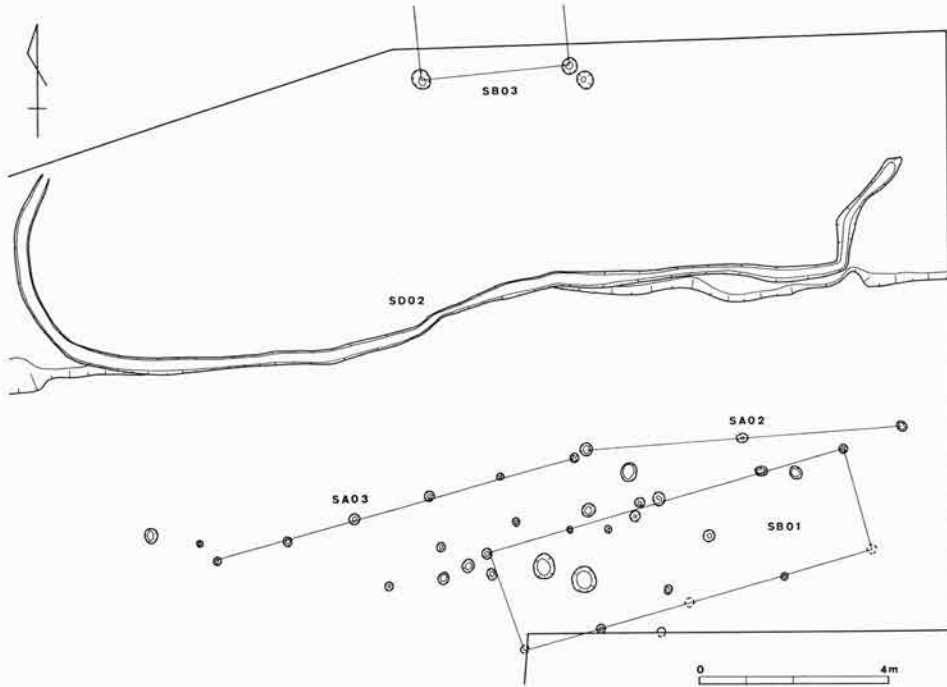
SA04 2間(5.49m)からなる柵である。方位はN-82°-Eで、SB02の棟方位とほぼ同じである。柱の掘方は円形で、直径20~25cmを測る。SA04はSB02と重複しているものの、柱穴の切り込む層位はSB02と同じであるため、ほぼ同時期と思われる(図版第23)。

SD01 調査地北側を北北西に向かって流れ、SX01につながる溝である。長さ約17m、幅30~40cm、深約20cmを測り、さらに調査地北側にのびている。黄褐色粘質土を掘り下げて検出したことから、SB02やSA04と同時期と考えられる(図版第25)。

SX01 不整形な形を呈しており深さは約20cmを測る。SD01とつながることから水溜めの可能性がある(図版第25)。

〔II 期〕

SB01 4間(7.79m)×1間(2.45m)の掘立柱建物である。棟方位は、N-71°-Eである。柱の掘方は円形で、直径20~30cmを測る。SA02・03の北側にわずかな段差があり、SB01はこの地形に沿って建てられている。またSA02・03もSB01とほぼ同方行であることから、これら



第53図 検出遺構 (Ⅱ期)

の柵列も同時期のものと思われる(図版第23)。

SB03 調査地北端で検出したため、その規模は不明である。SB03は、SB01・02と異なり南北方向の建物である。今回検出した柱穴から棟方位を算出すると、 $N-4^{\circ}-W$ となる。柱の掘方は円形で直径30~40cmを測る。柱穴内出土の遺物は、SB01・02と同時期と思われる。この建物跡の南側をSD02が「コ」字状に巡っており、溝のほぼ中央にSB03が位置することやSB03の東西方向の棟方位とSD02の方位がほぼ同じであることから、これらは同時期のものと思われる。

SA01 調査地南側に位置する3間(8.20m)からなる柵である。柵の方位は $N-79^{\circ}-E$ で、柱の掘方は、直径40cm前後を測る。この付近には9世紀中頃の須恵器片が多量に出土したSK04や、その東南東約4mの所に残りの良い須恵器がならんでいた(以下便宜上土器列と記す)。これらはいずれも同時期で、この土器列あたりの堆積状態からちょうど緩傾斜になる傾斜変換点と見られ、土器列はこの傾斜変換点に沿って堆積したものである。土器列や46ライン付近に残る段差の方向は、9世紀前期頃の地形と考えられ、この台地上の尾根筋は北北西の方向を向いており、建物跡や柵列はこの尾根筋に直行する形で設けられている(図版第24)。

SA02 SB01北側の2間(6.68m)からなる柵である。この柵列とSA03は、SB01北側の段差に沿って設けられており、SA02の方位はN-86°-Eである。柱の掘方は円形で直径約25cmを測る(図版第23)。

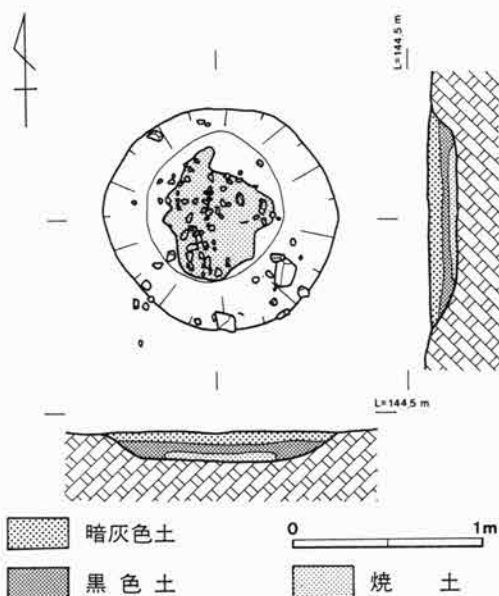
SA03 検出した柵列の中で最も残りの良いもので、長さ7.87mの柵である。方位はN-74°-Eを測り、SB01の棟方位とほぼ同じである。柱の掘方は円形で直径20~25cmを測る(図版第23)。

SA05 調査地北西隅より検出した、SA02とほぼ同方向の柵である。規模は2間以上のもので、その方位はN-87°-Wである。

SD02 調査地北側を「コ」字状に巡る。溝は、45~46ラインにかけてのわずかな段差に沿っており、溝の東端は46ライン付近で止まる。西端は後世の削平を受けており、SX01の西側まで検出したにとどまった。この溝はSB03を中央に巡っており、またSA02・03と平行に設けられていることなどから、SD02及びSB03は、SB01・SA02・SA03と同時期のものと考えられる。この溝の性格は、排水的役割をしていたものと思われる。規模は、長さ23m、幅30cm、深さ約20cmを測る。昨年度にSB03の北側を試掘調査したが、SD02の延長は見つからなかった(図版第25)。

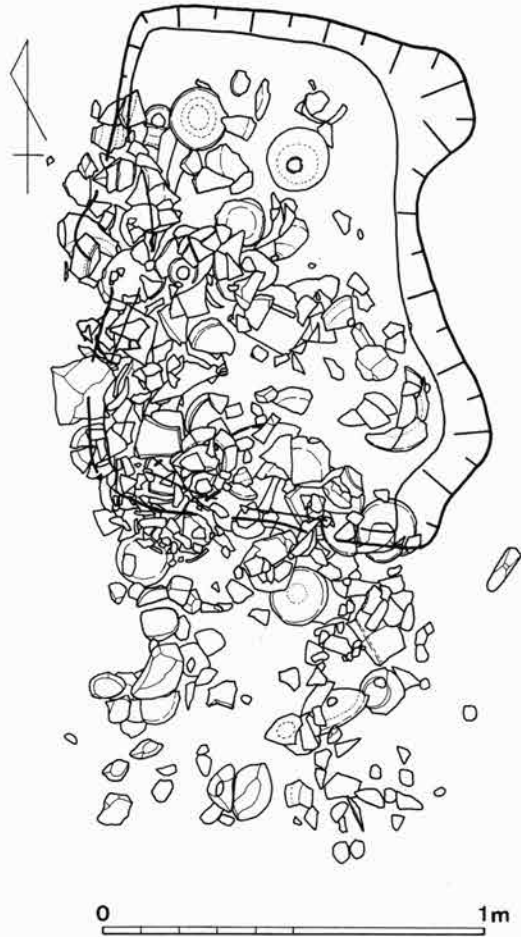
SK02 AF42地区にある土塚で、直径約1.2m、深さ約20cmを測る。SK01やSK03と異なる点は、土塚底部から焼土を検出したことである(第27図)。焼土は、土塚の底部にのみ厚さ約5cmの円形状に残っており、炭が混った黒色土が堆積していた。出土遺物はごくわずかであるが、平底の杯や高台を巡らす瓶子が出土していることにより、9世紀前期頃の遺構であると思われる、検出した層位よりⅡ期に相当するものである。性格については不明であるが、小柳1号窯調査時に検出している円形焼土と関連するものかもしれない(図版第27)。<sup>(注7)</sup>

SK03 SK04北側より検出した土塚である。規模は直径約1.2m、深さ約25cmを測り、この土塚の堆積土からはSK01やSK02のように炭は見つからなかった。出土遺物は、器形のわかるものとして短頸壺の蓋が出土している(第60図70・図版第28)。



第54図 SK02 実測図

SK04 AK36地区に位置し、昨年度の試掘調査時に検出した土坑である。東西約1m、南北約1.3m、深さ約30cmの長方形を呈する。今回の調査で出土した遺物の中で完形品に近いものは、この土坑から出土したものである(第60図～第62図)。これらは、9世紀前半の須恵器及び数点の土師器である。SK04東方約4mの土器列からもかなり残りの良い須恵器片が出土しており、時期もSK04出土遺物と同時期のものである。SD03北端からこの土器を結ぶラインより南側は、後世の削平を受けており、削平を受ける以前は、SK04から土器列にかけてかなりの土器が散在していたものと考えられる。またここから出土した須恵器片を復元するとほぼ完形品になるものが多いことから、廃棄品を投棄した場所と考えられる(図版第28・第29)。



第55図 SK04土器出土状況

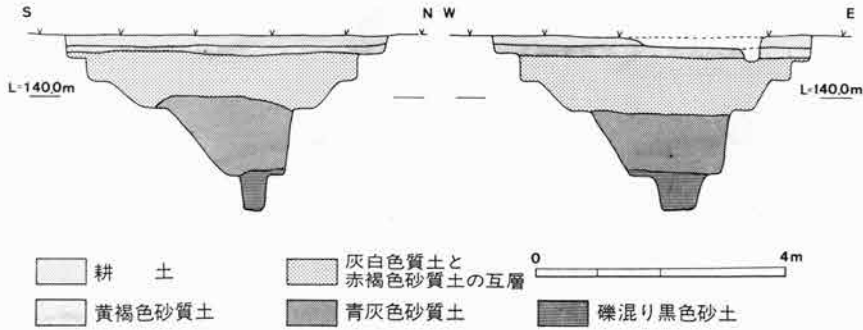
SK01 AJ41地区で検出した土坑である。直径約70cm、深さ約10cmを測り、土坑内には炭混りの黒色土が堆積していた。遺物は須恵器の細片が少量出土している。

時期は9世紀前半の遺構と考えられるが、地形が緩傾斜をなし、この地区まで黄褐色粘質土の堆積が見られないため、I・II期に区分することはできない。(図版第27)

〔Ⅲ期〕

SD03 調査地南側を北流する溝である。この付近は後世の削平を受けているため、遺構の残りは悪く、残存長3.8m、幅約20cm、深さ約20cmを測る。溝内からは、11世紀前半の西長尾5号窯出土遺物と類似した須恵器片が出土している(第59図67～69)。

SD04・SD05 SD03とSD04の間から検出した溝である。9世紀前半の遺構面よりも上層で検出しており、南西から北東方向に流れる溝である。長さ約6m。幅約40cm、深さ約20cm



第56図 第1トレンチ断面図

を測り、溝内からはSD03と同時期の須恵器片が出土している。SD03を含めたこれらの遺構の性格は不明であるが、今回検出した遺構の中では大きく時期の異なるものである。おそらくこの時期の遺構がこの他にも存在したものと考えられるが、後世の削平を受けていたためその全容を知ることはできなかった。

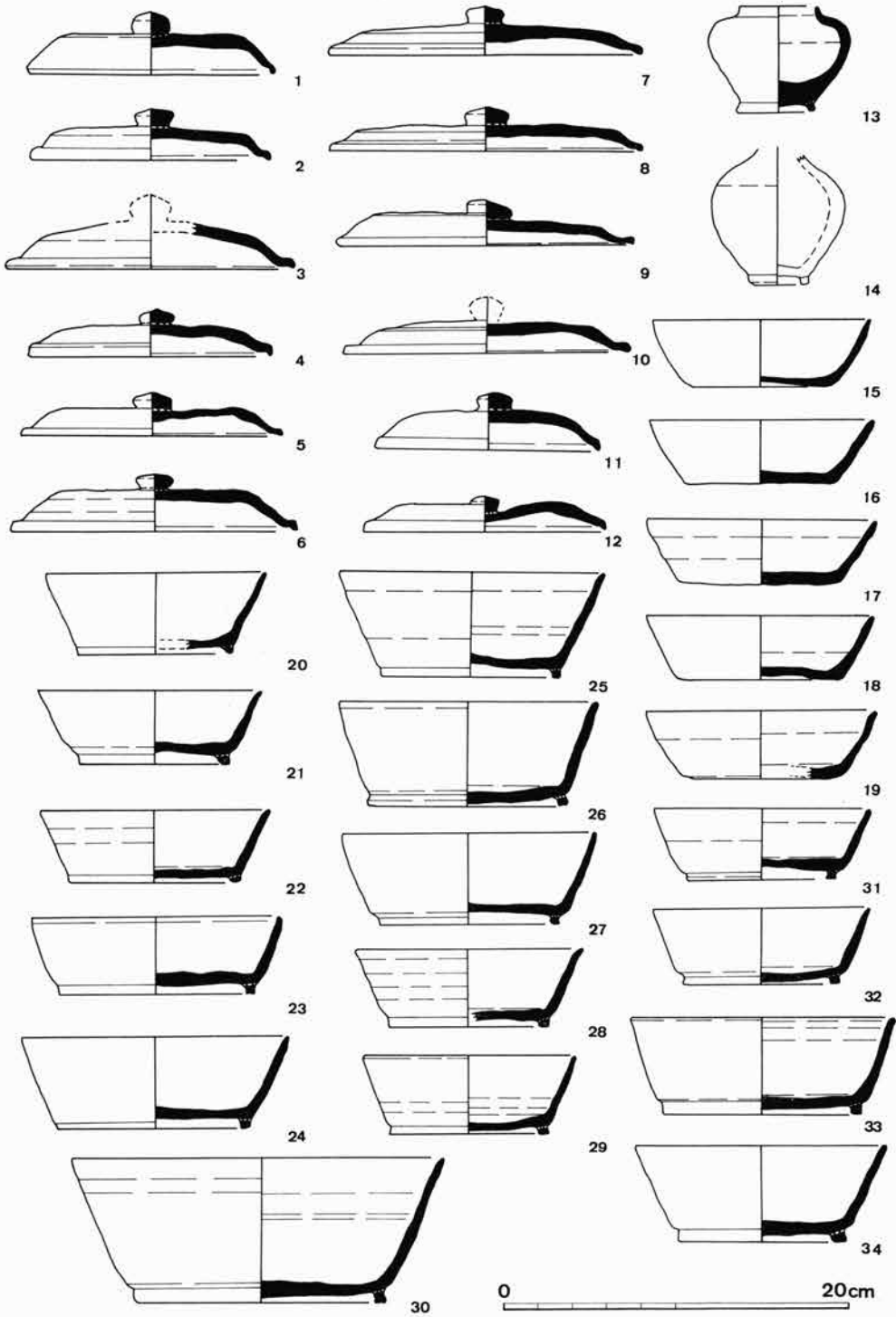
〔第1トレンチ〕

調査地西側の一段低い田畑の部分の旧地形を観察するために設定したトレンチである。その概要は調査概要の項で記した通り、かなりの堆積が見られ、地表下約3mで旧地形の谷底となった。出土遺物の大半はこの谷底より出土しており、貼り付け高台を巡らす杯や削り出し高台を有する椀など(第67図123～128)が出土している。

4. 出土遺物

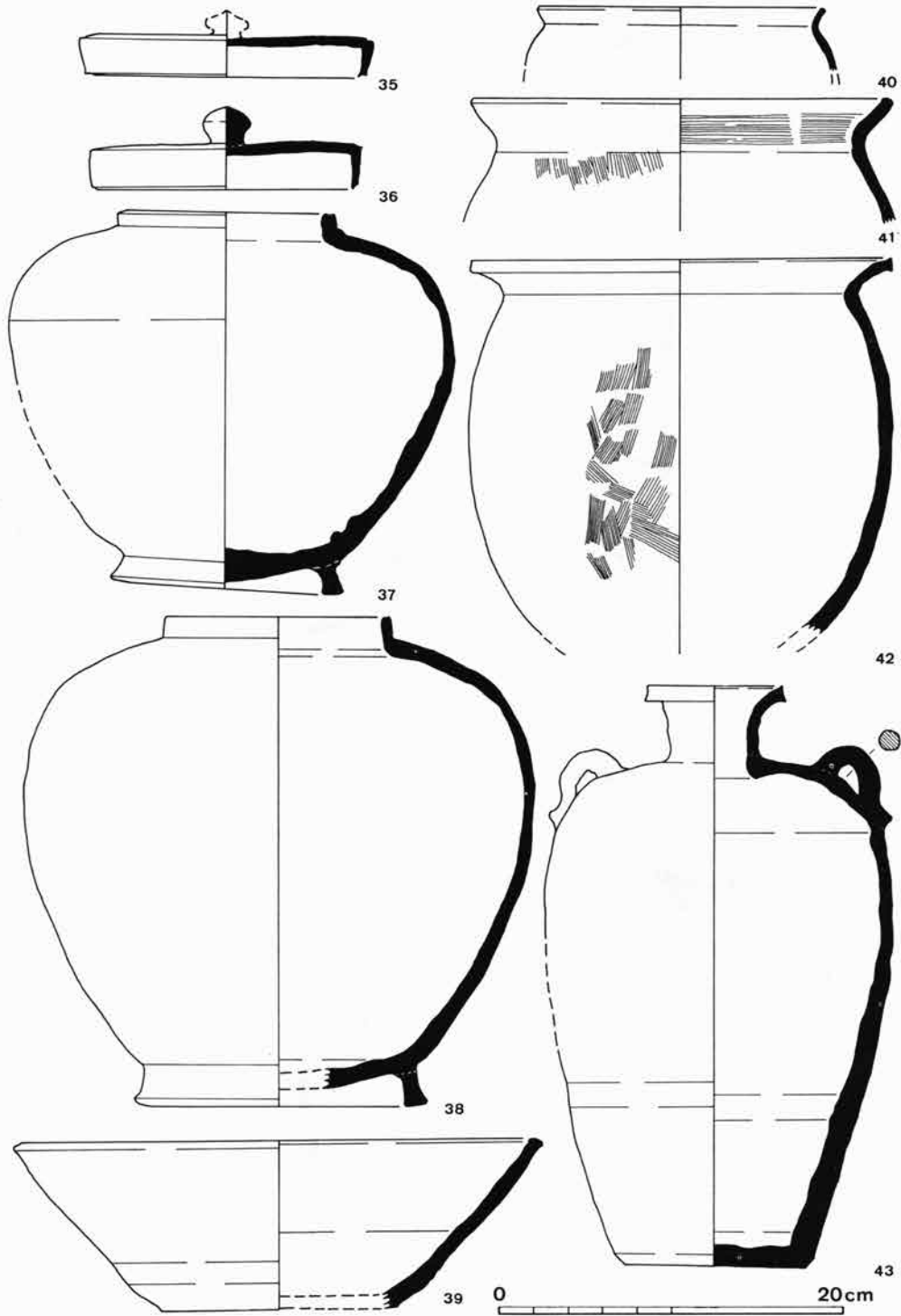
今回の調査で出土した遺物の大半は、9世紀前半から中頃のもので、その中でも完形品に近いものは、SK04より出土したものである。以下、各遺構ごとに出土遺物の特徴を記すことにする。

SK04(第57図1～34, 第58図35～43, 第59図44～49) 器種、形態別に分類できるものは90個体を数え、奈良時代的様相を残す平底の杯A, 高台を巡らした杯Bb, つまみのある蓋Aが大半を占める。蓋(2～10)はすべてつまみを有しており、天井部から口縁部にかけて「S」字状に屈曲する。中には、(1・11・12)のように天井部から外下方にのび、口縁部に至る蓋もある。(13)は、短頸のミニチュアで、底部がかなり厚く、小さな高台を巡らす。(14)は、高台のある瓶子Bである。体部が球形に近く、西長尾1号窯出土の瓶子と類似している。(15～19)は杯Aで、平底の底部外縁から外上方に立ち上り、口縁端部に至る。切り離しはヘラ切りである。(20～34)は、高台を巡らす杯Ba・Bb・Bcである。貼り付け高台の位置や形態

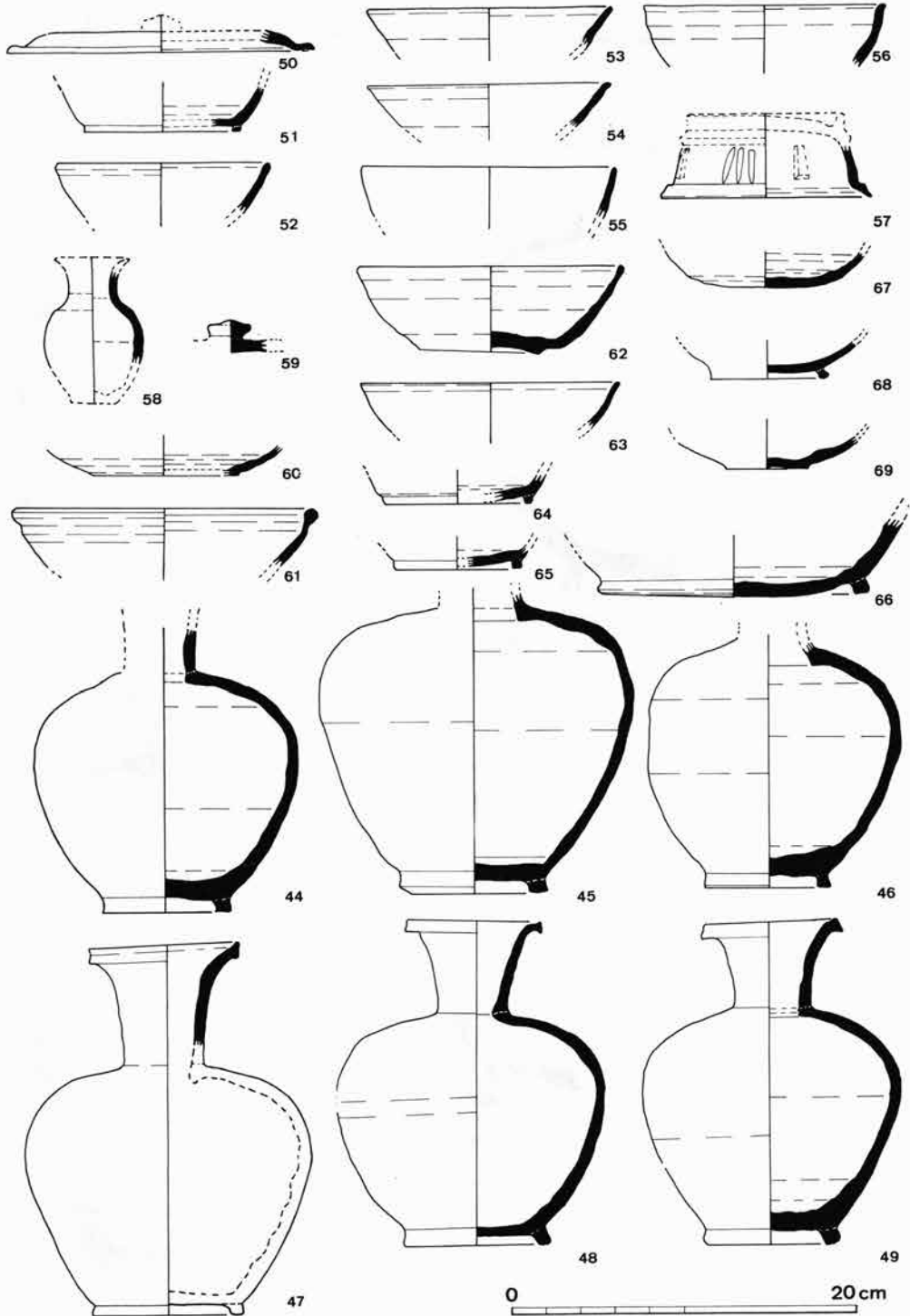


第57図 出土遺物実測図(1)





第58図 出土遺物実測図(2)



第59図 出土遺物実測図(3)

・手法上の特徴より、9世紀前半頃のものと思われる。(37・38)は、高台をもつ短頸壺である。高台は高く、外下方にふんばる。(35・36)は、短頸壺の蓋Aで、つまみを有し、口縁端部内側が下方に尖っている。(39)は、平底の底部から外上方に立ち上り、口縁部に至る鉢Aである。口縁端部は平坦である。(40~42)は、土師器の甕である。(43)は、平底で肩が張り、頸部の短い双耳壺である。(44~49)は、高台を巡らす壺Aで、肩が張り体部が球形に近い壺である。

SD01(第59図50~57) (50)は「S」字状に屈曲する蓋である。(51)は、底部に高台を貼り付ける杯Bbで、(52~55)は底部が欠損しているため、平底が高台を有するか不明である。

SD02(第59図62~66) (62)は底部糸切りによる平底の杯Aで、内湾しながら立ち上り口縁端部に至る。端部は丸くおさめている。(63~65)は杯で、(64・65)は、底部外縁に高台を巡らす杯Bbである。(66)は平瓶の底部である。

SD03(第59図67~69) (67)はヘラ切り未調整の椀G、(68)は貼り付け高台を巡らす椀C、(69)は糸切りで切り離れた椀Aである。

SD04・SD05(第59図58~61) (58)は、瓶子の頸部から体部にかけての破片で、高台の有無は不明である。(60)は、底部外面に糸切り痕を残す椀Aである。(61)は、口縁端部を丸くおさめた鉢Dである。SD03・SD04・SD05出土の遺物の時期は、時期差はあるが、検出した層位から考えるとこれらの溝は同時期のものと考えられ、11世紀前期頃と思われる。

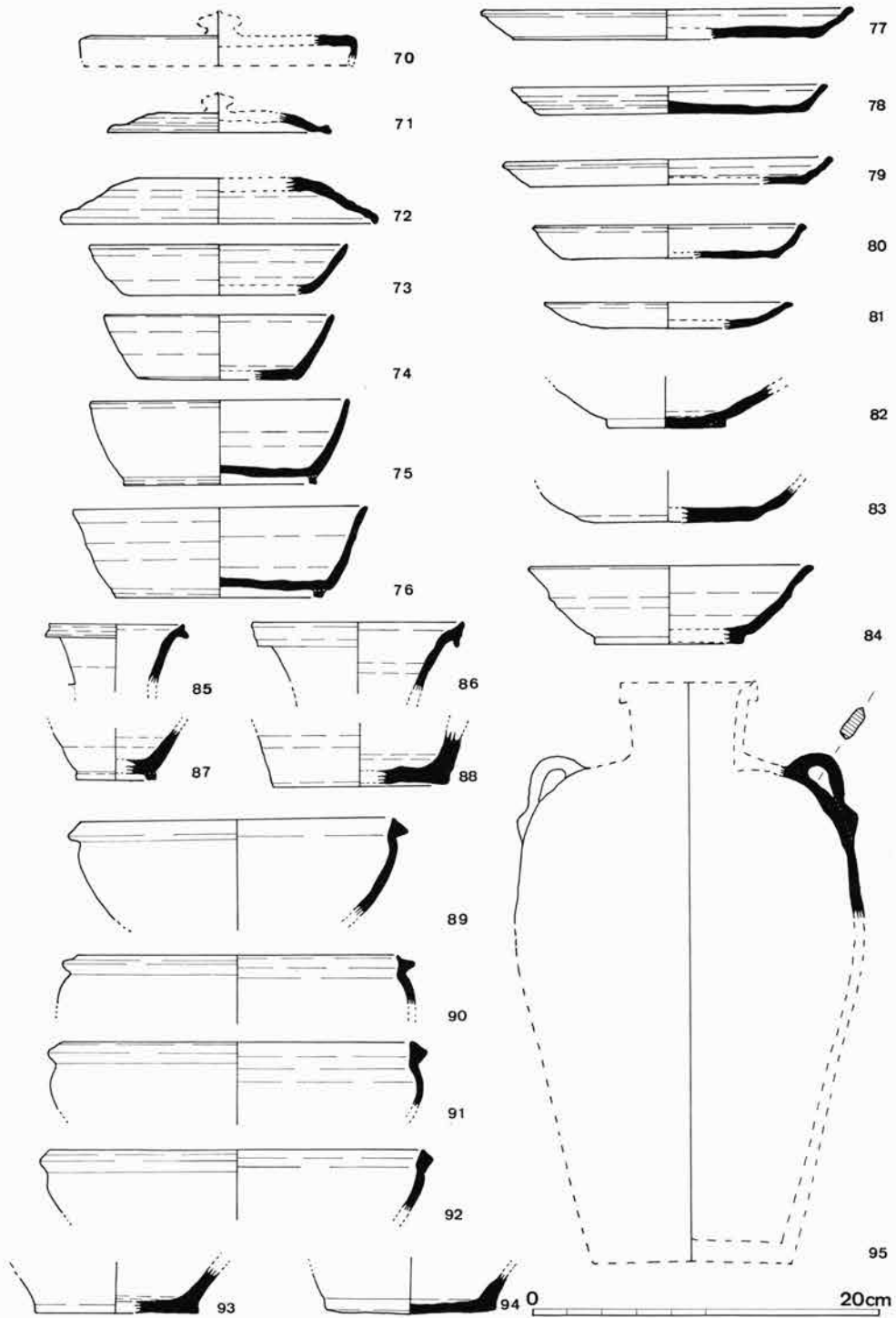
SK02(第60図73・87) (73)は杯Aで、平底の底部から外上方に立ち上り、口縁端部に至る。(87)は高台を有した瓶子Bである。

SK03(第60図70) 短頸壺の蓋Aで、形態からSK04出土のものと同時期である。

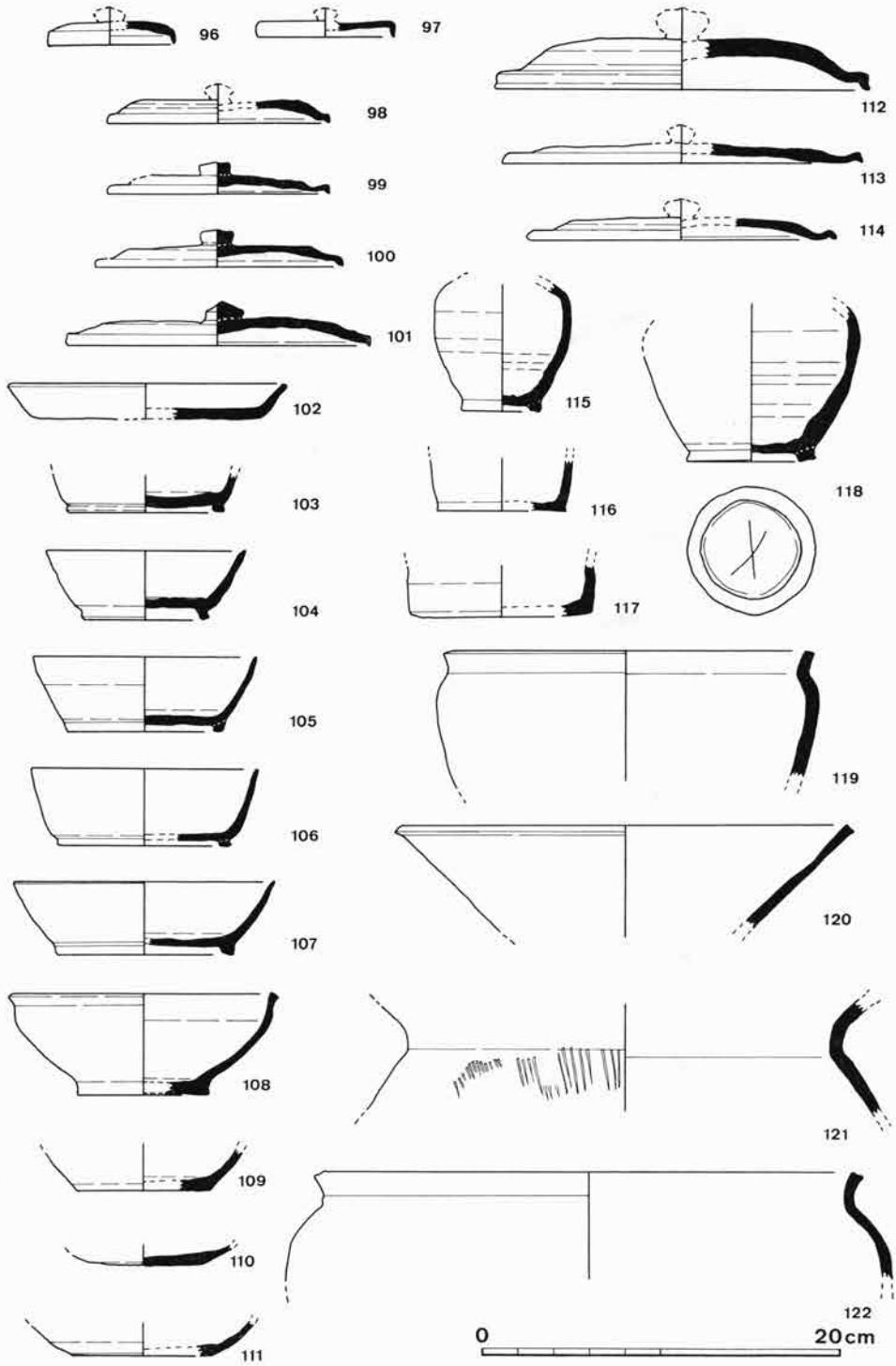
土器列(第60図74~80・85) SK04の東側より出土した遺物で、これらはSK04出土遺物と同時期であり、(77~80)のような口縁端部が平坦な平底の皿も出土している。

SX01(第60図71・72・81~84・86・88~95) (71)は、「S」字状に屈曲する蓋Aである。(72)は、平坦な天井部外縁から外下方にのび、口縁端部に至る蓋である。天井部中央付近が欠けているため、つまみの有無は不明である。(81)は皿Dであるが、高台部分が欠けているため、その形態は不明である。(82)は底部切り離しを糸切りで行った椀Aである。(83)は、ヘラ切りで切り離れた椀Gである。(84)は、糸切りで切り離し平底高台を有する椀Aである。体部は、外上方に立ち上る。(86)は、壺の口縁部で、「88」は、壺の底部である。(89~92)は、鉢の口縁部であるが、口縁端部の形はいずれも異なり、(93)や(94)の鉢の底部から内湾しながら立ち上る鉢である。

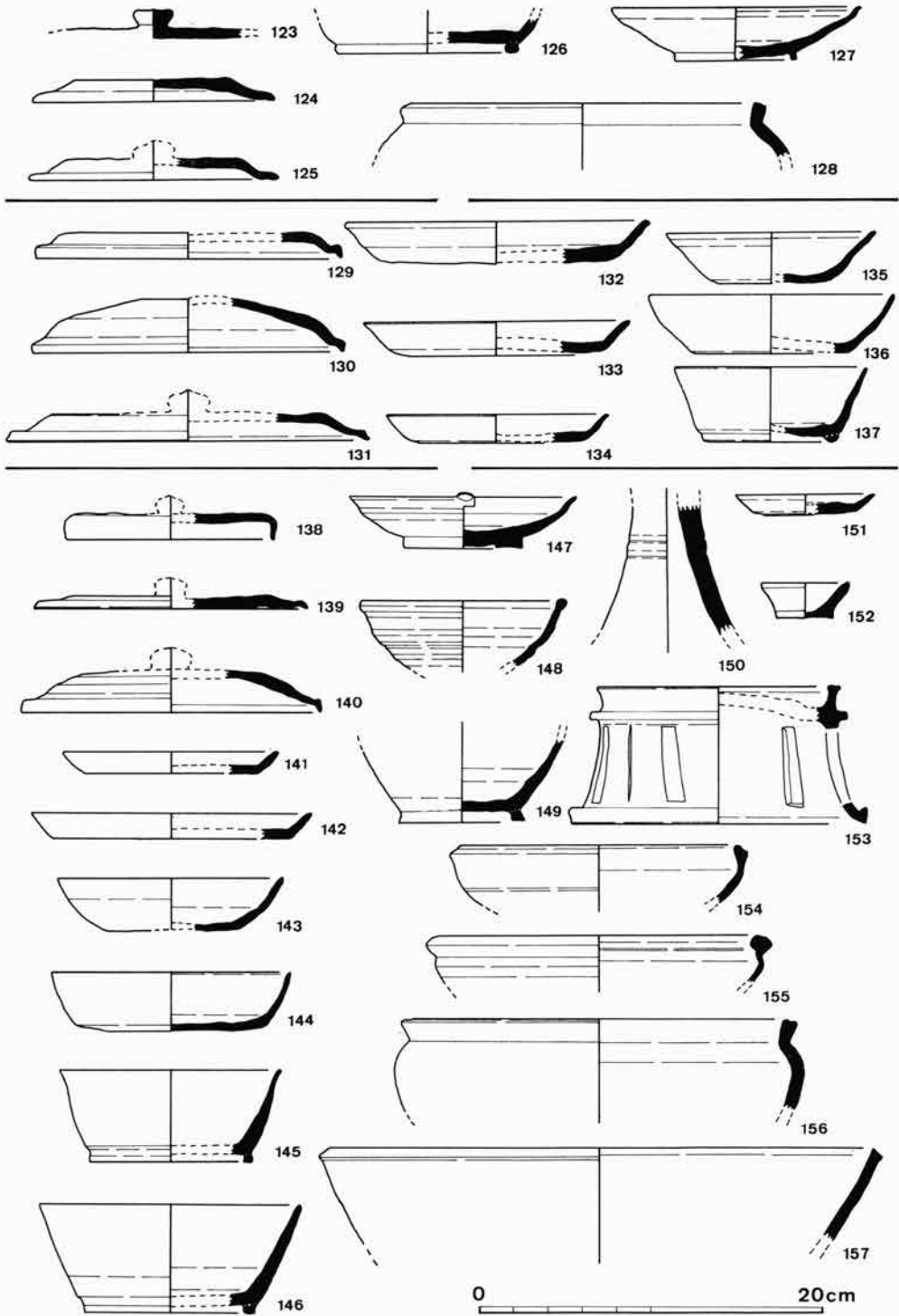
ピット内出土遺物(第61図) 各ピットより出土した遺物は、蓋・杯・皿・椀・壺・鉢と器



第60図 出土遺物実測図(4)



第61图 出土遺物実測图(5)



第62図 出土遺物実測図(6)

種はさまざまであるが、9世紀前期頃のものが多く、先述したⅠ・Ⅱ期に相当する遺物が大半を占める。この時期に該当するものとしては、(109)の杯Aや輪状高台を貼り付けた杯Bb(103~107)や口縁端部が平坦な皿Ab(102)、つまみを有した蓋A(98~101・112~114)、高台を巡らす瓶子B(115)、壺A(118)、平底の底部から外上方に立ち上る鉢A(120)、口縁部付近で「く」字状にすぼまる鉢B(119)がある。

第1トレンチ(第62図123~128)Ⅰ・Ⅱ期に該当するものとⅢ期に該当するものが出土している。つまみをもつ蓋A(123・125)や、高台を巡らした杯Bb(126)がⅠ・Ⅱ期に、削り出し高台を巡らす椀C(127)がⅢ期に相当する。

包含層出土遺物(第62図138~157)(138)は短頸壺の蓋である。平坦な天井部は縁部で屈曲して、下方に短かくのびる。(139~140)は、天井部外縁より「S」字状に屈曲する蓋である。(141・142)は平底の底部から外上方に立ち上り、口縁端部を丸くおさめた皿Acである。(143・144)は平底の杯Aaで、(145・146)は底部外縁に貼り付け高台を巡らす杯Bbである。(147)は底部外面中央部をわずかに削り出した椀Cである。(148)はロクロナデによって、体部内外面に凹凸が見られる椀である。(150)は高杯の脚部で、他には西長尾奥1号窯や石原畑3号窯から出土している。鉢F(154)は、内湾しながら体部が立ち上り、口縁部付近で上方に屈曲し、口縁端部は上方につまみ上げている。鉢D(155)は平底の底部から内湾しながら立ち上り、口縁端部は断面が丸くなるように仕上げている。この鉢は、小柳1号窯などでよく見られる。鉢B(156)は、口縁部で「く」の字状に屈曲し、口縁端部が平坦である。鉢A(157)は、体部が外上方に立ち上り、口縁端部を平坦に仕上げている。

鍋倉第2窯跡群第3号窯(第62図129~137)この遺物は、西長尾A地区作業場跡南側の丘陵を分布調査した際に採集したものである。平底の杯A(136)や高台をもつ杯Bb(137)また、口縁端部の平坦な皿Ab(132)や丸くおさめた皿Ac(133・134)などの出土により、芦原1・3号窯や西長尾1号窯とはほぼ同時期の窯跡があると思われる。

## 5. 器種・形態別個体数

調査地より出土した須恵器片は、コンテナバット100箱を数え、その時期は、8世紀末から11世紀前半までである。これは、篠窯跡群の操業開始時期から衰退期までの大半を占める。この中でも9世紀前半の須恵器片が多く、これらの遺物を形態別に分類することによって、西長尾A地区近辺の既に調査を行った窯跡や分布調査によって発見した窯跡との関連を見出すことができないかと考えた。篠窯跡群の編年案は、既に提示されているが、今回初めて<sup>(H15)</sup>出土した遺物もあり、編年案に即してはいるものの形態別の記号は独自に記した。また、分

付表 6 器種・形態別個体数一覧表

器種	形態	個体数	挿図番号	器種	形態	個体数	挿図番号	器種	形態	個体数	挿図番号	器種	形態	個体数	挿図番号
杯	A	158	15	Ⅲ	Aa	5	(注10)	椀	A	177	84	鉢	A	307	120
	Ba	7	(注8)		Ab	75	78		B	28	62		B	124	119
	Bb	1221	23		Ac	33	133		C	20	68		C	56	90
	Bc	16	20		D	28	81		G	49	69		D	108	155
蓋	A	39	1		F	7	151	壺	A	115	44		E	17	128
	B	3	(注9)		H	16	(注11)		B	119	93		F	57	89
	C	2	124	瓶子	A	82	(注12)		C	20	117		G	74	(注14)
			B		14	14	D		9	(注13)					

類の基準は耕土層出土の遺物以外を行い、器形の判別がつくものを分類した。ただし、甕の個体数のみ信憑性を欠くためこれを除いた。これらの土器を更に形態別に分類した(第5表)。

## 6. ま と め

今回検出した遺構は、9世紀前半及び11世紀前半の遺構である。11世紀前半の遺構については、調査地内南端より3条の溝を検出したにとどまり、その性格は不明である。9世紀前半の遺構では、建物跡・柵列跡・溝・土壇などを検出し、特に調査地南西部に検出した土壇SK04では、ほぼ完形品に近い須恵器を多量に含んでいた。このSK04は、大阪府深田遺跡のSK006と類似し、深田遺跡では建物跡・柵列跡の検出などから、このSK006を廃棄品置場と<sup>(注16)</sup>考え、これらの遺構から石津川による須恵器搬出の基地的な存在と位置付けている。

今回検出した遺構は、深田遺跡の遺構と性格が類似することや、また調査地付近の谷筋から約20基の窯跡を確認し、調査地を中心に径約250m以内に点在することから、篠窯跡群の須恵器搬出の基地的な存在の一つと考えられる。すなわち、平坦な高台を利用して作業場を設け、その付近に集中的に窯を築造するという、篠窯跡群における9世紀前半の窯業形態の一面を知ることが出来た。  
(岡崎研一)

## (2) 芦原3号窯発掘調査

### 1. 位 置

芦原3号窯は、昭和55年度の芦原1号窯発掘調査時に、篠町大字篠小字芦原において1号窯灰原と共にその所在が確認された<sup>(注17)</sup>。今回の調査は、3号窯と1号窯灰原を対象とし、両遺



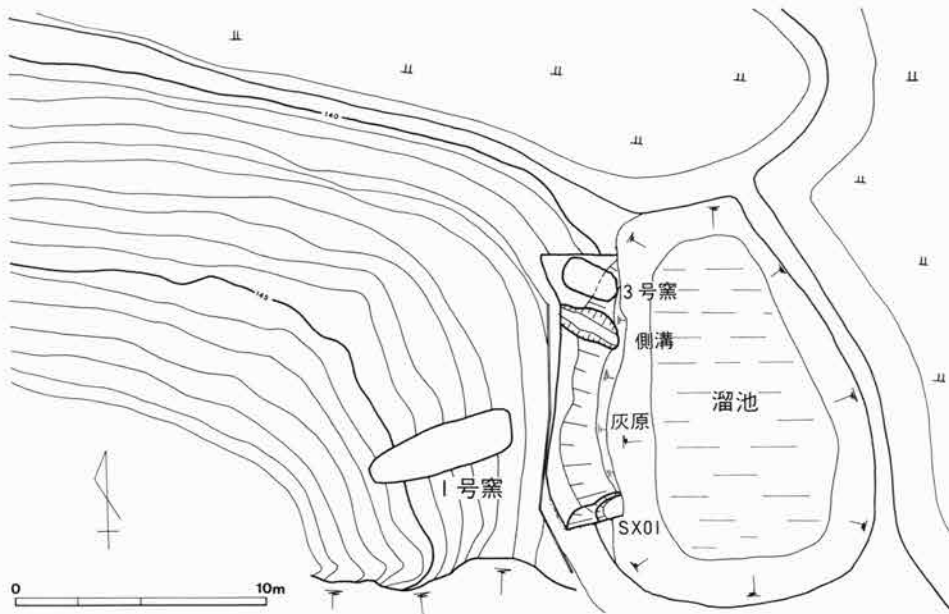
構の前後関係を明らかにすること、3号窯の構造、規模等の詳細な資料を得ることを目的として、昭和59年11月5日から昭和60年1月19日まで実施した。なお、調査の過程で1号窯灰原の下部より3号窯の側溝と考えられる溝(SD01)を検出した。

## 2. 調査経過

芦原1号窯・3号窯は、掛ヶ谷の東側の北西に伸びる丘陵東側斜面に位置しており、標高138m～146mの急斜面に構築されている。

調査は、始めに地区割り、表土の掘削作業を行い、溜池の土手を精査し断面観察を実施した。この結果、3号窯は1号窯に先行して構築されたことが判明したことから、1号窯灰原、3号窯の順に掘削、精査を行った。1号窯灰原を掘り下げ、下層に至った時点でSD01・SX01の遺構が明らかとなった。3号窯の範囲の確認については、溜池の水を汲み出し、底をさらえ、窯体・灰原の有無を調べたが、全く検出されなかった。3号窯の灰原は、昭和55年度の調査時に、溜池の構築によって池の南側に棄てられていることが確認された。

調査地区の割り付けは、従来の基準線にもとづいて、杭BC49、BB46を用い、真北方向の3m方眼の地区割りを行った。3号窯の割り付けは、窯体の主軸に合わせ0.5m方眼で行った。

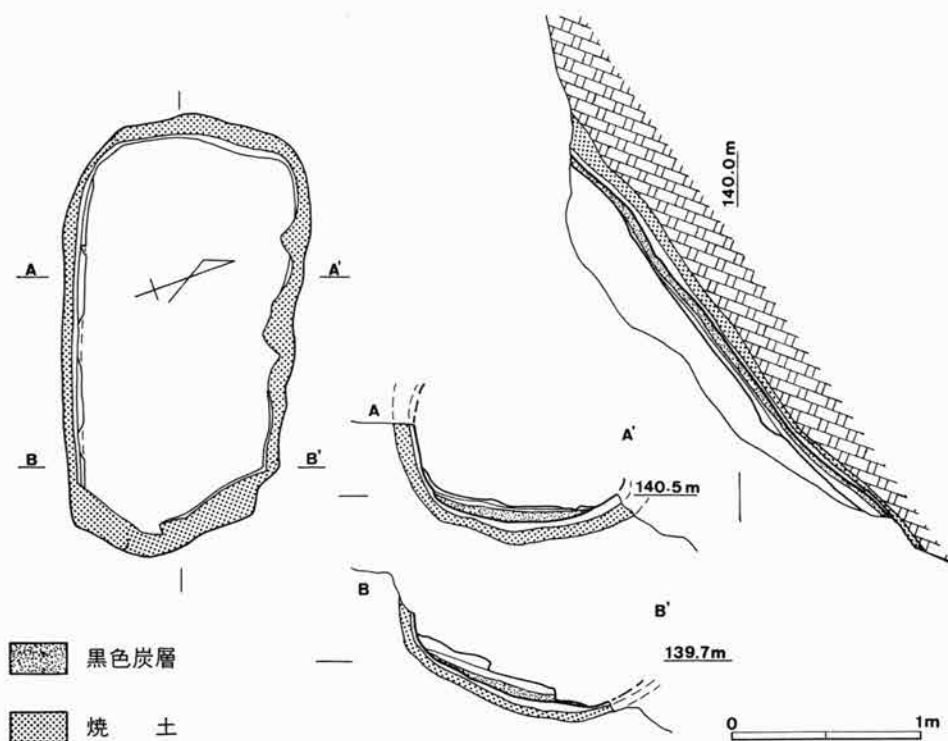


第63図 芦原3号窯地形図

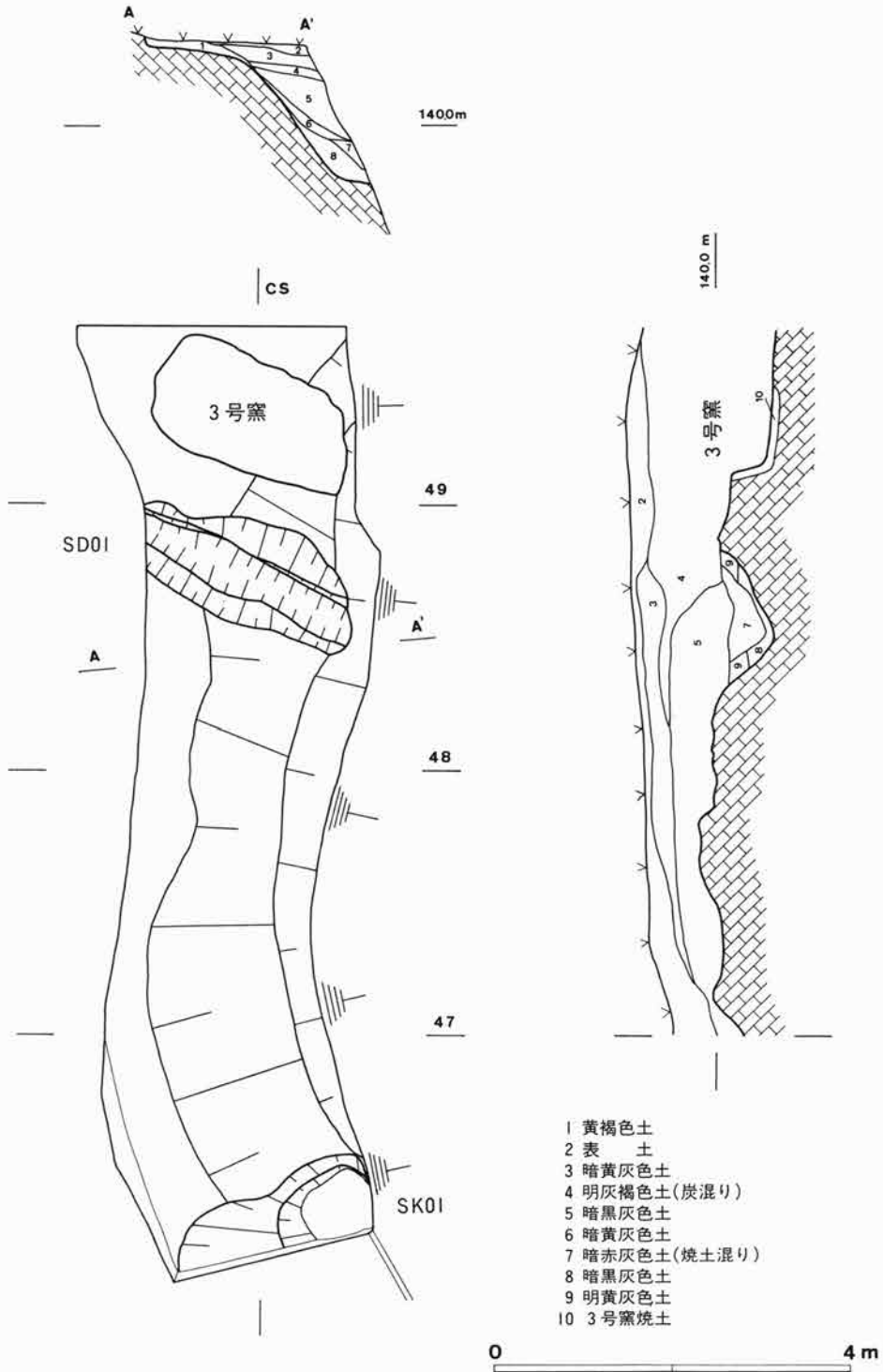
### 3. 検出遺構

3号窯 1号窯の北東5mに位置する半地下式登窯である。窯体は、残存長2.3m、幅1.1m、側壁高0.3mを測る。天井部が崩落し、床面及び側壁も一部を残すのみである。この部分は、窯体の床面傾斜角が38°前後から41°~48°に変化する地点であり、38°前後が焼成部、更にその上の急傾斜部分が煙道部付近に相当するものと推定される。スサ入り粘土で造られた天井部の崩落は、床の全面を覆っている。環元焰焼成により固く焼かれた床面は、補修作業の痕跡が認められず、窯の操業は短期間であったと考えられる。窯体の主軸方向はN-71°-Wであり、1号窯(N-110°-W)とは大きく振れている。床面傾斜角は、38°であり1号窯と同値である。窯体内には腐植質を含む灰褐色泥土が堆積しており、1号窯灰原の流出土とみられ、杯身・杯蓋・皿等が出土した。崩落した天井部と床面の間には、厚さ3~5mの黒色炭層があった。床面からは杯身が1点出土したのみである(図版第63)。

SD01 3号窯の南側で窯体を囲むように、また1号窯灰原下層より検出されたことから3号窯の側溝と考えられる。溝は、残存長2.2m、最大幅1m、深さ0.4mを測る。溝の主軸は、窯体と平行しており、その心々間は1.8mである。断面U字形を呈する溝は、埋土層が3層



第64図 芦原3号窯実測図



第 65 图 芦原 3 号窯・1 号窯灰原遺構配置図

に分かれて堆積している。(a)は明灰黄色粘質土で、ブロック状に堆積している。(b)は黒色灰層で、拳手大の焼土が含まれる。(c)は黒色灰層で、とりわけ遺物が多く、杯身・杯蓋・皿・鉢等の完形品も数点あった。溝に付随する施設はなく、素掘りの溝である(図版第16)。

1号窯灰原 灰原は、CS47～47区の範囲にあり、1号窯の焚口から扇状に広がっている。灰原の断面は、明確な分層が困難ではあるが、大きく上層、中層、下層の3層に分けられ、基底面は溜池に向かって急激に傾斜している。上層は、淡い黒灰色を呈する灰層で、腐植質を含む。中層は、灰黒色の炭層で泥土が含まれており、固くしまっている(A層)と最も黒色を呈する炭層(B層)とに分かれる。いずれも数多くの遺物が含まれている。下層は、焼土を含む黒色灰層である(図版第62・第17)

SX01 調査地の西端(CS47)に位置し、調査区外へ伸びているため、遺構の形態、規模、性格等が判然としない。堆積土は、青灰色粘質土であり、薄い灰の間層が認められる。出土遺物は、杯身・杯蓋・皿・鉢・瓶・壺・平瓶等があり、コンテナ・バットで8箱分あり、1号窯灰原と同数である。

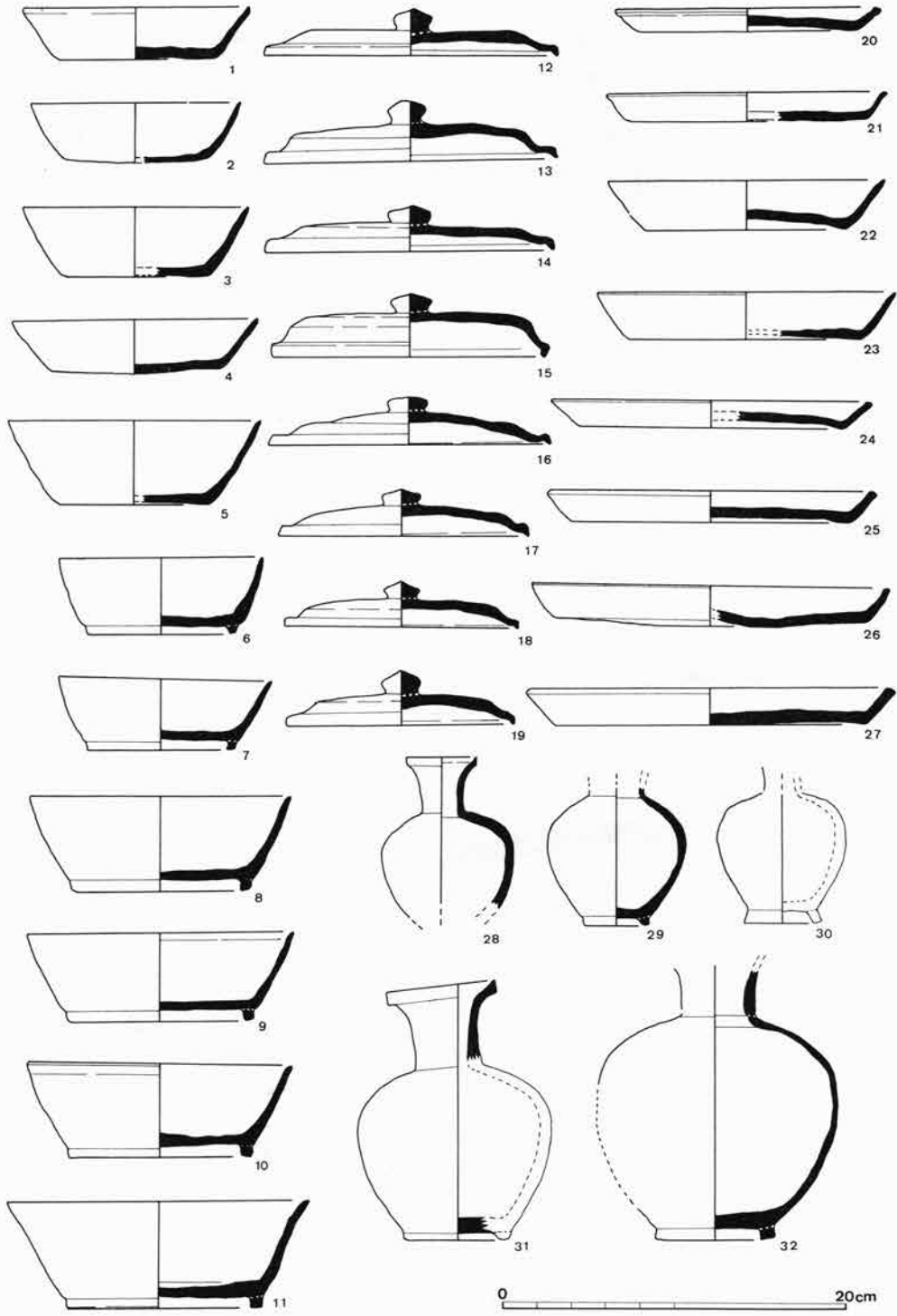
#### 4. 出土遺物

1号窯灰原、SX01(青灰色粘質土)からの出土遺物が大半を占め、3号窯窯体の埋土やSD01には1号窯灰原からの流出土器があり、3号窯で焼かれたものとしては杯B(第66図)が唯一である。現在、遺物の整理を進めており、まだ未整理の段階ではあるが、各器種ごとのタイプ別分類を行い、手法、形態等を中心に述べたい。

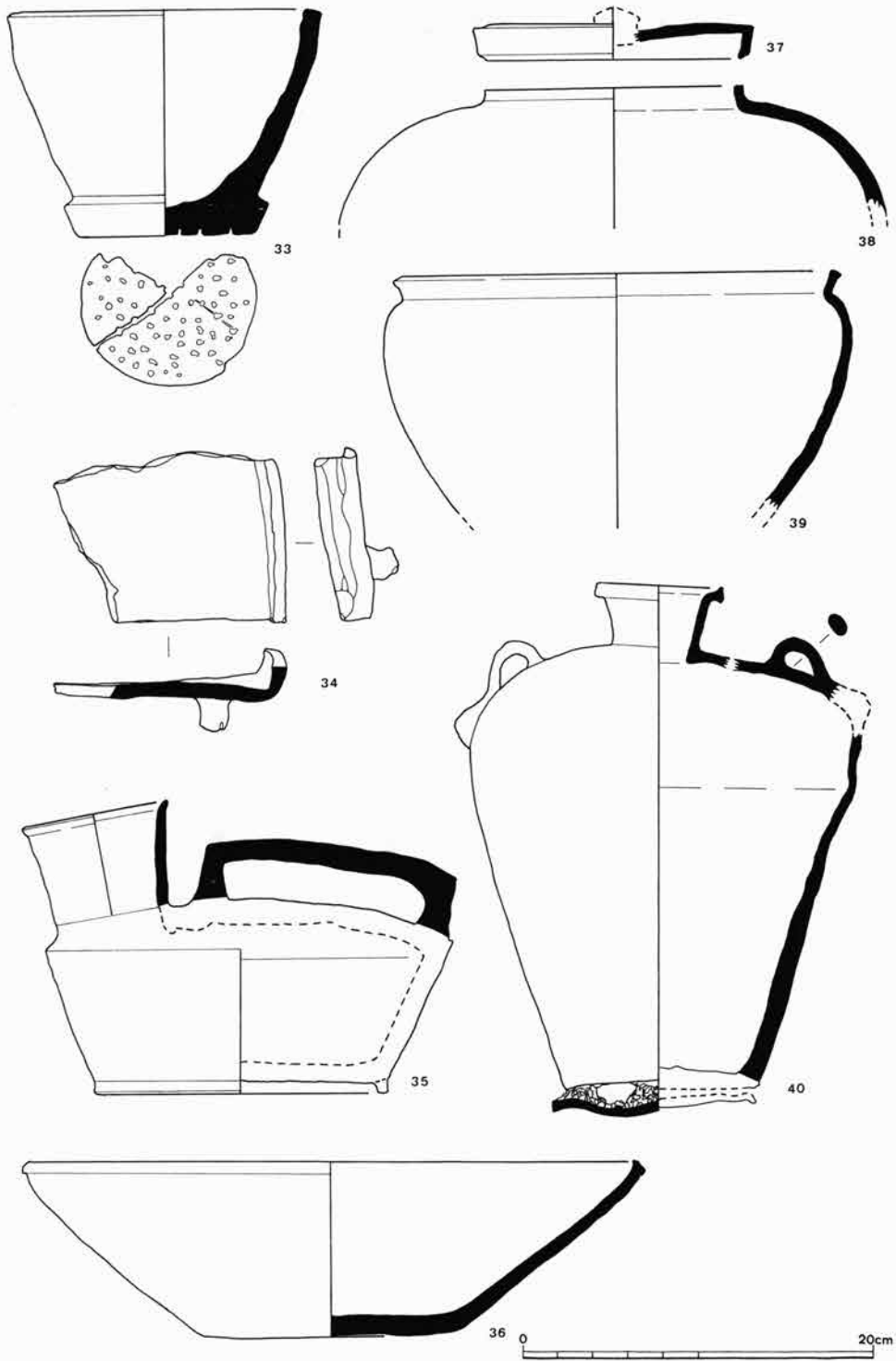
1号窯灰原(第66図2～6・9・10・15・18・19・20・21・24・25・28、第67図34、37)・SX01(第66図1・7・11・12・14・22・30・32、第67図35・38・39・40)及び3号窯、側溝(第66図6・13・17・29・31、第67図33・36)の遺物には、杯A・杯B・蓋A・蓋B・皿A・瓶B・鉢・壺・硯などがある。SD01では、杯B・蓋A・瓶B・鉢Cなどがある。出土遺物の中では、杯B・蓋A・瓶B・鉢Cなどがある。出土遺物の中では、杯B・蓋Aが最も多く、皿A・杯Aが続き、平瓶・風字硯は各一点ずつであり、甕はほとんど無かった。

杯A(第66図1～5) 高台をもたない平底の杯である。底部から口縁部までの斜め上方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。ロクロの成形後、内外面にナデ調整を施している。底部外面には粘土紐の単位がみられ、未調整のものもある。

杯B(第66図6～11) 輪状高台をもつ杯である。底部外面が未調整である以外は、ロクロ成形及び調整を行っている。口径は、12cm前後のもの(6・7)、15cm位のもの(8～10)と大きく二分できる。(10)は、底部から口縁部までやや外反ぎみに立ち上がり、口径18.6cmの大



第66図 出土遺物実測図(1)



第67図 出土遺物実測図(2)

型品である。(8)は3号窯の床面から、(6)はSD01から出土したものである。

蓋A(第66図12~19) 平坦な天井部中央に扁平な宝珠つまみを持つ。天井部からS字形に口縁部に至り、端部は丸みをもっている。なかには(15)のように肩部が強く張っているものもある。蓋の口径は、14cm前後のもの(18・19)と16~17cmのもの(12~16)とに二分できる。

蓋B(第67図37) 平坦な天井部からほぼ直角に垂れ下がる。口縁部は平坦面を有し、やや内傾している。外面には自然釉がかかっている。1号窯灰原から数点出土している。口径は16cmを測る。いわゆる薬壺の蓋である。

皿A(第66図20~27) 高台をもたない平底の皿を指す。底部から口縁部まで短く斜上方に立ち上がる。口縁端部は細くおさめるもの(22・23)、内側に肥厚するもの(20・24)、平坦面をもつもの(25・27)がある。底部外面はヘラ切り痕があり、内外面はロクロナデ調整を行う。青灰色を呈し堅緻に焼かれたものと、黄白色を呈しやや軟質のものがある。皿の口径は、16cm~20cmまで大小の差異が認められる。

瓶B(第66図28~32) 輪状高台を持つ平底の小形瓶である。肩の張った丸味のある胴部である。頸部は直立し、口縁部は大きく外反し、端部に至って上方に突出する。体部は粘土紐巻き上げ後、ロクロナデ調整を施す。底部外面はヘラ切りが行われている。器高は12cmから20cmを超えるものもある。

鉢(第67図33・36・39) (33)はほぼ完形品である。厚みのある平らな底部は安定感がある。外面には多くの刺突痕がある。体部は斜上方に立ち上がり口縁部では直立し、端部は平坦面を有する。内外面はロクロナデによる調整を行う。口径は18cm、器高は18.8cmを測る。(36)は大きく口を開いた鉢Cである。平らな底部から一定の厚みもち斜上方にはほぼまっすぐ立ち上がり、口縁端部は平坦面を有し内傾している。口径は35cm、器高は10.5cmを測る。(39)は体部が内湾しながら立ち上がり、丸い肩から口縁部はまっすぐ外傾する。口縁端部は平坦面を有する。胎土は精良でロクロナデ調整で仕上げる、黄白色を呈するものが多い。

壺(第67図38・40) (38)は、まるい胴部から張った肩をもち、口縁部は直立し、端部は平坦面をもっておさめる。口径は15cmを測る。いわゆる薬壺である。(40)は、胴部がほぼ直線的に立ち上がり、張った肩に把手(耳)が付く双耳壺である。頸部は外傾し、さらに口縁部が外に傾き、端部内側が直立に伸びてきておさまる。外面に自然釉が付着している。焼成時には器形がゆがみ、ひび割れたもので、底部には蓋が密着している。

甌(第67図34) 欠損しているものの、陸部、海部、外堤、脚部を観察することができる風字甌である。陸部から海部へなだらかに下り、外堤は低く直立し、端部は平坦面を有する。

平瓶(第67図35) SX01から出土した完形品である。底部に、輪状高台を有する。体部は斜

上方にまっすぐ立ち上がり、屈曲して肩部が作られる。注口は広口の口縁部で、端部がさらに外反し丸くおさめる。把手は断面長方形を呈し、貼り付けている。

## 5. ま と め

芦原3号窯は、1号窯と同じ形態をもつ半地下式登窯である。1号窯に先行して構築されたが、窯体の底部及び側壁の還元焼成層が5cm程度と薄く、操業時間は短いと推測される。窯体は焼成部及び煙道部を一部残すだけでその遺存状態は非常に悪いが、3号窯の付属施設となる覆家や側溝を考えるうえで、非常に貴重な資料となった。(竹井治雄)

### (3) 芦原地区 試掘調査

#### 1. 位 置

この調査は、昭和57年度の田畑部の試掘調査において灰原が発見されたことにより、この灰原に関連する窯跡が丘陵部に遺存していることを想定し、その検出を目的として、昭和59年9月17日から10月27日まで実施した。掘削面積は約120m<sup>2</sup>である。調査地は、芦原1号窯・3号窯から北西約80mに位置し、標高140m～150mの急傾斜地で、主に丘陵西側斜面を調査の対象とした。

#### 2. 調査経過と概要

試掘調査は、総計7本のトレンチを設定し、水田部の灰原に最も近い傾斜変換点から掘削した。Iトレンチでは若干の遺物が採集されたものの、灰原は検出されなかった。続いて標高約140mの丘陵裾部に沿って長さ28mのトレンチを西方から入れた。IIトレンチでは、厚さ1.5mの小礫が堆積しており、遺物は全く無かった。この下層は、風化した岩盤である。IIIトレンチでは、厚さ1.6mの砂礫と茶褐色粘質土の互層を排除すると、厚さ10cmの黒色の灰(炭)層が検出された。これが灰原であるかを明確にするために、IIIトレンチから丘陵腹部へIVトレンチを掘削した。この結果、灰(炭)層は、灰原そのものでなく、長辺2.5m・短辺1mの、東西に長軸をもつ隅丸長方形の土坑状遺構であることが判明した。また、土坑状遺構内から、糸切り底や玉縁状口縁をもつ鉢等がわずかに採集されたことにより、小形窯の存在が予想され、引き続きVトレンチからVIIトレンチまで掘削した。V・VIトレンチの東端、VIIトレンチでは、旧地形が若干テラス状を呈していることから、窯体の存在が期待されたが、固い岩盤が露見しただけであった。なお、VIIトレンチでは地山までが40cmと浅いため、よく旧





第 68 図 芦原地区試掘調査地地形図

形を留めていると考えられ、Ⅲトレンチの中央部は小さな谷間にあたるものと思われる。

(竹井治雄)

#### (4) 黒岩C地区作業場跡発掘調査

##### 1. 位 置

黒岩C地区は、亀岡市篠町大字篠小字黒岩に所在する。調査地は緑釉を生産する特殊窯である黒岩1号窯，特殊三角窯と登り窯が隣接する小柳1・4号窯，また道路予定幅の外に位置し，窯体構造などの細部は明らかでないが窯壁の一部と灰原が露出する黒岩窯跡群の各窯跡群の中間，標高140～150mを測る緩斜面に立地する。同地は昭和52年度，京都府教育委員会により試掘調査が行われ，前述の黒岩1号窯，小柳1号窯の確認とともに，CM14グリッドでは石垣状の石列と土壇状の平坦面，CM29区では直径1m，厚さ2～3cmの炭を埋土とする

円形土壇が確認され、検出遺構とともに地形を考えあわせ、同地が窯業生産に関連した作業場跡として想定されていた。

## 2. 調査経過

黒岩C地区の調査は、同地が国道9号バイパスに関連する路線帯とともに一部管理施設として開発される計画があるため事前に発掘調査を行った。

発掘調査は昭和59年9月3日より、樹木の伐採・下草刈りを行い、幅3m、長さ20mのトレンチを丘陵に平行あるいは直行する形で13ヶ所に設定した。トレンチ調査の結果、調査地の東半には顕著な遺構・遺物が認められず、黒岩1号窯に隣接した調査地西半で遺構・遺物の集中が認められた。この結果をふまえ、F～S・20～35地区を中心にトレンチを拡張し、遺構・遺物の追求につとめた。調査の結果、ピット・土壇・溝状遺構を確認したが、建物群としてまとまるピット群は認められなかった。なお黒岩C地区の現地調査は次年度にも継続する予定なので、今回は概略を記するにとどめる。

調査地の地区割はこれまでの篠窯跡群の地区割に準拠する。このため、同地はSNKW-C区に相等する。

## 3. 検出遺構

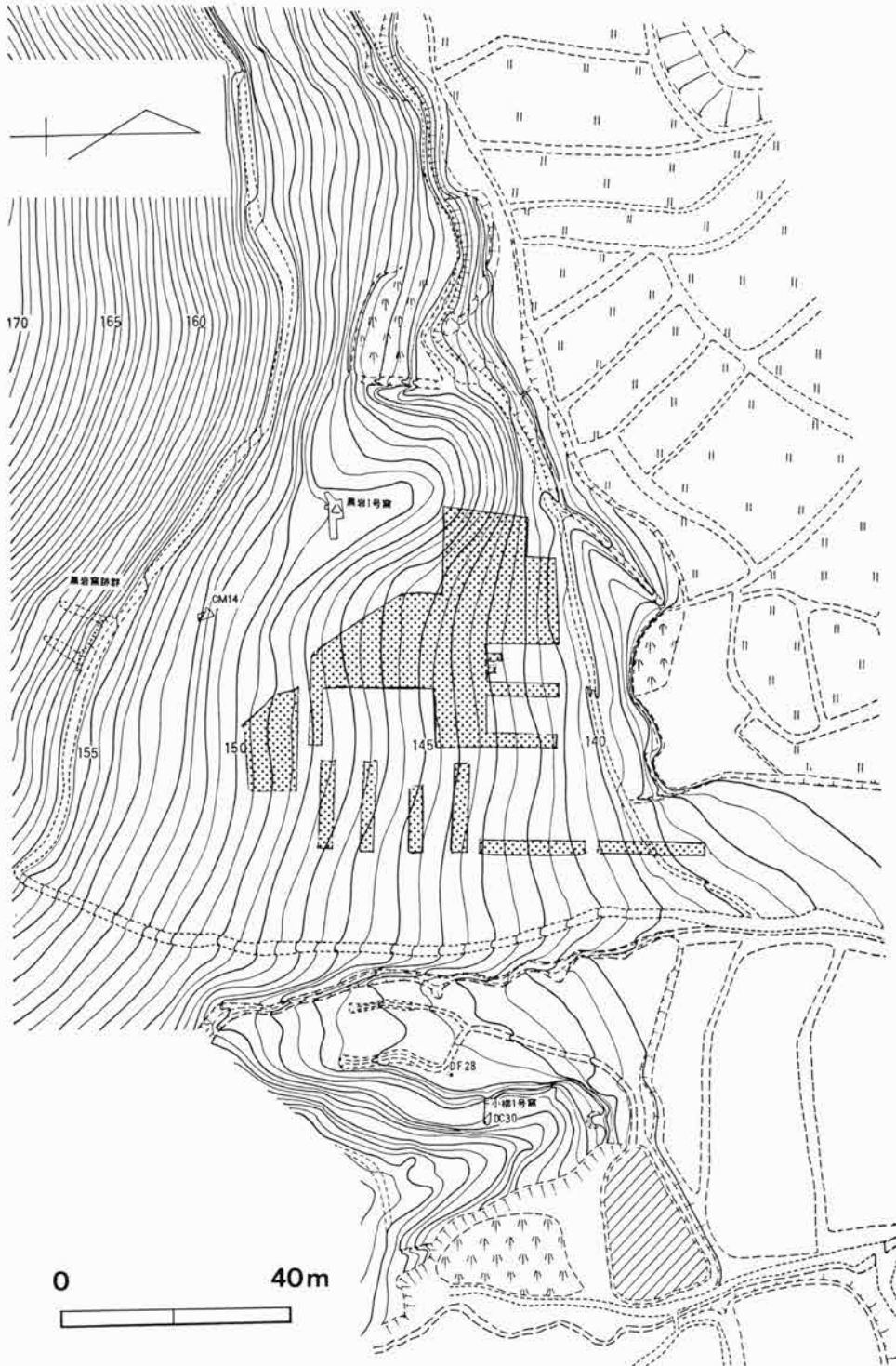
黒岩C地区で検出した遺構は窯状遺跡(SX04)・土壇(SK01・SK05・SK06)・溝状遺構(SD02・SK03)のほか、不整土壇・ピット群よりなる。

SX04は調査地西端、OP30・31地区で検出された、長軸4.06m、短軸1.33m、深さ35cmを測る窯状遺構である。SX04を窯状遺構とするのは側壁及び底部に赤色焼土が散在し、南側壁の一部には粘土を貼りつけ、窯壁状に焼きしめられていることに因る。SX04の埋土は厚さ10～20cmにわたり炭層が堆積し、その上層からは薄く淡黄褐色土層が堆積する。SX04出土遺物には須恵器鉢など数点が出土した。

SD02は26～34・L～N区で検出された検出長約21.0m、幅約1～2.2m、深さ約10～30cmを測る溝状遺構であり、埋土には淡褐色土のほか、拳大から人頭大に至る角礫が散在する出土遺物には埋土内より須恵器杯・碗のほか緑釉陶器碗が出土した。

SK01は29M区で検出された直径約1mを測る円形土壇である。SK01は昭和52年度の試掘調査に際し検出されたものであり、炭を埋土とし、底部には赤色焼土が一部認められる。

SX05は28J区で検出された長軸1.7m、短軸0.8m、深さ10～20cmを測る楕円形土壇である。SK05には拳大の角礫が散在する。



第 69 図 黒岩地区作業場跡調査地地形図

SK05は25 J区で検出された直径80～110cm・深さ20cmを測る円形土坑である、埋土は厚さ20cmにわたり炭層が堆積し、底部にはSK01と同様赤色焼土が認められる。

ピット群は各地区ごとに散在するが建物としてまとまるものは認められなかった。各ピットは直径10～20cmのものを主体とし、埋土には淡茶褐色土と淡黄褐色土の二種があり、断面の土層観察によると前者が上層より切り込まれたことが認められる。

#### 4. 出土遺物

黒岩C地区で出土した遺物には須恵器・緑釉陶器・石製品があり、コンテナ・バット約20箱を数えるが、大半が表土から出土し、遺構に帰属するものは少ない。

須恵器は杯・碗・鉢などがあり、昭和52年度に検出された黒岩1号窯併行期のものが大半である。

緑釉陶器は碗が大半であり、出土数は約20点を数える。

石製品は石鏃が3点出土したが、遺構に関連しては出土しなかった。

#### 5. ま と め

黒岩C地区の調査は昭和59年9月3日から始め、一時中断したが昭和60年3月末日までを要し、なお未掘部分がある。このため、今回は遺構、遺物の概略にとどめ、次年度、今度の調査成果を含め詳細な検討を行う予定である。

今回調査した遺構・遺物をまとめると昭和52年度の試掘調査で予想された窯業生産に関連した建物などの顕著な遺構は検出されなかった。ただ土坑・ピット群などが散在し、出土遺物も黒岩1号窯併行期の遺物が大半であることから、黒岩1号窯に関連した遺跡であると考えられる。

黒岩C地区の調査で注目される遺構としてはSX04がある。SX04は窯体構造である燃焼部・焼成部などの区部は明らかでないが、底部及び側壁に赤色焼土を含み、南側壁には粘土を貼りつけ、窯壁状に焼きしめられた部分が認められ、窯業生産に関連した遺構と考えられる。SK04と近似した遺構として小柳1・4号窯に近接して黒岩窯状遺構がある。小柳4号窯と黒岩窯状遺構・黒岩1号窯と黒岩C地区SK04など特殊窯と窯状遺構など今後検討を要する遺構が検出され注目される。

(石井清司)

## (5) 前山地区田畑試掘調査

### 1. 位 置

調査地は、亀岡市篠町大字森小字前山に位置する。昭和51年度に調査を行った前山1号窯<sup>(注18)</sup>や昭和55年度に調査を行った前山2号窯・3号窯<sup>(注19)</sup>がある。丘陵の東側の田畑部にあたる。地区割りでは、前山(SNMM)C～F地区である。周辺の遺跡としては、前山窯跡群のほかに、調査地南方約50mの所に東前山窯跡<sup>(注20)</sup>があり、東方約300mの所には昭和52年度に調査を行った黒岩1号窯<sup>(注21)</sup>がある。

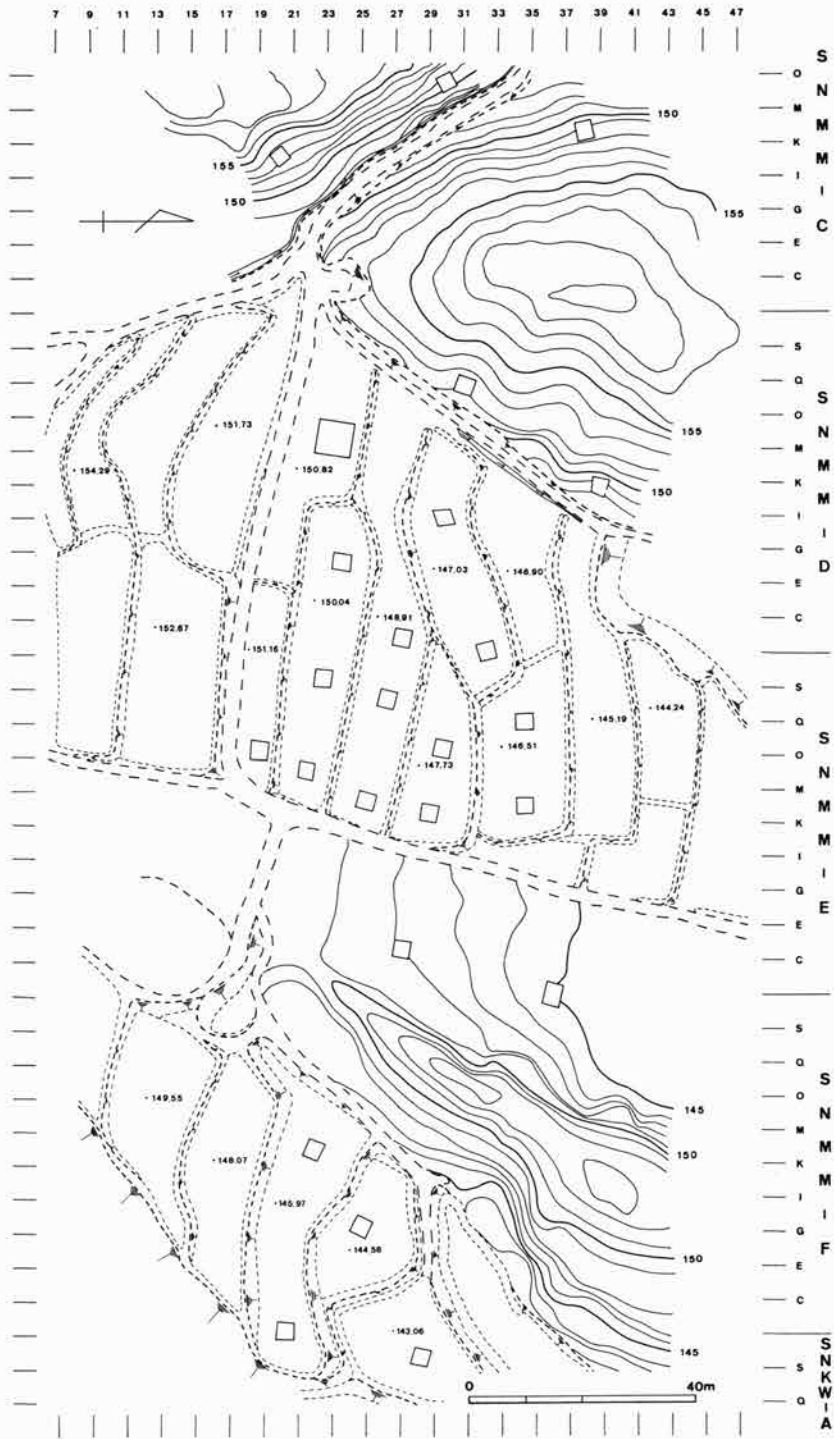
調査は、昭和60年12月17日から昭和61年2月28日まで実施した。

### 2. 調 査 概 要

調査地の田畑部に3m四方のグリッドを22か所設定し、掘削を行った。前山D～E地区にかけての基準層位は、耕土・礫混り黄褐色粘質土・礫混り黄褐色砂質土・赤褐色土(地山)となり、前山F地区においては、耕土・黄灰色砂質土・淡灰色砂質土・灰白色砂質土・黄褐色土(地山)となる。各層からの出土遺物はなく、窯跡や灰原・生産遺跡に関連したと思われる明確な遺構はみつからなかった。DO23地区において、耕土層を取り除くと、10cm～20cm大の石と焼土を検出したため、6m四方に拡張した。その結果10cm～20cm大の石が「L」字状に巡り、この内側の土は焼けていた。焼土は、砂質の土が焼けたもので、長辺2.4m・短辺1.8mの長方形にわたって広がっており、厚さは約4cmであった。周辺にはこれに伴う遺物もなく、その性格は不明である。この遺構の検出により、西側丘陵斜面裾部にも3m四方のグリッドを4か所設定し、掘削を行った。丘陵裾部では、排土・暗灰色土あるいは礫混り黄褐色土・黄白色土(岩盤)となり、遺物や遺構はなかった。

### 3. ま と め

調査の結果、長辺2.4m・短辺1.8mの焼土とこれを「L字状」に囲む石列を検出したが、出土遺物がなく、その性格・時期は不明である。この他には遺構はなく、今回の調査地には窯跡や灰原・生産遺跡に関連した明確な遺構はなかった。(岡崎研一)



第70図 前山地区調査地地形図

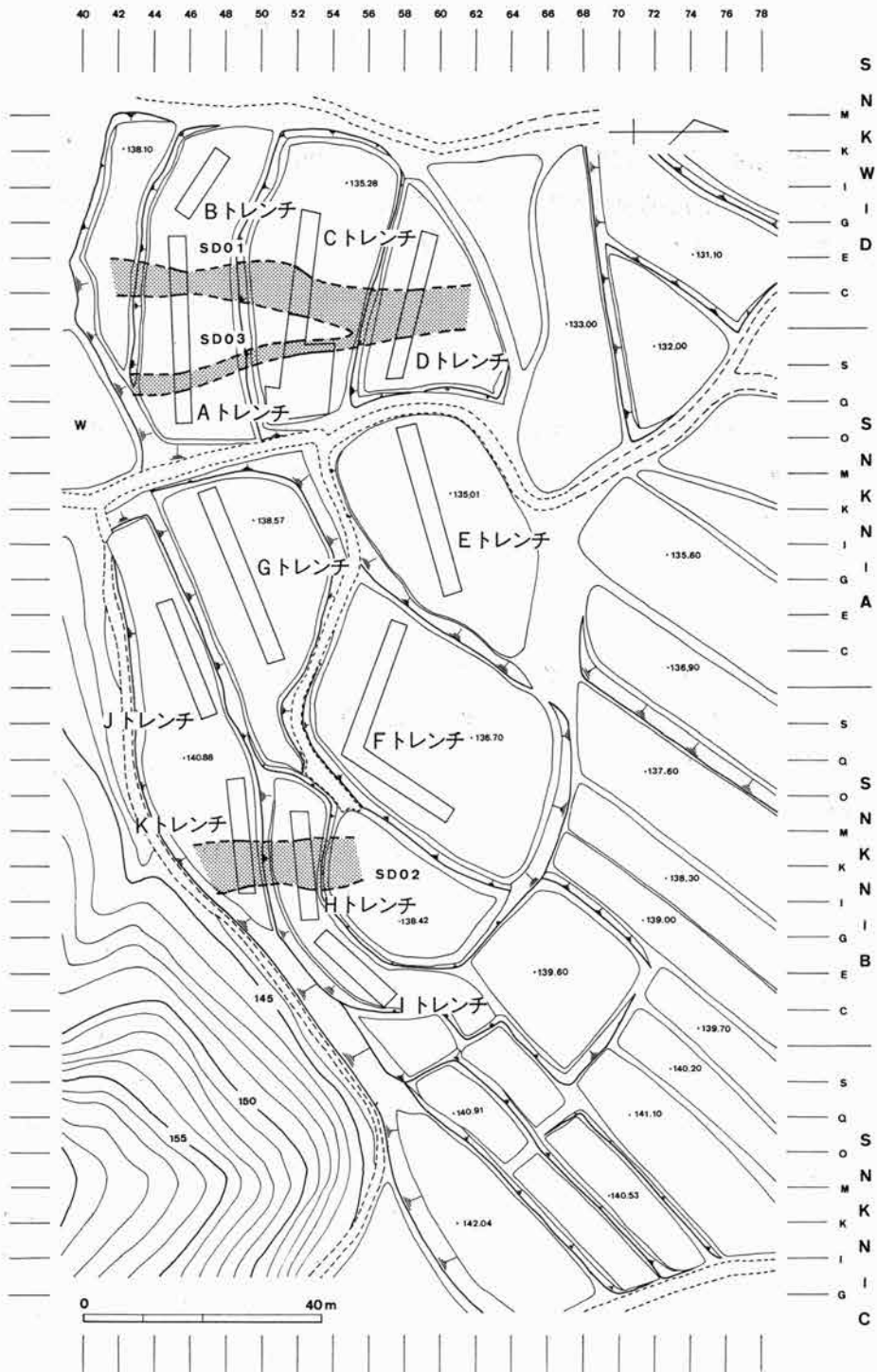
## (6) 掛ヶ谷・黒岩地区田畑試掘調査

## 1. 位 置

調査地は、京都府亀岡市篠町大字篠小字掛ヶ谷・黒岩の田畑部である。地区割りでは、黒岩D地区(SNKW-D)から掛ヶ谷C地区(SNKN-C)にあたる。周辺の周知の遺跡としては、黒岩D地区南側に昭和54・55年度に発掘調査を行った小柳窯跡群があり、9世紀中頃の登り窯(小柳1号窯)と10世紀中頃の三角窯(小柳4号窯)を確認している<sup>(注22)</sup>。小柳窯跡群から西方約100mの所には黒岩1号窯があり、昭和52年度の調査によって10世紀中頃の三角窯を発見している<sup>(注23)</sup>。また掛ヶ谷B～C地区にかけてのわずかに北へ張り出す丘陵斜面には、掛ヶ谷1号窯がある。このように登り窯や三角窯が調査地周辺の丘陵斜面や緩傾斜の所に位置することから、今回の調査は、上記した窯跡に伴う灰原及び生産に関連した遺構・また新たな窯跡の確認を目的として行った。

## 2. 調 査 経 過

各田畑に幅3mのトレンチを設定し掘削を行った。トレンチ名は、西から東にかけてアルファベットで記した(第71図)。掘削を行ったところ、黒岩D地区と掛ヶ谷B地区は谷地形を成しており、掛ヶ谷A地区では高台になっていた。掛ヶ谷A地区においては、耕土下すぐに赤黄褐色土の地山となり顕著な遺構は見つからなかった。黒岩D地区においては、Cトレンチを耕土下約50cm掘り下げたところ、南北方向の茶灰色土の堆積を検出した。この部分をさらに掘り下げると、「U」字状の落ち込みとなり、上層より茶灰色土・暗茶褐色土・黒色土が堆積していた。この落ち込みの南方約70mの所には小柳1・4号窯が位置し、昭和54・55年度の調査の時に表土下約2mより灰原の堆積が検出されたことから、小柳1・4号窯からCトレンチで検出した「U」字状の落ち込みにかけては、谷地形となっているかあるいは溝が存在するものと考えられた。この中間に設定したAトレンチを耕土下約60cm掘り下げると、「U」字状の落ち込みの延長と考えられる茶灰色土を検出した。掘削したところ、溝状遺構となり、昭和54・55年度の調査結果及びAトレンチ・Cトレンチでの検出状態から、小柳1・4号窯より北流する溝状遺構(SD01)と考えられた。またAトレンチ東側においても溝状遺構(SD03)を検出し、Cトレンチ東側の幅約3m、深さ約80cmの礫混り灰色土につながるものと考えられた。この溝状遺構は、小柳1号窯のある丘陵の東側の谷地形を源とし、北北西に向って流れるものと思われた。SD01・SD03の溝内からは小柳1号窯頃の須恵器片が多数出土している。特にSD01からは、小柳4号窯頃の須恵器片に混って窯滓や完形品に近いも



第 71 図 掛ヶ谷・黒岩地区調査地地形図



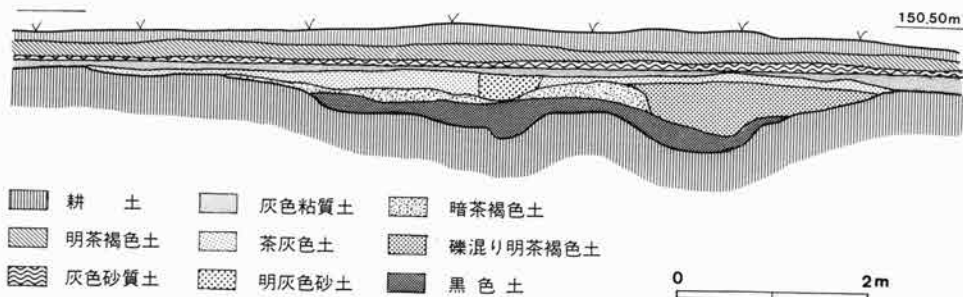
のがかなり出土していることから、これらの遺物は小柳窯跡群より流出し堆積したものと考えられた。またSD01は、少なくとも出土遺物より10世紀中頃まで存続したと思われる。その他の遺構としては、Cトレンチ東端において井戸状の遺構とそれに隣接する土壇状遺構を検出した。これらの遺跡に伴う遺物はなく、また耕土層を取り除いた際に発見していることから、その時期は不明である。

掛ヶ谷B地区においては、Hトレンチ・KトレンチよりSD01と同じ溝状遺構(SD02)を検出した。Hトレンチを耕土下約1.2m掘り下げたところ、南北方向の淡茶褐色粘質土を発見した。掘削したところ、「U」字状の落ち込みが見られ、上層より淡茶褐色粘質土・淡青灰色粘質土・礫混り明青灰色砂質土・暗茶褐色粘質土・礫混り淡茶褐色砂質土・礫混り淡茶褐色砂土が堆積していた。Hトレンチ南側のKトレンチでは、耕土下約1.6m掘り下げて溝状遺構を検出し、その規模また堆積状態はHトレンチと同じである。この溝状遺構(SD02)は、Kトレンチ南側に現在も小さな谷地形があることから、この谷を源とし北流するものと思われる。溝内からわずかに須恵器片が出土しており、時期は9世紀中頃と10世紀中頃である。この付近には、登り窯と考えられている掛ヶ谷1号窯があるが、出土遺物より三角窯も存在したと思われる。

### 3. 検出遺構

今回検出した遺構は、溝状遺構(SD01・SD02・SD03)と井戸状遺構と土壇状遺構である。

SD01 小柳1・4号窯付近を源とし、北流する溝状遺構である。規模は、Aトレンチで幅約10m、深さ約1.4m、Cトレンチで幅約8.3m、深さ約75cmである。黒色土・暗茶褐色土が堆積した後、溝状遺構の西端部を掘削しており、礫混り明茶褐色土が堆積していた。出土遺物の大半はこれらの層から出土しており、この時期は小柳1号窯と小柳4号窯頃の2時期に分かれる。また地山である明青灰色粘質土から小柳1号窯期の須恵器片が出土しており、



第72図 SD01断面図(Cトレンチ)

このような検出状況は、小柳1号窯操業後に窯跡北側の谷地形を広範囲にわたって灰原より須恵器片が流出し、その後SD01が設けられたためである。これは、昭和54・55年度の小柳窯跡群の調査の時にかなり厚い灰原の堆積を検出していることから、あるいは操業をくり返すごとに排水が悪くなり、そのために設けられた溝とも考えられる。溝は、出土遺物より小柳4号窯操業以降に埋ったものと思われる。

SD02 Kトレンチ南側の小さな谷地形を源とし、掛ヶ谷地区のBKラインに沿って北流する溝状遺構である。規模は、幅約8.3m、深さ約70cmを測る。溝内からは、小柳1号窯頃と小柳4号窯頃の須恵器片が混って出土しており、10世紀中頃以降に埋ったものと思われる。

SD03 小柳1号窯が位置する丘陵東側の谷地形を源とし、北流する溝である。その規模は、幅約3m、深さ約1mを測り、溝内からは小柳1号窯頃の遺物が出土している。

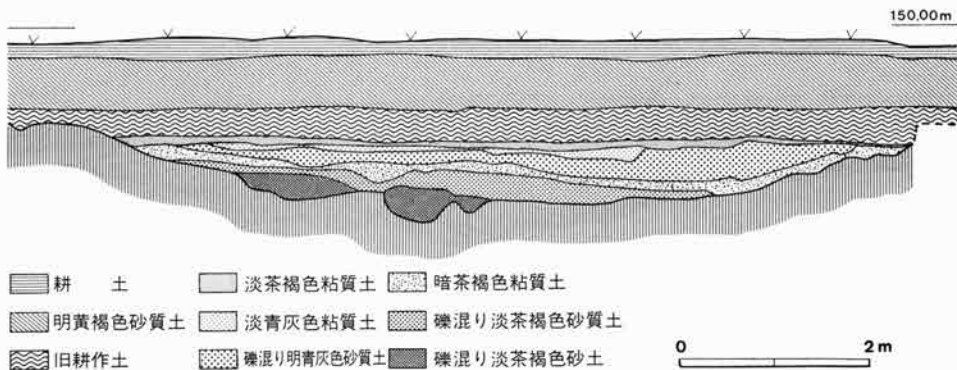
井戸状遺構 Cトレンチ東端より検出した直径約1.2m、深さ約80cmを測る遺構である。これも耕土下すぐに見つかり、出土遺物もないことから時期・性格ともに不明である。

#### 4. 出土遺物

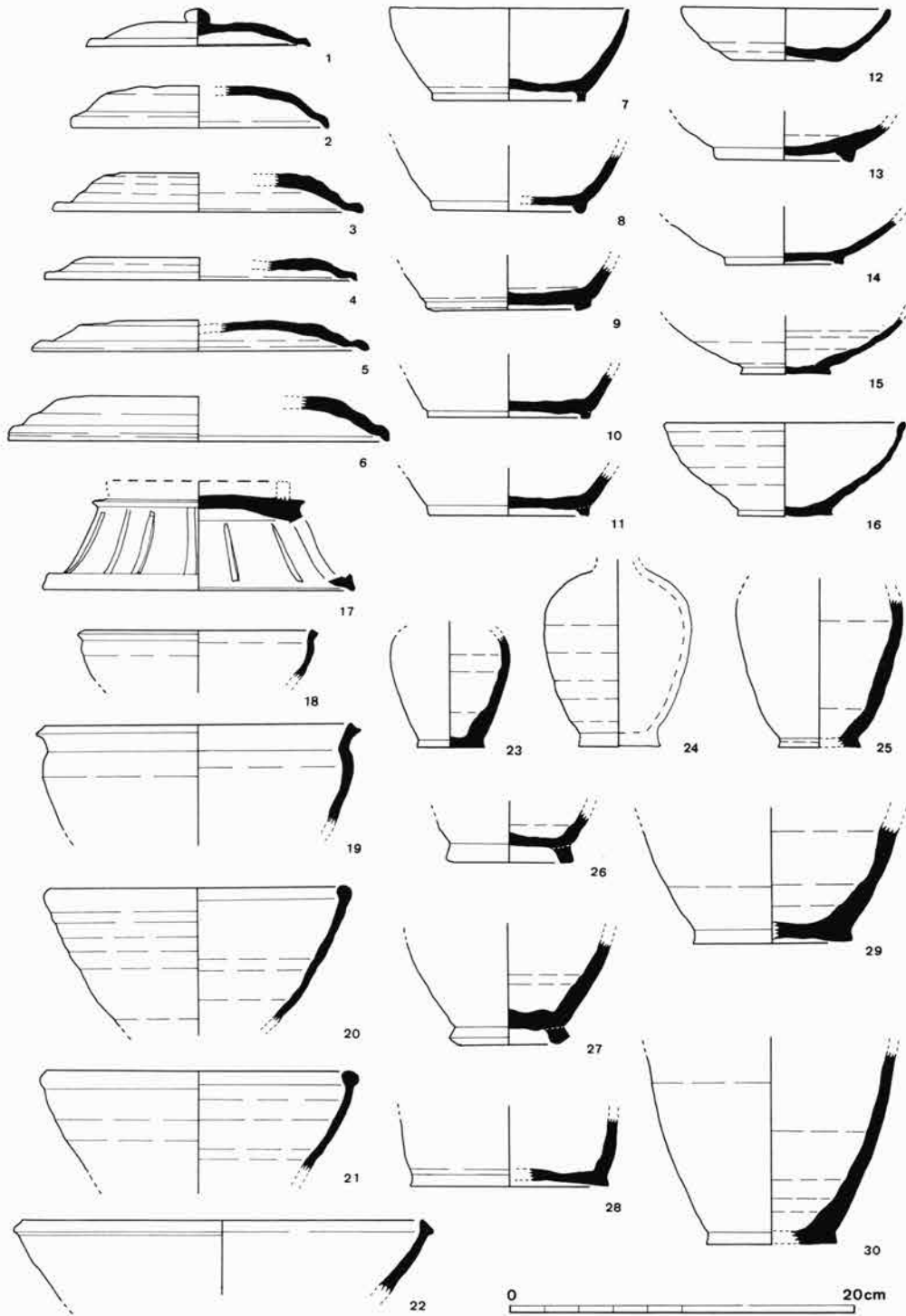
今回の調査で出土した遺物は、蓋A・杯B・椀A・椀C・椀G・円面硯・鉢A・鉢B・鉢D・瓶子・壺Aa・壺Bである。この大半はSD01より出土しており、完形品にちかいものもある。

SD01出土遺物(第74図1～13・15・17・18・20～23・25～30)

蓋(1～6)は、天井部から「S」字状に屈曲して口縁部に至るものである。9世紀中頃の蓋は、つまみを有するもの(1)とつまみのないものがあり、(2～6)は、天井部中央付近が欠損していたため、どちらに該当するか不明である。杯(7～11)はすべて輪状の高台を巡らしており、高台断面が逆台形を成すもの(7・10・11)と貼り付け高台から削り出し高台に移行



第73図 SD02断面図(Kトレンチ)



第 74 図 SD01・SD02出土遺物実測図(14・16・19・24はSD02出土)

する頃によく見られる高台の退化したもの(8・9)が出土している。これらの杯は小柳1号窯出土の杯と同じであることから、いずれも9世紀中頃と考えられる。椀(12・13・15)は、それぞれの形態・手法上の特徴が異なる。(12)は、底部切り離しをヘラ切りで行い、体部内外面にはロクロナデの痕が残る椀Gである。(13)は、削り出しによる高台を巡らす椀Cで、体部半ばで欠損しているため、黒岩1号窯から出土した体部半ばで「く」の字状に屈曲する椀であるかは不明である。(15)は、底部切り離しを糸切りで行い、体部内外面にはロクロナデの痕が残る椀Aである。これらは、小柳4号窯出土の椀と同じであり10世紀中頃のものと思われる。円面硯(17)は、陸部に裾の広がる圏台がつく。外堤が欠損しており、圏台には8本の透しがあり、透しの間には2条の沈線が施されている。(18)は、「く」字状に屈曲した口縁部を有し、口縁端部が平坦な鉢Bである。(20・21)は、体部が内湾しながら立ち上がり口縁端部を玉状に仕上げた鉢Dである。(22)は、体部が外上方に真っすぐ立ち上がり口縁端部が平坦な鉢Aである。瓶子(23・25)は、底部外面に糸切り痕を残し、体部は卵状を施したもので、小柳1号窯出土遺物と同じである。壺は、高台を巡らした壺Aa(26・27)と、平底高台の壺Ab(29・30)と、平底の底部から上方に立ち上がる壺B(28)が出土した。これらはいずれも小柳1号窯出土の壺と、特徴が同じである。

#### SD02出土遺物(第74図14・16・19・24)

(14)は、削り出しによる高台を有した椀Cである。(16)は、底部に糸切り痕を残し、体部内外面にはロクロナデの痕が残る椀Aである。両者とも10世紀中頃のものである。(19)は「く」字状に屈曲した口縁部を有し、口縁端部を平坦に仕上げた鉢Bである。(24)は、底部外面に糸切り痕を残し、卵形状の体部を有した瓶子である。鉢・瓶子とも9世紀中頃のものである。

## 5. ま と め

調査の結果、窯跡や灰原は検出できなかったが、自然地形を利用して設けられた3条の溝状遺構を確認した。SD01・03においては出土遺物から既に調査を実施した小柳窯跡に関連する遺構と考えられるが、掛ヶ谷地区において検出したSD02は、丘陵部試掘調査時に検出できなかった窯跡の存在をうかがわせるものである。(岡崎研一)

## (7) 掛ヶ谷地区植林地試掘調査

## 1. 位 置

今回の調査地は、大字篠小字掛ヶ谷の丘陵腹部の植林地であり、小柳窯跡群の東に位置している。小柳1号窯・4号窯は、昭和54・55年度の発掘調査で、丘陵西側斜面に構築された半地下式登窯・小形三角窯であることが確認された。また、昭和55年度試掘調査において、南方約30mの丘陵部には遺物や灰層が散布することが報告されている。このように、調査地周辺での遺構・遺物の分布状況から、窯体・灰原等が遺存していることが予想され、昭和59年7月9日から9月11日まで調査を実施した。

調査地の地形は、標高142m～158mで、南へ高く傾斜しており、東側が急斜面・西側が階段状のゆるやかな斜面である。東側の急斜面の頂部は、高さ約3mの断崖となり、竹藪の土入れによる削平か、地崩れによるものと考えられる。西側緩傾斜地の西端は、深い谷川により途切れている。この地形は、小柳窯跡群の立地条件と相似していることから、窯が構築された可能性が高いと考えられた。

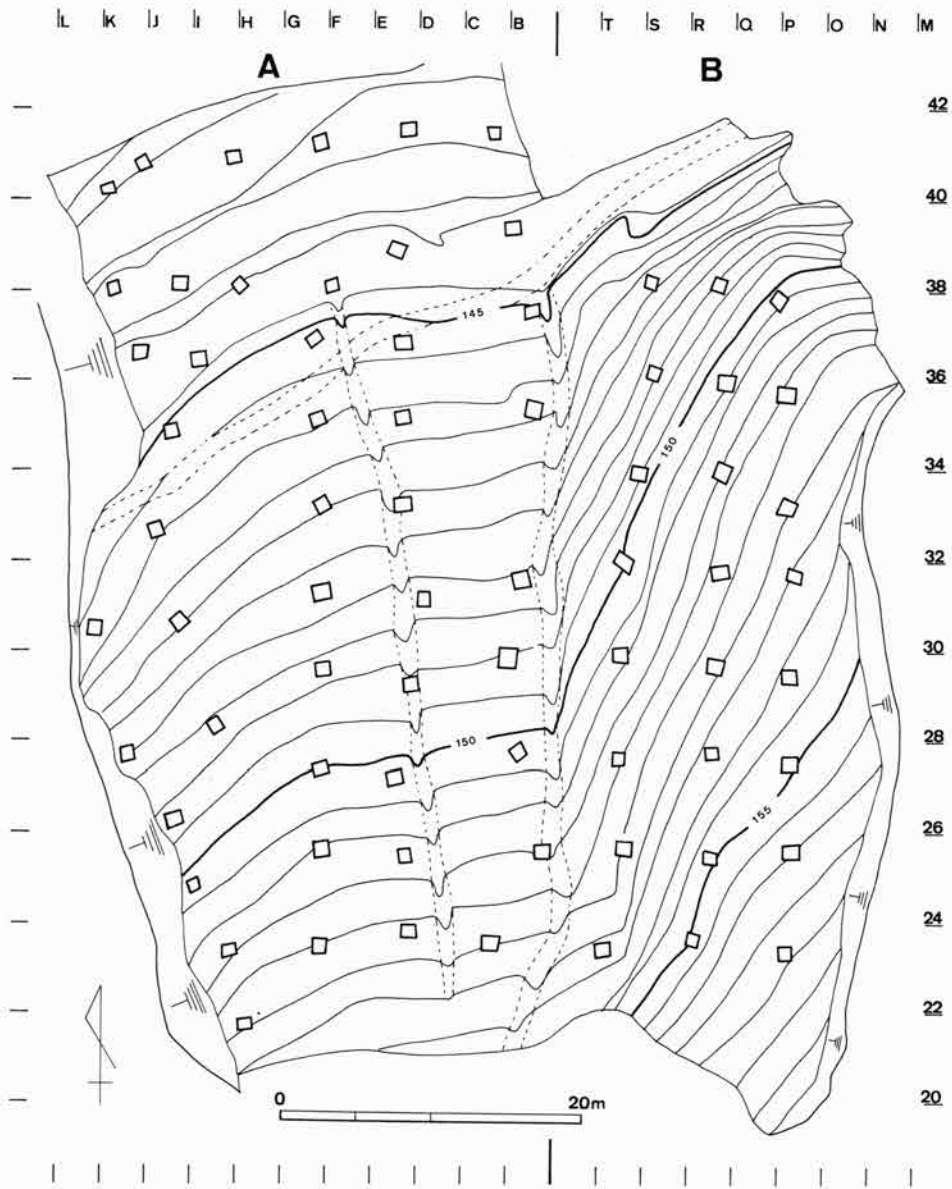
## 2. 調査経過と概要

試掘調査は、対象地(約4,000m<sup>2</sup>)全体を6m方眼に区切り、その区画ごとに1m四方のグリッドを一つ掘るという方法で実施した。調査地内の割り付けは、従来の基準線を用い、SNKN-A・B、23～41ラインの間に属する。地区名は、東西をアルファベット、南北を数字で表し、グリッドの南東隅の表示をグリッド名とした。

調査は、23ラインから始め、順次北へ下り、41ラインまで実施し、総数72か所のグリッドを掘削した。その結果、調査地東側では厚さ1.2mの竹藪の盛土・茶褐色粘質土・黄灰色砂質土(砂岩)が堆積していた。特にBT27・BT30グリッドでは、深さ2.5mに至って地山(黄灰色砂質土)が現われてくる場所もあった。西側では、表土(茶灰色腐植土)・灰褐色粘質土の順に堆積し、深さ0.5mで黄灰色砂礫の地山に至る。遺物は、表土から須恵器の細片が出土した。また、AD25・AD27グリッドでは、1mをこえる巨礫がみられ、時期は不明であるが土砂流による堆積と考えられる。

以上のように、今回の試掘調査においては、全般的に出土遺物が少く、灰原・焼土等の遺構が全く検出されなかったことから、この谷筋には窯跡は存在しないものと判断した。

(竹井治雄)



第75図 掛ヶ谷地区調査地地形図

(8) 黒岩地区田畑試掘調査

1. はじめに

今回の調査地は、大字篠小字黒岩の丘陵裾部に営まれている田畑であり、黒岩1号窯の北方にあたる。黒岩1号窯は、昭和51年度に実施された丘陵部における試掘調査や昭和52

年度の発掘調査によって三角窯であると確認された。黒岩1号窯の西側が急斜面になっているが、須恵器片、窯滓など多くの遺物が散布しており、水田部は丘陵と小谷川との間にあって、標高133m～140mと東へ段状に低くなる。水田部での表面採集による遺物は少ないが、上記の窯跡が近接しているため水田一筆毎に帯状の試掘溝を設定し、調査を実施した。

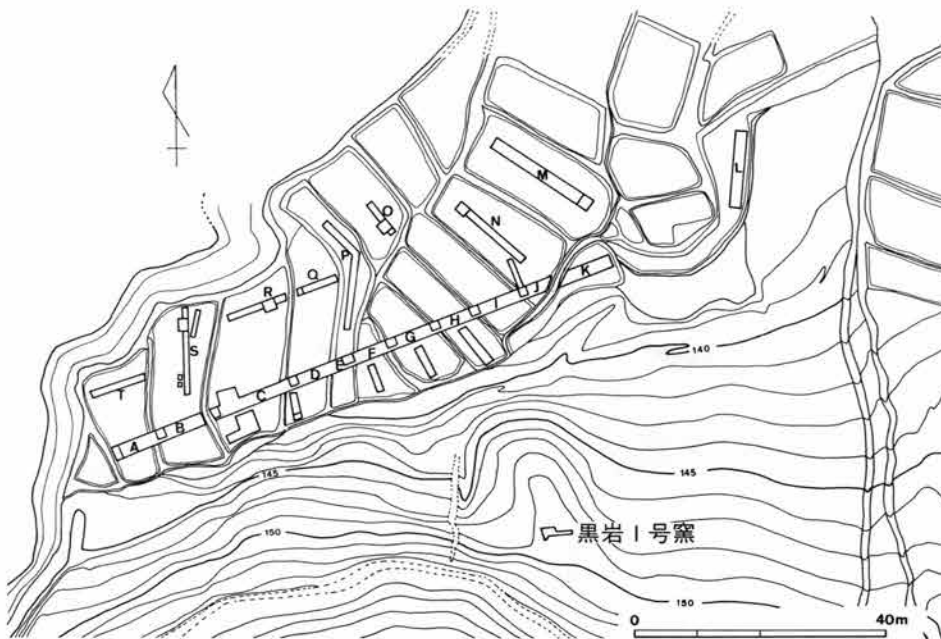
## 2. 調査経過と概要

試掘溝は、長さ20m～30m、幅3mを基本とした。まず、窯体や灰原が遺存しているかを調べるために丘陵沿いに東西約100mにわたって試掘溝を設定し、これを水田毎にA区～K区と名付けた。また、丘陵から小谷川までの南北の土層を観察するためにL区～T区の8本の試掘溝を設け、これによって全調査地を網羅できるようにした。さらに、C区～H区を拡張し、丘陵と水田の傾斜変換点の精査に努めた。

掘削作業は、上記のアルファベット順に行い、当初、機械掘りで表土や耕作土や盛土等を排除したが、遺物の出土によって手掘り作業に切り換えた。それ以後、各試掘溝の一部を深く掘り下げたが、地表下3mまで達してなお地山に至らないところもあった。

調査地内の層序は、その代表例としてE区とS区とに大別することができる。

E区の層序は、耕作土・床土・青灰色砂礫・青灰色粘質土・灰色粗砂・黒褐色泥炭・灰色



第76図 黒岩地区調査地地形図

粘質土である(C～I, M, N, Q, R区)。青灰色砂礫は、拳手大から50cmを超える巨礫からなり、雑木や須恵器片が含まれている。この砂礫層の厚さは、E区で1mほどであるが、R区では2.5m以上もあり、東方へ進むにつれその厚さを増している。青灰色粘質土及び灰色粗砂はD～H区の範囲に限られ、均一な堆積を示している。黒褐色泥炭層は、25cmの一定の厚さをもちD区～J区、M区と連続している。J区では多量の自然木が含まれている。

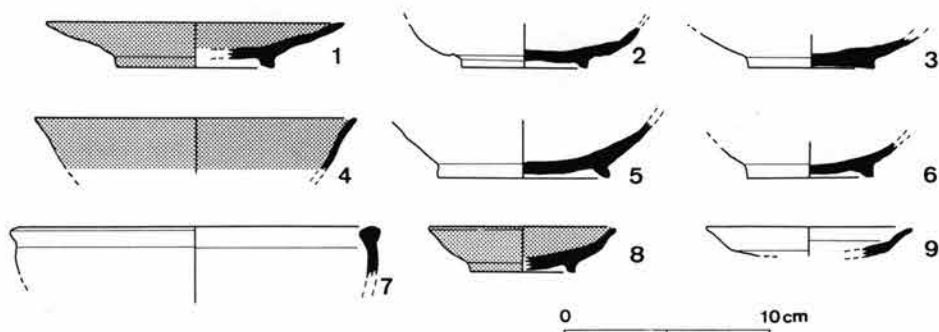
S区の層序は、耕作土・床土・黄褐色砂質土・黄灰色粘質土・黄褐色粘質土・暗褐色泥炭・灰色シルト・茶褐色粗砂質土である(A, B, K, L, O, S, T)。この層序は、黄褐色土を中心とした漸位層で、低・中位段丘にみられる大阪層群末期に相当するもので地山であると考えられる。

試掘調査の結果は、J区で自然木の堆積、S区では石組遺構が検出され、C区では土器の集中がみられた。また、調査地内の大部分に広がる青灰色砂礫層の内容も把握できた。以下、此等の点を列記したい。

1. J区の自然木は、白色シルト層下の黒褐色泥炭層より出土したものである。出土状況は、密集して不規則に折り重なっており、I区に続いている。自然木はその径が30cmを超えるものもあり、加工痕がみられず、表皮がまったく残らず炭化しつつあった。白色シルト及び泥炭には遺物が含まれておらず、地山と考えられる。

2. S区の石組遺構は、検出長20mを測り、ほぼ直線をなし北から東へ20度振れている。石組は、2段に積まれ、乱れてはいるが木口積で、裏込めは粘質土で施されている。石材は、20cm～50cmの砂岩系がほとんどであり、石組の頭面は削平されているためか不揃いである。この石組は、耕作土、床土の下部から出土したもので、中・近世の水田の畦を維持するための石垣と考えられる。

3. 青灰色砂礫層は、前述の堆積状況、範囲から土砂流によって形成されたものと考えられる。流出した方向は、丘陵から北方(Q, R区)と北東(M, N区)の二方向であり、現在の



第77図 出土遺物実測図 A区(8～9), C区(1～7)



水田(とくにE~I, M・N区)の畦は、この土砂流によって大きく改変されたものと推定される。

4. 今回の調査で出土した土器は、杯、椀、皿、鉢等であり、その他数点、緑釉を施された皿、椀等である。これらは各調査区に散在していたが、特にC区の青灰色砂礫層上部において密集して出土した。(第77図)

(1)は緑釉の施された段皿である。口縁端部から底部までの内外面全体に薄い釉を施している。高台部から口縁部まで低く斜め上方へのび、体部半ばで段を有し、端部は丸くおさめる。(2)は輪状高台を巡らし、高台付け部より大きく内湾しながら立ち上がる椀である。(3)は平高台の椀である。底部は糸切りで切り離しており、体部内外面はナデ調整を行っている。(4)は、内外面に釉を施した椀である。(5)は輪状高台を巡らした椀で、高台は削り出している。内面に磨きを施している。(6)は削り出し高台の椀である。高台部底面と底部外面の中心部に糸切り痕を残し、その外周を削り出しその後ナデを施す。(7)は玉縁状口縁をもつ鉢である。(8)は小型の緑釉皿である。底部外面と高台部を除く内外面には濃い緑釉が施されている。体部は緩かに立ち上がり、口縁部に至って外反ぎみに斜上方へのび、端部では水平方向に丸くおさめる。(9)は小型の皿である。(竹井治雄)

注1 (補助員)青井 敏・青木恒文・伊豆田晃正・上田俊章・梅田善愛・片山統夫・金田真樹・河田敏行・川村幸男・栗林幸生・甲田陽亮・斎藤秀和・坂下雅朗・佐藤勝憲・沢 裕俊・清水 努・菅原淳之・高井啓雄・立花正寛・田中博樹・富永洋功・中井達雄・中坪央暁・中西一博・中西健二・中西秀行・中西 宏・中西正樹・西岡成郎・西垣真史・西町達也・野田幸助・畑 時正・波多野徹・人見 歩・人見克之・福富 仁・星簇克之・松井正明・森 一夫・山口文吾・吉田和弘・吉田昌己

(整理員)青木あさ代・安達君江・足立多枝子・板倉真理・伊藤泰子・岩崎優美・岩田且子・上田和子・臼井千映子・大石厚子・大塚弥生・岡田貞子・岡本美代子・岡本美和子・荻野冨紗子・坂本明美・坂本佳津江・佐藤友子・曾根ひろ子・竹原京子・谷利里美・辻田祥子・内藤純子・中西美好・中西康子・野々口紀子・林 良子・藤田育子・藤田順代・冬木万理・別所京子・三木伸子・宮岡昭夫・村尾多美子・村上典子・村田澄恵・毛利悦子・山口輝子・山本末子・和田友子

(作業員)石野正男・宇野三雄・高橋一義・平田数太郎・法貴四郎・松本春樹・矢代四一郎・井内悦子・小川ふじ・木村一江・中西ふみ子・中村公子・西田初恵・森百合子

(事務補助員)有元伊奈・関本典子

注2 篠古窯跡研究会による。

注3 水谷寿克「篠窯跡群昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会) 1981

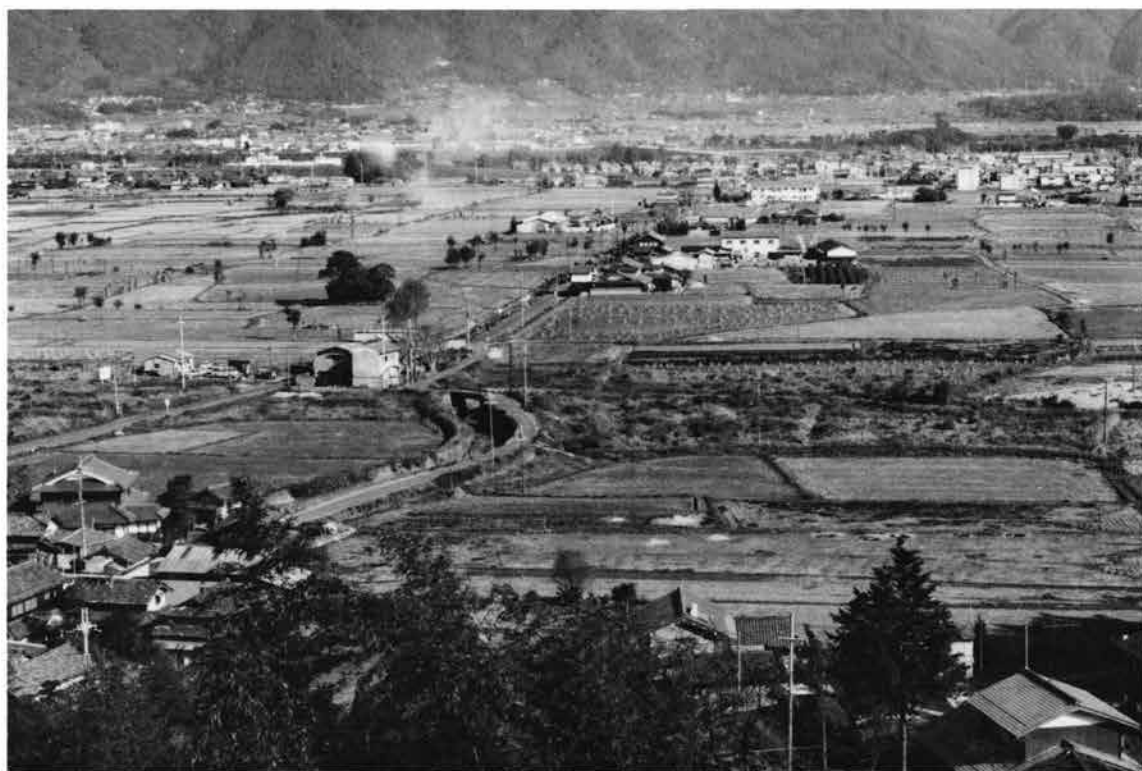
注4 安藤信策「篠窯跡群昭和53年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1979

注5 引原茂治「篠窯跡群昭和58年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』)第10冊 (財)京都府埋

蔵文化財調査研究センター) 1984

- 注6 岡崎研一「篠・西長尾A地区作業場跡」(『京都府埋蔵文化財情報』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984
- 注7 注5と同じ
- 注8 底部外縁に輪状高台を巡らす杯である。
- 注9 輪状のつまみを有した蓋である。
- 注10 口縁部内面に一条の凹線を巡らす平底の皿である。
- 注11 皿Abに、かなり高い高台を巡らすものである。
- 注12 平底高台の瓶子である。
- 注13 壺Cに輪状高台を有したものである。
- 注14 体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は上方につまみあげた鉢である。
- 注15 石井清司「篠窯跡群出土の須恵器について」(『京都府埋蔵文化財情報』第7号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
- 注16 中村 浩「陶邑・深田」(『大阪府文化財調査抄報』第2輯 (財)大阪文化財センター) 1973
- 注17 注3と同じ
- 注18 安藤信策「国道9号バイパス関係遺跡昭和52年度発掘調査概報」(『埋蔵文化財調査概報』京都府教育委員会) 1978
- 注19 安藤信策「篠窯跡群昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会) 1981
- 注20 注18と同じ
- 注21 注18と同じ
- 注22 注3と同じ
- 注23 注18と同じ

# 圖 版



(1) 調査地遠景 (西から)



(2) 第6次調査地調査前全景 (西から)



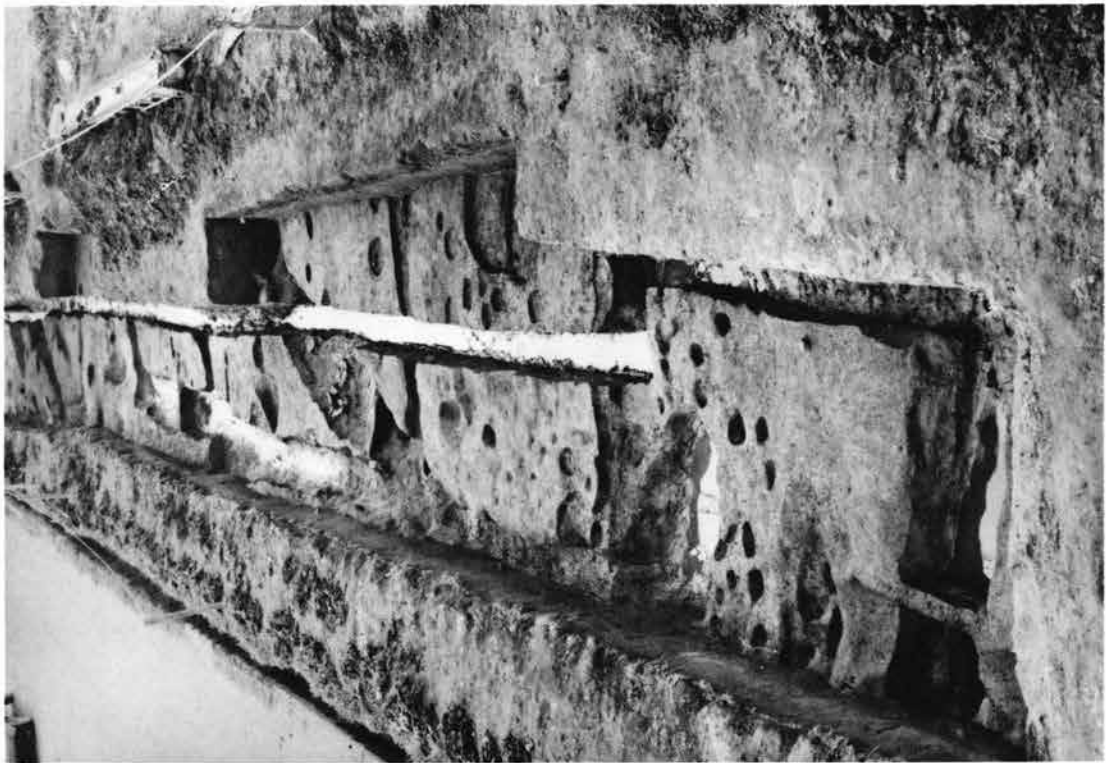
(1) 第6次調査地全景 (西から)



(2) №4 トレンチ築地状遺構 (南から)



(2) No.2トレンチ掘立柱建物跡(西から)



(1) No.4トレンチ東半部(東から)



(2) No.5トレンチ全景(西から)



(1) No.7トレンチ全景(西から)



(2) №9トレンチ全景(西から)



(1) №13トレンチ全景(西から)





(1) 第7次調査地全景（西から）



(2) Na16トレンチ遺構検出状況（西から）



No.5 トレンチ出土遺物 (弥生土器)



No.7 トレンチ出土遺物1 (弥生土器)



28



23



25



26



27



17



21



60



31



61



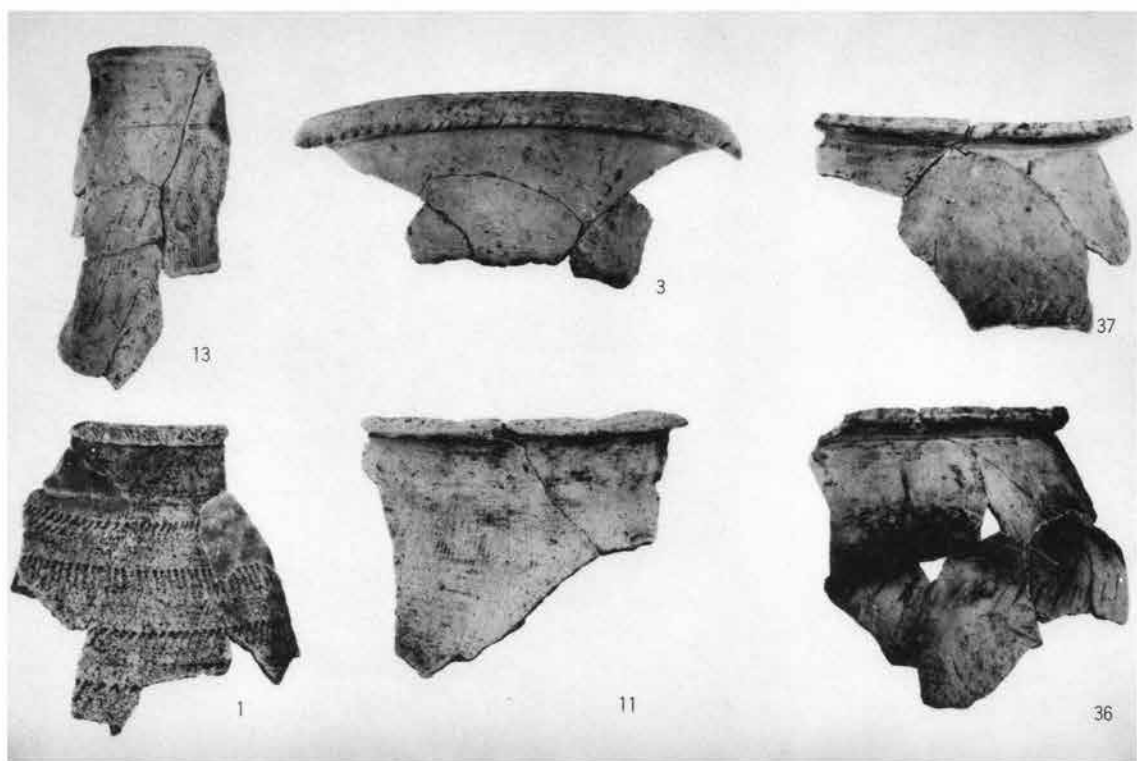
68

No.9 トレンチ出土遺物1 (弥生土器)

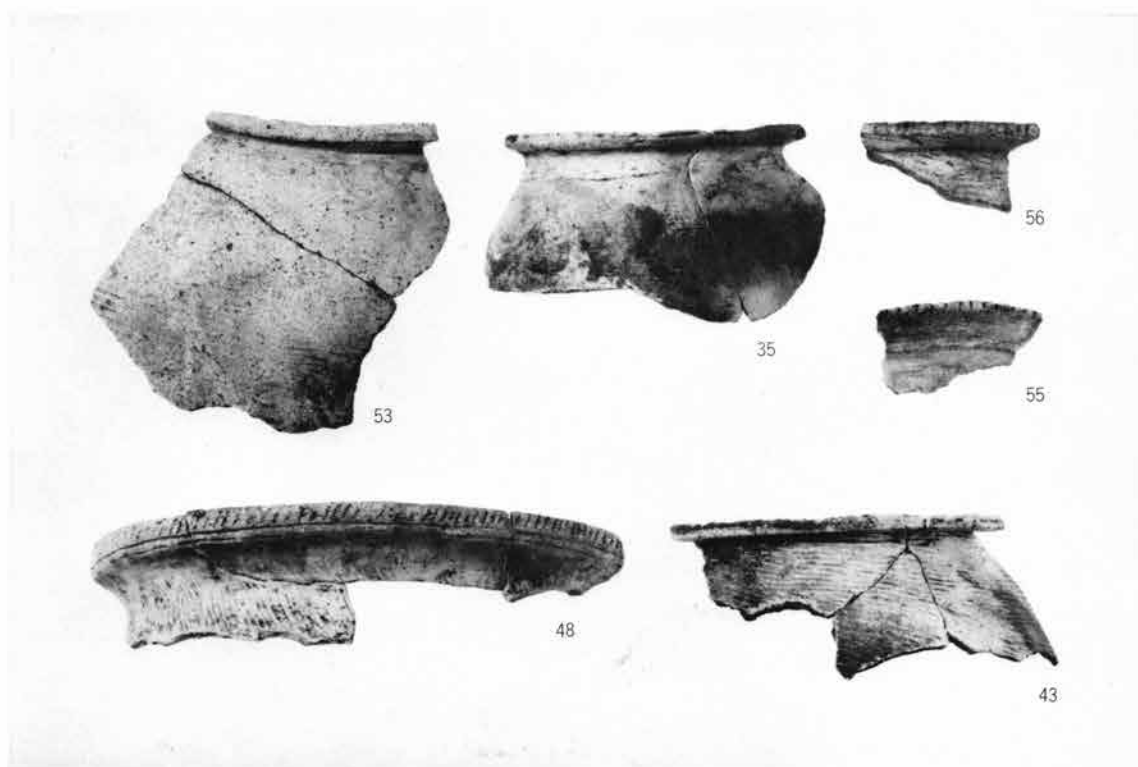


32

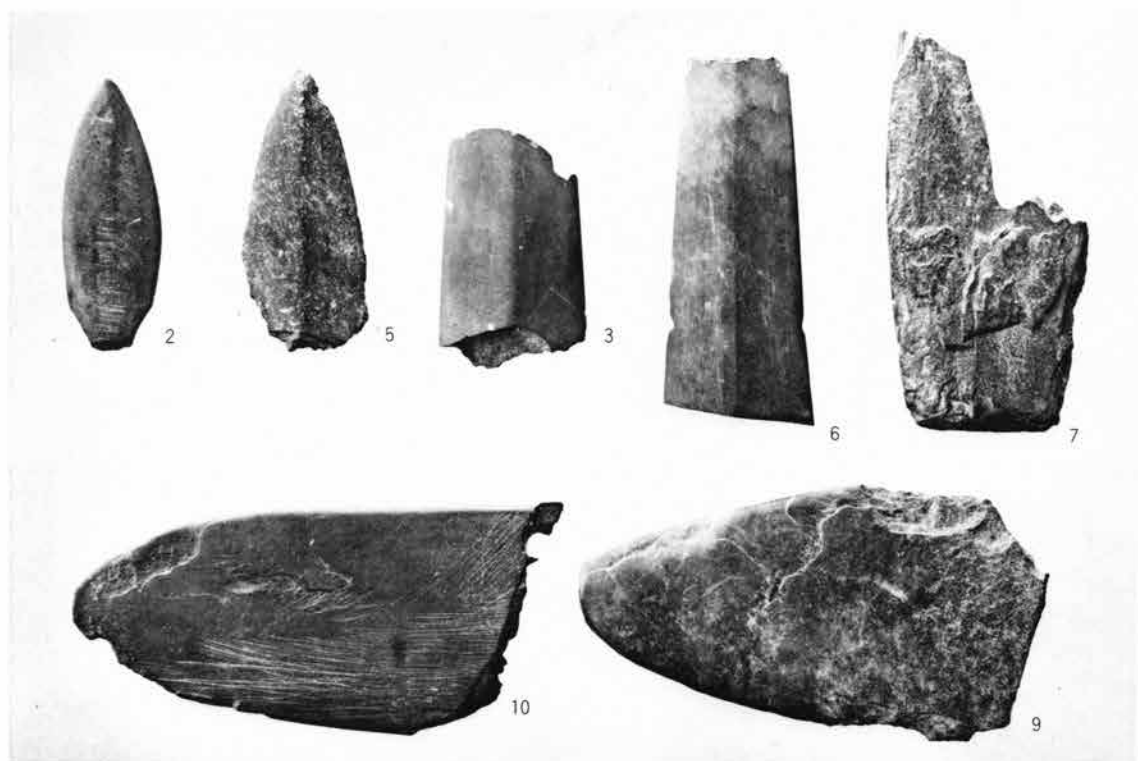
(1) №9 トレンチ出土遺物2 (弥生土器)



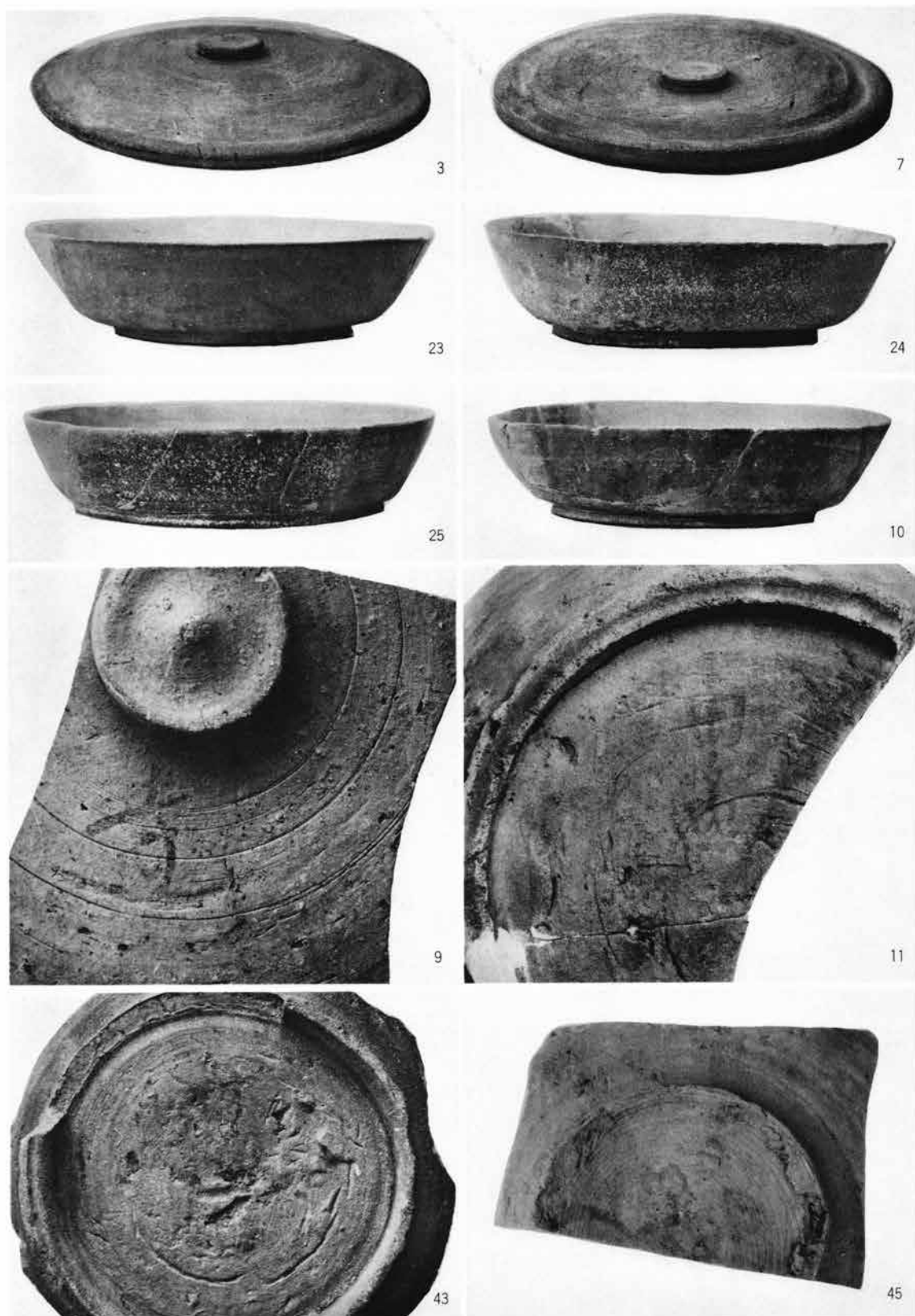
(2) №9 トレンチ出土遺物3 (弥生土器)



(1) №9 トレンチ出土遺物4 (弥生土器)



(2) 出土遺物 (石器)



出土遺物 (須恵器)





1



2



3



7



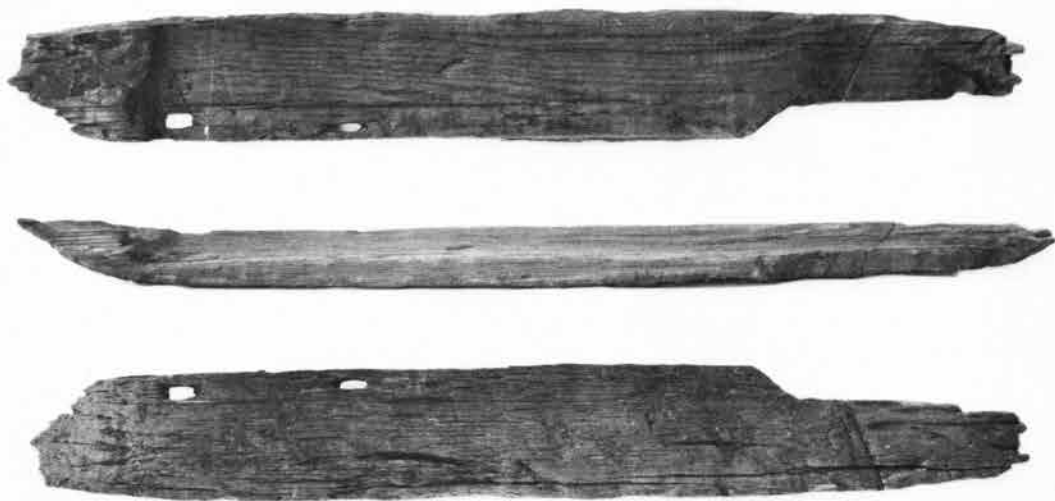
5



8



15



2



3



4

出土遺物（木製品）



(1) 調査地遠景 (南西から)



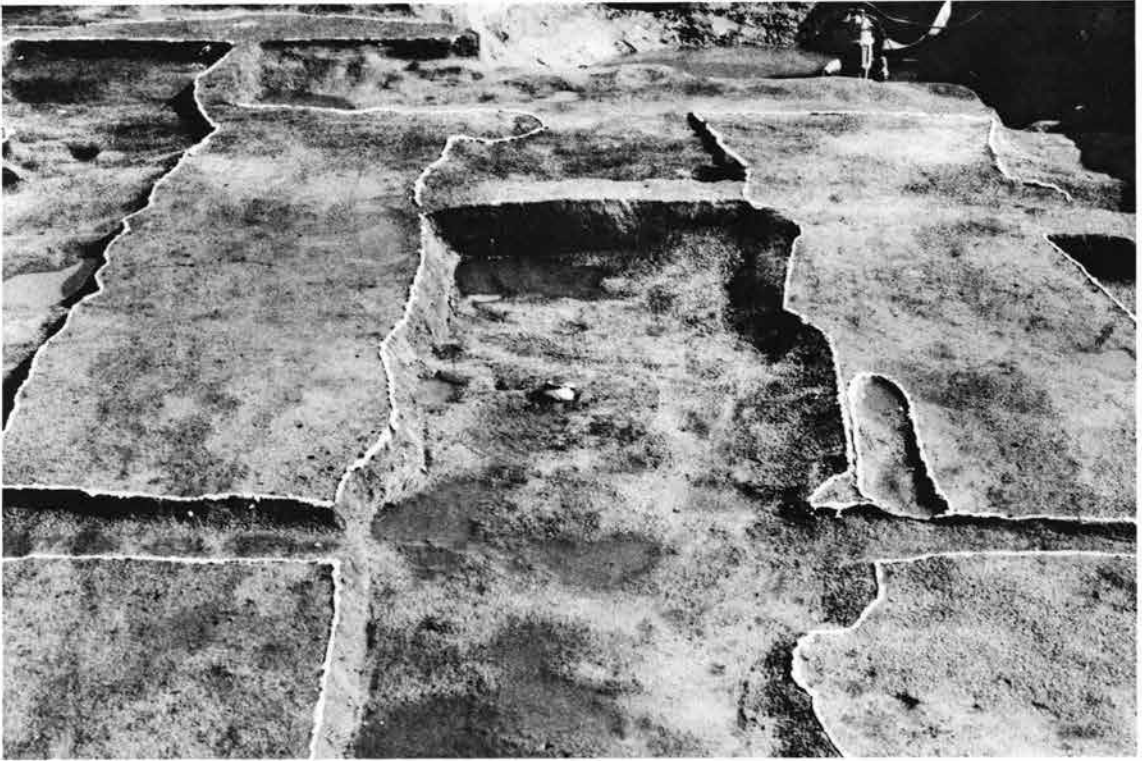
(2) 調査地全景 (南から)



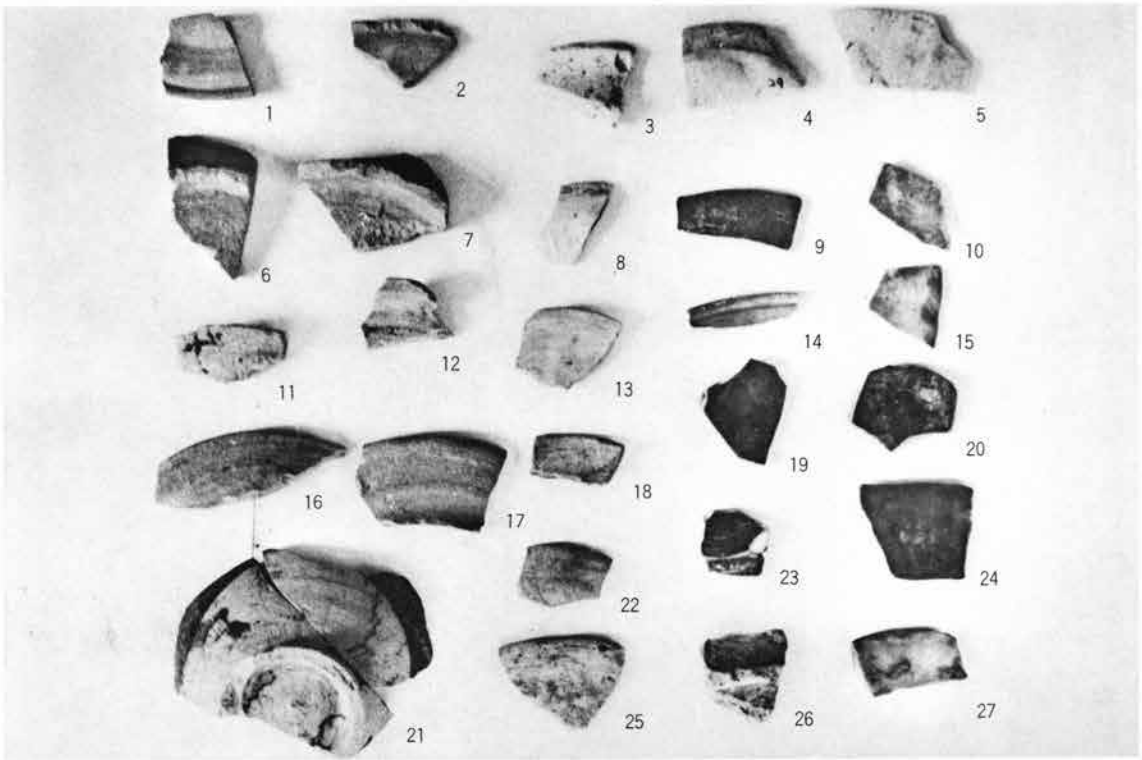
(1) 調査地全景（北から）



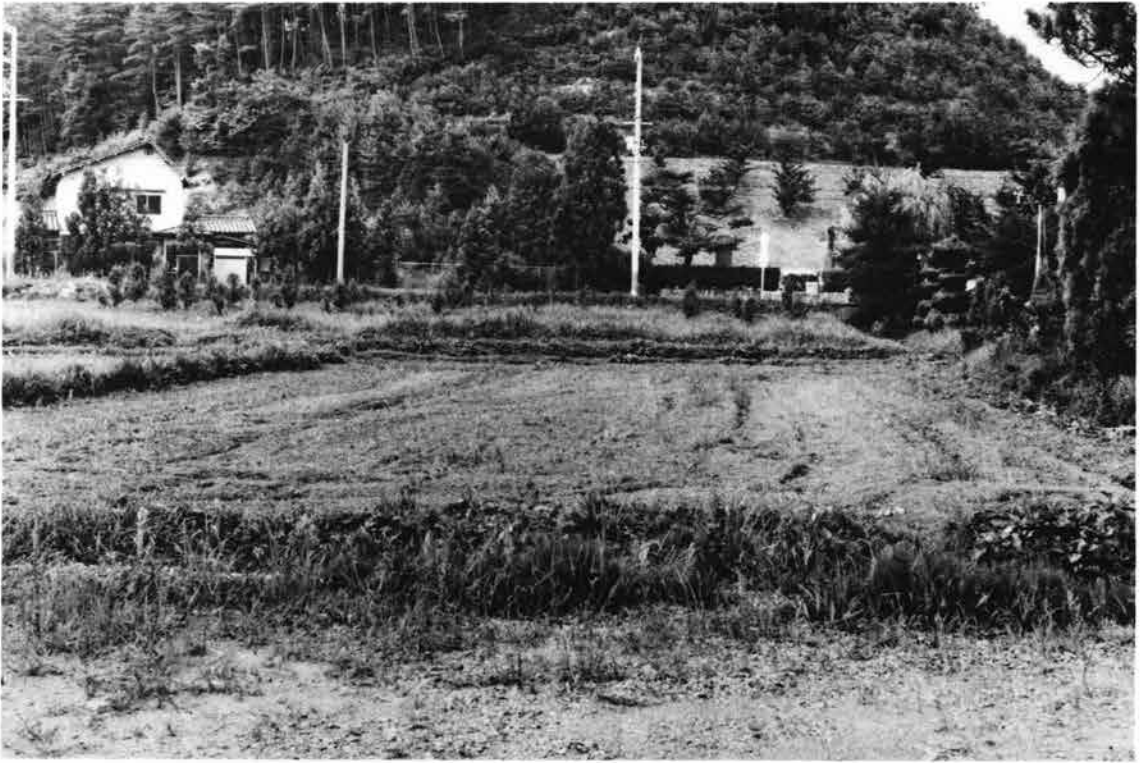
(2) 南北方向溝（南から）



(1) 溝内遺物出土状況(北から)



(2) 出土遺物



(1) 調査前全景 (南西から)



(2) トレンチ全景 (南西から)



(1) トレンチ南壁西南端土層断面 (北西から)



(2) 調査地全景 (北東から)



(1) 西長尾A地区作業場跡調査地遠景（東から）



(2) 西長尾C地区作業場跡遠景（南西から）





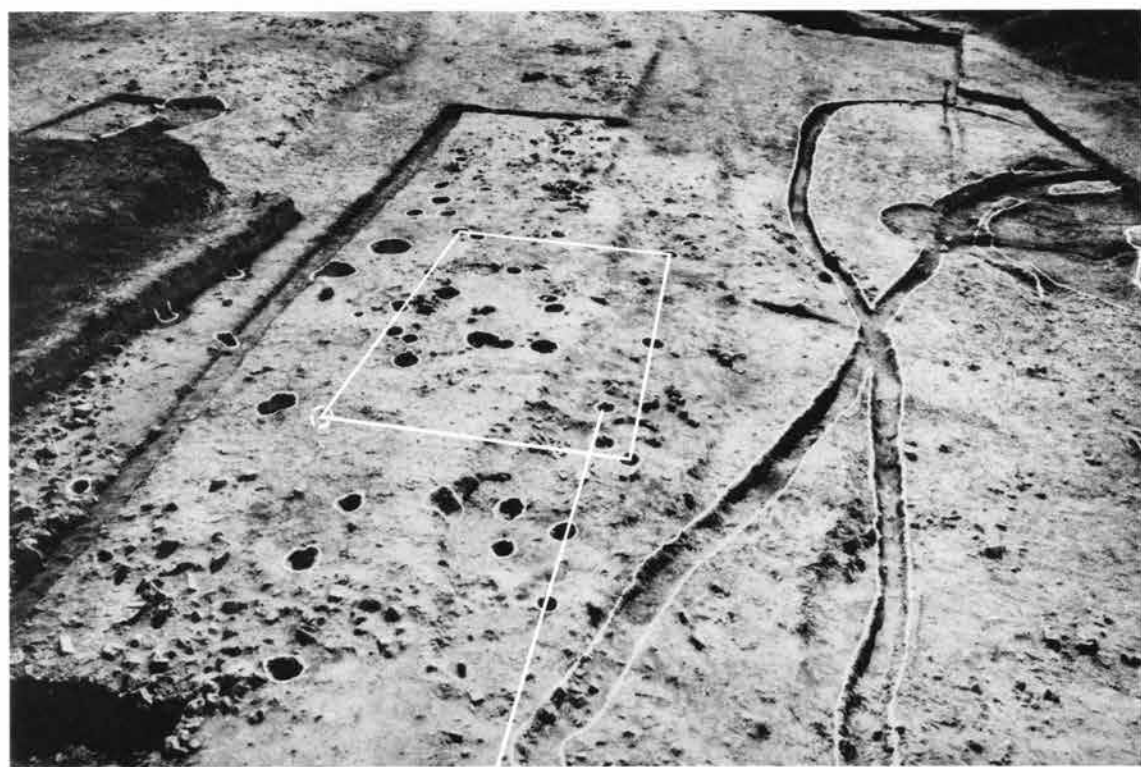
(1) 西長尾A地区作業場跡 (調査前)



(2) 西長尾A地区作業場跡 (調査後)



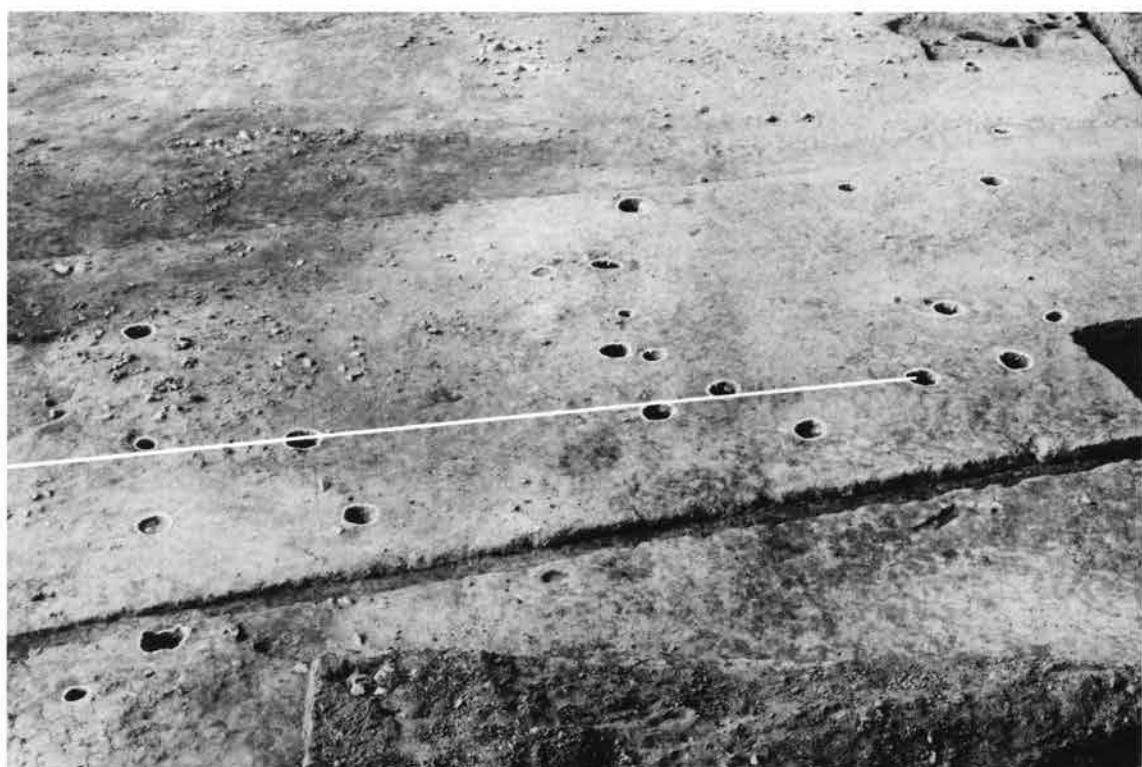
(1) 調査地北側ピット群、SB01・SA02・SA03 (西から)



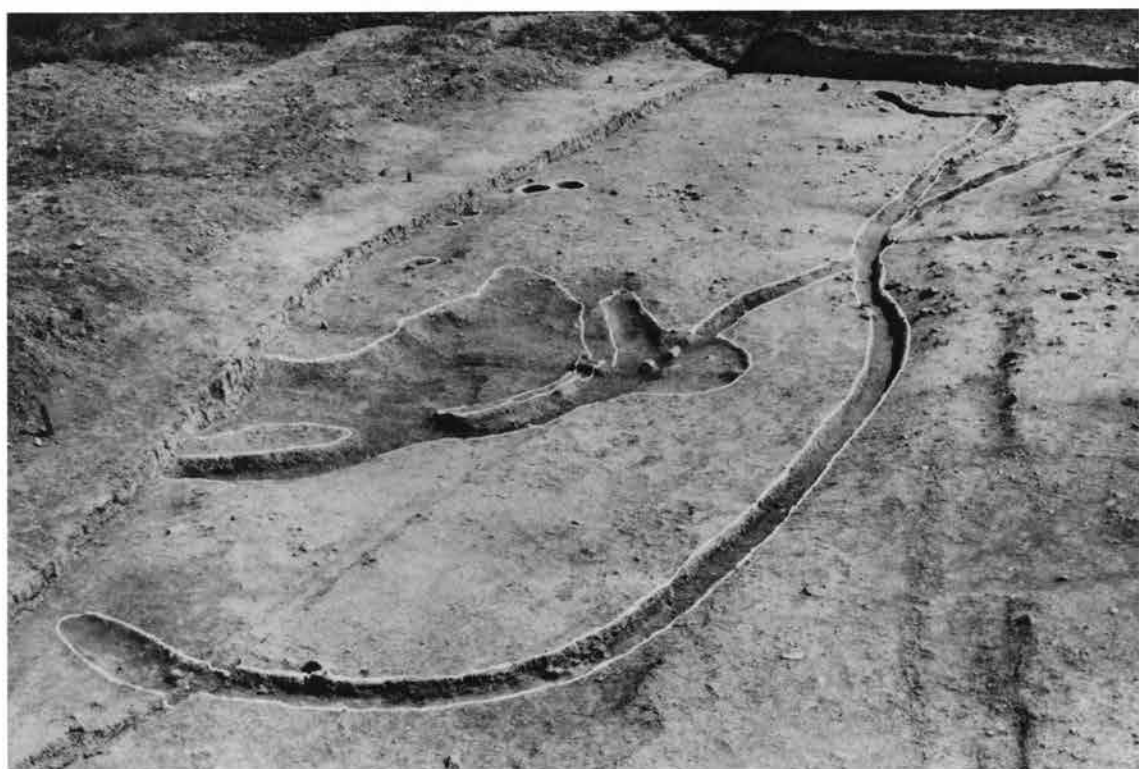
(2) 調査地北側ピット群、SB02・SA04 (東から)



(1) 調査地南側ピット群、SA01 (西から)



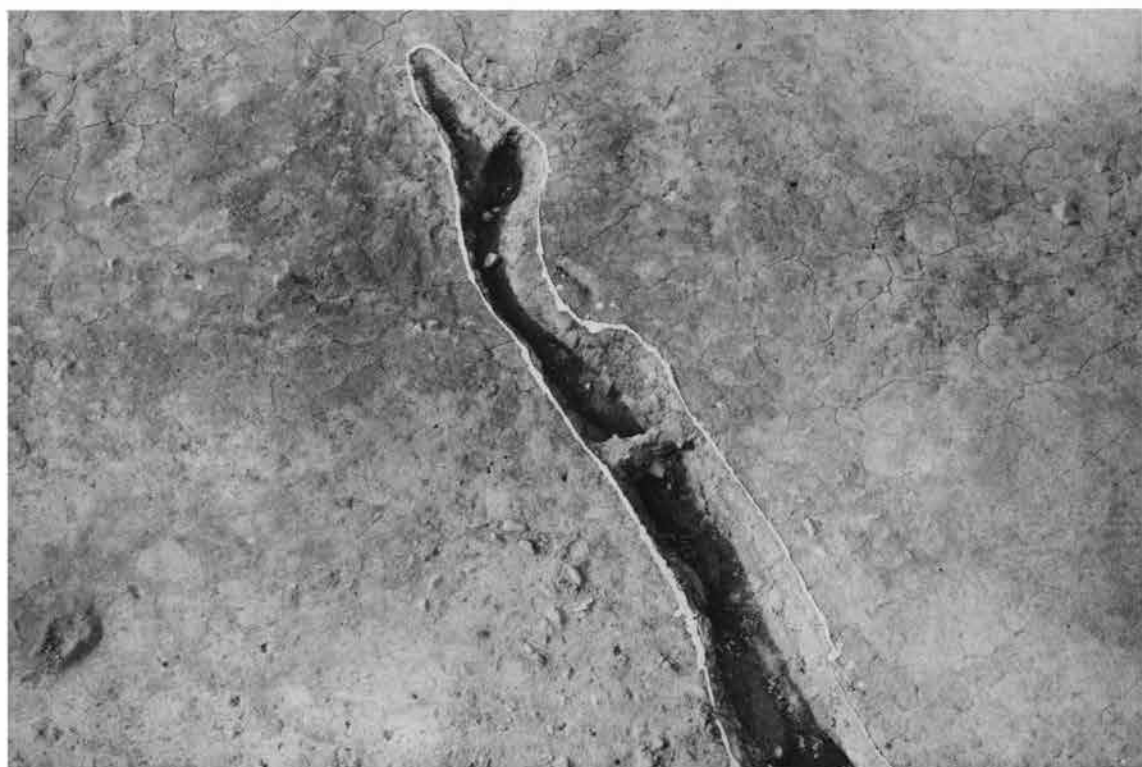
(2) 調査地南側ピット群、SA01 (南から)



(1) SD01・SD02・SX01 (西から)



(2) SD01・SD02・SX01 (南から)



(1) SD03 (南から)



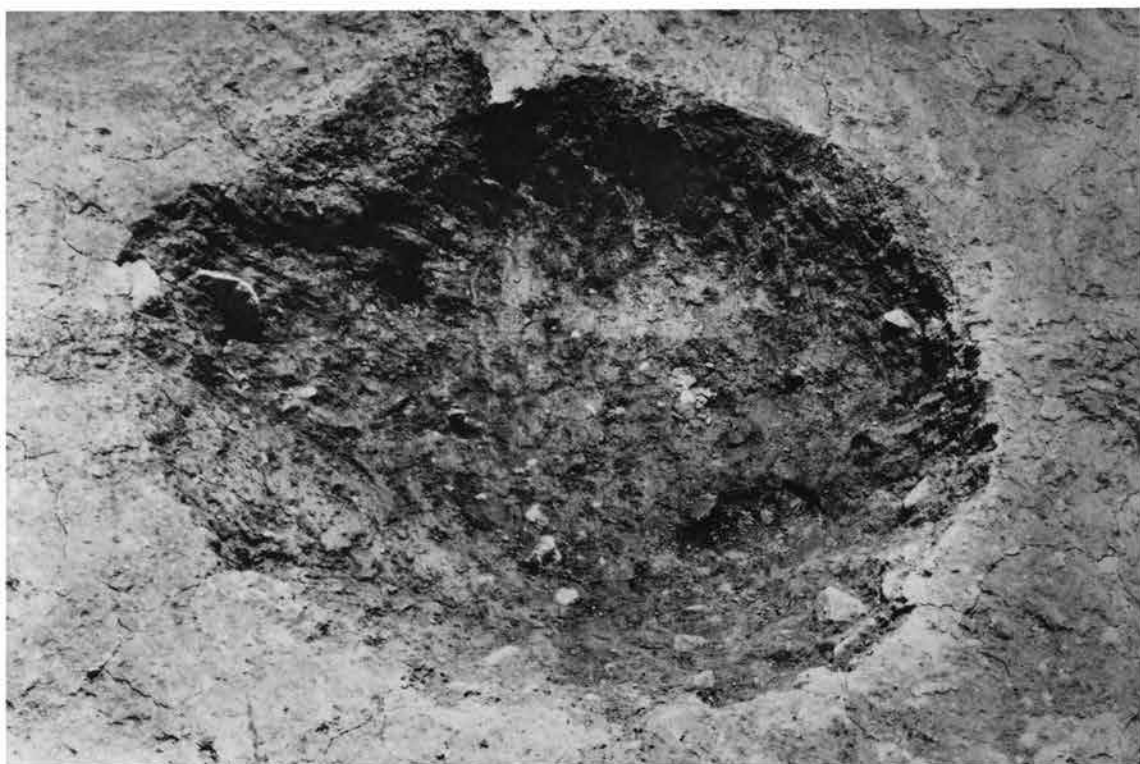
(2) SD04・SD05 (北から)



(1) SK01 (北から)



(2) SK02 (西から)



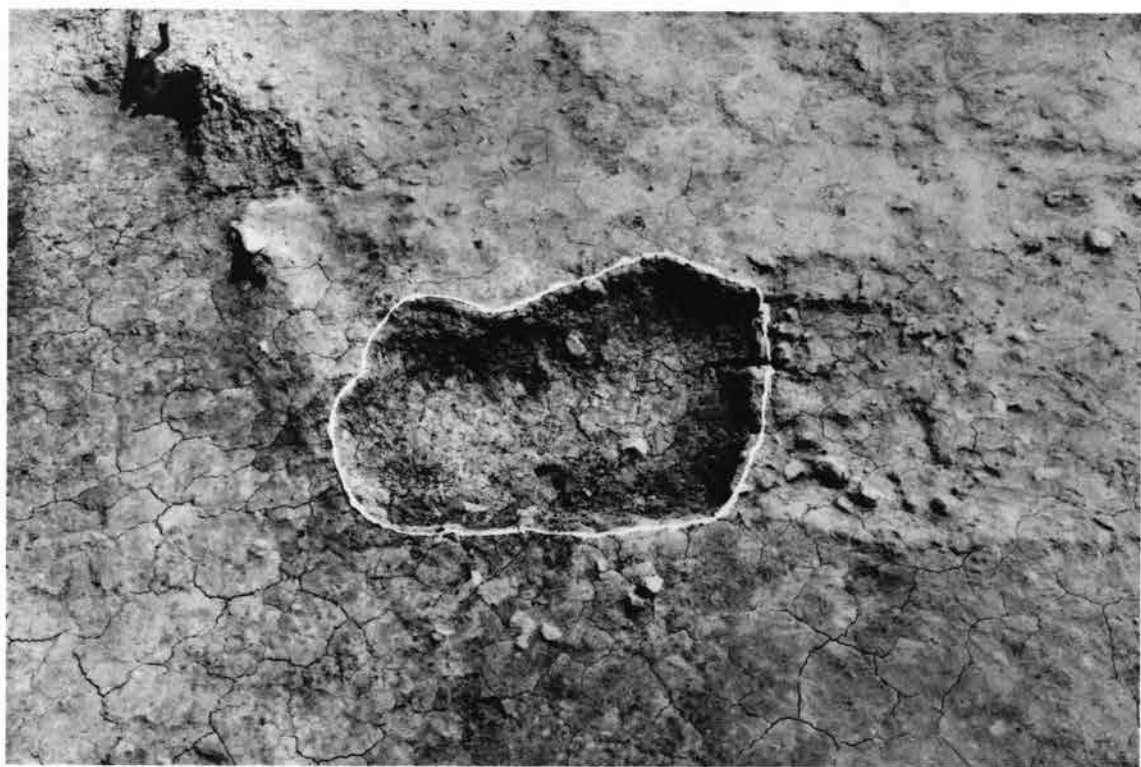
(1) SK03 (北から)



(2) SK04 (北から)



(1) SK04 (北から)



(2) SK04 (西から)





(1) ピット内遺物出土状況



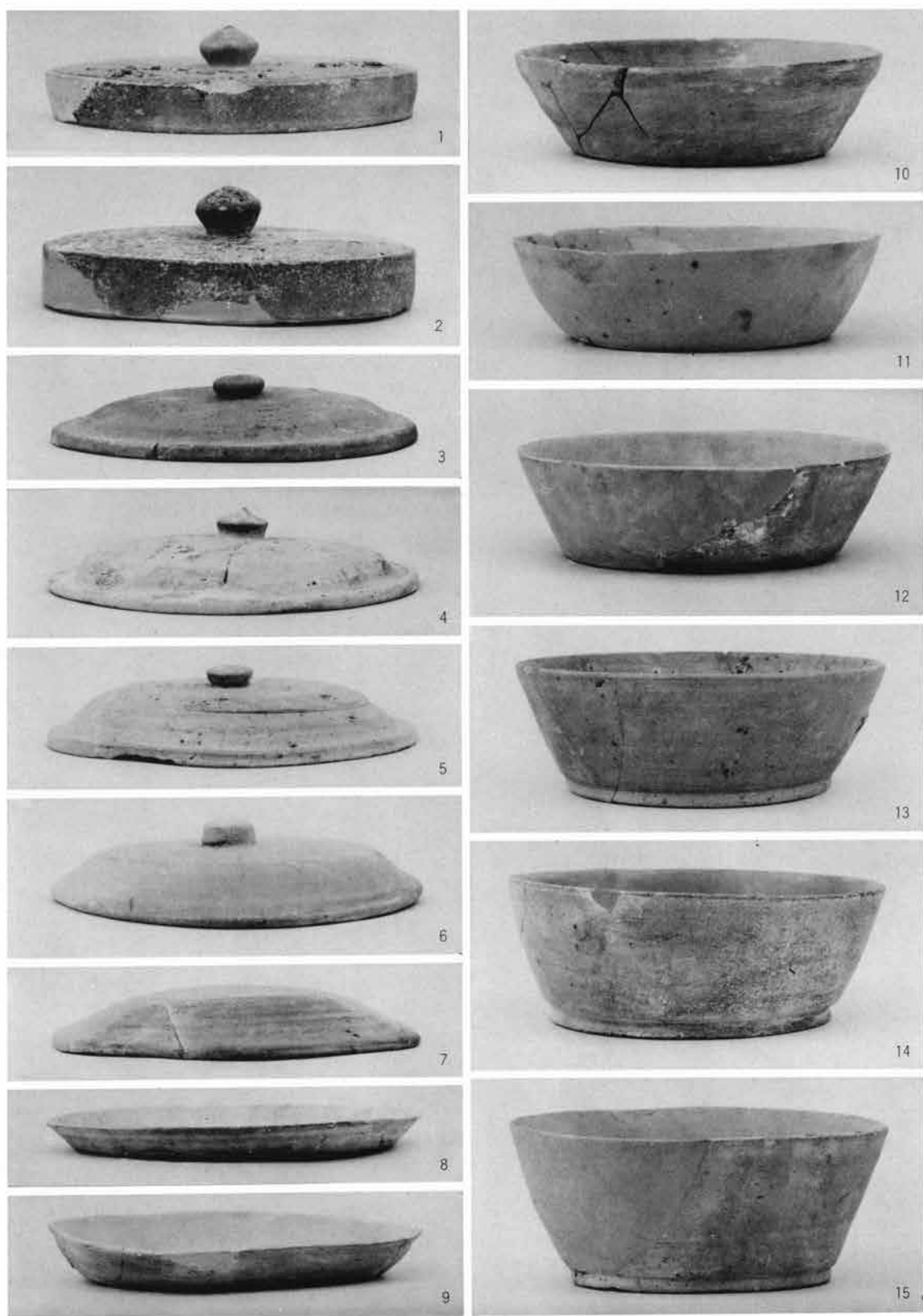
(2) ピット内遺物出土状況



(1) ピット内根石検出状況



(2) 第1トレンチ (南から)



酒長尾A地区作業場跡出土遺物(1)  
(SK04 1~6・10~15 SX01 7 土器列 8・9)

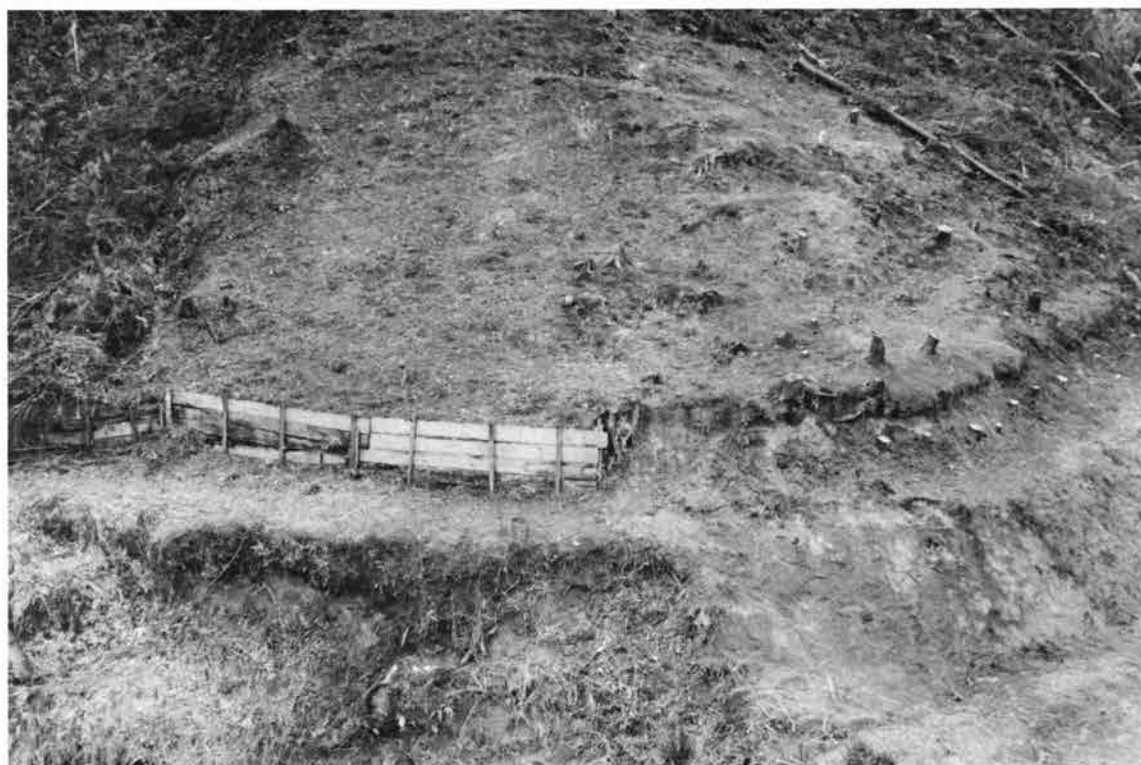


西長尾A地区作業場跡出土遺物(2) (1~5 SK04)



西長尾A地区作業場跡出土遺物(3)

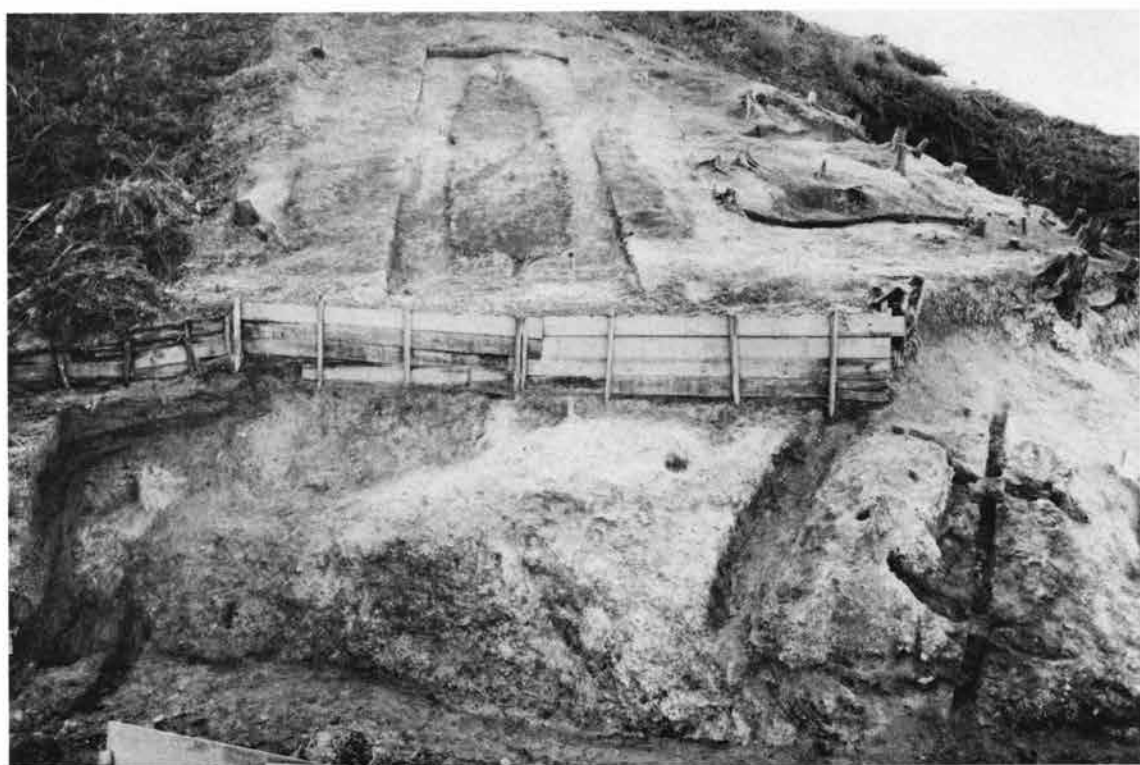
(1~5・8~10 ピット内, 6・7 土器列, 11 SK04)



(1) 芦原3号窯調査前全景(東から)



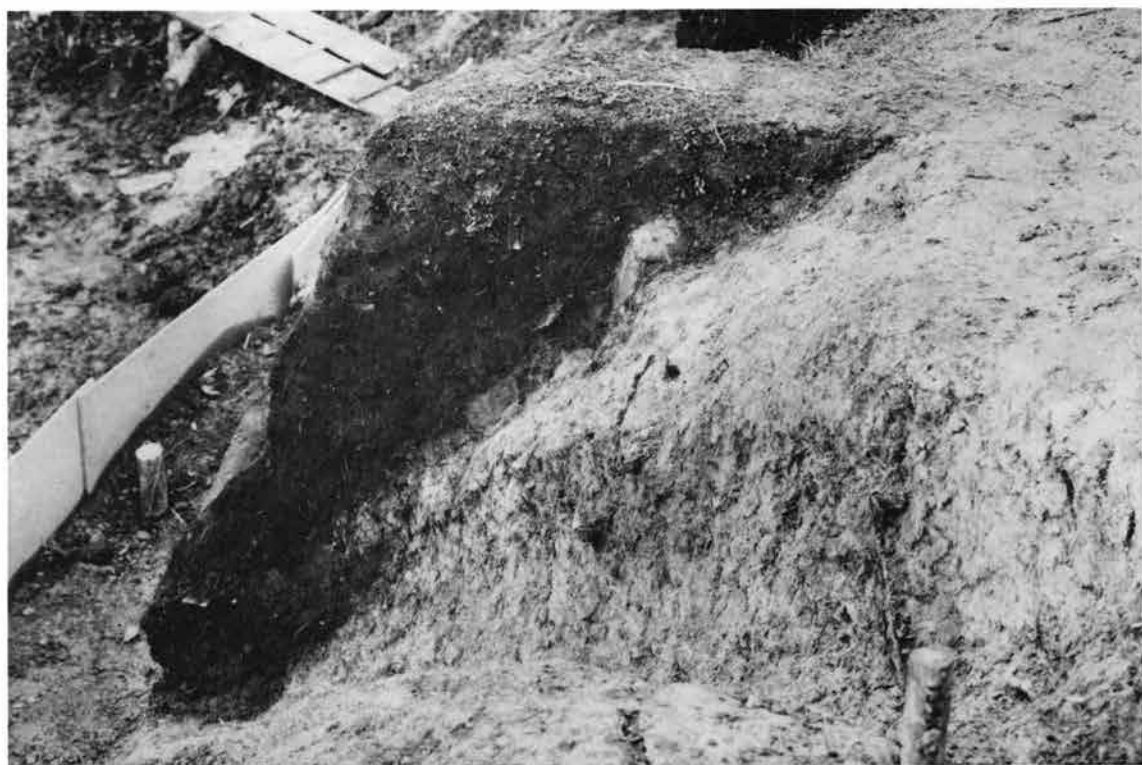
(2) 1号窯・1号窯灰原・3号窯検出状況(東から)



(1) 3号窯、SD01・1号灰原完掘状況（東から）



(2) 芦原3号窯、SD01（東から）

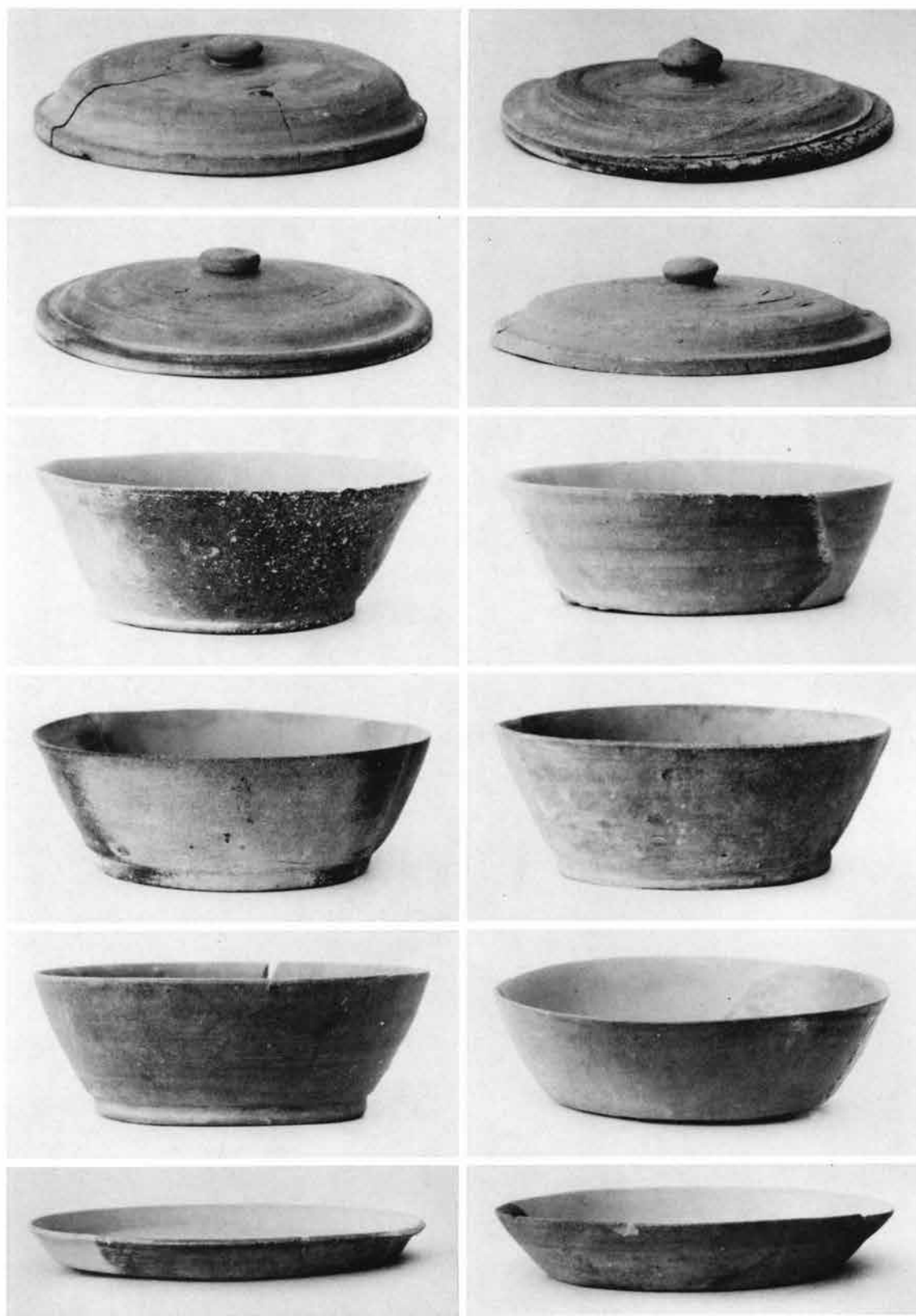


(1) 1号窯灰原断面（北から）



(2) SD01遺物出土状況（東から）





菅原窯跡出土遺物(1)



芦原窯跡出土遺物(2)



(1) 芦原地区調査前風景（北から）



(2) 芦原地区完掘状況（東から）



(1) 前山地区調査地西側全景 (西から)



(2) 前山地区調査地東側全景 (北西から)



(1) 掛ヶ谷・黒岩地区調査地全景（東から）



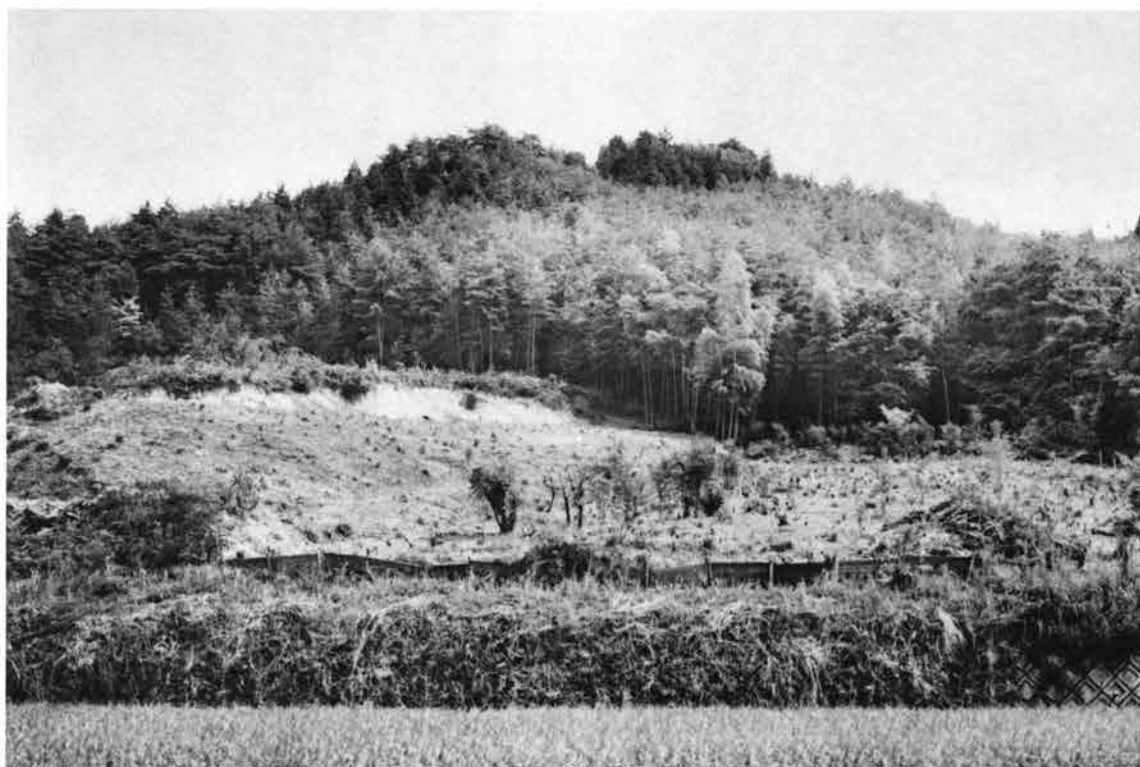
(2) 掛ヶ谷・黒岩地区調査地近景（南から）



(1) SD01 (北から)



(2) SD02 (北から)



(1) 掛ヶ谷地区調査地全景（東から）



(2) 掘削状況（東南から）

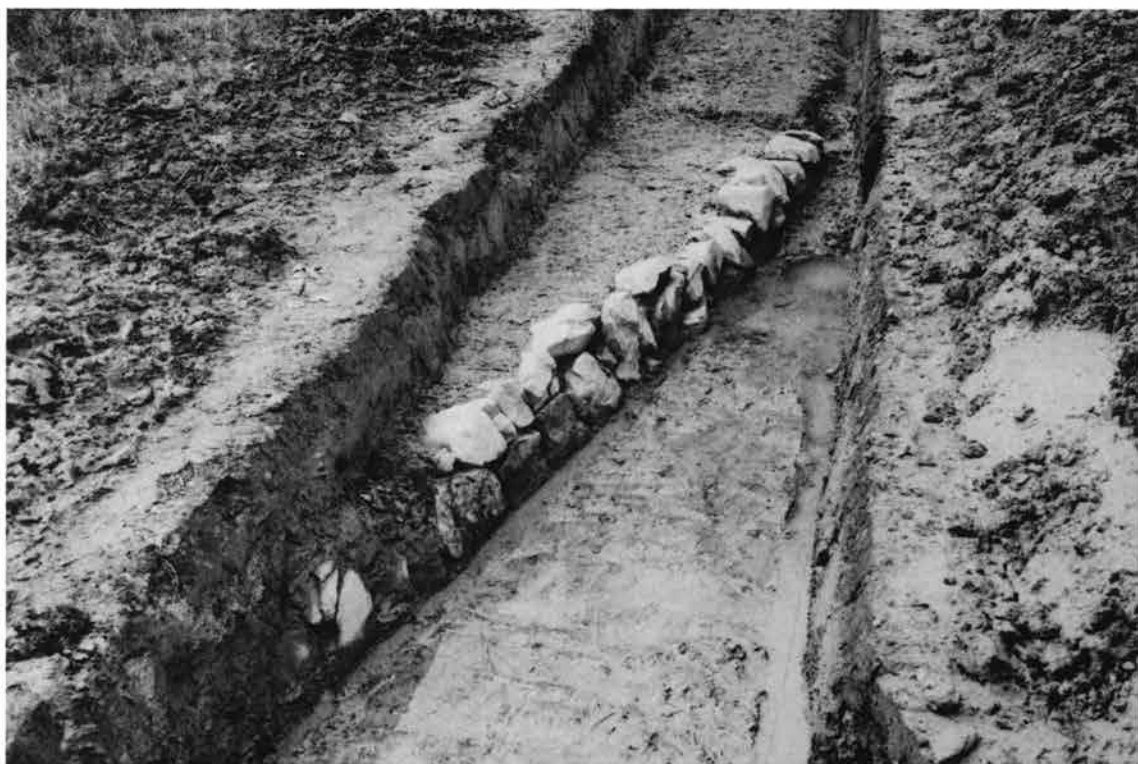


(1) 黒岩地区調査地全景（東から）

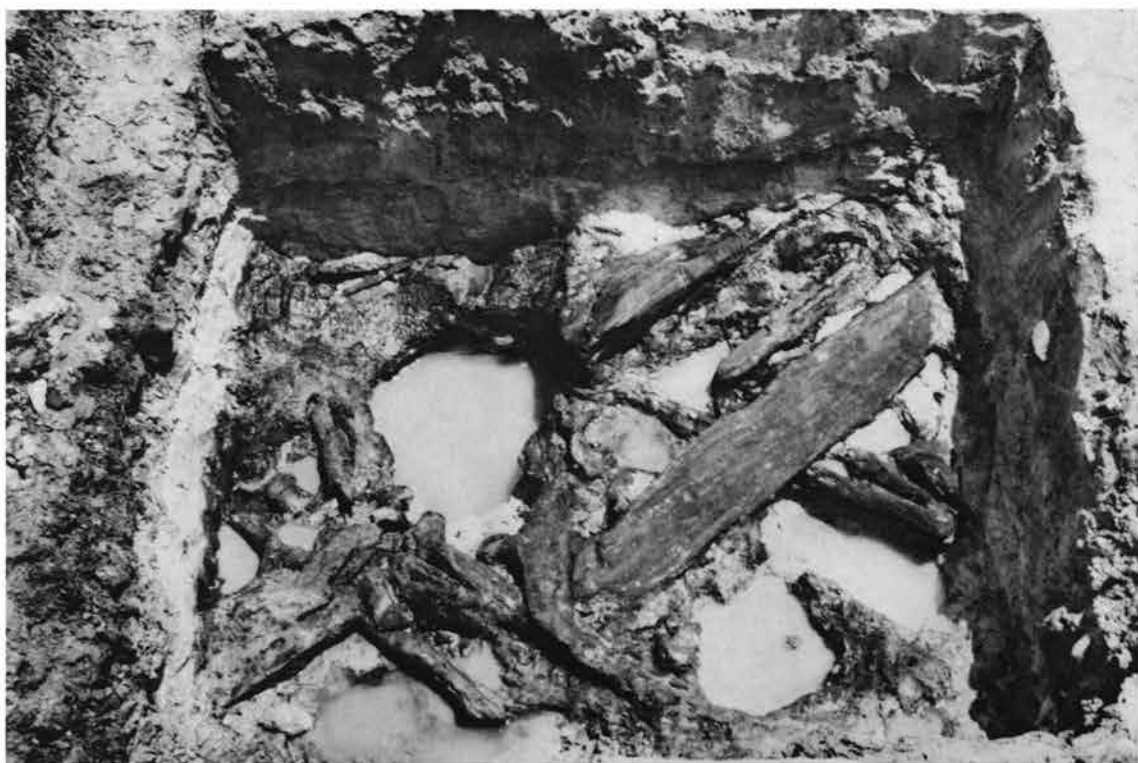


(2) 掘削状況（東から）





(1) 石組遺構 (南から)



(2) J区自然木出土状況

## 京都府遺跡調査概報 第14冊

昭和60年3月20日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3  
TEL (075)933-3877

印刷 中西印刷株式会社  
〒602 京都市上京区下立売通小川東入  
TEL (75)441-3155 (代)